（財）大阪府文化財センター調査報告書　第198集

松原市

池　内　遺　跡

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

（第１分冊）

2010年 3 月

財団法人　大阪府文化財センター

池内遺跡　（第1分冊）

二〇一〇年三月

財団法人　大阪府文化財センター

（財）大阪府文化財センター調査報告書　第198集

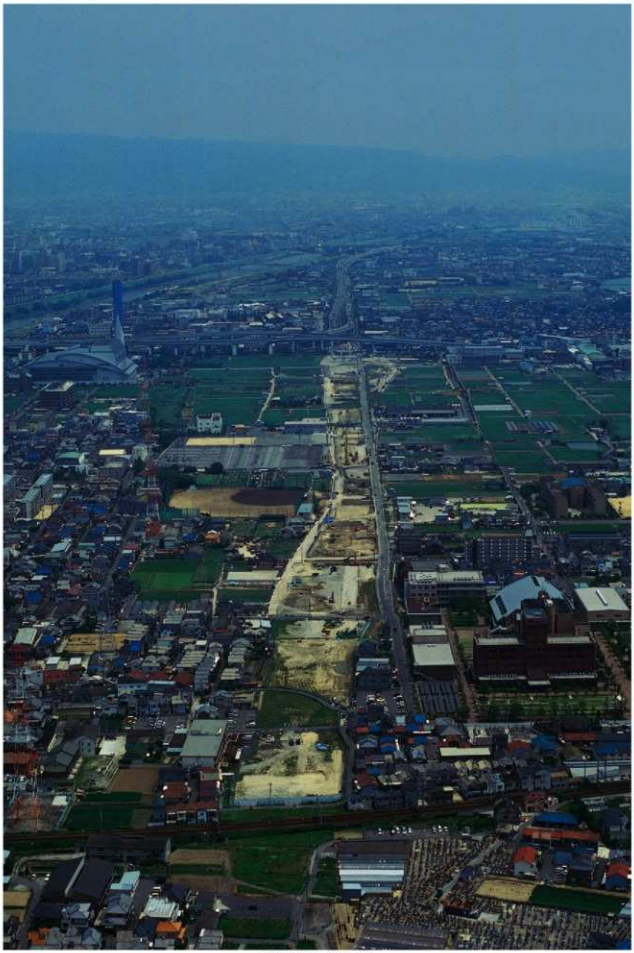
松原市

池　内　遺　跡

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

（第１分冊）

財団法人　大阪府文化財センター



調査地遠景（西から）

１．弥生時代前期　集落西半

２．弥生時代前期　小区画水田

1．第 4 面　2035 流路　弥生時代前期土器

2．第 4 面　2035 流路　彩文土器

1．緑釉陶器

2．銙帯

序　　文

池内遺跡は、大阪府の中央部、松原市の北側に位置する弥生時代から近世にかけての複合遺跡です。

今回の発掘調査は、都市計画道路大和川線外の建設に伴うもので、建設の計画は東西方向に長い遺跡範囲のほぼ中央部分を横断する形で設定されていたことから、結果的に遺跡を横断する大きなトレンチを入れることとなりました。本遺跡周辺では、発掘調査がほとんど行われていなかったことから、南側から延びる段丘縁辺部の沖積平野における各時期の遺跡形成の過程を知る上で、非常に多くのデータを蓄積することができたものと言えるでしょう。

今回の調査では、主な成果として平安時代の掘立柱建物群から構成される集落を確認したほか、弥生時代前期の集落と生産域を確認しております。

このうち前者については、総数にして60棟以上を数える掘立柱建物、およそ4分の3町単位で区切られた区画溝、人骨一体が埋葬された土坑墓等、資料数の少ない9世紀から11世紀までの集落の様相を把握するに十分な規模と質の遺構・遺物を確認することができました。加えて、金属製の鈴帯や硯等の一定の官位が想定される遺物や、近隣では例の少ない白色土器、越州窯青磁などをはじめとする、多様な搬入遺物の存在も集落の性格を考える上で、非常に重要な資料を確認しております。

また、後者については、推定直径70ｍ規模の二重の溝に挟まれた弥生時代前期中段階の集落を確認するとともに、その集落よりも古い段階の水田を約2160㎡以上にわたり検出しています。弥生時代前期の集落をこれだけの規模で発掘調査することは稀なことでもあり、非常に重要な成果を挙げることができたと言えるでしょう。

当遺跡は、今回の発掘調査によって始めて本格的な発掘調査データが得られた遺跡でもあり、従来明らかでなかった周辺域の様相を窺い知る上でも極めて重要なものとなっております。今回の発掘調査に続き、一般府道の建設工事に伴う発掘調査も実施されており、これらの成果が、周辺地域の総合的な歴史の解明に寄与することを切に願います。

最後に、調査に際して、大阪府富田林土木事務所ならびに大阪府富田林土木事務所松原建設事業所、城連寺地区自治会、大阪府教育委員会、松原市教育委員会をはじめとする、関係者の方々のご指導、ご協力に感謝申し上げるとともに、今後とも当センターの埋蔵文化財調査事業に一層のご理解とご協力をお願いする次第であります。

平成22年3月

財団法人　大阪府文化財センター

理事長　水　野　正　好

例　　言

1．本書は、都市計画道路　大和川線外　建設に伴う池内・三宅西遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は大阪府富田林土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人大阪府文化財センターが実施した。

3．各調査における発掘調査・遺物整理に関わる受託契約期間および調査体制については以下のとおりである。

〔発掘調査〕

〔池内遺跡 05-1　発掘調査〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡発掘調査委託

受託契約期間　平成 17 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 30 日

調査体制　調査部長　赤木克視　　調整課長　田中和弘
南部調査事務所長　藤田憲司（平成 17 年度）　大野　薫（平成 18 年度）
調査第一係長　岡本敏行
主査　入江正則　　積山　洋
専門調査員　西川雄大（平成 17 年度）　　佐藤由美（平成 18 年度）

〔池内遺跡 05-2　発掘調査〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡発掘調査委託

受託契約期間　平成 17 年 4 月 1 日～平成 19 年 3 月 30 日

調査体制　調査部長　赤木克視　　調整課長　田中和弘
南部調査事務所長　藤田憲司（平成 17 年度）　大野　薫（平成 18 年度）
調査第一係長　岡本敏行
主査　亀島重則　　技師　平田洋司　　専門調査員　永田由香

〔池内遺跡 07-1　発掘調査〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡遺物整理委託

受託契約期間　平成 19 年 4 月 2 日～平成 21 年 3 月 31 日

調査体制　調査部長　赤木克視　　調整課長　田中和弘
南部調査事務所長　大野　薫
調査第一係長　藤澤眞依　　主査　入江正則

〔池内遺跡 08-1　発掘調査〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡（その 2）発掘調査委託

受託契約期間　平成 20 年 4 月 1 日～平成 20 年 7 月 31 日

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡（その 3）・三宅西遺跡（その 2）発掘調査委託

受託契約期間　平成 20 年 8 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

調査体制

平成 20 年度　調査部長　赤木克視　　調整課長　田中和弘
南部調査事務所長　大野　薫
調査第一係長　中村淳磯
技師　正岡大実

平成 21 年度　調査部長兼調査課長　福田英人
調整グループ長　金光正裕
調整グループ南部総括主査　森屋美佐子
技師　正岡大実

〔三宅西遺跡 08-1　発掘調査〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡（その３）・三宅西遺跡（その２）発掘調査委託

受託契約期間　平成 20 年８月１日～平成 22 年３月 31 日

調査体制

平成 20 年度　調査部長　赤木克視　　調整課長　田中和弘
南部調査事務所長　大野　薫
調査第一係長　中村淳磯
技師　正岡大実

平成 21 年度　調査部長兼調査課長　福田英人
調整グループ長　金光正裕
調整グループ南部総括主査　森屋美佐子
技師　正岡大実

〔池内遺跡 09-1　発掘調査〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡（その３）・三宅西遺跡（その２）発掘調査委託

受託契約期間　平成 20 年８月１日～平成 22 年３月 31 日

調査体制　調査部長兼調査課長　福田英人
調整グループ長　金光正裕
調整グループ南部総括主査　森屋美佐子
技師　正岡大実

〔三宅西遺跡 09-1　発掘調査〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡（その３）・三宅西遺跡（その２）発掘調査委託

受託契約期間　平成 20 年８月１日～平成 22 年３月 31 日

調査体制　調査部長兼調査課長　福田英人
調整グループ長　金光正裕
調整グループ南部総括主査　森屋美佐子
技師　正岡大実

〔遺物整理〕

〔池内遺跡 05-1・05-2・07-1　遺物整理〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡遺物整理委託

受託契約期間　平成 19 年 4 月 2 日～平成 21 年 3 月 31 日

調査体制　調査部長　赤木克視　　調整課長　田中和弘

南部調査事務所長　大野　薫

調査第一係長　藤澤眞依（平成 19 年度）　中村淳磯（平成 20 年度）

主査　入江正則　　技師　新海正博

〔池内遺跡 08-1・09-1・三宅西遺跡 08-1・09-1　遺物整理〕

受託契約名　都市計画道路　大和川線外　池内遺跡（その３）・三宅西遺跡（その２）発掘調査委託

受託契約期間　平成 20 年 8 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

調査体制

平成 20 年度　調査部長　赤木克視　　調整課長　田中和弘

南部調査事務所長　大野　薫

調査第一係長　中村淳磯

技師　正岡大実

平成 21 年度　調査部長兼調査課長　福田英人

調整グループ長　金光正裕

調整グループ南部総括主査　森屋美佐子

技師　正岡大実

4．本書で用いた現地写真は調査担当者が撮影した。また、遺物写真の撮影に関しては、南部調査事務所 副主査　立花正治（平成 19 年度まで）、非常勤職員　久禮孝志が担当した。発掘調査・遺物整理に当たっては、随時当財団職員の助言・協力を得た。

5．調査にあたっては、以下の諸機関・諸氏よりご協力・ご教示を得た。記して感謝の意を表したい。（敬称略・順不同）大阪府富田林土木事務所・大阪府富田林土木事務所松原建設事業所・松原市教育委員会・大阪府教育委員会・財団法人　大阪市文化財協会・阪神高速道路城連寺地区対策協議会・岡本武司・小倉徹也・橘田正徳・栄原永遠男・芝田和也・清水梨代・積山　洋・西山昌孝・藤田徹也・山上　弘・山田幸弘

6．本書の執筆・編集は、入江・平田・永田・新海・森屋・正岡が担当した。それぞれの文責については、目次・本文中に記している。

7．本調査に関わる出土遺物・実測図・写真・カラースライド・デジタルデータ等は財団法人　大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

凡　例

1．水準については、すべて東京湾平均海水位（T.P.）＋値を使用している。本文の記述では、特に断りのない限り「T.P.＋」の記載を省略している。

2．調査にあたっては、国土座標軸（使用測地系「世界測地系 2000」）第Ⅵ座標系を基準にしている。また、遺構図に記載した座標値はmで表示している。

3．本書に掲載した遺構図に付された方位は、すべて国土座標に基づく座標北を示している。なお、座標北を基準とした場合、遺跡周辺の磁北はＮ６°　27′ Wに、真北はＮ０°　13′ Ｅに偏位している。

4．発掘調査および遺物整理については、『(財) 大阪府文化財センター　遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003) の内容に準拠して行った。その詳細については第Ⅲ章に記述している。

5．本書で用いた土色は、小山正忠・竹原秀雄編（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）の『新版　標準土色帖』2003 年版を基準としている。

6．遺構名は、遺構の種類に関係なく、各調査時の検出順に付与した１からの連番号に遺構の種類を付して、「10 土坑」のように表記している。また、掘立柱建物や杭列など、複数の遺構から構成される遺構については、「掘立柱建物 1」のように遺構番号と遺構の種類を逆転させて表示している。これらは、調査毎の連番であるため、調査毎に１番が発生する。本文中でそれらを区別する必要が生じる際には、「05-1-1 区 10 土坑」のように表記している。

7．本文中で記載する基本的な地層については、冒頭に「第」を付して個別遺構の層名と区別している。すべての層準名が同一の層準を必ずしも示さない場合もあることから、調査区毎に地層の概略を記すほか、第Ⅶ章総括において最終的な統合を図っている。

　遺構面については、断面観察によって遺構・遺物の存在が予想された土壌化層を基準に上から順に第１面・第２面…と呼称し、これについても第Ⅶ章総括にて統合を図っている。

8．各種遺構・遺物の記述に当たっては、規模等の数値について、遺構がm表記、遺物がcm表記を基準としている。なお、遺構の数値については、小数点第３位以下を四捨五入し、最小で小数点第２位のcm単位までの表記としている。遺物の数値については、小数点第２位以下を四捨五入し、最小で小数点第１位のmm単位までの表記としている。ただし、石器は小数点第３位以下を四捨五入し、小数点第２位までを表記する場合がある。

9．遺物番号は通し番号で付与しており、写真に関しては挿図番号と同一の番号を記載している。なお、写真のみの掲載遺物に関しては、「写 10」のように区別して表記している。

また、古代～中世の土器で、一部土器の種類を明示したほうが良いと判断したものについては、下記の通りにその名称を遺物番号の横に付している。

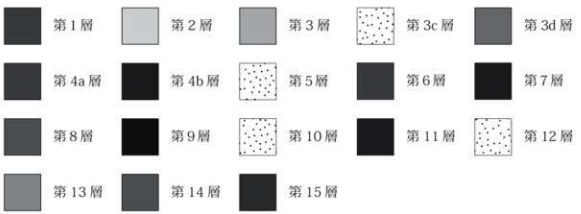
黒色土器（両黒）：両黒　黒色土器（内黒）：内黒　瓦器・瓦質土器：瓦　須恵器：須　緑釉陶器：緑
灰釉陶器：灰　白色土器：白　青磁：青　白磁：白　青白磁：青白　越州窯青磁：越

10. 本書に掲載した遺物実測図の縮尺は、土器類を４分の１、鉄器・石器は２分の１、木器は８分の１を基本に、各遺物の寸法に応じて適宜縮尺を変更している。なお、遺物写真の縮尺は任意としている。

11. 基本的な遺物の年代観等は、下記の文献を参考に用いた。

寺沢　薫・森岡秀人編 1989『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
古代の土器研究会編 1992『古代の土器１　都城の土器集成Ⅰ』古代の土器研究会
古代の土器研究会編 1993『古代の土器２　都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会
古代の土器研究会編 1994『古代の土器３　都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究』京都編集工房
鈴木秀典 1983「長原遺跡における９～ 11 世紀の土師器・黒色土器の器種構成」『長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』財団法人大阪市文化財協会
佐藤　隆 1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告Ⅴ』財団法人大阪市文化財協会
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

12. 本文中に掲げた各調査区毎の地層断面には、地層の注記に示したほか、判別を容易にするため、各層準をトーンで塗り分けている。このトーンについては、特別な場合を除き以下の通りとした。



目　次

第１分冊

（05-1・07-1 の調査）

巻 頭 図 版
序　　　文
例　　　言
凡　　　例
目　　　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過（正岡）
第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第２節　発掘調査・整理作業の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

第Ⅱ章　位置と環境（正岡）
第１節　遺跡の位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第２節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

第Ⅲ章　調査の方法（正岡）
第１節　現地調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
第２節　整理作業・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9

第Ⅳ章　05-1・07-1 調査の成果（入江）
第１節　１・２区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 11
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面　５．第４面　６．第５面
第２節　３区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 43
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面　５．第４面　６．第５面　７．第６面
第３節　４・５区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面　５．第４面　６．第５面
第４節　６・７区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・178
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面　５．第４面　６．第５面
第５節　８区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・218
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面　５．第４面　６．第５面
第６節　05-1・07-1 調査のまとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・242

第２分冊

（05-2・08-1・09-1 の調査・自然科学分析・総括・三宅西遺跡 08-1・09-1 の調査）

Ⅴ章　05-2 調査の成果（森屋・平田・永田・新海）
第１節　１・２区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第４面　５．第５面　６．第９面
７．第９面以下　８．小結
第２節　３区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第４面　５．第６面　６．第 10 面
第３節　４区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 45
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第４面　５．第６面　６．第８面
７．第９面
第４節　５区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
１．基本層序　２．第２面　３．第３面　４．第４面　５．第５面　６．第７面
７．第８面　８．第９面　９．第 11 面　10. 小結
第５節　05-2 調査区出土　石製遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・234
１．第２面遺構出土石器　２．第 3c・3d 層・第３～４層出土石器　３．第３面遺構出土石器
４．第 4a 層出土石器　５．第４面遺構出土石器　６．第 4b 層出土石器
７．第 4c 層出土石器　８．第５面遺構・第５層以下・側溝出土石器
石器観察表・・・267

第Ⅵ章　08-1 調査の成果（正岡）
第１節　１区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・274
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面　５．第４面
第２節　２区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・289
１．基本層序　２．第１面　３．第２・３面　４．第４面
第３節　３区の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・335
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面
第４節　小結・・343

第Ⅶ章　自然科学的分析（趙・小倉・渡辺・正岡・パリノ・サーヴェイ株式会社）
第１節　分析の目的と概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・344
第２節　大和川下流域における遺跡形成過程の総合調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・345
第３節　池内遺跡（その２）発掘調査に伴う花粉・珪藻・植物珪酸体分析・・・・・・・・・・387

第Ⅷ章　総括（正岡）

第１節　遺跡の構造変遷・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・402

付編　三宅西遺跡 08-1・09-1 調査の成果（正岡）
第１節　調査の経緯と経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・411
第２節　三宅西 08 －１調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・411
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面
第３節　池内・三宅西 09 －１調査の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・428
１．基本層序　２．第１面　３．第２面　４．第３面
第４節　総括・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・436

報告書抄録

第３分冊

（写真図版）

目　次

写真図版

挿　図　目　次

図１　遺跡位置図
図２　池内遺跡　調査地位置図
図３　池内・三宅西遺跡周辺の地形環境
図４　池内・三宅西遺跡周辺の遺跡分布図
図５　池内・三宅西遺跡周辺の条里地割図
図６　調査区の配置と地区割
図７　１・２区　南壁　断面図
図８　１・２区　第１面　平面図
図９　１－１区　第１面　平面図
図10　１－２区　第１面　平面図
図11　１－３区　第１面　平面図
図12　１・２区　第２面　平面図
図13　１－１区　第２面　平面図
図14　１－２区　第２面　平面図
図15　１－１区　第２面　掘立柱建物１平・断面図
図16　１区　第２面　各遺構　断面図
図17　１区　第２面　各遺構　出土遺物
図18　１・２区　第３面　平面図
図19　１－１区　第３面　平面図
図20　１－２区　第３面　平面図
図21　１－３区　第３面　平面図
図22　１－３区　第３面　掘立柱建物25
平・断面図
図23　１－３区　第３面　掘立柱建物26・27
平・断面図
図24　１区　第３面　耕作溝群　断面図
出土遺物
図25　１－１区　第３面　各遺構　断面図（１）

図26　1－3区　第3面　2623溝　出土遺物
図27　1区　第3面　各遺構　断面図(2)
図28　1区　第3面　各遺構　出土遺物
図29　1・2区　第4面　平面図
図30　1区　第4面　2801流路　出土遺物
図31　1・2区　第5面　平面図
図32　1－1区　第5面　平面図
図33　1－2区　第5面　平面図
図34　1－3区　第5面　平面図
図35　1区　第5面　各遺構　断面図
図36　1区　第3層　出土遺物
図37　1区　第4・10・13層　出土遺物
図38　3区　南壁　断面図
図39　3区　第1・2面　平面図
図40　3－1区　第1面　平面図
図41　3－2区　第2面　平面図
図42　3－2区　第2面　各遺構　出土遺物
図43　3－2区　第2面　692井戸　出土遺物
図44　3区　第3面　平面図
図45　3－1区　第3面　平面図
図46　3－1区　第3面　9溝・10土坑　断面図
出土遺物
図47　3区　第3面　各遺構　出土遺物
図48　3区　第4面　平面図
図49　3－1区　第4面　平面図
図50　3－2区　第4面　平面図
図51　3－1区　第4面　掘立柱建物2・3
平・断面図
図52　3－1区　第4面　掘立柱建物2・3
出土遺物
図53　3－1区　第4面　掘立柱建物4
平・断面図
図54　3－2区　第4面　掘立柱建物5
平・断面図
図55　3－2区　第4面　掘立柱建物6
平・断面図
図56　3－2区　第4面　掘立柱建物7
平・断面図
図57　3－2区　第4面　掘立柱建物8
平・断面図
図58　3－2区　第4面　掘立柱建物5－785柱穴
平・断面図　各遺構　出土遺物
図59　3－2区　第4面　掘立柱建物9
平・断面図
図60　3－2区　第4面　掘立柱建物10
平・断面図
図61　3－2区　第4面　掘立柱建物11
平・断面図
図62　3－2区　第4面　掘立柱建物12
平・断面図
図63　3－2区　第4面　掘立柱建物13
平・断面図
図64　3－2区　第4面　掘立柱建物14
平・断面図
図65　3－2区　第4面　掘立柱建物15
平・断面図
図66　3－2区　第4面　掘立柱建物16
平・断面図
図67　3－2区　第4面　掘立柱建物11・13
出土遺物
図68　3－2区　第4面　掘立柱建物17
平・断面図
図69　3－2区　第4面　掘立柱建物14－1360
柱穴　平・断面図　各遺構　出土遺物
図70　3－2区　第4面　掘立柱建物18
平・断面図
図71　3－2区　第4面　塀1　平・断面図
図72　3区　第4面　各遺構　断面図
図73　3区　第4面　各遺構　出土遺物(1)
図74　3区　第4面　各遺構　出土遺物(2)
図75　3区　第4面　1307・2481溝　出土遺物
図76　3－1区　第4面　375井戸　平・断面図
出土遺物
図77　3区　第4面　12土坑・993井戸
平・断面図　出土遺物
図78　3区　第4面　各遺構　出土遺物(3)

図79　3－2区　第4面　1789土坑　平・断面図
出土遺物
図80　3－1区　第4面　各遺構　平・断面図
出土遺物
図81　3－2区　第4面　1402・1407土坑
出土遺物
図82　3－2区　第4面　各遺構　出土遺物(4)
図83　3区　第5面　平面図
図84　3－1区　第5面　平面図
図85　3－2区　第5面　平面図
図86　3－2区　第5面　掘立柱建物28
平・断面図
図87　3－2区　第5面　掘立柱建物28
出土遺物
図88　3－2区　第5面　掘立柱建物29
平・断面図
図89　3－2区　第5面　各遺構　断面図
出土遺物
図90　3－2区　第5面　677溝　出土遺物(1)
図91　3－2区　第5面　677溝　出土遺物(2)
図92　3－2区　第5面　677溝　出土遺物(3)
図93　3－1区　第5面　379井戸　平・断面図
出土遺物
図94　3区　第5面　各遺構　断面図(1)
図95　3区　第5面　各遺構　出土遺物
図96　3－2区　第5面　1378・1572井戸
出土遺物
図97　3－2区　第5面　858土坑　平・断面図
出土遺物
図98　3－2区　第5面　2479土坑　平・断面図
出土遺物
図99　3区　第5面　各遺構　断面図(2)
図100　3－1区　第5面　各遺構　出土遺物
図101　3－2区　第5面　各遺構　出土遺物(1)
図102　3－2区　第5面　各遺構　出土遺物(2)
図103　3－2区　第5面　黒色炭層　出土遺物
図104　3区　第6面　平面図
図105　3－1区　第6面　平面図
図106　3－1区　第6面　386風倒木痕　断面図
図107　3－2区　第6面　373・2207流路
断面図
図108　3－2区　第6面　2337流路　断面図
図109　3－2区　第6面　373・2207流路
出土遺物
図110　3区　第2～4a層　出土遺物
図111　3区　第4b層　出土遺物
図112　3区　第4b・5層　出土遺物
図113　4区・5区　南壁　断面図
図114　4・5区　第1面　平面図
図115　4－1・2区　第1面　平面図
図116　5－1区　第1面　平面図
図117　5－2区　第1面　平面図
図118　4・5区　第2面　平面図
図119　4－1・2区　第2面　平面図
図120　5－2区　第2面　平面図
図121　4区　第2面　各遺構　断面図
出土遺物
図122　4－2区　第2面　691井戸
平・断・立面図
図123　4－2区　第2面　691井戸
出土遺物(1)
図124　4－2区　第2面　691井戸
出土遺物(2)
図125　4・5区　第2面　各遺構　断面図
出土遺物
図126　4区　第2面　654・712土坑　断面図
出土遺物
図127　4・5区　第3面　平面図
図128　5－2区　第3面　平面図
図129　5－2区　第3面　掘立柱建物19・塀2
平・断面図
図130　5－2区　第3面　各遺構　出土遺物(1)
図131　5－2区　第3面　掘立柱建物20
平・断面図
図132　5－2区　第3面　掘立柱建物21
平・断面図

図133　5－2区　第3面　掘立柱建物22・23
平・断面図
図134　5－2区　第3面　掘立柱建物24・塀3
平・断面図
図135　5区　第3面　掘立柱建物20・23・24
出土遺物
図136　5区　第3面　1039溝　平・断面図
図137　5区　第3面　1039溝　出土遺物(1)
図138　5区　第3面　1039溝　出土遺物(2)
図139　5区　第3面　各遺構　断面図
出土遺物
図140　5－2区　第3面　1038・1717土坑
平・断面図
図141　5－2区　第3面　1038・1717土坑
出土遺物
図142　5－2区　第3面　1044土坑
平・断面図
図143　5－2区　第3面　1044土坑
出土遺物(1)
図144　5－2区　第3面　1044土坑
出土遺物(2)
図145　5－2区　第3面　各遺構
出土遺物(2)
図146　4・5区　第4面　平面図
図147　4－1・2区　第4面　平面図
図148　5－1区　第4面　平面図
図149　5－2区　第4面　平面図
図150　4－1区　第4面　掘立柱建物30
平・断面図　出土遺物
図151　5－1区　第4面　掘立柱建物31・32
平・断面図
図152　4・5区　第4面　各遺構　断面図(1)
図153　4・5区　第4面　各遺構　出土遺物(1)
図154　4・5区　第4面　各遺構　断面図(2)
図155　4・5区　第4面　各遺構　出土遺物(2)
図156　4・5区　第5面　平面図
図157　4－1・2区　第5面　平面図
図158　5－2区　第5面　平面図
図159　5－1区　第5面　平面図
図160　4・5区　第5面　各遺構　断面図
図161　4・5区　第3層　出土遺物
図162　4・5区　第4a層　出土遺物
図163　4・5区　第4b層・側溝　出土遺物
図164　6区　南壁　断面図
図165　6・7区　第1面　平面図
図166　6－2区　第1面　平面図
図167　6－3区　第1面　平面図
図168　6－4区　第1面　平面図
図169　7－1～4区　第1面　平面図
図170　6－4区　第1面　溜池　出土遺物
図171　6・7区　第2面　平面図
図172　6－1区　第2面　平面図
図173　6－1区　第2面　各遺構　断面図
図174　6－4・7－1区　第2面　平面図
図175　7－1区　第2面　2016溝　断面図
出土遺物
図176　6－4区　第2面　2332井戸　断面図
出土遺物
図177　6・7区　第3面　平面図
図178　6－1区　第3面　平面図
図179　6－2区　第3面　平面図
図180　6－3区　第3面　平面図
図181　6－4区　第3面　平面図
図182　7－1～4区　第3面　平面図
図183　6－3区　第3面　2470流路　断面図
図184　6・7区　第3面　各遺構　断面図(1)
図185　7区　第3面　各遺構・南壁　断面図
図186　7－3区　第3面　各遺構　出土遺物
図187　6・7区　第3面　各遺構　断面図(2)
図188　7－2区　第3面　各遺構　断面図
出土遺物
図189　6・7区　第4面　平面図
図190　6－3区　第4面　平面図
図191　6－3区　第4面　2255流路・
2256土坑　断面図
図192　6・7区　第5面　平面図

図193　6－1区　第5面　平面図
図194　6－2区　第5面　平面図
図195　6－3・7－1区　第5面　平面図
図196　6－3区　第5面　2278流路　断面図
図197　6・7区　第5面　各遺構　断面図
図198　6・7区　第3層　出土遺物(1)
図199　6・7区　第3層　出土遺物(2)
図200　6・7区　第4a・9層・側溝　出土遺物
図201　8区　南壁　断面図
図202　8区　第1面　平面図
図203　8－1区　第1面　平面図
図204　8－2区　第1面　平面図
図205　8区　第2面　平面図
図206　8－1区　第2面　平面図
図207　8－2区　第2面　平面図
図208　8区　第3面　平面図
図209　8－1区　第3面　平面図
図210　8－2区　第3面　平面図
図211　8区　第3面　各遺構　断面図(1)
図212　8区　第3面　各遺構　断面図(2)
図213　8区　第3面　各遺構　出土遺物
図214　8区　第4面　平面図
図215　8－2区　第4面　平面図
図216　8区　第5面　平面図
図217　8－1区　第5面　平面図
図218　8－2区　第5面　平面図
図219　8－1区　第5面　各遺構　断面図
図220　8区　第3層　出土遺物
図221　8区　第3～5層　出土遺物
図222　2区　南壁　断面図
図223　1・2区　第1面　平面図
図224　1区　第1面　3442・2856井戸
平・断面図
図225　1区　第1面　2856井戸　出土遺物
図226　1・2区　第2面　平面図
図227　第4a層　出土遺物
図228　1・2区　第4面　平面図
図229　1区　第4面　各遺構断面図
図230　1区　第4面　2876・3529土坑
出土遺物
図231　1区　第6面　平面図　2872流路
断面図
図232　1区　第9面　平面図
図233　3区　南壁　断面図
図234　3区　第1面　平面図
図235　3区　第3d層　第1・2面　出土遺物
図236　3区　第2面　平面図
図237　3区　第4a層　出土遺物
図238　3区　第4面　平面図
図239　3－2区　第4面　平面図
図240　3－2区　第4面　3516溝　平・断面図
出土遺物
図241　3－1区　第4面　平面図
図242　3－2区　第4面　平面図
図243　3－2区　第4面　3504・3505溝
断面図
図244　3－2区　第4面　3504溝　出土遺物(1)
図245　3－2区　第4面　3504溝　出土遺物(2)
図246　3－2区　第4面　3505溝　出土遺物
図247　3－2区　第4面　掘立柱建物33
平・断面図
図248　3－2区　第4面　平地建物1
柱列1・2　平・断面図
図249　3区　第4面　2659・2660・3597・
3676溝　断面図
図250　3－2区　第4面　3553溝・3569溝
平・断面図　出土遺物
図251　3－1区　第4面　2673・2675井戸
平・断面図　2675井戸　出土遺物
図252　3－1区　第4面　2669・2674土坑
平・断面図　2674土坑　出土遺物
図253　3－2区　3474・3554・3555土坑
平・断面図　3554・3555土坑　出土遺物
図254　3－2区　第4面　3665・3590・3598・
3614土坑　平・断面図　3598土坑
出土遺物

図255　3−2区　第4面　3599・3603土坑
平・断面図　3599・3603・3631土坑
出土遺物
図256　3−2区　第4面　各土坑　平・断面図
図257　3−2区　第4面　各土坑　出土遺物
図258　3−2区　第4面　3835土坑　平・断面図
出土遺物
図259　3−2区　第4面　各ピット　平・断面図
3632・3649ピット　出土遺物
第4面　出土遺物
図260　3区　第6面　平面図
図261　3−1区　第9面　2800〜2802流路
断面図
図262　3区　第10面　平面図
図263　3区　第10面　出土遺物
図264　4区　南壁・東壁　断面図
図265　4区　第1面　平面図
図266　4区　第3ｄ層　出土遺物
図267　4区　第2面　平面図
図268　第4ａ層　出土遺物
図269　4区　第4面　平面図
図270　4−1区　第4面　平面図
図271　4−2区　第4面　平面図
図272　4−1区　第4面　掘立柱建物34
図273　4−1区　第4面　2416・2420溝
断面図　出土遺物
図274　4−1区　第4面　各溝　断面図
2599溝　出土遺物
図275　4−1区　第4面　2460・2486溝
断面図　2486溝　出土遺物
図276　4−1区　第4面　2460溝出土遺物
図277　4−2区　第4面　各溝　断面図
出土遺物
図278　4−2区　第4面　各溝　断面図
出土遺物
図279　4−1区　第4面　2444井戸　平・断面図
出土遺物
図280　4−1区　第4面　各土坑　平・断面図(1)
図281　4−1区　第4面　各土坑　平・断面図(2)
図282　4−1区　第4面　各土坑　出土遺物(1)
図283　4−1区　第4面　各土坑　平・断面図(3)
図284　4−1区　第4面　各土坑　平・断面図(4)
図285　4−1区　第4面　2528土坑　出土遺物
図286　4−1区　第4面　各土坑　出土遺物(2)
図287　4−1区　第4面　各土坑　平・断面図(5)
2547土坑　出土遺物
図288　4−2区　第4面　1469・1491・1559土坑
平・断面図
図289　4−2区　第4面　1469・1491・1559土坑
出土遺物
図290　4−2区　第4面　1577土坑　平・断面図
出土遺物
図291　4−2区　第4面　1708・1717土坑
平・断面図
図292　4−2区　第4面　1717土坑
出土遺物(1)
図293　4−2区　第4面　1708・1717土坑
出土遺物(2)
図294　4−2区　第4面　各土坑　平・断面図
図295　4−2区　第4面　1455土坑　出土遺物
図296　4−2区　第4面　各土坑　出土遺物
図297　4区　第4面　2541・1560・1518ピット
平・断面図　出土遺物
図298　4−2区　第6面　平面図
図299　4−2区　第8面　平面図(上)　第9面
平面図(下)
図300　5区　南壁　断面図
図301　5区　第3層　出土遺物
図302　5区　第2面　平面図
図303　5−3区　第2面　608溝　断面図　各溝
出土遺物
図304　5区　第4ａ層　出土遺物(1)
図305　5区　第4ａ層　出土遺物(2)
図306　5区　第3面　平面図
図307　5−3・4区　西半部　第3面　平面図
図308　5−3・4区　東半部　第3面　平面図

図309　5－1区　第3面　平面図
図310　5－2区　第3面　平面図
図311　5区　第3面　掘立柱建物　平面図
図312　5－4区　第3面　掘立縦柱建物35
平・断面図　出土遺物
図313　5－4区　第3面　掘立柱建物36
平・断面図
図314　5－4区　第3面　掘立柱建物37
平・断面図
図315　5－3区　第3面　掘立柱建物38・39
平・断面図
図316　5－3区　第3面　掘立柱建物38・39
出土遺物
図317　5－3区　第3面　掘立柱建物40
平・断面図
図318　5－3区　第3面　掘立柱建物41
平・断面図　出土遺物
図319　5－3区　第3面　掘立柱建物42
平・断面図　出土遺物
図320　5－3区　第3面　掘立柱建物43
平・断面図
図321　5－3・4区　第3面　掘立柱建物44
平・断面図
図322　5－4区　第3面　掘立柱建物45
平・断面図(1)
図323　5－4区　第3面　掘立柱建物45
平・断面図(2)
図324　5－4区　第3面　掘立柱建物46
平・断面図(1)
図325　5－4区　第3面　掘立柱建物46
平・断面図(2)
図326　5－4区　第3面　掘立柱建物45～47
出土遺物
図327　5－4区　第3面　掘立柱建物47
平・断面図
図328　5－4区　第3面　掘立柱建物47
出土遺物
図329　5－4区　第3面　掘立柱建物48
平・断面図
図330　5－4区　第3面　掘立柱建物49
平・断面図　出土遺物
図331　5－4区　第3面　掘立柱建物50
平・断面図　出土遺物
図332　5－4区　第3面　掘立柱建物51・52
平・断面図(1)
図333　5－4区　第3面　掘立柱建物51・52
平・断面図(2)
図334　5－4区　第3面　掘立柱建物51・52
出土遺物
図335　5－4区　第3面　掘立柱建物53
平・断面図　出土遺物
図336　5－1区　第3面　掘立柱建物54
平・断面図
図337　5－1区　第3面　掘立柱建物55
平・断面図　出土遺物
図338　5－1区　第3面　掘立柱建物56
平・断面図
図339　5－1区　第3面　掘立柱建物57
平・断面図
図340　5－1区　第3面　掘立柱建物58
平・断面図　2889柱穴　出土遺物
図341　5－1・2区　第3面　掘立柱建物59
平・断面図　出土遺物
図342　5－2区　第3面　掘立柱建物60
平・断面図　出土遺物
図343　5－2区　第3面　掘立柱建物61
平・断面図(1)
図344　5－2区　第3面　掘立柱建物61
断面図(2)　出土遺物
図345　5－2区　第3面　掘立柱建物62
平・断面図
図346　5－2区　第3面　掘立柱建物62
出土遺物
図347　5－2区　第3面　掘立柱建物63
平・断面図　出土遺物
図348　5－2区　第3面　掘立柱建物64

平・断面図
図349　5−2区　第3面　掘立柱建物64
出土遺物
図350　5−2区　第3面　掘立柱建物65
平・断面図
図351　5−2区　第3面　掘立柱建物65
出土遺物
図352　5−2区　第3面　掘立柱建物66
平・断面図
図353　5−2区　第3面　掘立柱建物66
出土遺物
図354　5−4区　第3面　柱列3・4　平・断面図
図355　5−4区　第3面　柱列3・4　出土遺物
図356　5−2・4区　第3面　柱列5・6　平・断面図
出土遺物
図357　5−2・4区　第3面　柱列7〜9
平・断面図
図358　5−2区　第3面　柱列8・9　出土遺物
図359　5−3・4区　第3面　117溝　断面図
図360　5−3・4区　第3面　117溝　上層
出土遺物(1)
図361　5−3・4区　第3面　117溝　上層
出土遺物(2)
図362　5−3・4区　第3面　117溝　上層
出土遺物(3)
図363　5−3・4区　第3面　117溝　上層
出土遺物(4)
図364　5−3・4区　第3面　117溝　上層
出土遺物(5)
図365　5−3・4区　第3面　117溝　中層
出土遺物(6)
図366　5−3・4区　第3面　117溝　中層
出土遺物(7)
図367　5−3・4区　第3面　117溝
出土遺物(8)
図368　5−3・4区　第3面　117溝
出土遺物(9)
図369　5−3・4区　第3面　各溝　断面図
図370　5−3・4区　第3面　各溝　出土遺物
図371　5−2区　第3面　1020溝　断面図
出土遺物
図372　5−1・2区　第3面　各溝　出土遺物
図373　5−1・2区　第3面　2819溝・2829溝・
736溝　断面図
図374　5−1・2区　第3面　各溝　出土遺物
図375　5−1・2区　第3面　各溝　断面図
出土遺物
図376　5−4区　第3面　242井戸　平・断面図
2126・242・561井戸　出土遺物
図377　5−4区　第3面　1218井戸　平・断面図
図378　5−4区　第3面　1218井戸　出土遺物
図379　5−2区　第3面　726井戸　平・断面図
図380　5−2区　第3面　726井戸　出土遺物
図381　5−2区　第3面　805井戸　平・断面図
図382　5−2区　第3面　805井戸　出土遺物
図383　5−1区　第3面　3834井戸　断面図
出土遺物
図384　5−3区　第3面　2129・2208土坑
平・断面図　出土遺物
図385　5−6区　第3面　501・506土坑
平・断面図　405・502・506土坑
出土遺物
図386　5−4区　第3面　421・448・449土坑
平・断面図
図387　5−3区　第3面　各土坑　平・断面図
図388　5−3区　第3面　各土坑　出土遺物
図389　5−4区　第3面　各土坑　平・断面図
171土坑　出土遺物
図390　5−4区　第3面　49土坑　平・断面図
図391　5−1区　第3面　各土坑　平・断面図
2866土坑　出土遺物
図392　5−2区　第3面　各土坑　平・断面図
出土遺物
図393　5−2区　第3面　687・899・900土坑
平・断面図
図394　5−2区　第3面　899・900土坑

出土遺物
図395　5−2区　第3面　1015土坑　平・断面図
出土遺物
図396　5−2区　第3面　各土坑　出土遺物
図397　5−2区　第3面　1092・1094・1095・
1097土坑　平・断面図　出土遺物
図398　5区　第3面　各ピット　平・断面図
図399　5−1・3・4区　第3面　各ピット
出土遺物
図400　5−2区　第3面　各ピット
出土遺物(1)
図401　5−2区　第3面　各ピット
出土遺物(2)
図402　5−4区　第3面　2047落込み
出土遺物
図403　5−2区西端部　第3面　平面図
1747・1748溝　断面図
図404　5−2区　第3面　1747・1748・1230溝
出土遺物
図405　5区　第4ｂ層　出土遺物(1)
図406　5区　第4ｂ層　出土遺物(2)
図407　5区　第4面　平面図
図408　5−2区　第4面　掘立柱建物67
柱列10・11　平・断面図
図409　5−1区　第4面　方形周溝墓1
平・断面図
図410　5−1区　第4面　方形周溝墓1
出土遺物
図411　5−1・2区　第4面　1765・1766溝
断面図
図412　5−1・2区　第4面　1765溝
出土遺物(1)
図413　5−1・2区　第4面　1765溝
出土遺物(2)
図414　5−1・2区　第4面　1766溝　出土遺物
図415　5−1区　第4面　3147・3149溝
断面図　3147溝　出土遺物
図416　5−2区　第4面　3151溝　断面図
出土遺物
図417　5区　第4面　各溝　断面図　出土遺物
図418　5−3区　第4面　3180・3247溝
断面図　3180溝　出土遺物
図419　5−1区　第4面　3224井戸　平・断面図
図420　5−1区　第4面　3224井戸　出土遺物
図421　5−3区　第4面　3257土坑　平・断面図
図422　5−4区　第4面　2120・2121・2128土坑
平・断面図　2128土坑　出土遺物
図423　5−1区　第4面　3201・3202土坑
平・断面図
図424　5−1区　第4面　3202土坑　出土遺物
図425　5−2区　第4面　2023土坑　平・断面図
出土遺物
図426　5区　第5層　出土遺物
図427　5区　第5面　平面図
図428　5−3・4区　第5面　水田面
図429　5−4区　第5面　大畦畔　断面図
図430　5−1・2区　第5面　2035流路　断面図
堰　平面図
図431　5−1・2区　第5面　2035流路
出土遺物(1)
図432　5−1・2区　第5面　2035流路
出土遺物(2)
図433　5−1・2区　第5面　2035流路
出土遺物(3)
図434　5−1・2区　第5面　2035流路
出土遺物(4)
図435　5−1・2区　第5面　各溝　断面図
図436　5−1・3区　第5面　3374・3379溝
出土遺物
図437　5−1区　第5面　3377土坑　平・断面図
図438　5−1区　第5面　3448土坑　平・断面図
図439　5−1区　第5面　3448土坑　出土遺物
図440　5−1・2区　第5面　3449土坑
平・断面図
図441　5−1・2区　第5面　3449土坑
出土遺物

図442　5−2区　第5面　2050土坑　平・断面図
出土遺物
図443　5区　第5面　上面　出土遺物
図444　5−3区　第7面　平面図
図445　5−2・3区　第8面　平面図
図446　5−2区　第8面　2414・2415流路
断面図
図447　5−3・4区　第9面　平面図
図448　5−3・4区　第9面　風倒木痕　断面図
図449　5区　第11面　平面図
図450　5区　第11面　流路　断面図
図451　第2面　各遺構　出土遺物
図452　第3層・第3c層・第3d層　出土遺物
図453　第3〜4層　出土遺物
図454　第3面　各遺構　出土遺物(1)
図455　第3面　各遺構　出土遺物(2)
図456　第4a層　出土遺物(1)
図457　第4a層　出土遺物(2)
図458　第4面　各遺構　出土遺物(1)
図459　第4面　各遺構　出土遺物(2)
図460　第4面　各遺構　出土遺物(3)
図461　第4面　各遺構　出土遺物(4)
図462　第4面　各遺構　出土遺物(5)
図463　第4面　各遺構　出土遺物(6)
図464　第4面　各遺構　出土遺物(7)
図465　第4面　各遺構　出土遺物(8)
図466　第4面　各遺構　出土遺物(9)
図467　第4面　各遺構　出土遺物(10)
図468　第4面　各遺構　出土遺物(11)
図469　第4面　各遺構　出土遺物(12)
図470　第4面　各遺構　出土遺物(13)
図471　第4面　各遺構　出土遺物(14)
図472　第4面　各遺構　出土遺物(15)
図473　第4b層　出土遺物
図474　第4c層　出土遺物(1)
図475　第4c層　出土遺物(2)
図476　第5面・第5〜12層　側溝　出土遺物
図477　1区　南壁　断面図
図478　1区　東壁　断面図
図479　1区　第1面　平面図
図480　1区　第2面　平面図
図481　1区　第2面　各遺構　平・断面図
図482　1区　第3面　平面図
図483　1区　第3面　各遺構　平・断面図
図484　1区　第4面　平面図
図485　1区　第4面　63周溝
遺物検出状況図
図486　1区　第4面　63周溝　出土遺物
図487　1区　第4b層下面　各遺構
断面図(1)
図488　1区　第4b層下面　各遺構
断面図(2)
図489　1区　第3・4a層　出土遺物
図490　2区　東半南壁　断面図
図491　2区　西半南壁　断面図
図492　2区　中央部南北　断面図
図493　2区　第1面　平面図
図494　2区　第1面　各遺構　出土遺物
図495　2区　第2面　平面図
図496　2区　第3面　平面図
図497　2区　第2面　区画溝　断面図
図498　2区　第2面　区画溝　出土遺物
図499　2区　第2面　165溝　出土遺物(1)
図500　2区　第2面　165溝　出土遺物(2)
図501　2区　第2面　掘立柱建物68
平・断面図
図502　2区　第2面　掘立柱建物69
平・断面図
図503　2区　第2面　掘立柱建物70
平・断面図
図504　2区　第2面　掘立柱建物68・70
出土遺物
図505　2区　第2面　掘立柱建物71
平・断面図
図506　2区　第2面　掘立柱建物72
平・断面図

図507　2区　第2面　330土坑墓　平・断面図
図508　2区　第2・3面　各遺構　断面図(1)
図509　2区　第2・3面　各遺構
出土遺物(1)
図510　2区　第2・3面　各遺構　断面図(2)
図511　2区　第2・3面　各遺構
出土遺物(2)
図512　2区　第2面　169土坑　平・断面図
図513　2区　第2面　347土坑　平・断面図
図514　2区　第2面　169土坑　出土遺物(1)
図515　2区　第2面　169土坑　出土遺物(2)
図516　2区　第2面　169土坑　出土遺物(3)
図517　2区　第2面　347土坑　出土遺物
図518　2区　第3面　194土坑　平・断面図
図519　2区　第3面　194土坑　出土遺物
図520　2区　第2・3面　各遺構　断面図(3)
図521　2区　第2・3面　各遺構　断面図(4)
図522　2区　第2・3面　各遺構　断面図(5)
図523　2区　第2・3面　各遺構
出土遺物(3)
図524　2区　第2・3面　各遺構
出土遺物(4)
図525　2区　第3面　233・234溝　平面図
図526　2区　第3面　233・234溝
遺物検出状況平面図
図527　2区　第3面　233溝　出土遺物
図528　2区　第3面　234・250溝　出土遺物
図529　2区　第4面　平面図
図530　2区　第4面　362流路　出土遺物
図531　2区　第4面　各遺構　断面図
図532　2区　第4面　各遺構　出土遺物
図533　2区　第3～4a層　出土遺物
図534　2区　第4b～6層　出土遺物
図535　3区　北壁　断面図
図536　3区　第1面　平面図
図537　3区　第2面　平面図
図538　3区　第2面　10土坑　平・断面図
図539　3区　第2面　10土坑　出土遺物
図540　3区　第2面　各遺構　断面図
図541　3区　第2面　8土坑　出土遺物
図542　3区　第3面　平面図
図543　3区　各層　出土遺物
図544　瓜破台地西部の東西地質断面図
図545　調査区東西地質断面図
図546　池内遺跡(その1)3－1区・6－1区
試料採取　柱状図
図547　池内遺跡(その1)　8－1区
(IK(1)8－1)　試料柱状図
図548　池内遺跡(その2)　5－3区西
(IK(2)5－3W)　試料柱状図
図549　粒度分析の手順
図550　IK(1)3－1礫砂泥の割合・粒度分布
の評価
図551　IK(1)3－1　粒度分布のヒスト
グラム・累計曲線
図552　IK(1)　6－1　礫砂泥の割合・粒度
分布の評価
図553　IK(1)　6－1　粒度分布のヒスト
グラム・累計曲線
図554　IK(1)　8－1　礫砂泥の割合・粒度
分布の評価　粒度分布のヒストグラム・
累計曲線
図555　IK(1)　5－3W　礫砂泥の割合・粒度
分布の評価
図556　IK(1)　5－3W　粒度分布の
ヒストグラム・累計曲線
図557　IK(1)　3－1　鉱物組成・火山ガラス
の形態・重組成鉱物・火山ガラスの屈折率
図558　IK(1)　6－1　鉱物組成・火山ガラス
の形態・重鉱物組成・火山ガラスの屈折率
図559　IK(1)　8－1　鉱物組成・火山ガラス
の形態・重鉱物組成・火山ガラスの屈折率
図560　IK(2)　5－3W　鉱物組成・火山ガラ
スの形態・重鉱物組成・火山ガラスの
屈折率
図561　花粉分析処理フロー

図562　イネ科花粉の粒径比較図
図563　IK(1)　3－1　花粉ダイアグラム
図564　IK(2)　5－3W　花粉ダイアグラム
図565　大阪平野中央部の上部更新統～完新統における主要5火山灰層の標準的な岩石記載的性質
図566　主要珪藻化石群集の層位分布
図567　花粉化石群集の層位分布
図568　植物珪酸体含量の層位的変化
図569　縄文時代～弥生時代前期の池内遺跡
図570　平安時代前期の池内遺跡
図571　中～近世の池内遺跡
図572　平安時代屋敷地の構成
図573　屋敷地内特殊遺物の分布
図574　近隣検出弥生前期環濠集落との規模比較
図575　三宅西遺跡08－1　遺物取り上げ区画
図576　池内遺跡09－1・三宅西遺跡09－1遺物取り上げ区画
図577　西壁　断面図
図578　南壁　断面図
図579　第1面　平面図
図580　第1面　1溝　断面図
図581　3区　第1面　1溝　出土遺物
図582　3区　第1面　8溝　断面図
図583　3区　第1面　8溝　遺物出土状況図
図584　3区　第1面　8溝　出土遺物(1)
図585　3区　第1面　8溝　出土遺物(2)
図586　3区　第1面　各遺構　断面図(1)
図587　3区　第1面　各遺構　断面図(2)
図588　3区　第2面　平面図
図589　3区　第2面　各遺構　断面図
図590　3区　第3面　平面図
図591　3区　第3面　46流路　断面図
図592　3区　第3面　46流路　出土遺物
図593　3区　第3面　各層　出土遺物
図594　西壁　断面図
図595　第1面　平面図
図596　第1面　各遺構　断面図
図597　第2面　平面図
図598　第2面　各遺構　断面図
図599　第3面　平面図
図600　第3面　39流路　断面図
図601　各層・遺構　出土遺物

表目次

表1　石器観察表（1）
表2　石器観察表（2）
表3　石器観察表（3）
表4　石器観察表（4）
表5　石器観察表（5）
表6　石器観察表（6）
表7　石器観察表（7）
表8　池内遺跡の火砕物組成
表9　池内遺跡05－1－3－1区花粉化石組成
表10　池内遺跡05－2－5－3区　花粉化石組成
表11　分析試料表
表12　珪藻化石の生態性区分と環境指標種群
表13　各調査区遺構面対応表
表14　平安時代掘立柱建物一覧表

写真目次

写真1　砕屑物・火山砕屑物の実体顕微鏡写真・偏光顕微鏡写真
写真2　火山砕屑物の偏光顕微鏡写真
写真3　花粉の生物顕微鏡写真
写真4　珪藻化石
写真5　花粉化石
写真6　植物珪酸体

写 真 図 版 目 次

図版１　池内遺跡05-1・07-1　遺構
１.１-１区　第１面
２.１-３区　第３面　2623溝
３.１-１区　第２面　掘立柱建物１
４.１-２区　第３面
５.１-１区　第３面
図版２　池内遺跡05-1・07-1　遺構
１.１-３区　第３面
２.１-３区　第３面　掘立柱建物27
３.１-３区　第３面　掘立柱建物26
４.１-３区　第３面　2788柱穴
図版３　池内遺跡05-1・07-1　遺構
１.１-３区　第３面　2602溝
２.１-３区　第３面　2613溝
３.１-３区　第３面　2732溝・2712土坑
図版４　池内遺跡05-1・07-1　遺構
１.１-１区　第５面
２.１-２区　第５面
３.１-３区　第５面
図版５　池内遺跡05-1　遺構
１.３-２区　第２面
２.３-１区　第１面
３.４-２区　第１面
４.４-１区　第２面
５.４-２区　第２面
図版６　池内遺跡05-1　遺構
１.５-１区　第１面
２.３-１区　第４面　耕作溝群
３.３-１区　第４面　掘立柱建物２
図版７　池内遺跡05-1　遺構
１.３-１区　第４面　掘立柱建物３
２.３-１区　第４面
３.３-１区　第４面　耕作溝群
図版８　池内遺跡05-1　遺構
１.３-２区　第５面　掘立柱建物28
２.３-２区　第５面　掘立柱建物29
３.３-２区　第４面　掘立柱建物８～11
図版９　池内遺跡05-1　遺構
１.３-２区　第４面　掘立柱建物７～９
２.３-２区　第４面　掘立柱建物12・13
３.３-２区　第４面　掘立柱建物15　塀１
図版10　池内遺跡05-1　遺構
１.３-２区　第４面　掘立柱建物16
２.３-２区　第４面
掘立柱建物14・15・18　塀１
３.３-２区　第５面　677溝
図版11　池内遺跡05-1　遺構
１.４-１区　第４面　掘立柱建物30
２.４-２区　第４面
３.５-１区　第４面　掘立柱建物31・32
図版12　池内遺跡05-1　遺構
１.４-２区　第２面　691井戸（１）
２.４-２区　第２面　691井戸（２）
３.４-２区　第２面　691井戸（３）
図版13　池内遺跡05-1　遺構
１.３-１区　第４面　掘立３-84柱穴
２.３-２区　第４面　掘立５-785柱穴
３.３-２区　第４面　掘立11-1021柱穴
４.３-２区　第４面　掘立14-1360柱穴
５.３-２区　第４面　掘立18-1380柱穴
６.３-２区　第４面　1407土坑
７.３-２区　第４面　1789土坑
８.４-２区　第２面　712土坑
図版14　池内遺跡05-1　遺構
１.４-１区　第２面　470土坑
２.３-１区　第５面　38井戸
３.３-１区　第５面　379井戸
４.３-２区　第５面　677溝
５.３-２区　第５面　728土坑
６.３-２区　第５面　1318土坑

7．3-2区　第5面　2479土坑
8．3-2区　第5面　2479土坑下層
図版15　池内遺跡05-1　遺構
1．3-1区　第4面　375井戸
2．3-2区　第5面　379井戸
3．3-2区　第5面　858土坑
図版16　池内遺跡05-1　遺構
1．3-1区　第4面　53溝
2．3-1区　第4面　106溝
3．3-1区　第5面　156井戸
4．3-1区　第5面　347土坑
5．3-1区　北壁
図版17　池内遺跡05-1　遺構
1．3-2区　第6面　373流路
2．3-2区　第6面　2207流路（1）
3．3-2区　第6面　2207流路（2）
図版18　池内遺跡05-1　遺構
1．3-1区　第6面　373流路　西側肩
2．3-1区　第6面　373流路
3．4-1区　第5面　584流路
4．5-2区　第1面
5．6-1区　第2面
6．6-3区　第1面
7．7-1区　第1面
図版19　池内遺跡05-1　遺構
1．7-1区　第2面　2016溝
2．6-4区　第2面
3．5-2区　第3面　714・715溝
4．7-4区　第3面　2397・2398溝
5．5-2区　第3面　溝・掘立柱建物
図版20　池内遺跡05-1　遺構
1．5-2区　第3面　掘立柱建物19・22・23
2．5-2区　第3面　掘立柱建物20・21
3．5-2区　第3面　掘立柱建物24
図版21　池内遺跡05-1　遺構
1．6-4区　第2面　2332土坑
2．5-2区　第3面　掘立19-1910柱穴
3．5-2区　第3面　掘立20-1838柱穴
4．5-2区　第3面　掘立21-1841柱穴
5．5-2区　第3面　掘立24-1848柱穴
6．5-2区　第3面　1825柱穴
7．5-2区　第3面　1038・1717土坑
8．5-2区　第3面　1044土坑
図版22　池内遺跡05-1　遺構
1．5-2区　第4面
2．6-3区　第3面
図版23　池内遺跡05-1　遺構
1．5-2区　第4面　轍
2．6-1区　第3面
3．6-2区　第3面
4．6-4区　第3面
5．7-1区　第3面
6．7-3区　第3面
7．7-2区　第3面
図版24　池内遺跡05-1　遺構
1．5-2区　第5面
2．6-1区　第5面
3．6-2区　第5面
4．6-3区　第5面
5．7-1区　第5面
6．6-3区　第5面　2278流路
7．6-3区　第5面　炭化物・焼土塊
図版25　池内遺跡05-1　遺構
1．8-1区　第1面
2．8-1区　第2面
3．8-1区　第3面
図版26　池内遺跡05-1　遺構
1．8-1区　第5面
2．8-2区　第3面
3．8-2区　第5面
図版27　池内遺跡05-1・07-1　遺物
図版28　池内遺跡05-1　遺物
図版29　池内遺跡05-1　遺物
図版30　池内遺跡05-1　遺物
図版31　池内遺跡05-1　遺物
図版32　池内遺跡05-1　遺物

図版33　池内遺跡05-1　遺物
図版34　池内遺跡05-2　遺構
1.1-1区　北壁
2.1-2区　北壁
3.2区　南壁
図版35　池内遺跡05-2　遺構
1.1-1区　第1面
2.1-1区　第1面　水田畦畔
3.1-2区　第1面
図版36　池内遺跡05-2　遺構
1.1-1区　第1面　3442井戸
2.1-2区　第1面　2856井戸
3.1-2区　第2面
図版37　池内遺跡05-2　遺構
1.1-1区　第4面
2.1-2区　第4面
3.2区　第4面
図版38　池内遺跡05-2　遺構
1.1-1区　第4面　3529土坑
2.1-2区　第4面　2875井戸
3.1-2区　第4面　2876土坑
図版39　池内遺跡05-2　遺構
1.1-2区　第6面
2.1-1区　第6面　2872流路
3.1-2区　第6面　2872流路
図版40　池内遺跡05-2　遺構
1.1-1区　第9面
2.1-2区　第9面
3.1-2区　第9面　風倒木痕
図版41　池内遺跡05-2　遺構
1.3-1区　南壁
2.3-1区　北壁
3.3-1区　東壁
図版42　池内遺跡05-2　遺構
1.3-1区　北壁東端
2.3-2区　北壁
3.3-2区　東壁
図版43　池内遺跡05-2　遺構
1.3-1区　第1面
2.3-2区　第1面
3.3-2区　第1面　水田大畦畔
図版44　池内遺跡05-2　遺構
1.3-1区　第2面
2.3-2区　第2面
3.3-1区　第2面　小溝群
図版45　池内遺跡05-2　遺構
1.3-1区　第4面
2.3-2区　第4面
3.3-1区　第4面　轍跡
図版46　池内遺跡05-2　遺構
1.3-1区　第4面　2674土坑
2.3-1区　第4面　2673井戸
3.3-1区　第4面　3597溝
図版47　池内遺跡05-2　遺構
1.3-2区　第4面
2.3-2区　第4面
図版48　池内遺跡05-2　遺構
1.3-2区　第4面　3504・3505溝
2.3-2区　第4面　3505溝　中央断面
3.3-2区　第4面　3504溝　中央断面
4.3-2区　第4面　3505溝　北側断面
5.3-2区　第4面　3504溝　北側断面
図版49　池内遺跡05-2　遺構
1.3-2区　第4面　平地建物1
2.3-2区　第4面　柱列1・2
図版50　池内遺跡05-2　遺構
1.3-2区　第4面　掘立柱建物33
2.3-2区　第4面　3719柱穴
3.3-2区　第4面　3727柱穴
4.3-2区　第4面　3729柱穴
5.3-2区　第4面　3723柱穴
図版51　池内遺跡05-2　遺構
1.3-2区　第4面　3835土坑
2.3-2区　第4面　3835土坑
3.3-2区　第4面　3695土坑
4.3-2区　第4面　3695土坑

5.3-2区　第4面　3650土坑
6.3-2区　第4面　3650土坑
7.3-2区　第4面　3678土坑
8.3-2区　第4面　3594土坑
図版52　池内遺跡05-2　遺構
1.3-1区　第6面
2.3-1区　第6面　2802流路
3.3-1区　第6面　2802流路
図版53　池内遺跡05-2　遺構
1.3-1区　第9面
2.3-1区　第10面
3.3-1区　第10面
図版54　池内遺跡05-2　遺構
1.4-1区　北壁
2.4-2区　南壁
3.4-2区　東壁
図版55　池内遺跡05-2　遺構
1.4-1区　第1面
2.4-2区　第1面
3.4-1区　第1面　大畦畔
図版56　池内遺跡05-2　遺構
1.4-1区　第4面
2.4-2区　第4面
図版57　池内遺跡05-2　遺構
1.4-1区　第4面　2416溝
2.4-1区　第4面　2444井戸
3.4-1区　第4面　2495土坑
図版58　池内遺跡05-2　遺構
1.4-1区　第4面　掘立柱建物34
2.4-1区　第4面　2485溝
図版59　池内遺跡05-2　遺構
1.4-1区　第4面　2528土坑
2.4-1区　第4面　2580～2582土坑
3.4-1区　第4面　2424・2437土坑
図版60　池内遺跡05-2　遺構
1.4-1区　第4面　2599溝
2.4-2区　第4面　1550土坑
3.4-2区　第4面　1744土坑
図版61　池内遺跡05-2　遺構
1.4-2区　第6面
2.4-2区　第6面　465溝
3.4-2区　第7面
図版62　池内遺跡05-2　遺構
1.4-2区　第8面
2.4-2区　第9面
3.4-2区　第11面
図版63　池内遺跡05-2　遺構
1.5-3区　東壁
2.5-4区　東壁
3.5-3区　西壁
図版64　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　南壁
2.5-2区　南壁
3.5-2区　南壁
図版65　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第2面
2.5-3区西　第2面
3.5-3区東　第2面
図版66　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第3面
2.5-3区西　第3面
図版67　池内遺跡05-2　遺構
1.5-3区　第3面
2.5-2区　第3面
図版68　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面
2.5-4区　第3面　西側
図版69　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　中央部
2.5-4区　第3面　東側
図版70　池内遺跡05-2　遺構
1.5-3区西　第3面　東側　区画溝他
2.5-4区　第3面　東側　区画溝他
図版71　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　117溝〔上層〕
2.5-4区　第3面　117溝〔上層〕

3.5-4区　第3面　117溝〔上層〕
図版72　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　117溝〔中層〕
2.5-4区　第3面　117溝〔中層〕
3.5-3区西　第3面　117溝
図版73　池内遺跡05-2　遺構
1.5-3区西　第3面　117溝　中央断面
2.5-4区　第3面　117溝　北側断面
3.5-4区　第3面　117溝　南側断面
図版74　池内遺跡05-2　遺構
1.5-3区西　第3面　92溝
2.5-4区　第3面　90～92溝
3.5-4区　第3面　156溝
図版75　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第3面　西側　1230畦畔
2.5-2区　第3面　西側　1230畦畔
3.5-1区　第3面　1230畦畔下　溝
図版76　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　掘立柱建物46～53
2.5-4区　第3面　掘立柱建物46～53
図版77　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　掘立柱建物46周辺
2.5-4区　第3面　掘立柱建物47周辺
図版78　池内遺跡05-2　遺構
1.5-2区　第3面　掘立柱建物66
2.5-2区　第3面　掘立柱建物61
3.5-2区　第3面　掘立柱建物64・65
図版79　池内遺跡05-2　遺構
1.5-2区　第3面　掘立柱建物60～66
2.5-2区　第3面　柱列9
3.5-1区　第3面　掘立柱建物55
図版80　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第3面　掘立柱建物54
2.5-3区西　第3面　掘立柱建物41～43
3.5-3区西　第3面　掘立柱建物38・39
図版81　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　掘立柱建物37
2.5-4区　第3面　掘立柱建物36
3.5-4区　第3面　掘立柱建物35
図版82　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　1218井戸
2.5-4区　第3面　1218井戸
3.5-4区　第3面　1218井戸水溜
図版83　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　242井戸
2.5-2区　第3面　726井戸
3.5-2区　第3面　805井戸
図版84　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　222土坑他
2.5-3区西　第3面　2129土坑
3.5-3区西　第3面　2934土坑
4.5-2区　第3面
掘立柱建物57・1403柱穴
5.5-2区　第3面　899土坑
6.5-4区　第3面　2119土坑
7.5-4区　第3面　249土坑
8.5-4区　第3面　483土坑
図版85　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第4面　西側
2.5-1区　第4面
3.5-3区　第4面
図版86　池内遺跡05-2　遺構
1.5-2区　第4面
2.5-4区　第4面　西側
図版87　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第3面　506土坑
2.5-2区　第4面　1983溝
3.5-1区　第4面　3202土坑
4.5-1区　第4面　方形周溝墓1南西部
5.5-4区　第4面　501土坑
図版88　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第4面　3224井戸
2.5-1区　第4面　3224井戸
3.5-1区　第4面　3224井戸
図版89　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第4面　1765・1766溝

2.5-2区　第4面　1765・1766溝
図版90　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第4面　1765溝
2.5-1区　第4面　1765溝　北側断面
3.5-1区　第4面　1766溝　北側断面
4.5-2区　第4面　1765溝　北側断面
5.5-2区　第4面　1766溝　南側断面
図版91　池内遺跡05-2　遺構
1.5-3区西　第5面
2.5-3区東　第5面
図版92　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第5面　西側
2.5-4区　第5面　中央部
図版93　池内遺跡05-2　遺構
1.5-4区　第5面　東側
2.5-3区西　第5面　中央部流路
3.5-3区西　第5面　3375溝
図版94　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第5面
2.5-2区　第5面
3.5-1区・5-3区西　第5面　2035流路
図版95　池内遺跡05-2　遺構
1.5-1区　第5面　2035流路内堰
2.5-1区　第5面　2035流路内堰
3.5-1区　第5面　2035流路内堰
4.5-1区　第5面　2035流路内
堰背後出土土器
5.5-1区　第5面　2035流路最下部
図版96　池内遺跡05-2　遺構
1.5-3区東　第7面
2.5-3区西　第8面　4003流路
3.5-3区東　第8面　4003流路
図版97　池内遺跡05-2　遺構
1.5-2区　第8面　流路
2.5-3区東　第9面
3.5-4区　第8面　倒木痕跡
図版98　池内遺跡05-2　遺構
1.5-3区東　第10面
2.5-3区西　第11面
3.5-4区　第11面　西側南端
図版99　池内遺跡05-2　遺構
1.5-2区　第11面　東側
2.5-2区　第11面　流路
3.5-4区　第11面　東側南端
図版100　池内遺跡05-2　遺物
1区　出土遺物
図版101　池内遺跡05-2　遺物
3-2区　第4面　3504・3505溝　出土遺物
図版102　池内遺跡05-2　遺物
3-2区　出土遺物
図版103　池内遺跡05-2　遺物
4-1区　第4面　出土遺物(1)
図版104　池内遺跡05-2　遺物
4区　第4面　出土遺物(2)
図版105　池内遺跡05-2　遺物
4-2区　第4面　1717土坑　出土遺物
図版106　池内遺跡05-2　遺物
5-1区　出土遺物(1)
図版107　池内遺跡05-2　遺物
5-1区　出土遺物(2)
図版108　池内遺跡05-2　遺物
5-1区　第5面　2035流路　出土遺物(1)
図版109　池内遺跡05-2　遺物
5-1区　第5面　2035流路　出土遺物(2)
図版110　池内遺跡05-2　遺物
5-1区　第5面　2035流路　出土遺物(3)
図版111　池内遺跡05-2　遺物
5-2区　出土遺物(1)
図版112　池内遺跡05-2　遺物
5-2区　出土遺物(2)
図版113　池内遺跡05-2　遺物
5-2区　出土遺物(3)
図版114　池内遺跡05-2　遺物
5-2区　第4面　1765・1766溝　出土遺物(1)
5-2区　第4面　1765・1766溝　出土遺物(2)
図版115　池内遺跡05-2　遺物

5-3区　第４面　出土遺物
図版116　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　第３面　117溝　出土遺物（１）
図版117　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　第３面　117溝　出土遺物（２）
図版118　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　第３面　117溝　出土遺物（３）
図版119　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　第３面　117溝　出土遺物（４）
図版120　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　第３面　117溝　出土遺物（５）
図版121　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　第３面　117溝他　出土遺物
図版122　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　第３面　1218井戸　出土遺物（１）
図版123　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　第３面　1218井戸　出土遺物（２）
図版124　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　出土遺物（１）
図版125　池内遺跡05-2　遺物
5-4区　出土遺物（２）
図版126　池内遺跡05-2　遺物
５区　輸入陶磁器
図版127　池内遺跡05-2　遺物
５区　緑釉陶器
図版128　池内遺跡05-2　遺物
石鏃
図版129　池内遺跡05-2　遺物
石錐
図版130　池内遺跡05-2　遺物
削器類（１）
図版131　池内遺跡05-2　遺物
削器類（２）
図版132　池内遺跡05-2　遺物
楔形石器
図版133　池内遺跡05-2　遺物
石核
図版134　池内遺跡05-2　遺物
二次加工ある剥片
図版135　池内遺跡05-2　遺物
両極打法による剥片
図版136　池内遺跡05-2　遺物
接合資料
図版137　池内遺跡05-2　遺物
石包丁・石斧
図版138　池内遺跡05-2　遺物
砥石・礫石器（１）
図版139　池内遺跡05-2　遺物
礫石器（２）
図版140　池内遺跡05-2　遺物
石製品
図版141　池内遺跡05-2　遺物
金属製品
図版142　池内遺跡05-2　遺物
土製品
図版143　池内遺跡08-1　遺構
１.１区　基本層序
２.１区　基本層序
３.１区　基本層序
図版144　池内遺跡08-1　遺構
１.１区　第１面
２.１区　第２面
図版145　池内遺跡08-1　遺構
１.１区　第３面
２.１区　第３面　29土坑
３.１区　第３面　30溝
図版146　池内遺跡08-1　遺構
１.１区　第４面
２.１区　第４面　63周溝
３.１区　第４面　63周溝
４.１区　第４面　63周溝　南西部
５.１区　63周溝　北側
図版147　池内遺跡08-1　遺構
１.２区　東半部基本層序
２.２区　東半部基本層序
３.２区　東半部基本層序

図版148　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第1面
2．2区　第1面　西半
3．2区　第1面　東半
図版149　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第2面　西半
2．2区　第2面　中央部
3．2区　第2面　東半
図版150　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第2面　西側屋敷境畦畔
2．2区　第2面　西側屋敷境畦畔
3．2区　第2面　西側屋敷境畦畔
4．2区　第2面　東側屋敷境畦畔
5．2区　第3面　231・235・236溝
6．2区　第3面　231溝　断面
7．2区　第3面　331土坑
8．2区　第2面　182土坑
図版151　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第3面
2．2区　第3面　西半
3．2区　第3面　東半
図版152　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第3面　掘立柱建物68・69
2．2区　第3面　135柱穴　礎板
3．2区　第3面　136柱穴　礎板
4．2区　第3面　138柱穴
5．2区　第3面　266柱穴
図版153　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第3面　掘立柱建物70
2．2区　第3面　154柱穴
3．2区　第3面　254柱穴
4．2区　第3面　273柱穴
5．2区　第3面　256柱穴
図版154　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第3面　掘立柱建物71
2．2区　第3面　311柱穴
3．2区　第3面　284柱穴・314小穴
4．2区　第3面　291柱穴
5．2区　第3面　285柱穴
図版155　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第3面　掘立柱建物72
2．2区　第3面　159柱穴
3．2区　第3面　296柱穴
4．2区　第3面　294柱穴
5．2区　第3面　306柱穴　礎石
図版156　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第3面　240溝
2．2区　第3面　329小穴
3．2区　第3面　188土坑
4．2区　第3面　347土坑
5．2区　第3面　169土坑
6．2区　第3面　169土坑
7．2区　第3面　194土坑
8．2区　第3面　194土坑
図版157　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第3面　330土坑墓
2．2区　第3面　330土坑墓
3．2区　第3面　330土坑墓
4．2区　第3面　330土坑墓
図版158　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第3面　233・234溝
2．2区　第3面　233溝
3．2区　第3面　233溝
図版159　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第4面　西半
2．2区　第4面　東半
図版160　池内遺跡08-1　遺構
1．2区　第4面　366溝
2．2区　第4面　369土坑
3．2区　第4面　東半　水田畦畔
図版161　池内遺跡08-1　遺構
1．3区　基本層序　北壁
2．3区　第1面
3．3区　第1面　踏み込み痕跡
図版162　池内遺跡08-1　遺構
1．3区　第2面

2．3区　第3面
図版163　池内遺跡08-1　遺構
1．3区　第2面　10土坑
2．3区　第2面　6溝
3．3区　第2面　8土坑
図版164　池内遺跡08-1　遺物
1．1区　第3～5層　出土遺物
2．1区　第4面　63周溝　出土遺物
図版165　池内遺跡08-1　遺物
1．2区　第3～5層　出土遺物
図版166　池内遺跡08-1　遺物
1．2区　第2・3面　各遺構　出土遺物
図版167　池内遺跡08-1　遺物
1．2区　第2面　169土坑　出土遺物
図版168　池内遺跡08-1　遺物
1．2区　第2・3面　各遺構　出土遺物
図版169　池内遺跡08-1　遺物
1．2区　第2・3面　194土坑・190溝
出土遺物
図版170　池内遺跡08-1　遺物
1．2区　第3面　233・234溝　出土遺物
図版171　池内遺跡08-1　遺物
1．2区　第4面　362流路　出土遺物
2．2区　第3面　371土坑　出土遺物
図版172　池内遺跡08-1　遺物
1．3区　第3～5層　出土遺物
2．3区　第2面　8・10土坑　出土遺物(1)
3．3区　第2面　8・10土坑　出土遺物(2)
図版173　三宅西遺跡08-1　遺構
1．1区　基本層序
2．3区　第1面　8溝
3．3区　第1面　8溝
図版174　三宅西遺跡08-1　遺構
1．3区　第1面　北半
2．3区　第1面　中央
3．3区　第1面　南半
図版175　三宅西遺跡08-1　遺構
1．3区　第1面　1溝・9落ち込み
2．3区　第1面　1溝・9落ち込み
3．3区　第1面　1溝・9落ち込み
図版176　三宅西遺跡08-1　遺構
1．3区　第2面　北半
2．3区　第2面　北半
3．3区　第2面　南半
図版177　三宅西遺跡08-1　遺構
1．3区　第3面　北半
2．3区　第3面　南半
3．3区　第3面　46流路
図版178　三宅西遺跡08-1　遺構
1．3区　第3面　46流路
2．3区　第3面　46流路
図版179　池内遺跡09-1　遺構
1．1区　第1面
2．1区　第2面
3．1区　第2面　16流路
図版180　池内遺跡09-1　遺構
1．1区　第3面
2．1区　第3面　27流路
図版181　三宅西遺跡09-1　遺構
1．1区　第1面
2．1区　第2面
3．1区　第3面
図版182　三宅西遺跡08-1　遺物
1．3区　第1面　各遺構　出土遺物
図版183　三宅西遺跡08-1　遺物
1．3区　第1面　8溝　出土遺物(1)
図版184　三宅西遺跡08-1　遺物
1．3区　第1面　8溝　出土遺物(2)
2．3区　第3面　46流路　第7a層
出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過

第１節　調査に至る経緯

大阪南部地域では、既存の幹線道路、特に東西方向の道路の混雑が著しく、円滑な交通の確保が難しくなっており、今後の更なる交通量の増大や都市圏の広域化を考えた場合、これに対応できる道路の整備が極めて重要になっている。また、都心部を走る阪神高速道路１号環状線の混雑は慢性的なものとなっており、沿道環境への影響が懸念されている。そのため、これらの問題を解決するべく、自動車交通の流れを抜本的に変革し、都心部の慢性的な渋滞や沿道環境の悪化等を大幅に緩和する、新たな環状道路の整備が強く要望されるようになった。

大阪府道高速大和川線（以下、大和川線）は、このような状況を背景として計画されたものであり、大阪府知事により、平成７年９月に都市計画決定、平成８年２月に路線決定、同７月に自動車専用道路の指定がなされている。平成 11 年３月には、建設大臣より阪神高速道路公団に対して基本計画の指示、10 月には工事実施計画書の認可がおこなわれ、工事開始公告となった。平成 12 年２月には、建設大臣より阪神高速道路公団に対して都市計画事業の承認がおこなわれた。なお、道路関係四公団民営化での事業区分見直しや堺市の政令指定都市移行にともない、平成 18 年度からは大阪府、堺市ならびに阪神高速道路株式会社の三者が共同して整備をおこなうことになった。

この一方で、整備により誘導される新たな都市拠点の形成を通じた都市構造の再編を促すことを目的として、政府の都市再生本部により、平成 13 年８月に「大阪都心部における新たな環状道路」が都市再生プロジェクトとして決定された。大和川線は、この「新たな環状道路」の一部を形成する路線であり、堺市堺区築港八幡町で阪神高速道路４号湾岸線より分岐し、松原市三宅中で同 14 号松原線に連絡

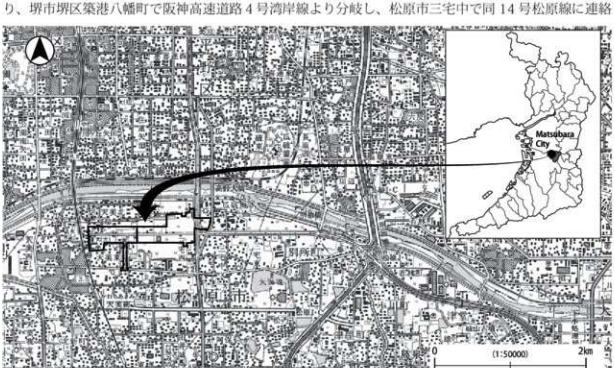


図１　遺跡位置図

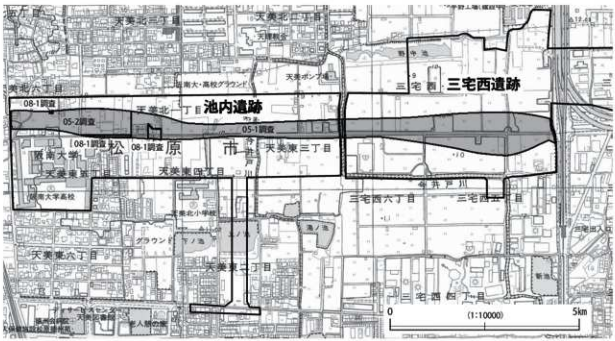


図2　池内遺跡　調査地位置図

する、全長約9.9㎞の自動車専用道路である。途中、堺市域で直交する国道26号線や大阪高石線などの幹線道路に連結し、松原市域では都市計画道路堺松原線（大阪府施行）と一体的に整備する予定である。この道路により、大阪南部地域においては臨海部と内陸部が高速道路で直結されることとなり、東西方向一般道の交通混雑が大幅に緩和されるとともに、阪神高速道路の1号環状線、13号東大阪線、14号松原線なども渋滞が緩和され、関西都市圏の社会経済活動の活発化に大きく寄与すると期待されている。

大和川線は、路線の計画にあたって、道路の整備だけではなく、地域の環境保全に十分配慮しながら高規格堤防整備事業（国土交通省施行）やその他の周辺整備計画との整合のうえ進めている。このため、大和川の景観保護、周辺市街地の環境への影響、沿道の土地利用ならびに沿川のグリーンベルトタウン構想との整合などを勘案し、一部のランプやジャンクションを除いて基本的に地下構造または掘割構造を採用している。平成17年度以降にも計画の見直しがされており、建設着手前にランプの廃止や線形の変更などがおこなわれている。

この都市計画道路の建設計画をうけて、計画路線が周知の遺跡である三宅西遺跡や池内遺跡、大和川今池遺跡などに隣接していることから、平成15年度に大阪府教育委員会文化財保護課は、大阪府土木部および富田林土木事務所および阪神高速道路公団とその取り扱いについて協議をおこなった。その結果、路線内における遺跡の有無および周知の遺跡の実態についての資料を得るために、富田林土木事務所と阪神高速道路公団から、（財）大阪府文化財センターに対して事前確認調査の依頼がなされた。その調査目的は、埋蔵文化財包蔵地の有無を確認することで、基本的に路線予定地の両側に東西方向に幅2m（下端）のトレンチを設定するものであった。調査期間は、平成15年10月～平成16年6月（阪神高速道路公団は、平成15年10月～平成16年3月と平成16年4月～平成16年6月）で、対象は大和川線予定路線のうち、国道309号線から府道大阪狭山線までの区間（約2㎞）である。

この調査成果をうけ、大阪府教育委員会文化財保護課は三宅西遺跡と池内遺跡が大和川線路線内まで及んでいると判断し、遺跡範囲が拡大されることとなった。これにより、路線内が調査対象部分となり、

三宅西遺跡に関しては、国道309号線から今井戸川までの約550mの区間、今井戸川を越えた西側は池内遺跡となり、近鉄南大阪線付近までの約900mの区間と決定された。これを受けて、池内・三宅西遺跡範囲内の道路建設に関連する発掘調査に関しては、平成16年11月から平成22年3月にかけて、(財)大阪府文化財センターが、大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、富田林土木事務所の委託を受けて発掘調査・遺物整理を実施する旨の覚書が交され、調査が実施されることとなった。

なお、このほかにも道路建設に関連する付帯工事として、主に三宅西遺跡の範囲内において、今井戸川の付け替え工事が実施されることとなり、上述した覚書に基づき、発掘調査と遺物整理を実施している。この内容については、本書第2分冊に所収した付編にて後述する。

第2節　発掘調査・整理作業の経過

池内遺跡における発掘調査対象区域は、総面積で25,810㎡を測る。その内訳は、遺跡の東半分に相当する05-1調査が11,000㎡、西半分の05-2調査が12,500㎡、遺跡の東端に相当する07-1調査が792㎡、上記3工区の残地部分に相当する08-1調査が1,518㎡をそれぞれ測る（図2・6）。

なお、08-1調査については、対象面積が狭く、本体工事の工程と密接に関連することから、発掘調査に伴う工事として当センターからの発注形態は採らず、本体工事業者が担当する方法を採っており、航空測量のみ、センターからの発注業務として委託し、発掘調査を実施した。さらに、先述した今井戸川取水施設整備工事に先立つ調査についても同様の形態で対応している。

それぞれの事業に要した調査期間は、05-1調査が平成17年9月26日～平成19年1月9日、05-2調査が平成17年10月5日～平成19年2月20日、07-1調査が平成19年7月3日～10月14日、08-1調査が平成20年5月8日～9月22日である。

発掘調査は、計画路線内のほぼ全面が対象となっており、大阪府教育委員会文化財保護課の指示により官民境界線を調査地の下端とした。なお、掘削は一割勾配のオープンカットでおこない、基本的に鋼矢板などでの土留め等は行っていないため、上端で一部民地にまで掘削が及ぶことになった。このため、可能な限り隣接地の所有者の理解を得て借地を行い、調査範囲を確保することとした。また、これに伴い調査区の北側と南側に沿う形で設置されていた、排水路や畦畔、耕作地用の水道などの付け替えも付帯工事として行っている。

以上の発掘調査では、コンテナに換算して約610箱に及ぶ遺物が出土し、それぞれの発掘調査が終了した段階で南部調査事務所（平成21年度からは本部事務所内に併設）にて報告書作成に向けた出土遺物の整理作業を行った。

なお、それぞれの受託期間は異なるため、05-1調査、05-2調査、07-1調査については、平成21年度3月まで遺物整理を行い、残りの08-1調査については、発掘調査と併行して平成21年12月まで遺物整理を行っている。

本事業では、現地で作成した遺構図面の整理・トレース、特徴的な遺物の抽出・接合・復元並びに実測・トレースを行い、それぞれの版下を作成したほか、遺物の写真撮影と、遺構・遺物写真図版版下の作成、各台帳類の作成・整備と遺物の収納を実施し、平成22年3月31日に本報告書の刊行をもってすべてを完了した。

第Ⅱ章　位置と環境

本章では、本書に所収した池内遺跡と三宅西遺跡に関連する地理的環境と歴史的環境の概要を述べる。なお、本書に関連する事業の既刊報告書である『三宅西遺跡』((財) 大阪府文化財センター 2009) 第1分冊第2章において、本遺跡の東側に展開する瓜破台地周辺の古環境と地質の概要及び文献上に表れる「三宅」地名についての文献上の記録等についての詳細が述べられていることから、ここでは再度の記述は行わず、遺跡の概要を記すにあたり、最低限必要と考えられる事項のみを記述することにする。

第1節　遺跡の位置と地理的環境

池内遺跡と三宅西遺跡の所在する松原市は、大阪府のほぼ中央部に位置する。市域の広さは約 16.7 ㎢で、人口約 12 万 5 千人（平成 20 年 5 月推計）の都市である。市域の北側を大和川が東西方向に流れており、川をはさんだ北側は大阪市東住吉区・平野区、東側から南側にかけては、堺市北区・美原区、西側は八尾市・藤井寺市・羽曳野市と接する。

池内遺跡は、松原市天美北 1・6 丁目と天美東 3・5 丁目にかけて分布する弥生時代から近世にかけての複合遺跡で、その範囲は東西 860 m、南北 310 m（一部延長の結果 570 m）に及ぶ。一方、三宅

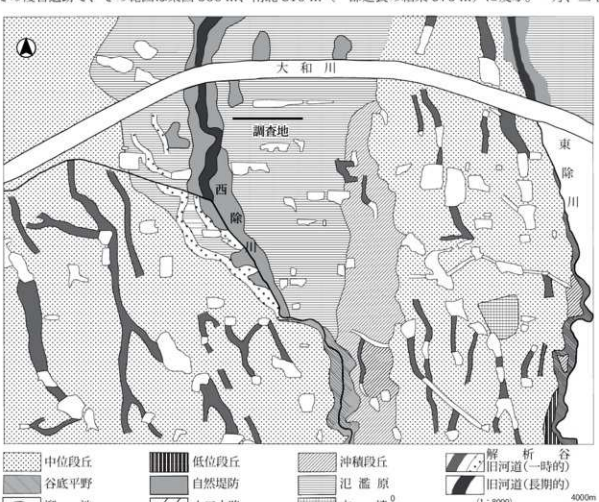


図3　池内・三宅西遺跡周辺の地形環境（日下1981を元に作成、一部改変）

西遺跡は松原市三宅西７丁目を中心に広がる弥生時代から中世にかけての複合遺跡で、その範囲は東西750 m、南北 400 mに及ぶ。

池内遺跡と三宅西遺跡は、日下雅義氏の分類（日下 1980）によると、調査区の西方を南北方向に流れていた西除川の氾濫原に位置する。今回の発掘調査対象となった池内・三宅西遺跡の東側には、現在の三宅集落が展開しており、この部分は南からの沖積段丘上となる。遺跡の東端部は、ちょうど西除川の氾濫原と沖積段丘の境界部分となるが、現地表面では明確な段差などは認められない。本遺跡の東側に展開する三宅集落が営まれている部分は、南から北へのびる河内台地上に立地しており、現大和川以北は瓜破台地と呼ばれる。この河内・瓜破台地は、最終氷期に「古天野川」によって形成された扇状地が、それ自身の浸食で段丘化したものと考えられており、主として中位段丘面で構成されている。中位段丘面は南から北に向かって緩やかに低くなり、現大和川の北側部分で沖積平野の地下に埋没する。台地上には凹凸があり、複数の開析谷が存在する。台地の東西には、東除川と西除川が流れており、これらの源流が台地の南に位置する現在の天野川である。６世紀後半から７世紀初頭頃に、「古天野川」の開析により形成された谷底平野を堰き止めて、狭山池がつくられた。この狭山池からの主たる流路が東除川と西除川である。本遺跡の立地する氾濫原の形成に大きく影響を及ぼしたと考えられる旧西除川は、18 世紀初頭に大和川が付け替えられ、現在の流路になるまで、狭山池から北流し、平野川と合流した後に天満川と合わさり、大阪湾に注ぎこんでいた。以上のような地形環境の下、度重なる地層の堆積によって、池内遺跡と三宅西遺跡は形成されてきた。

第２節　歴史的環境

松原市域は、古くは河内国に属しており、その中で丹比郡と称された地域にあたる。丹比郡は後に三分割され、そのうち丹北郡に属することになる。こうした背景の下、本遺跡が立地する河内平野南部には、多数の遺跡が分布しており、そのうちのいくつかについては、継続的な発掘調査が実施され、重要な成果が挙がっているものもある。本節では、これらの周辺遺跡の動向を概観しておく。

池内・三宅西遺跡の西側では松原市から堺市にかけて大和川今池遺跡が位置するほか、北西側に城連寺東遺跡、城連寺遺跡、南側に天美南遺跡、天美東１丁目遺跡、田池下遺跡、三宅西４丁目遺跡、東側に三宅遺跡などが知られている。また、北側には大阪市域に瓜破遺跡が広がっている。ただし、古墳時代～中世の遺跡とされる城連寺東遺跡や弥生時代～中世の城連寺遺跡、弥生～古墳時代の天美南遺跡、中世の天美東１丁目遺跡、古墳～中世の田池下遺跡、弥生時代の三宅西４丁目遺跡の実体は、発掘調査などが行われておらず、ほとんど不明である。今回報告対象である池内遺跡と三宅西遺跡も本事業の開始までは本格的な調査がおこなわれておらず、遺跡の実体は不明な状況であった。

台地上に位置する三宅遺跡は、現在の集落内であることから本格的な調査がおこなわれていないが、小規模な発掘調査により、弥生時代の流路や古墳時代の溝、平安時代や中世の掘立柱建物などを検出し、遺物も出土している。なお、集落内にある亀倉神社の地はかつての砦跡といわれており、その東と南に幅３mの濠がある。発掘調査などはおこなわれておらず、実体は不明であるが、神社の南には馬場池、村の西には新池、北には谷池があって、濠の一部を形成していたと考えられている。なお、明治40(1907) 年に同社に合祀された酒屋神社は、式内社の同名社に比定されている。

この地域で最も有名で、調査例が多く実体が比較的はっきりしている遺跡は、西方に位置する大和川今池遺跡と北に広がる瓜破遺跡である。最近の調査例も多く、これらの既往の調査成果を概観すること

で、この地域の様相をある程度把握することができる。

大和川今池遺跡は、下水処理場建設に伴う発掘調査や高規格堤防に関連する河川敷での調査が数次にわたっておこなわれており、多くの成果が挙がっている。また、今回の調査対象となっている大和川線の路線もこの遺跡を横切ることから、引き続き発掘調査が進められている状況である。

この遺跡では、旧石器時代のナイフ形石器に始まり、縄文時代の有舌尖頭器や石器、古墳時代の玉類や韓式系土器・土師器・須恵器、中世の遺物などが出土している。遺構では、古墳時代の竪穴住居や掘立柱建物、古代～中世の掘立柱建物や井戸・溝などが検出されているほか、古代の官道である「難波大道」の一部もみつかっている。これは、難波宮から南へ直進するもので、河内と大和を東西に結ぶ大津

1：池内遺跡　2：三宅西遺跡　3：城連寺東遺跡　4：城連寺遺跡　5：三宅西４丁目遺跡　6：田池下遺跡　7：天美東１丁目遺跡
8：天美南遺跡　9：中高野街道　10：亀倉神社　11：三宅城（三宅砦）跡推定地　12：三宅遺跡　13：権現山古墳跡
14：三宅古墳跡　15：三宅東遺跡　16：阿保遺跡　17：東新町遺跡　18：堀遺跡　19：高木遺跡　20：下高野街道
21：大和川今池遺跡　22：難波大道跡　23：狐塚古墳跡　24：瓜破遺跡　25：瓜破北遺跡　26：喜連東遺跡　27：住道寺跡
28：中臣須牟知神社境内遺跡　29：照ヶ丘矢田遺跡　30：矢田２丁目遺跡　31：矢田部遺跡　32：新堀城跡伝承地
33：苅田４丁目所在遺跡　34：依羅池跡　35：北花田遺跡　36：天美北六丁目北遺跡　37：天美北六丁目南遺跡

図4　池内・三宅西遺跡周辺の遺跡分布図〔国土地理院1:25000「古市」・「大阪東南部」平成14年を元に作図〕

道や丹比道につながり、さらに横大路を経て下ツ道・中ツ道・上ツ道などにより、飛鳥藤原京や平城京にいたるものと考えられている。『日本書紀』推古天皇廿一年十一月の条には、「掖上池・畝傍池・和珥池作ル。又難波(なには)ヨリ京(みやこ)ニ至ルマデニ大道(おほち)ヲ置ク。」とあり、推古天皇21(613)年に官道のつくられたことが知られている。昭和55(1980)年の調査で、約18m間隔で並行する溝がみつかっており、両溝間の中心線がちょうど難波宮の中軸線と一致していたことが判明し、先の『日本書記』の記述などから、「難波大道」と呼ばれることになったものである。平成20(2008)年度の調査においても、同様の道路状遺構を南北46mにわたって検出し、位置関係から「難波大道」と断定した。

一方、北に位置する瓜破遺跡は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、東西1.7㎞、南北1.6㎞に及ぶ範囲を有する。旧大和川流域に展開する河内平野遺跡群の南西端にあたり、東には長原遺跡が隣接する。瓜破遺跡は現在、地形の特徴と遺構の分布により、西・東北・東南の3地区に区分されている。昭和14(1939)年、瓜破霊園建設に伴って出土した弥生土器が新聞で取り上げられたのを契機に、翌年には山本博氏により大和川河床で採集された弥生土器などの遺物が学会に紹介された。その後、戦前から戦後にかけて今里幾次氏や日本考古学協会による発掘調査がおこなわれた。その間に、特に弥生時代前期の土器研究が進み、弥生時代前期後半の土器様式を「瓜破式」と呼称することもあったようである。昭和24(1949)年には、採集された中国新代の「貨泉」が誌上で紹介されている。

池内遺跡と三宅西遺跡に隣接する部分は瓜破遺跡西地区にあたり、地形的には瓜破台地の西側斜面とさらに西に広がる平野部に位置しており、多くの成果が得られている。既往の調査で、約6300年前に降下したとされる横大路火山灰層の下から、石器製作跡に伴うと考えられるサヌカイトのチップがみつかっており、古くは後期旧石器時代までさかのぼるものとみられている。また、縄文時代中期から晩期にかけての土器や石器が、自然流路よりまとまって出土しており、集落の存在の可能性が指摘されている。平野部では、晩期に堆積作用が活発化することが知られており、水成層からは多くの突帯文土器の破片が出土するほか、西地区南半部に、弥生時代の集落のまとまりがあることが知られている。集落域

図5　池内・三宅西遺跡周辺の条里地割図〔足利1985を元に作成〕

の中心は、現在の大和川の位置にあたり、前期から後期まで継続すると考えられている。近年では大和川以南にも調査が及び、三宅西遺跡に隣接する部分の調査区で、弥生時代中期前葉単純期の居住域や墓域が確認されている。これに対し、古墳時代の遺構や遺物はほとんどみつかっていない。また、古代に関しても遺物は散見されるが、まとまった遺構は検出されていない。中近世は、全体で耕作土層が確認されており、島畠や耕作溝が多くみつかっている。

なお、今回の調査地を含む、三宅集落から大和川今池遺跡付近にかけての地域は、条里地割が明瞭に残る場所として知られている。特に、昭和55(1980)年におこなわれた大和川今池遺跡の調査の際に、初めて「難波大道」が確認されたことから、周辺の古道の検討と共に条里制についての研究が進んだ。大和川今池遺跡を中心とした条里地割に関しては、岸俊男氏を始めとして、足利健亮氏や金田章裕氏などの研究がある。岸氏は、古道の比定や道の設定規格について検討をおこなっており、その後の古道や条里の研究に大きな影響を与えた。足利氏は、古道の間隔の検討から距離単位における時期を比定し、大津道や丹比道の斜行道路の痕跡を復元した上で、条里の検討をおこなった。また、金田氏は、古道と条里地割の関係について、古道を中心とした条里地割の不規則な規格を、古道設定から条里地割設定、道路耕地化へと続くプロセスとして捉え、検討をおこなった。

さらに、発掘調査で「難波大道」が検出されたため、考古学的な観点からも検討がおこなわれることとなった。古代史や地理学の既往の調査成果をふまえて、条里や「難波大道」の設営時期についての検討がなされているが、同時に条里地割の導入時期の問題に焦点が絞られるようになり、集落と土地利用の構造的把握が重要な検討課題となっている。

大和川の付け替え工事は、宝永元(1704)年に大和川と石川の合流点に堤防を築き(柏原の築留)、流れを西の堺に向け、台地を掘りくぼめ、堤防を積んで新しい川をつくるものであった。河内平野では、以前から大雨が降ると、大和川の堤防が切れて頻繁に洪水をおこし、田畑が水や土砂で埋まることが多いことや、水がうまく抜けないことなどから、農民が江戸幕府に対して大和川の流れを変えるように訴えていた。今米村(現在の東大阪市今米)の庄屋中甚兵衛を中心とした訴えは、明暦3(1657)年からおこなわれていたが、約50年後についに認められ、幕府や西日本の大名による工事が決定されることとなった。工事は約8ヶ月の短期間でおこなわれ、川幅180m、長さ14.3kmの新しい川が完成した。これらの付け替え工事に関する記録は、中甚兵衛の残した文書や絵図類からなる「中家文書」をはじめ数多く残されており、経緯を知ることができる。この結果、洪水による被害もほとんどなくなったほか、もとの河道部分に新田と呼ばれる耕地がひろがり、米のつくりにくい土地には木綿が多く植えられた。

〔参考文献〕

井上正雄　1921『大阪府全志　巻4』(復刻版　1985　清文堂出版)

日下雅義　1980『歴史時代の地形環境』古今書院

趙　哲済　2001「瓜破台地東北部の段丘について」『大阪市文化財協会研究紀要』4　7－16

趙　哲済　1994「大阪平野の旧石器遺跡－特に古大阪平野における遺跡の立地について－」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会　243－252

柏原市　1985『柏原市史　第1巻』柏原市役所

(財)大阪府文化財調査研究センター　2000『大和川今池遺跡(その1・その2)』

(財)大阪府文化財センター　2009『三宅西遺跡』

第Ⅲ章　調査の方法

第１節　現地調査

発掘調査の実施に当たっては、2003年刊行の『(財) 大阪府文化財センター　遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』にしたがって行った。以下、現地での調査において用いた調査の手法について述べる。

調査箇所の呼称については、受託年度（西暦下２桁）－発注番号（発注順）を組合わせて表記する原則に基づき、第Ⅰ章で述べたように 05-1・05-2・07-1・08-1 調査と呼称し、必要に応じてトレンチ名を付した。なお、各調査においては、それぞれ個別にトレンチ番号が付与されているため、複数トレンチが存在する場合は、05-1-1 区や 08-1-1 区等の表記を行った。

遺構名については、現地調査時に各調査ないしはトレンチ毎に番号を付与したものを踏襲する。遺物整理段階で全調査区を通じての通し番号を振ることも考えたが、遺構・遺物ともに膨大な量であることから、後の利用に齟齬をきたさないよう、必要最小限のものを除き、当初の遺構番号をそのまま用いた。記述が各調査区をまたぐ場合には、05-1-1 区１溝や 05-2-1 区１土坑等の表現を行った。

調査地の地区割は、世界測地系の国土座標軸に準拠したもので、大阪府が位置する国土座標軸の第Ⅵ座標系をもとに、第Ⅰ～Ⅳ区画に区分している（図６）。これに従うと今回の調査地の第Ⅰ・Ⅱ区画上の位置はＧ 5-3 及びＦ 5-16 となる。遺物の取り上げもこの地区割を使用し、区画の最小は 10 ｍを単位とする第Ⅳ区画を用いた。

水準は、全国的に共通の基準となっている東京湾平均海水位（T.P.：TOKYO PEIL）を用いる。

遺構面及び遺構・遺物の実測に関しては、必要に応じて個別に手書きによる平・断・立面図を作成した。遺構面については、基本的に縮尺 100 分の１の平板測量を行い、遺構分布が密な場合や微細な地形復元が必要と判断した場合は、ヘリコプターによる空中写真測量で 50 分の１の平面図を作成した。

調査時の地層については、各調査区の南壁断面を基本に記録を行い、平成 15 ～ 16 年度に実施した確認調査結果に準ずる層準名を付した。本遺跡では、調査区毎に堆積環境が細かく変化するため、調査区毎に第１層から順に基本層名を付与したものがあるほか、第Ⅶ章第２節では地質学的な見地から各層準の統合を図っているものもあり、第Ⅷ章総括において最終的な統合を図っている。

遺構面については、断面観察によって遺構・遺物の存在が予想された土壌化層を基準に、上から順に第１面・第２面…と呼称し、遺構・遺物の粗密を考慮しつつ必要のある遺構面について調査を実施した。

第２節　整理作業

現地調査で得た遺物は、土器・石器・木器などを合わせるとコンテナに換算して約 610 箱を数えた。この中から重要と判断するものについて 3191 点を実測した。また、これらの作業に併行して、報告書刊行後の遺物管理を効率的に行うため、FileMaker 社の FileMakerPro8.0 を用いて遺物データベースを作成した上で収納を行った。

なお、本報告書掲載の挿図類は、遺構図の大半を Adobe 社の Windows 版 PhotoshopCS2 を用いて図面の合成・調整を行い、同社の IllustratorCS2 を用いてトレース作業を行うという手順によって作成している。このほか、地形の微起伏を表現するための等高線などについては、現地調査で実施した空中写

真測量の成果であるデータ図面（DXF 形式）を、AutoDesk 社の AutoCad LT2007 を用いて簡単な加工を施した後、Illustrator 上において加工・調整を施して最終的な図面として用いている。

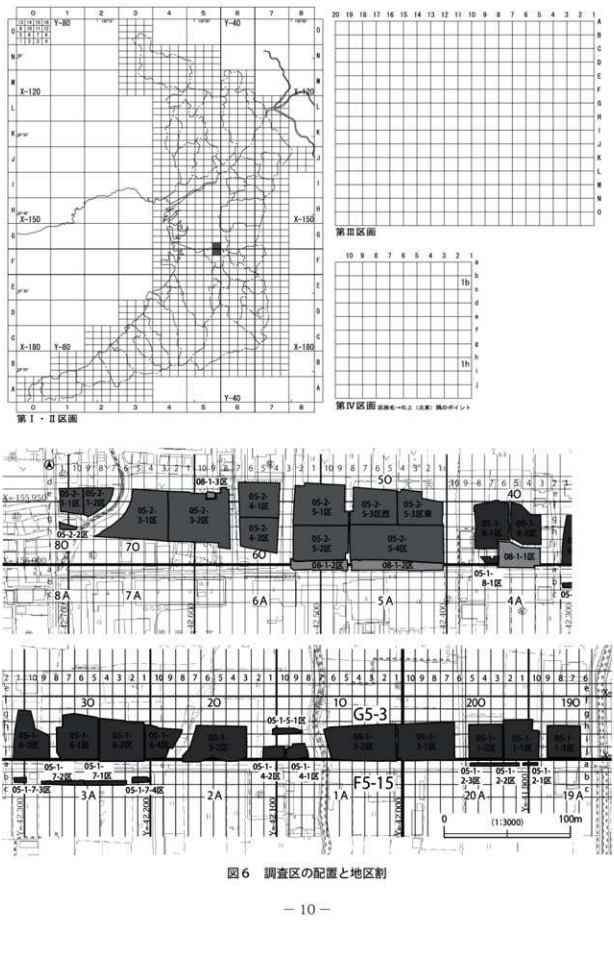


図６　調査区の配置と地区割

第Ⅳ章　05-1・07-1 調査の成果

第１節　１・２区の成果

１・２区は 05-1・07-1 調査の東端部の調査区である（図６）。東側は今井戸川を挟んで三宅西遺跡と接している。現地表面の標高は約 10.2 mで、現況は道路沿いに倉庫や工場が散在し、周辺には田畑が広がる。東西道路を挟んだ北側が１区、南側が２区である。２区は幅が２～３mほどの細長いトレンチで、断面調査を実施したにとどまる。また、調査時期や掘削土仮置きの都合で、１区は 1-1 区、1-2 区、1-3 区の３分割、２区も 2-1 区、2-2 区、2-3 区の３分割で調査をおこなった。このうち 1-3 区が平成 19 年度におこなった 07-1 調査である。以下の報告は１区の調査成果を中心に記述する。

１．基本層序（図７）

調査は現代耕作土層である第１層までをバックホーによる掘削を行い、第２層以下については、人力によって１層ずつ除去しながら、遺構面の検出に努めた。地層の確認は、調査区の南壁面を基本的に用いた。

第１層　現代耕作土層である。層厚は平均 0.15 mを測る。

第２層　灰白色細砂からなる耕作土層である。調査区の東端では第１層による削平を受け、ほとんど遺存しない。層厚は平均 0.1 mを測る。近世陶磁器を含むことから、近世に形成された地層と考える。

第３層　黄褐色細砂混シルトからなる耕作土層である。層厚は 0.15 mを測る。調査区東西端では遺存しない。尾上編年Ⅲ - ２期前後の和泉型瓦器椀を含むほか、14 ～ 15 世紀の瓦質土器を含むことから、中世に形成された地層と考える。本層上面を第１面として調査をおこなった。

第４層　黄灰色砂礫混粘質シルトからなる耕作土層である。層厚は平均 0.1 mを測る。下位層である第５層の堆積環境によって層の遺存状態が左右され、窪地状をなしている調査区の中央部付近にのみ堆積する。古墳時代後期の須恵器や奈良時代の土師器を含むことから、古墳時代～奈良時代にかけて形成された地層と考える。本層上面を第２面として調査をおこなった。

第５層　氾濫堆積による水成層である。層厚は 0.2 ～ 0.4 mを測り、下部は極粗砂～細礫を中心とする粗粒の堆積物で構成され、上部は粘質シルトまで細粒化する。層内にはほとんど遺物を含まない。前後の地層の示す年代観と周辺の調査成果から、縄文時代～弥生時代に形成された地層と考える。本層上面を第３面として調査をおこなった。

第６層　弥生時代前期に形成された耕作土層であるが、本調査区では認められなかった。

第７層　暗褐色粘質シルト～粘土からなる、下位層の第８層を母材とする土壌化層である。層厚は平均 0.15 mを測る。

第８層　氾濫堆積による水成層で、層厚 0.4 ～ 0.5 mを測る。上方細粒化する。

第９層　黒褐色シルト混粗砂・砂礫からなる、下位層の第 10 層を母材とする土壌層で、層厚 0.1 mを測る。周辺の調査成果から、縄文時代後期～晩期にかけて形成された地層と考えられる。

第 10 層　灰黄褐色砂礫・黒褐色粗砂混シルトなどからなる氾濫堆積による水成層である。流路部分に認められ、大半は上位の第９層に取り込まれる。

第 11 層　黒褐色中砂混シルト・灰黄褐色粘土などからなる土壌化層である。層厚は平均 0.2 mを測る。

W
E
Y=-41940
Y=-41900
Y=-41860
TP-10.0m
TP-9.0m
TP-8.0m
TP-7.0m
TP-6.0m
2m
0
(1:40)
(1:500)
20m

図7　1・2区　南壁　断面図

1区　南壁断面　注記

1　（盛土）
2　オリーブ黒　5Y3/1　細砂～中礫混粘質シルト（現代耕作土層）〔第1層〕
3　灰白　5Y7/2　細砂〔第2層〕
4　黄褐　10YR5/6　細砂混シルト〔第3層〕
5　黄灰　2.5Y4/1　砂礫混粘質シルト〔第4層〕
6　灰オリーブ　5Y4/2　粘質シルト〔第5層〕
7　黄灰　2.5Y6/1～黄褐　2.5Y5/6　粘質シルト〔第5層〕
8　灰オリーブ　5Y6/2　細礫〔第5層〕
9　灰　5Y5/1　中砂～中礫〔第5層〕
10　灰黄　2.5Y6/2～黄褐　10YR5/8　細砂混粘質シルト〔第5層〕
11　黄灰　2.5Y6/1～黄褐　2.5Y5/6　粘質シルト〔第5層〕
12　暗褐　10YR3/4　砂礫〔第5層〕
13　褐灰　10YR6/1　細砂～粘土〔第5層〕
14　黄褐　10YR5/6　砂礫〔第5層〕
15　灰黄　2.5Y6/2　砂質シルト～粘質シルト〔第5層〕
16　黄灰　2.5Y6/1　粘質シルト〔第5層〕
17　黄褐　2.5Y5/3　極粗砂～細礫混シルト〔第5層〕
18　黄褐　2.5Y5/3　極粗砂～細礫混シルト〔第5層〕
19　暗褐　10YR3/3　粘質シルト～粘土〔第7層〕
20　暗灰黄　2.5Y5/2　砂礫〔第8層〕
21　褐灰　10YR6/1　粗砂～シルト〔第8層〕
22　灰黄　2.5Y6/2　粗砂～シルト〔第8層〕
23　にぶい黄　2.5Y6/3　シルト〔第8層〕
24　灰黄　2.5Y6/2　粘質シルト〔第8層〕
25　黄褐　10YR5/6　粘質シルト〔第8層〕
26　黄褐　2.5Y5/3　粘質シルト〔第8層〕
27　にぶい黄褐　10YR5/4　極粗砂～細礫〔第8層〕
28　黄褐　10YR5/6　粘土〔第8層〕
29　にぶい黄褐　10YR5/3～黄褐　10YR5/8　砂礫〔第8層〕
30　灰　5Y6/1　粘土　細砂主体のラミナあり〔第8層〕
31　暗灰黄　2.5Y5/2　粘土〔第8層〕
32　灰　5Y5/1　中砂～中礫〔第8層〕
33　黄褐　10YR5/8　粘土混中砂～中礫〔第8層〕
34　灰黄　2.5Y6/2　細砂〔第8層〕
35　褐灰　7.5YR5/1　粘土〔第8層〕
36　灰黄褐　10YR5/2　粘土〔第8層〕
37　黒　10YR2/1　砂礫混粘土〔第9層〕
38　黒褐　2.5Y3/2　シルト混粗砂〔第9層〕
39　黒褐　2.5Y3/1　シルト混砂礫〔第9層〕
40　灰黄褐　10YR5/2　砂礫〔第10層〕
41　暗灰黄 2.5Y5/2　砂混シルト　植物遺体（流木）を含む〔第10層〕
42　黒褐　10YR2/3　粗砂混シルト〔第10層〕
43　褐灰　7.5YR4/1　シルト混細砂〔第10層〕
44　黒褐　2.5Y3/1　中砂混シルト〔第11層〕
45　灰黄褐　10YR4/2　粘土〔第11層〕
46　オリーブ黒　7.5Y2/2　シルト混細礫〔第11層〕
47　オリーブ黒　7.5Y3/2～灰　10Y4/1　砂礫混シルト〔第11層〕
48　オリーブ黒　5Y3/1　粗砂混シルト〔第11層〕
49　灰黄　2.5Y6/2～灰　7.5Y4/1　砂礫混シルト〔第12層〕
50　灰黄褐　10YR4/2　粗砂～中礫混細砂～
　黄褐　2.5Y5/4　シルト〔第12層〕
51　オリーブ灰　5GY5/1　粘土〔第12層〕
52　にぶい黄褐　10YR5/3　中砂～細礫〔第12層〕
53　灰　7.5Y4/1　シルト〔第13層〕
54　褐灰　10Y6/1　粘土　黄色ブロックを含む〔第13層〕
55　暗灰　N3/　シルト〔第14層〕
56　灰　7.5Y5/1～暗灰　N3/　シルト～細砂〔第14層〕
57　緑灰　10GY6/1　シルト～極細砂〔第14層〕
58　暗灰　N3/　極細砂〔第14層〕
59　（上部）灰　7.5Y5/1　極細砂　（下部）灰　10Y5/1　中～細砂〔第14層〕
60　（上部）灰　7.5Y5/1　細砂　（下部）暗灰　N3/　細砂〔第14層〕
61　緑灰　10GY5/1　（上位）極細～細砂　（中位）細～中砂
　（下位）極細～粗砂〔第14層〕
62　緑灰　7.5GY5/1　極細～細砂〔第14層〕
63　緑灰　7.5GY5/1　（上位）極細～粗砂　（中位）中～粗砂
　（下位）細～中砂〔第14層〕
64　緑灰　10GY5/1　中～粗砂〔第14層〕
65　暗灰　N3/　中～粗砂〔第14層〕
66　緑灰　10GY5/1　中～粗砂〔第14層〕
67　緑灰　7.5GY5/1　細砂〔第14層〕
68　灰　5Y5/1　砂礫〔第14層〕
69　緑灰　7.5GY5/1　極細砂〔第14層〕
70　灰　5Y5/1　砂礫〔第14層〕
71　緑灰　10GY5/1　細～粗砂〔第14層〕
72　灰　5Y5/1～緑灰　7.5GY5/1　中～粗砂　極粗砂～中礫を少量含む
　大礫を少量含む〔第14層〕

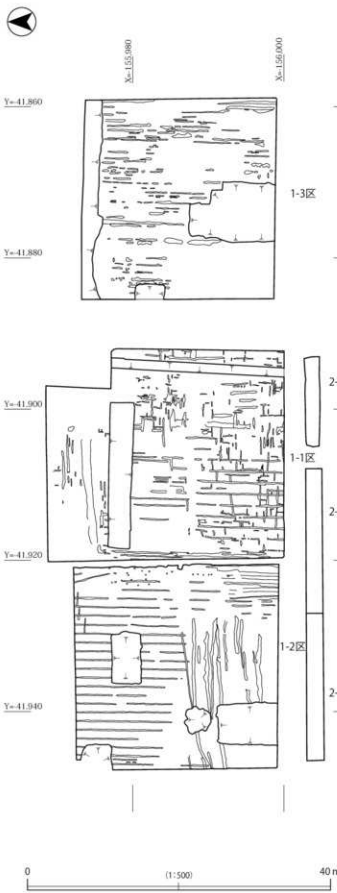


図8　1・2区　第1面　平面図

縄文時代に形成された地層と考える。

第12層　土壌化層である。層厚は概ね0.2mを測る。縄文時代に形成された地層と考える。

第13層　灰色シルト・粘土からなる水成層である。周辺の調査成果から、低位段丘構成層と考える。

第14層　灰色砂礫などからなる水成層である。下層確認調査でのみその存在を確認した。段丘構成層と考える。

2．第1面（図8～11、図版1-1）

近世耕作土層である第2層を除去した第3層上面を第1面として調査した。遺構面の標高は9.0m前後でおおむね平坦だが、北端部で8.9mを測り、北側がわずかに低くなる。

第1面では南北方向、および東西方向の多数の溝を検出した。いずれも耕作溝と考えられる。幅は0.20～0.60mを測り、0.30m程度のものが多い。深さはごく浅いものが大部分である。

南北方向の溝の間隔には一定の規則があり、1-2区北半の溝は平均1.15m間隔で並び、これから外れる溝は少ない。1-1区南半の溝は平均1.50m間隔で並んでいるが、これも外れる位置にもかなりの溝がある。なお、1-3区の溝は遺存状況が悪い。

東西方向の溝は1-2区の南半、1-1区で検出された。いずれも遺存状況は良くない。1-1区南半ではおおむね南北方向の溝に切られており、東西方向から南北方向への土地利用の変化が認められる。1-1区北半・1-2区南半の東西方向の溝は、全体として幅が広く、東側方向でやや北を向いたり、若干湾曲したりしている。

第1面で検出した溝の埋土は、すべ

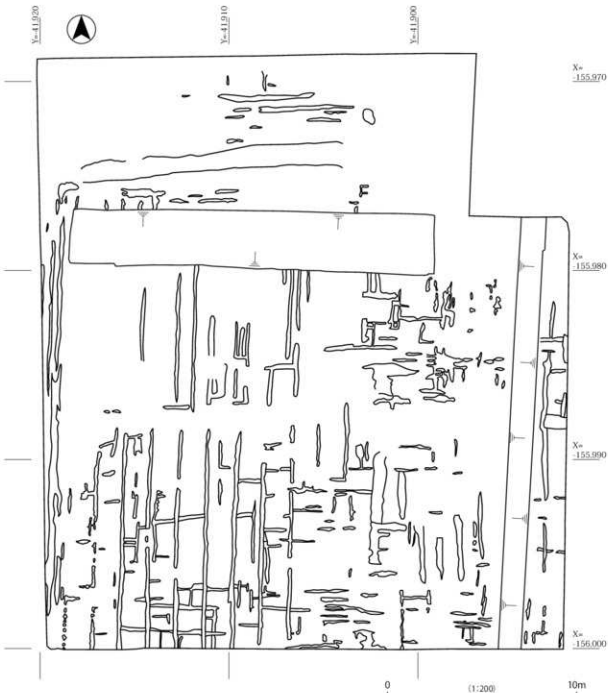


図9　1-1区　第1面　平面図

て近世耕作土である第2層と同じ土であり、これらの溝は第2層下面遺構である。溝からは図示しうる遺物の出土はなかったが、中世から近世の所産と考えられる。

3．第2面（図12～14）

中世耕作土層である第3層を除去した第4層（第4a層）上面を第2面として調査した。第4層は西側には認められるが、東側では削平を受けて遺存しておらず、東端の1-3区ではこの遺構面自体が認められなかった。遺構は西方1-2区に濃密で、1-1区西端まで及んでいる。1-1区中央から東では、東西方向の575溝以外の遺構は認められなかった。

1-2区から1-1区西端の範囲で検出した遺構は、柱穴、小穴、溝、土坑である。1-1区では柱穴・小

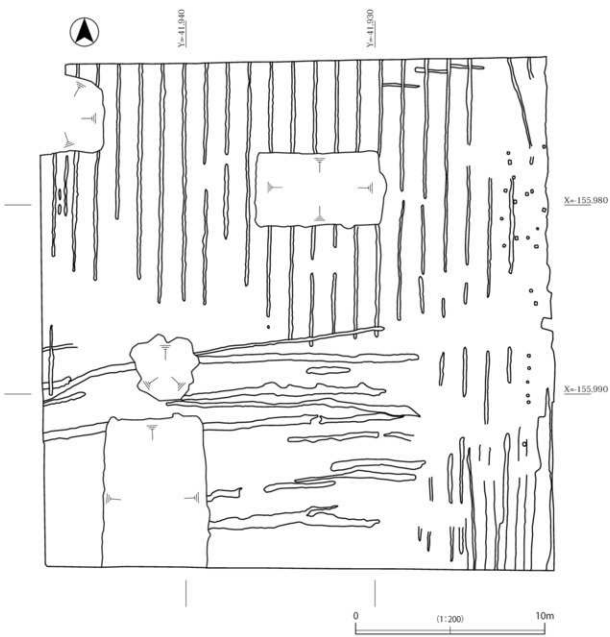


図10　1-2区　第1面　平面図

穴から掘立柱建物を復元し、1-2区西端では東西方向の短い溝を多数検出した。溝は、幅0.40～0.60m、長さ1.00～4.00m程度で、かなり密接した状態で検出した。同様の溝は、まばらではあるが1-2区に散在しており、耕作溝と考える。

また個別には取り上げないが、1-2区には溝・土坑が認められる。南北方向の1062・1063溝の南側約6mには1792・1793土坑がある。これらの土坑は切り合っており、1792土坑が古く1793土坑が新しいが、二つの土坑は平面形・深さ・埋土とも類似しており、かつ埋土が1062溝・1063溝と酷似する。このため、1062溝・1063溝が1792土坑・1793土坑に接続していた可能性も考えられる。

掘立柱建物

〔掘立柱建物1〕（図13・15・17、図版1-3）

1-1区、200-2jにおいて計26基の柱穴・小穴を検出した。これらのうち604柱穴・595柱穴・590柱穴・588柱穴・600柱穴・594柱穴から、東西1間・南北3間の掘立柱建物1を復元した。建

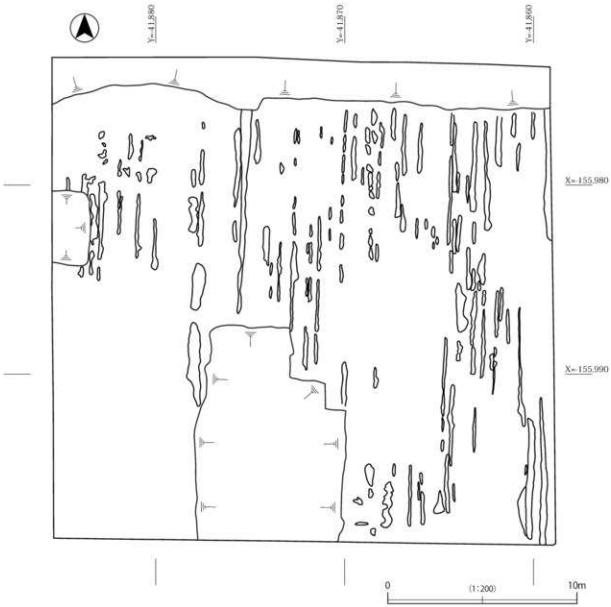


図11　1-3区　第1面　平面図

物規模は東西 1.6 m、南北 5.5 mである。西側柱列の南側２基の柱穴は検出していない。各柱穴の大きさは、604 柱穴が 0.20 m、595 柱穴が 0.30 m、590 柱穴が 0.25 m、588 柱穴が 0.35 m、600 柱穴が 0.25 m、594 柱穴が 0.30 mである。検出した建物柱穴の多くにおいて、重複する柱穴、あるいは隣接する柱穴があり、各柱穴には２～３回の建て替えが想定される。なお、掘立柱建物１は第４面で検出した遺構であるが、第３層掘削中に柱穴を確認しており、第３層が形成される間に営まれた遺構と判断する。

588 柱穴から土師器小皿が出土している。１はいわゆる「て」字口縁の土師器小皿で、復元口径 9.1 ㎝、11 世紀初頭～前半前葉のものとみられる。

溝

〔536 溝〕（図 13・15・16・17）

1-1 区、200-2j において検出した南北方向の溝である。掘立柱建物１の東側に位置する。東側肩は失われていて、検出できなかった。長さ 12.10 m、幅 0.45 m以上、南側は調査区外に延びる。埋土は

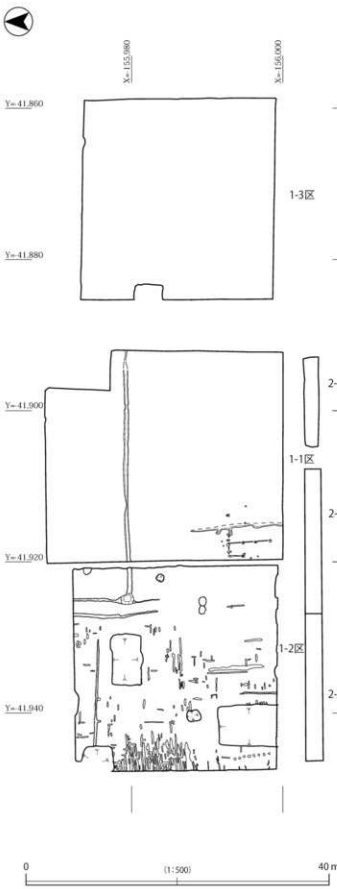


図12　1・2区　第2面　平面図

2層で、上層が黄灰色炭混じり粘質土、下層がにぶい黄橙色粘質土である。

埋土から黒色土器が出土している。2は黒色土器内黒椀の高台部分である。復元底径 8.4 ㎝、内底面をヘラミガキで仕上げる。9 世紀前半頃のものであろう。

〔575 溝〕（図 12・13・15・16・17）

1-1 区をまっすぐ東西に走り、1-2 区の南北方向の 1063 溝に接続する東西方向の溝である。1063 溝との接続部は水溜め状に深くなっている。長さ 32.60 m、幅 0.61 m、深さ 0.10 mを測る。東端は幅が狭くなり、東側の 1-3 区では検出されていない。埋土は 1 層で浅黄色砂質土である。

575 溝から土師器および黒色土器が出土している。3は土師器椀口縁部で復元口径 14.0 ㎝、口縁部内外面を横ナデで仕上げている。4・5はいずれも黒色土器椀底部である。4は復元底径 8.0 ㎝で両黒椀であるのに対し、5は復元底径 10.0 ㎝で内黒椀である。

〔1060 溝〕（図 14・16）

1-2 区、20O-4h・5h で検出した東西方向の溝である。長さ 14.00 m、幅 3.50 m、深さ 0.06 mを測る。西側は調査区外に延び、東側は徐々に幅が狭くなり、1062 溝に至らずに消える。埋土は 1 層で黄灰色シルトである。図示しうる遺物は出土していない。

〔1061 溝〕（図 14・16）

1-2 区、20O-4j で検出した南北方向の小規模な溝である。長さ 4.90 m、幅 0.30 m、深さ 0.05 mを測る。北側は徐々に幅が狭くなって終わり、南側は調査区外に延びる。埋土は 1 層で黄灰色粘土である。図示しうる遺物は

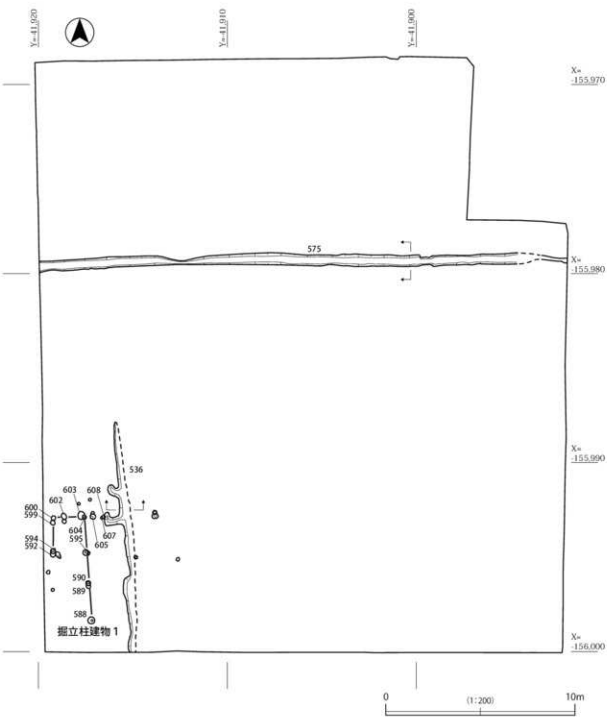


図13　1-1区　第2面　平面図

出土していない。

〔1062溝〕（図14・16）

1-2区、200-3h・3iで検出した南北方向の溝である。東側約2mに1063溝がほぼ平行に走る。長さ11.10m、幅0.40m、深さ0.05mを測る。南側は徐々に幅を減じて終わり、北側は調査区外に延びる。埋土は黄灰色シルトである。図示しうる遺物はない。

〔1063溝〕（図14・16）

1-2区、200-3h・3iで検出した南北方向の溝である。上述の1062溝の東約2mに位置し、1062溝

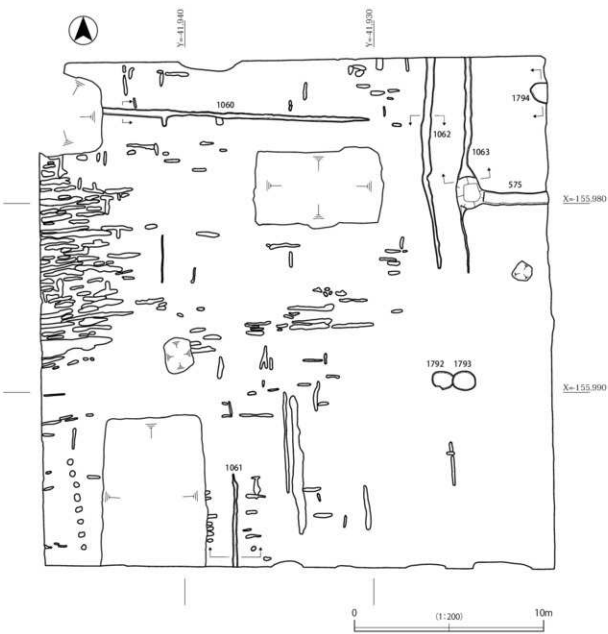


図14　1-2区　第2面　平面図

とほぼ平行に走る。東側から延びてくる 575 溝がほぼ直角に接続し、接続部は水溜め状に深くなる。断面位置を 575 溝との接続地点付近に設定したため、長さ 11.40 m、最大幅 1.14 m、深さ 0.18 mを測るが、規模・埋土とも 1062 溝と共通する点が多い。埋土は 2 層で、上層が灰色粗砂混じりシルト、下層が黄灰色粘土でにぶい黄色斑文が縦方向に入る。図示しうる遺物は出土していない。

土坑

〔1794 土坑〕（図 14・16）

1-2 区、200-3h で検出した。径 1.20 m程度の不整円形を呈するが、東側の一部が調査区外に延びるため全形は不明である。深さは 0.36 mである。埋土は 1 層で灰白色シルトににぶい黄色シルトブロックが入る。図示しうる遺物は出土していない。

4．第3面（図 18 ～ 21、図版 1-4・2-1）

第 4 層を除去した第 5 層上面を第 3 面として調査した。第 3 面は全域で遺構を検出したが、1-1 区・

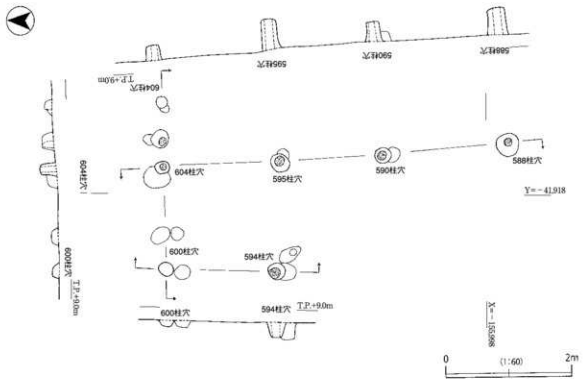


図15　1-1区　第2面　掘立柱建物1　平・断面図

1-2区と、1-3区では様相が大きく異なる。

1-1区（図19）・1-2区（図20）では全域で耕作溝を検出した。図19・20において遺構番号を付与していないものが耕作溝である。これらの耕作溝は第4層の下面遺構である。本来は第4層中に掘り込み面があると考えられるが、第4層（第4a層）と耕作溝の埋土が酷似しているため、掘り込み面を認識できなかった。

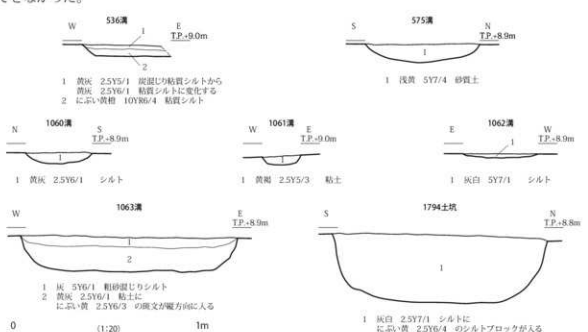


図16　1区　第2面　各遺構　断面図

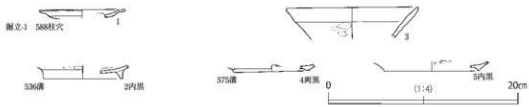


図17　1区　第2面　各遺構　出土遺物

第3面で検出した遺構のうち、耕作溝より古い段階のものは、1-1区・1-2区を西南西から東北東に横断する溝（図中アミフセ部）、1-1区の538溝のほか、1-1区の545溝・548溝・549溝・550溝・552溝・553溝・554溝、561井戸・562井戸、556土坑・557土坑・563土坑・564土坑・565土坑・573土坑・576土坑・2456土坑、571小穴などである。

1-3区（図21）では、第4層自体が遺存せず、第3層を除去した段階で第3面が現れる。遺構面のレベルは約8.9mである。検出した遺構は掘立柱建物、溝、土坑、小穴、などである。第3層下面遺構と、第4層下面遺構の混在する可能性がある。

掘立柱建物

〔掘立柱建物25〕（図21・22）

1-3区北西隅、19O-9h・9iで検出した2間×2間の掘立柱建物である。軸をN-27.5°-Eにおく。平面形はやや歪な長方形を呈する。南西隅の柱穴は撹乱によって失われ、一方、北東隅には2基の柱穴が重複し、合計8基の柱穴を検出した。東側柱列は北から2745柱穴・2746柱穴・2747柱穴・2786柱穴が並び、うち2745柱穴・2746柱穴は重複しており、2746柱穴が2745柱穴を切っている。北側柱列の柱穴ラインも2745柱穴を通るので、2746柱穴は掘立柱建物25とは関係しない柱穴かもしれない。ただし、後述するように、西側柱列の2782柱穴は1基として検出しているが、複数の柱穴が重複しているような形状を示すことには注意を要する。東側柱列の柱間距離は、2745柱穴－2747柱穴間が1.78m、2747柱穴－2786柱穴間が1.48m、合計3.26mである。西側柱列は北から2782柱穴・2783柱穴が並び、南端の柱穴は撹乱により失われていると考えられる。柱間距離は2782柱穴－2783柱穴間が1.68mである。西側柱列を2間に復元した場合、3.26mと推定でき、東側柱列と同じ距離となる。北側柱列は東側から2745柱穴・2744柱穴・2782柱穴が並ぶ。柱間距離は2745柱穴－2744柱穴間が1.33m、2744柱穴－2782柱穴間が1.45m、合計2.78mとなる。南側柱列は東から2786柱穴・2785柱穴が並ぶ。柱間距離は2786柱穴－2785柱穴間が1.44m、南側柱列を2間に復元した場合の梁行は2.88mと推定でき、北側柱列とは0.10mの差があることになる。柱穴は押しなべて遺存状況が悪く、深さは0.05～0.10m程度である。2782柱穴以外は掘形内に柱痕跡が認められた。

〔掘立柱建物26〕（図21・23、図版2-3）

1-3区のほぼ中央、19O-8iで検出した1間×1間の掘立柱建物である。平面形はやや歪な方形を呈し、軸をN-2°-Eにおく。柱穴は2677柱穴・2679柱穴・2681柱穴・2683柱穴の4基を検出した。北西隅の2679柱穴は西側に別の柱穴が重複しており、2679柱穴がこの柱穴を切っている。南東隅の2681柱穴の西側にも別の柱穴がある。柱間距離は、東側柱列が1.92m、西側柱列が1.98m、北側柱列が1.96m、南側柱列が1.76mとなっており、南側柱列がやや狭くなっている。柱穴の深さは、2677柱穴が0.44mともっとも深く、次いで2679柱穴が0.29m、2681柱穴が0.27m、2683柱穴

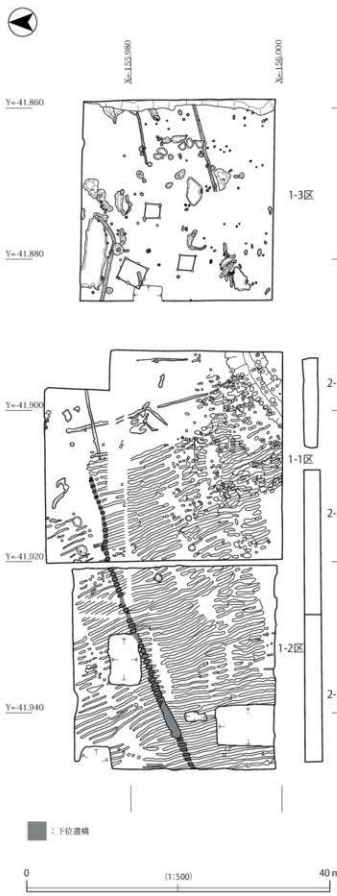


図18　1・2区　第3面　平面図

が0.16 mとなっており、北東側が深く、南西側が浅い。いずれの柱穴においても柱痕跡を検出している。

〔掘立柱建物27〕（図21・23、図版2-2）

1-3区西側、190-8i・9iで検出した掘立柱建物である。掘立柱建物25の南約5 mに位置している。平面形はやや歪な方形を呈する。軸をN－4°－Eにおき、掘立柱建物26とほぼ同方向の軸を有している。柱穴は2751柱穴・2752柱穴・2789柱穴・2800柱穴の4基を検出した。柱間距離は、東側柱列が2.00 m、西側柱列が1.95 m、北側柱列が1.92 m、南側柱列が1.96 mで、ほぼ均等な柱間距離となっている。柱穴はいずれも遺存状況が悪く、深さは0.08～0.20 m程度である。2751柱穴を除く、2752・2789・2800柱穴では柱痕跡を検出した。

溝

〔耕作溝群〕（図18・19・20・24）

すでに記したように、1-1区・1-2区のほぼ全域で耕作溝を検出した。これらの耕作溝群は、第4層下面遺構と考えられる。

耕作溝群はおおむね北北西－南南東の方向性をもち、規則正しく列をなしている。検出した範囲では、西側の耕作溝に長いものが多く、東側ほど短い傾向がある。一方、南東部では耕作溝の長さも不連続な様相を呈している。これは、東側に向かい上昇する地形であるため、東側ほど遺構面の遺存状況が悪いためと推測できる。また、残存状況が良い部分においても、耕作溝の途切れる位置が揃っているところが数箇所ある。これは耕作の単位を示して

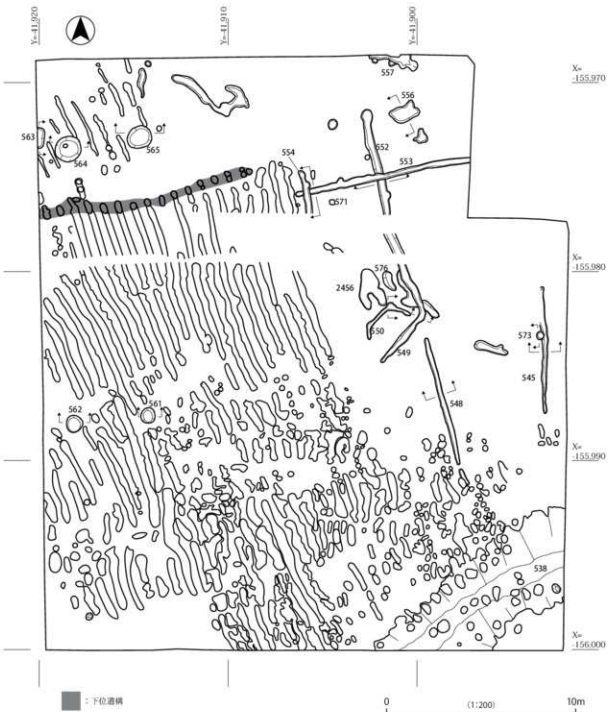


図19　1-1区　第３面　平面図

いるものと考えられる。耕作溝の幅は狭いもので 0.30 m程度、広いもので 0.60 m程度を測る。埋土は灰色～灰黄色の細～粗砂混シルトである。耕作溝底には連続する凹凸があり、その底部には水成堆積層と考えられる微細な砂層が堆積している。このことから、耕作溝底の連続する凹凸は鋤跡と推測する。

耕作溝からは出土した遺物は少ない。6 は 1-2 区 200-5i の耕作溝から出土した円筒埴輪小片である。古墳時代６世紀中頃のものであろうか。耕作溝の時期とはかけ離れたものである。

耕作溝に先行する遺構としては、1-1 区・1-2 区において耕作溝に切られる溝がある。遺構番号は付与していないが、図 19・20 において網掛けをした溝である。東北東－西南西の方向性をもち、耕作溝

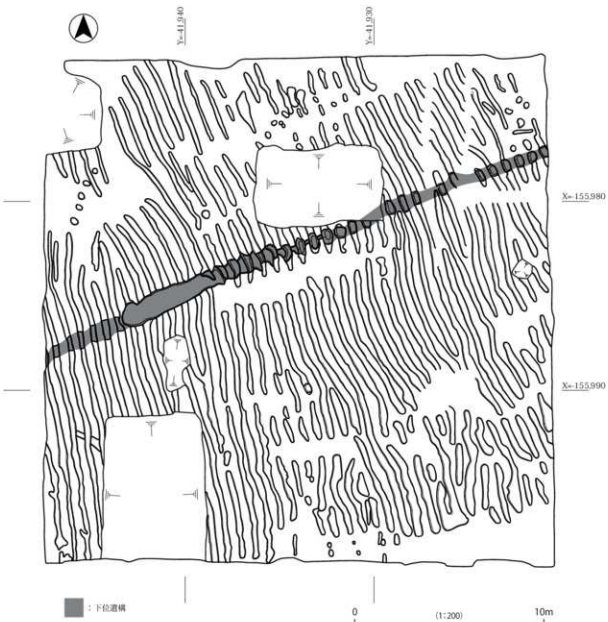


図20　1-2区　第3面　平面図

群とほぼ直交する。1-2区では直線的に延びているが、1-1区では若干蛇行している。また1-1区では遺存状況が悪い。性格は不明である。

〔538溝〕（図19）

第3面では、1-1区で12条、1-3区で10条の計22条の溝を検出した。これらの溝はいずれも耕作溝より下位の遺構である。以下、主要な溝について報告する。

538溝は1-1区南東隅で検出した。幅約4m、ごく緩やかな弧を描いている。深さは0.10～0.15mとごく浅い。溝底には流れに並行する2条のくぼみが認められるが、図示していない。上述の耕作溝群は、この538溝埋没後に形成されている。

〔545・548～550・552～554溝〕（図19・25）

1-1区の北東部に分布する溝である。ほぼ南北方向をとるもの、北側で若干西に振るもの、それらとほぼ直交するものがある。548溝は南南東から北北西に向かい、途中で549溝が合流して、552溝に

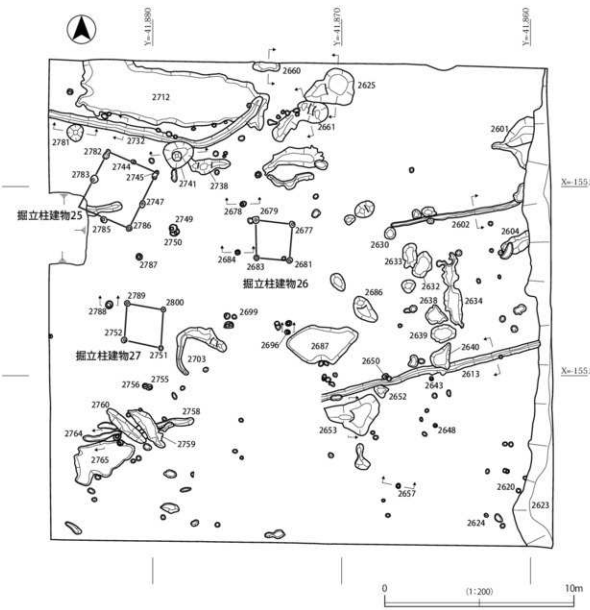


図21　1-3区　第３面　平面図

続いている。552 溝は直交する 553 溝に切られ、その 553 溝は直交する 554 溝に切られている。545 溝はほぼ南北方向の溝である。550 溝は短く屈曲する溝である。これらの溝は、幅 0.25 ～ 0.45 m、深さ 0.05 ～ 0.15 mを測る。埋土は黄灰色から黒褐色の粘質シルトである。

〔2602 溝〕（図 21・25、図版 3-1）

1-3 区、19O-7i で検出したほぼ東西方向の溝である。直線状を呈し、軸をN -80° - Eにおく。検出長 6.8 m、幅 0.2 m、深さ 0.05 mを測る。断面形は皿状で、埋土は暗灰黄色粗砂混砂質シルトである。溝底には掘削による凹凸が認められる。

〔2613 溝〕（図 21・25、図版 3-2）

1-3 区、19O-6i・7i・7j・8j で検出した東西方向の溝で、2602 溝の南 7.5 mの位置を、2602 溝に平行に東西に走る。軸を 2602 溝とほぼ同じN -77° - Eにおく。長さ 11.50 m、幅 0.25 m、深さ 0.08 mを測る。断面形は椀状で、埋土は３層に分かれ、上から黄灰色粘質シルト、灰白色中～細砂、灰黄色砂質シルトである。2613 溝の西側には撹乱があり、その撹乱によって 2613 溝は失われているが、そ

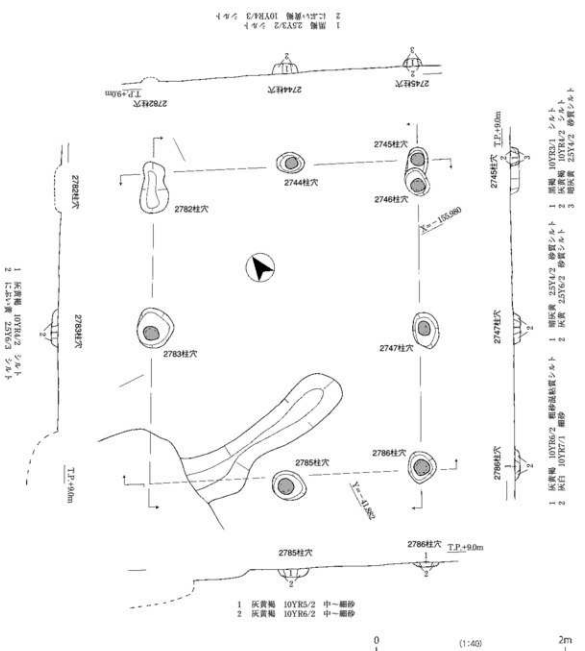


図22　1-3区　第3面　掘立柱建物25　平・断面図

の西側の2758溝・2764溝（図25）が2613溝の続きと考えられる。

〔2623溝〕（図21・26、図版1-2・28）

1-3区、19O-6h・6i・6j・7h・7i・7jで検出した南北方向の溝である。1-3区の東端に位置し、西側肩のみを検出した。2623溝の大部分は調査区外にあるものと考えられる。検出長25.20m、調査区内における検出幅1.20～2.70m、調査区内における最大深度0.75mである。調査区内で検出した西側肩の法面は急傾斜となっている。埋土は上中下の3層に大きく分けられ、上層は黄褐色粘質土ブロック・灰色シルトブロックなどを含む白灰色砂混シルト層、中層はブロック土が認められない白灰色砂混シルト層、下層は灰色粘土～粘質土が堆積している。下層の灰色粘土～粘質土が堆積した段階では、2623溝は機能しているが、水の溜まった状態であったと考えられる。

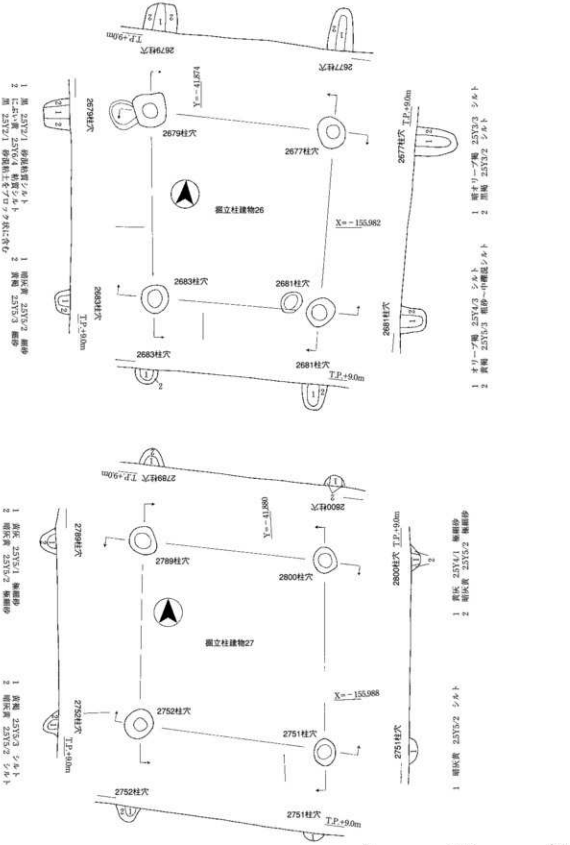


図23　1-3区　第３面　掘立柱建物26・27　平・断面図

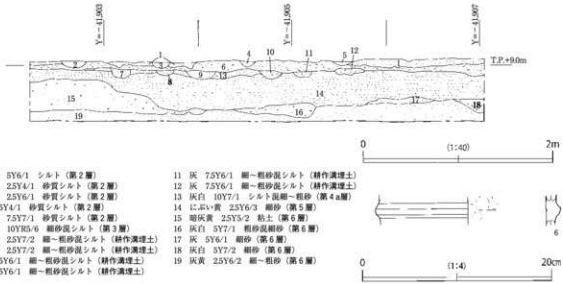


図24　1区　第3面　耕作溝群　断面図　出土遺物

出土遺物は土師器・備前焼などが少量認められる。7は土師器鉢で、口縁部のみの破片である。ほぼ直立する体部から口縁部が強く外反する。口縁端部には面取りが認められる。16世紀中頃のものか。8・9は備前焼擂鉢で、8が口縁部、9が底部である。口縁部内外面はヨコナデ、底部付近内面には擂り目が認められる。16世紀前半～中頃のものか。

〔2732溝〕（図21・25、図版3-3）

1-3区、19O-8h・9hで検出した溝で、2712土坑の南側に位置する。2712土坑の南縁に沿うように走り、途中から北東方向に屈曲して2712土坑の東端と重複する。2712土坑が古く、2732溝が新しい。また、2732溝は2741土坑とも重複しており、2732溝が古く、2741土坑が新しい。

井戸

〔561井戸〕（図19・27）

1-1区、20O-2iで検出した井戸で、径0.70 mを測る。深さ0.6 mまで掘り下げたが、井戸底を確認するには至らなかった。調査範囲では埋土は5層に分層され、粘土ブロックの混じった粘質シルト～砂質シルト層となっている。人為的に埋め戻されたものと考えられる。

図示しうる遺物は出土していない。

〔562井戸〕（図19・27）

1-1区、20O-2iで検出した井戸で、561井戸の西4 mに位置する。径0.85 mを測る。深さ0.5 mまで掘り下げたが、井戸底を確認するには至らなかった。調査した範囲では埋土は1層で、5～10 cm大のブロック土を含む明黄褐色粘質シルトである。人為的に一気に埋め戻されたものと考えられる。図示しうる遺物は出土していない。

〔2625井戸〕（図21・27・28）

1-3区、19O-7h・8hで検出した素掘りの井戸である。南西側に張り出し部があるが、これは別の遺構と考えられる。したがって2625井戸は、平面形が歪な楕円形で、長径1.8 m、短径1.5 mを測り、断面形は椀形で深さ0.95 mである。埋土は30層ほどに細分が可能であり、おおむね黒色～黒褐色を呈する粘土・シルト・砂礫などが周囲から流れ込んだような堆積状況を呈する。なお、本井戸の開削される第5層は水成層の粗砂であり、2625井戸の調査中も湧水が著しかった。

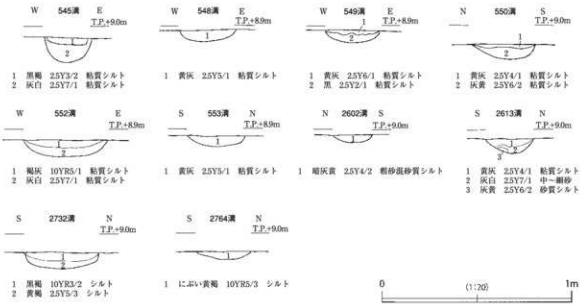


図25　1区　第3面　各遺構　断面図(1)

本井戸からは若干の遺物が出土している。10は土師器壺である。やや開く直口の口縁部で、口縁口縁端部は凹面をもち、頸部は「く」の字に屈曲する。外面にハケメを施す。古墳時代前期のものであろう。

柱穴

〔2657柱穴〕(図21・27)

1-3区南東部、19O-7jで検出した。径0.15m、深さ0.14mを測る。埋土は柱痕部と掘形裏込土の2層である。

〔2678柱穴〕(図21・27)

1-3区中央部、19O-8iで検出し、掘立柱建物26の北西約1mに位置する。径0.34m、深さ0.24mを測る。埋土は2層で、柱痕部が黒褐色シルト、掘形が黄褐色シルトである。柱痕部は柱穴底までは及ばず、柱穴底から0.15mほど上部に留まっている。

〔2684柱穴〕(図21・27)

1-3区中央部、19O-8iで検出し、掘立柱建物26の西約1m、2678柱穴の南側2.5mに位置する。径0.30m、深さ0.17mを測る。埋土は2層で、柱痕部がにぶい黄橙色細砂、掘形がにぶい黄褐色細砂である。

〔2696柱穴〕(図21・27)

1-3区中央部、19O-8iで検出し、2687落ち込みのすぐ西に位置する。径0.24m、深さ0.17mを測る。埋土は2層で、柱痕部が暗褐色シルト、掘形が暗灰黄色シルトである。

〔2788柱穴〕(図21・27・28、図版2-4・28)

1-3区西部、19O-9iで検出し、建物27の西約1mに位置する。径0.31m、深さ0.24mを測る。埋土は3層で、上から順に、上層が灰黄褐色砂混粘質シルト、中・下層が黄灰色細砂である。上層は柱痕状であるが、深さ0.10mと浅い。同層内から須恵器杯身が出土した。

11は須恵器杯身で残存率80%と完形に近く、口径14.6cm、器高3.7cmを測り、しっかりした高台のつくやや浅めの杯身である。奈良時代前半、平城Ⅰ期のものと考えられる。

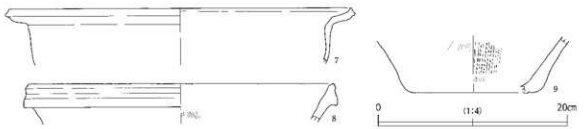


図26　1-3区　第3面　2623溝　出土遺物

小穴

〔2699 小穴〕（図 21・28）

1-3 区中央部、19O-8i で検出した。長径 0.26 m、短径 0.24 mを測る。埋土内からサヌカイト片が出土した。

19 はサヌカイト片で、長さ 2.53 ㎝、幅 3.23 ㎝、重さ 8.18 g を測る。

土坑

〔556 土坑〕（図 19・27）

1-1 区、19O-10h、20O-1h で検出した。平面は不定形である。埋土はオリーブ黒色粘質シルトの 1 層である。図化しうる遺物は出土していない。

〔563 土坑〕（図 19・27）

1-1 区北西部、20O-2h には、径 2 m前後の土坑 3 基が近接して分布する。563 土坑、564 土坑、565 土坑の 3 基であり、埋土も類似する。これらの土坑からは、図化しうる遺物は出土していない。

563 土坑は 1-1 区の西壁付近で一部のみを検出した。長径 1.10 m、深さ 0.25 mを測る。平面は隅丸方形を呈すると考えられる。断面は皿状で、埋土は灰白色細砂で、下半に炭化物の薄層を挟む。

〔564 土坑〕（図 19・27）

1-1 区北西部、20O-2h で検出し、563 土坑の東側に位置する。径 1.30 m、深さ 0.50 mを測る。平面はほぼ円形を呈する。断面は椀状で、埋土は灰白色砂質シルトの 1 層だが、部分的にオリーブ黄色粘土や暗オリーブ色粘質シルトが混じる。

〔565 土坑〕（図 19・27）

1-1 区北西部、20O-2h で検出し、564 土坑の東約 4 mに位置する。径 1.20 m、深さ 0.35 mを測る。平面はほぼ円形を呈する。断面は皿状で、埋土は灰白色砂質シルトの 1 層である。

〔573 土坑〕（図 19・27）

1-1 区、19O-10i で検出した小型の土坑で、長径 0.44 m、短径 0.38 m、深さ 0.26 mを測る。埋土は 2 層で、上層が黒色粘質シルト、下層が黒褐色粘質シルトである。図化しうる遺物は出土していないが、埋土の色調からみて古墳時代の土坑の可能性がある。545 溝と重複し、同溝より後出する。

〔2601 土坑〕（図 21）

1-3 区北東隅、19O-6h・7h で検出した不定形の土坑で、東西 2.00 m、南北 2.60 mを測る。東側が 2623 溝に切られる。

〔2604 土坑〕（図 21）

1-3 区北東隅、19O-6i・7i で検出した溝状の土坑で、2601 土坑の南約 5 mに位置する。長さ 1.60 m、幅 0.90 mを測る。上述の 2601 土坑と同様、東側が 2623 溝に切られる。

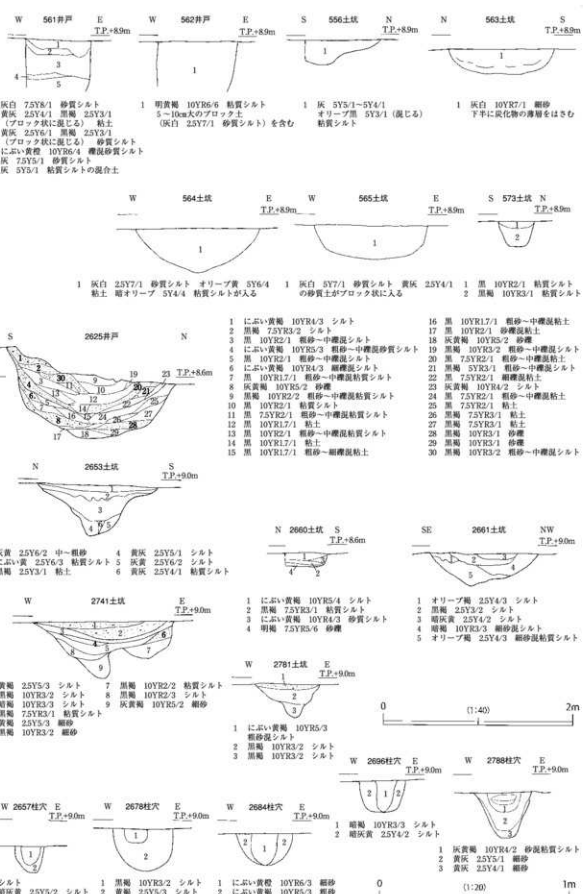


図27　1区　第3面　各遺構　断面図（2）

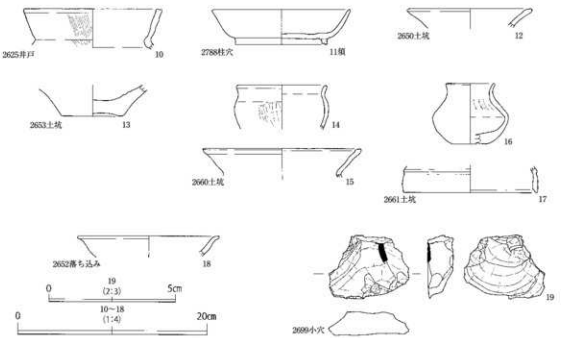


図28　1区　第3面　各遺構　出土遺物

〔2650 土坑〕（図 21・28）

1-3 区南東部、19O-7i・7j で検出した土坑で、2613 溝のすぐ北側に位置する。埋土から弥生土器が出土している。

12 は弥生土器壺である。口縁部のみの破片で、弥生時代前期のものと考えられる。

〔2653 土坑〕（図 21・27・28）

1-3 区の中央、19O-7j・8j で検出した不定形の土坑である。長辺 2.80 m、短辺 1.90 m、深さ 0.50 mを測る。平面は少し歪んだ三角形を呈する。埋土は大きく 4 層に分かれる。埋土からは、弥生土器壺底部が出土した。

13 は弥生土器壺底部である。底部のみの破片であるが、胎土に砂粒を多く含む点や、やや上げ底の形状から、弥生時代前期の可能性が考えられる。

〔2660 土坑〕（図 21・27・28）

1-3 区北端のほぼ中央、19O-8h で検出した。東西 1.40 m、南北 0.50 m（残存長）、深さ 0.15 mを測る。平面は隅丸長方形を呈する。北側は調査区外に続く。既存の建物基礎により上部が削平されている。埋土は 4 層に分かれる。土坑内からは土師器鉢、および土師器甕が出土している。

14 は土師器鉢である。復元口径 9.4cm の小型のもので、口縁部は短く緩やかに外反する。体部外面にはヘラミガキが認められる。15 は土師器甕で、布留式甕の口縁部である。口縁部は大きく外に開き、口縁端部は肥厚し、内傾する面が認められる。古墳時代前期と考えられる。

〔2661 土坑〕（図 21・27・28）

1-3 区北部のほぼ中央、19O-8h で検出し、2625 井戸の南西側に位置する。長さ 3.30 m、幅 1.10 m、深さ 0.34 mを測る。平面は南西－北東方向に長い不定形である。断面は椀状で、埋土は 5 層に分かれる。土坑内からは弥生土器、須恵器が出土している。

16 は弥生土器小壺で、高さ 6.4 cmの小さなものである。体部内面に絞り目が認められる。弥生時代中期頃か。17 は須恵器杯蓋である。口縁部のみの破片で、TK10 型式と考えられる。

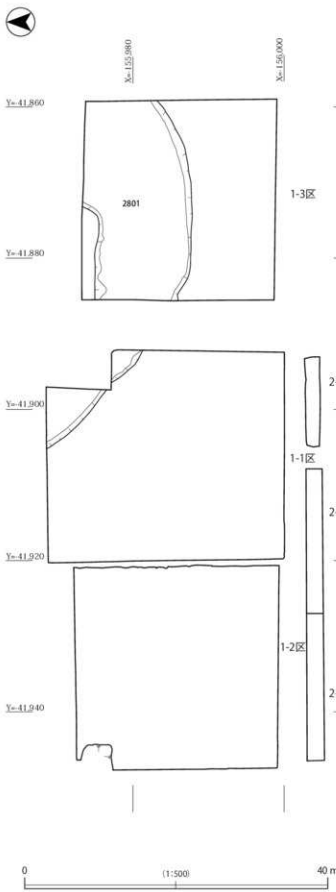


図29　1・2区　第4面　平面図

〔2686 土坑〕（図 21）

1-3 区のほぼ中央部、19O-7i で検出し、2687 落ち込みの北東側に位置する。長さ 1.60 m、幅 0.90 mを測る。平面は不整長円形を呈する。

〔2703 土坑〕（図 21）

1-3 区西部、19O-8i で検出した。東西・南北とも 2.50 mを測る。平面は不定形で、南東方向に開いたC字形を呈し、風倒木痕の可能性がある。

〔2712 土坑〕（図 21）

1-3 区北西部、19O-8h・9h で検出した大型の土坑で、幅が広く、東西方向に長く延びる。東西 9.40 m、南北 2.70 mを測る。西端は北側に折れ曲がって調査区外へと続く。先述の 2732 溝に切られる。

〔2738 土坑〕（図 21）

1-3 区北西部、19O-8h で検出した。長さ 2.20 m、幅 0.70 mを測る。平面は東西方向に長く、溝状を呈する。後述する 2741 土坑に切られる。

〔2741 土坑〕（図 21・27）

1-3 区北西部、19O-8h で検出した不整楕円形の土坑である。建物 25 の北東側約 1.5 mに位置する。長径 1.50 m、短径 1.40 m、深さ 0.60 mを測る。断面は擂鉢状を呈する。埋土は 9 層に分けられるが、1 層の黄褐色シルトと、9 層の灰黄褐色細砂を除き、大部分が黒褐色系の粘質シルト～シルト～細砂である。井戸の可能性も考えられる。2732 溝・2738 土坑と重複し、それぞれを切っている。

〔2759 土坑〕（図 21）

1-3 区南西部、19O-8j・9j で検出した細長い土坑である。長さ 2.70 m、幅 0.70 mを測る。平面は南東－北西

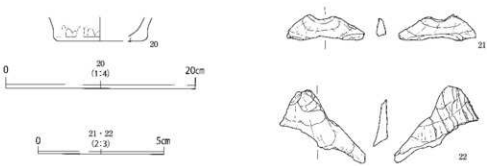


図30　1区　第4面　2801流路　出土遺物

方向に長い。

〔2760 土坑〕（図 21）

1-3 区南西部、19O-9j で検出した細長い土坑である。2759 溝の北東側に位置し、ほぼ平行する。長さ 2.60 m、幅 0.60 mを測る。

〔2781 土坑〕（図 21・27）

1-3 区北西端部、19O-9h で検出した土坑で、ほぼ楕円形を呈する。長径 1.0 m、短径 0.8 m、深さ 0.35 mを測る。断面は擂鉢状である。埋土は 3 層に分けられる。

落ち込み

〔2632 ～ 2634・2638 ～ 2640 落ち込み〕（図 21）

1-3 区東側、19O-7i では、2602 溝と 2613 溝の間に、2632 ～ 2634 落ち込み、2638 ～ 2640 落ち込みが連続的に分布している。いずれも不定形で浅い落ち込みである。

2632 落ち込みは、長さ約 1.4 m、幅約 0.8 mを測る。2633 落ち込みは、長さ 1.15 m、幅 0.75 mを測る。2632 落ち込みの北西側に位置し、ごく一部が重複している。2634 落ち込みは、長さ約 4 m、幅約 0.9 mを測る。長さ 2 m程度の落ち込みが南北に二つ繋がったような形状を呈する。

2638 ～ 2640 落ち込みは、2632 ～ 2634 落ち込みの南側に続いている。

2638 落ち込みは、長さ約 0.9 m、幅 0.85 mを測る。2639 落ち込みは、2638 落ち込みの南側に位置する。長さ約 1.3 m、幅約 0.9 mを測り、2638 落ち込みと近似した形状・規模を呈する。2640 落ち込みは、長さ約 1.5 m、幅約 0.9 mを測る。2613 溝と重複し、同溝を切っている。

〔2652 落ち込み〕（図 21・28）

1-3 区東側、19O-7j で検出した小規模な落ち込みである。ごく一部が 2613 溝と重複している。遺構内から土師器が出土している。

18 は土師器椀で、口縁部のみの破片である。古墳時代後期頃のものであろう。

〔2765 落ち込み〕（図 21）

1-3 区南西端、19O-9j で検出し、2759 土坑・2760 土坑の南西側に位置する。長さ約 3.3 m、幅約 1.8 mを測る。平面は不定形である。

〔2687 落ち込み〕（図 21）

1-3 区中央部、19O-7i・8i で検出したやや大型の不定形な落ち込みである。長さ約 3.7 m、幅約 1.9 mを測る。

5．第 4 面（図 29）

第 5 層を除去した第 7 層上面を第 4 面として調査した。検出した遺構は流路 1 条のみである。

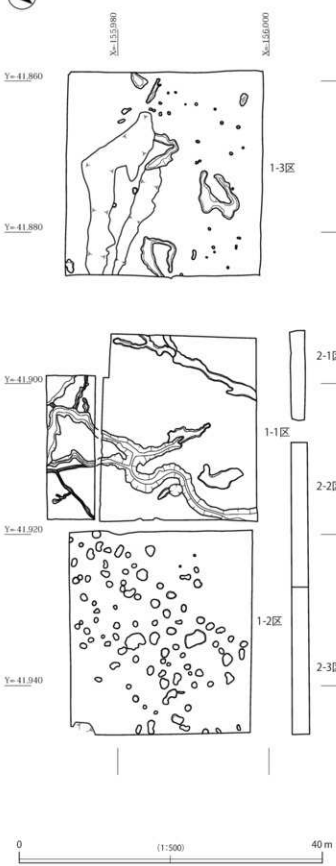


図31　1・2区　第5面　平面図

〔2801 流路〕（図 29・30）

1-3 区 19O-6h・6i・7h・7i・8h・8i・9h・9i、および 1-1 区 19O-10g・10h・10i・20O-1g・1h にある自然流路で、1-3 区北東隅から西に向かい、1-1 区の北東隅をかすめて北西側に延びる。検出した範囲では長さ約 30 m、幅は 11 ～ 16 m である。2801 流路内から弥生土器片、およびサヌカイト片が出土した。

20 は弥生土器甕である。底部の破片で、底部外面に指オサエ、内面にナデを施す。胎土に石英・長石などの砂粒を多く含む。弥生時代前期のものか。21・22 はサヌカイトで、いずれも小剥片である。

6．第 5 面（図 31 ～ 34、図版 4-1 ～ 4-3）

第 5b 層～第 9 層を除去した第 9 層下面を第 5 面として調査した。遺構面の標高は、西側の 1-2 区で 7.9 m前後、東端の 1-3 区で 7.6 m前後で、西から東に向かって下がっていく。遺構面は平坦ではなく、凹凸が認められる。なお、第 9 層下面に至るまでの各層界で精査をおこなったが、遺構は検出されなかった。第 5 面で検出した遺構は、流路、溝、土坑、小穴、風倒木痕である。1-1 区では主として流路や溝を検出したのに対し、1-2 区では多数の不定形土坑、1-3 区では風倒木痕などを検出した。

流路

〔638・639・649・650・651 流路〕（図 32・35）

1-1 区で検出した。これらの流路部分は、下層の第 11 層（暗色帯）が大きく落ち込んでおり、流路形成以前から谷状地形を呈していたと考えられる。この谷

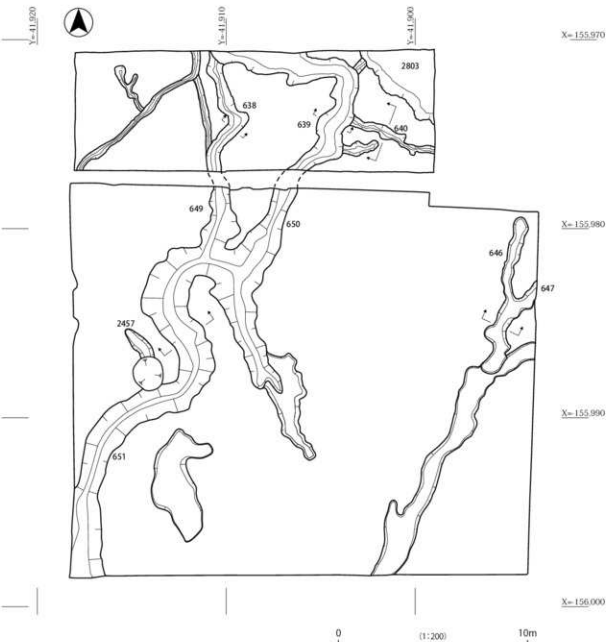


図32　1-1区　第5面　平面図

状地形に流路が形成され、砂礫層～シルト層を堆積し、埋没したと考えられる。

638・639・649・650・651 流路は南南西―北北東の方向性をもち、調査区内において大きく蛇行する。幅・深さは一定ではなく、651 流路の断面位置では、幅 1.80 m、深さ 0.90 mを測る。埋土は3層に分かれ、上層は灰色粘土～砂質シルトだが、中層は灰黄褐色の、下層は黒褐色の礫混じり細砂～中砂・粗砂が堆積している。下層は壁面を抉るような堆積状況を示し、強い流れがあったと考えられる。651 流路は 1-1 区の北端部で 649 流路・638 流路と 650 流路・639 流路に分岐し、さらに北に延びて再び合流するようである。図示しうるような遺物は出土していないが、倒れた状態の自然木が出土した。第Ⅶ章第2節の成果を勘案すると、縄文時代中期ごろの流路と考えられる。

〔640 流路〕（図 32・35）

1-1 区北部で検出し、東南東－西北西の方向性をもつ。東側は調査区外に続き、西側は前述の 639

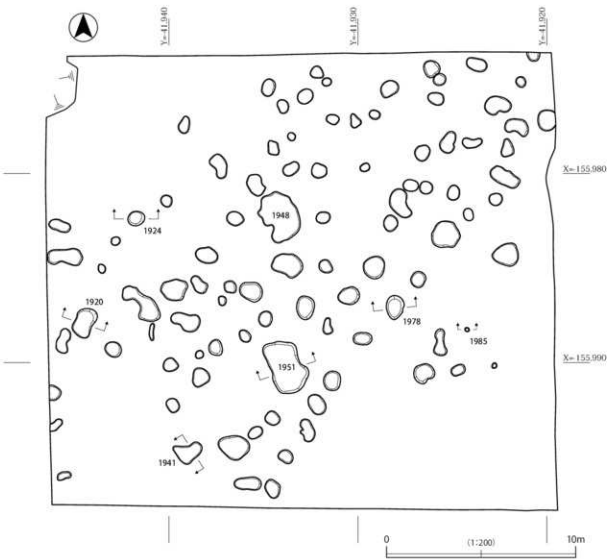


図33　1-2区　第5面　平面図

流路に接続する。幅約1m、深さ0.18mを測る。埋土は灰白色砂礫が大部分を占め、一部に暗灰色粘土が認められる。

〔646・647 流路〕（図25・28）

1-1区東部で検出し、南南西－北北東の方向性をもち、1-1区内では直線的に延びる。北部で東側に647流路が分岐する。幅0.68m、深さ0.12mを測る。埋土は1層で褐色粗砂が堆積している。

〔2803 流路〕（図34）

本流路は第4面2801流路の一部であり、第5面においてもその下部が残っていたものである。

溝

〔2457 溝〕（図32）

1-1区、20O-2iで検出した小規模な溝である。651流路と繋がる可能性はあるが、撹乱のため不明である。

〔2807 溝〕（図34）

1-3区、19O-6i・7iで検出した小規模な溝である。長さ3.60m、幅0.70mを測る。

土坑

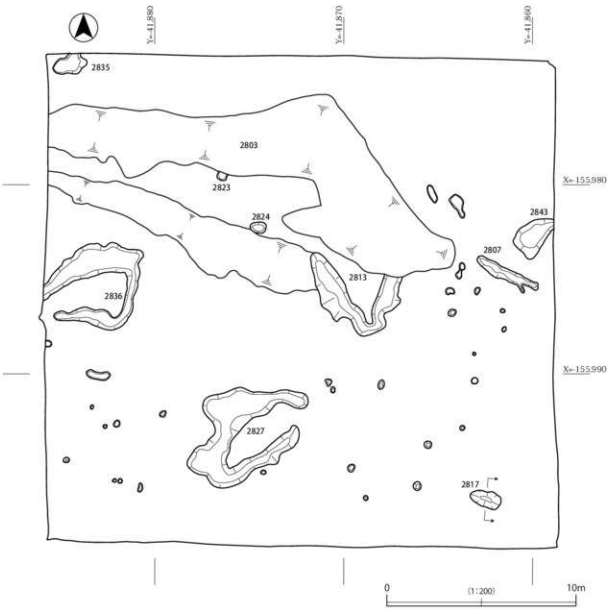


図34　1-3区　第5面　平面図

〔1920 土坑〕（図 33・35）

1-2 区、200-5i で検出したやや大型の土坑で、長さ 1.60 m、幅 0.90 m、深さ 0.20 mを測る。埋土は黒色粘質シルトである。樹木根痕跡と考えられる。

〔1924 土坑〕（図 33・35）

1-2 区、200-5i で検出したほぼ円形の土坑で、長径 0.85 m、短径 0.80 m、深さ 0.14 mを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトである。

〔1941 土坑〕（図 33・35）

1-2 区、200-4j で検出したやや大型の不定形土坑で、長さ 1.40 m、幅 0.60 m、深さ 0.06 mを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトである。

〔1951 土坑〕（図 33・35）

1-2 区、200-4i・4j で検出した大型の不定形土坑で、長さ 2.90 m、幅 1.50 m、深さ 0.16 mを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトである。

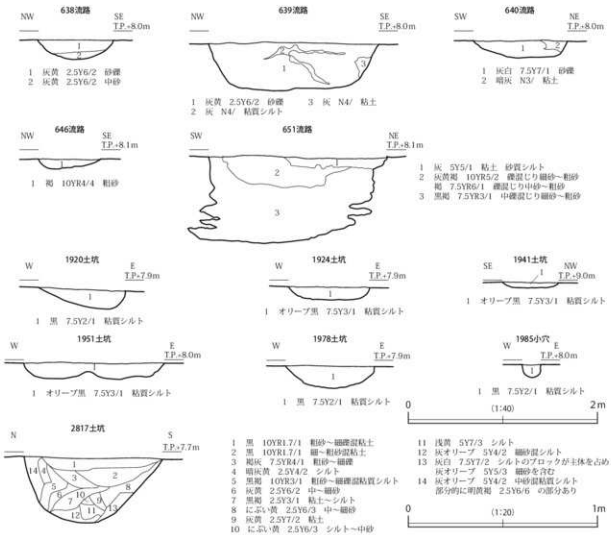


図35　1区　第5面　各遺構　断面図

〔1978 土坑〕（図 33・35）

1-2 区、200-3i で検出したやや大型の土坑で、長さ 1.30 m、幅 0.90 m、深さ 0.20 mを測る。埋土は黒色粘質シルトである。

〔2817 土坑〕（図 34・35）

1-3 区、190-7j で検出した不整長楕円形の土坑で、長径 1.70 m、短径 0.70 m、深さ 0.35 mを測る。埋土は 14 層に細分されるが、最終段階に堆積した 1～3 層以外の、4～14 層は大小さまざまなブロック状の堆積状況を示す。遺物は出土しなかった。

小穴

〔1985 小穴〕（図 33・35）

1-2 区、200-3i で検出した小穴である。径 0.10 m、深さ 0.14 mを測る。埋土は黒色粘質シルトである。

風倒木痕

〔2813・2827・2836 風倒木痕〕（図 34）

1-3 区では 3 か所で風倒木痕と思われる不定形の落ち込みを検出した。いずれもＣ字形あるいはＵ字形に落ち込みがひろがるものである。

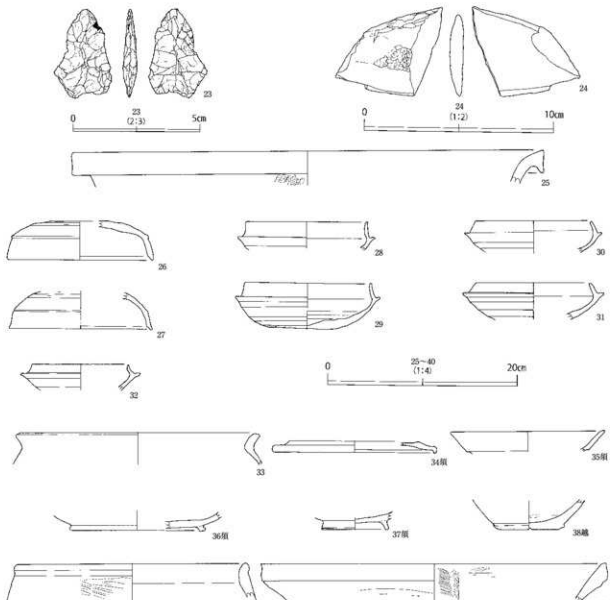


図36　1区　第3層　出土遺物

包含層出土遺物（図 36・37）

23 ～ 40 は、第 1 面・第 2 面・第 3 層から出土したものである。23 は石鏃で、1-2 区から出土した。凹基無茎式でサヌカイト製である。24 は石庖丁で、1-1 区から出土した。粘板岩製で直線刃半月形とみられるものである。3 分の 1 ほどが遺存している。外面は黄褐色を呈する。25 は須恵器大甕で、1-2 区から出土した。口縁部のみが遺存し、口径約 50 cmに復元できる大型品である。口縁部外面に格子状の叩き目がある。26 ～ 32 は須恵器である。26・27 は杯蓋、28 ～ 31 は杯身で、いずれも TK10 型式前後と考えられるものである。26 は口縁端部内面に凹面がめぐる。27 は口縁端部内面に凹面をつくる。29 は杯身に杯蓋を被せて焼成したもので、杯身受部に杯蓋口縁部の一部が溶着している。TK10 型式でも古段階であろうか。26 は 1-1 区、27・30 は 1-2 区第 3 層、28・29 は 1-1 区第 3 層、31 は 1-2 区から、それぞれ出土した。32 は杯身で、1-2 区第 3 層出土である。やや小型化しており、TK209 型式か。33 は土師器甕で、1-2 区第 3 層出土である。口縁部のみの破片である。平安時代の 9 世紀まで

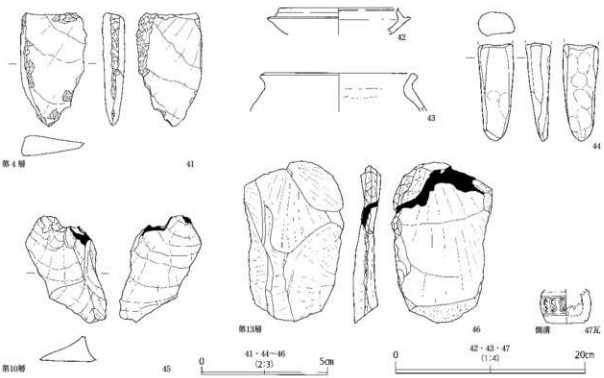


図37　1区　第4・10・13層　出土遺物

下るものか。34は須恵器杯蓋で、1-2区第3層から出土した。口縁部のみの破片で、天井部が平坦化し、口縁端部は屈曲した後、下方に小さく折れ曲がる。35は須恵器甕で、1-1区の第1面から出土した。大きく開く口縁部のみの破片で、口縁端部の形状からみて口縁部が長く発達した形態であろう。36は須恵器杯で、1-2区の第3層から出土した。高台付近の破片で、平城Ⅰ期頃のものであろうか。37は須恵器椀で、1-2区の第3層から出土した。高台付近の破片で、灰釉陶器の可能性がある。10世紀前半頃か。38は1-2区の第3層出土で、越州窯系青磁Ⅱ類と考えられる。体部外面は露胎しており、内底面に目跡がある。39は瓦質甕で、1-1区第1面から出土した。外面を粗いタタキで仕上げるもので、破損後に二次焼成を受けた可能性がある。15世紀後半以降と思われる。40は瓦質こね鉢で、1-1区第1面から出土したものである。15世紀中頃のものであろう。

41～47は第4層以下で出土したものである。41はサヌカイト剥片で、1-3区の第4層から出土した。細部調整以外の大きな剥離面はいずれも表面の風化が進んでいる。42は須恵器杯身で、1-1区の第4面から出土した。口縁端部内面に沈線がめぐるもので、TK43型式かと思われる。43は土師器甕で、1-1区の第4層から出土した。くの字に短く外反する口縁部片である。44は土師質三足土器で、1-1区第4層から出土したものである。脚部の先端のみが遺存する。45はサヌカイト剥片で、1-1区第10層から出土した。縦長のもので、剥離面はいずれも風化している。46はサヌカイトスクレーパーで、1-1区第13層から出土した。上下端に原礫面を残す薄い縦長剥片を素材とし、片側縁にのみ細部調整を施している。剥離面はすべて風化が進んでいる。旧石器時代から縄文時代の古い段階のものか。47は瓦質焼成の小壺で、1-3区の東側側溝から出土したものである。体部に蔵手文に類似した文様を連続して施文する。内面には、有機物様の集積が認められるが、素材等は明らかにできなかった。時期は15世紀以降である。

第２節 ３区の成果

３区は 05-1 調査の中で東側に位置する。３区は、調査の都合上、東側の 3-1 区と西側の 3-2 区に分けて調査を実施した。

１．基本層序 （図 38）

第１層 現代耕作土である。この上部に盛土が被る。

第２層 現代耕作土を除去すると、黄褐色中～細砂・明黄褐色、浅黄色シルト混中～細砂などからなる第２層が現れる。層厚は 0.05 ～ 0.23m を測る。本層は 3-1 区では厚く、3-2 区では薄く堆積する。

第３層 黄灰色シルト（マンガン含む）、灰オリーブ色砂混シルト（鉄分を斑状に含む）などからなる。3-1 区では層厚は 0.01 ～ 0.06 mを測り、3-2 区では 0.02 ～ 0.04m を測る。本層上面を第１面として調査をおこない、東西方向の鋤溝群を検出した。なお、3-2 区では第２・３層を除去した段階で調査をおこない、第２面とした。

第 4a 層 黄灰色、明褐色シルトや灰オリーブ色シルトなどからなる。層厚は 0.02 ～ 0.08 mを測る。第 4 a 層は 3-1 区では明瞭だが、3-2 区では部分的に残存するのみである。本層上面を第３面として調査をおこなった。3-1 区の東側では南北方向を主とする、短く細い鋤溝が検出された。３区全体では、鋤溝以外に溝や土坑が検出されたが、これらは第３層下面と第 4a 層上面の遺構が混在している。

第 4b 層 にぶい黄褐色シルト混中砂・暗灰黄色シルト混中砂などから構成される。層厚は 0.04 ～ 0.18 mを測る。この上面を第４面として調査をおこなった。第 4b 層の堆積が薄い箇所では、同時に第５層上面を検出する結果となったが、遺構埋土や遺物の差異でこれを分離している。第４面（第 4b 層上面）の遺構では、耕作溝や掘立柱建物 17 棟、塀１列、土坑、井戸などを検出した。

第５層 3-1 区の第５層は灰黄色中砂、灰黄褐色砂混シルト～シルト混砂礫などからなり、層厚は 0.04 ～ 0.42m を測る。3-2 区の第５層は灰黄細砂（明黄褐色混）、黄褐色、にぶい褐色砂礫などからなる。層厚は 0.18 ～ 1.68m を測る。3-1 区では第５層と第 5b 層の２層に分けられるが、3-2 区では区別できなかった。第５層全体の上面を第５面とした。第５面では、掘立柱建物、土坑や溝などを検出した。

第 5b 層 黄褐色シルト、灰オリーブ粘質シルトなどからなり、3-1 区にのみ認められる。層厚は 0.08 ～ 0.20 mを測る。本層上面を第６面として調査をおこない、自然流路などを検出した。

第６層 黄褐色シルト（上位は中砂が混じる）・褐色混灰褐色シルト～粘質シルト等からなる。3-1 区にはほとんど認められないが、3-2 区では堆積が認められ、層厚は 0.28 ～ 0.38 mを測る。

第７層 褐灰色～灰黄褐色粘質シルト（小礫を含む）などからなる。層厚は 0.05 ～ 0.18 mを測る。

第８層 暗灰黄色シルト混粗砂・黄灰色砂礫などからなる。層厚は 0.50 ～ 0.65 mを測る。

第９層 黒褐色砂礫混シルト・黒色シルト～砂礫混じりシルトなどで構成される暗色帯である。層厚は 0.05 ～ 0.20 mを測る。

第 10 層 灰色粘質シルト～砂質シルト・灰色粘質シルト・にぶい褐色粗い砂礫などで構成される。層厚は 0.10 ～ 0.55 mを測る。3-2 区では厚く、3-1 区では薄く堆積している。

第 11 層 灰色シルト～中砂混シルト・黒褐色シルト質粘土などからなる暗色帯である。層厚は 0.13 ～ 0.20 mを測る。

第 12 層 オリーブ灰色シルト～粘土・オリーブ灰色粘質シルト～粘土などから構成され、少し固結する。層厚は 0.10 ～ 0.30 mを測る。

W
E
Y=41960
Y=41980
Y=42000
Y=42020
Y=42040
TP-10.0m
TP-9.0m
TP-8.0m
TP-7.0m
TP-6.0m
TP-5.0m
20m
(1:500)
0
(1:40)
2m

図38　3区　南壁　断面図

3区　南壁断面　注記

1 （現代盛土）
2 オリーブ褐　2.5Y4/3　シルト混粗砂（現代耕作土層）〔第1層〕
3 黄褐　2.5Y5/6　中～細砂　明黄褐　2.5Y7/6　シルト混中～細砂〔第2層〕
4 黄灰　2.5Y6/1　シルト（マンガン含む）　灰オリーブ　5Y6/2
砂質シルト〔第3層〕
5 黄灰　2.5Y5/1〔第4層〕
6 灰黄褐　10YR5/2　シルト混砂礫〔53 溝埋土〕
7 褐灰　10YR5/1　中～粗砂〔遺構埋土〕
8 オリーブ褐　2.5Y4/4～明黄褐　2.5Y6/6　砂礫　ラミナ明瞭〔106 溝埋土〕
9 灰黄褐　10YR6/2　中～粗砂　シルトの第6層ブロックを含む〔遺構埋土〕
10 オリーブ褐　2.5Y4/3　シルト混中～粗砂〔遺構埋土〕
11 灰黄　2.5Y6/2　細砂　下位に粘土ラミナ〔373 流路埋土〕
12 黄褐　10YR5/6～灰黄　2.5Y6/2　砂礫〔373 流路埋土〕
13 にぶい黄　2.5Y6/3～灰黄褐　10YR6/2　粗砂〔第5層〕
14 赤褐　5YR4/8～明褐　7.5YR5/8　砂礫〔第5層〕
15 黄褐　2.5Y5/4～褐　7.5YR4/6　砂礫〔第5層〕
16 明黄褐　2.5Y6/6～にぶい黄　2.5Y6/3　シルト混細砂〔第5層〕
17 にぶい黄褐　10YR5/3～褐　10YR4/4　砂礫〔第5層〕
18 黄灰　2.5Y6/1～黄灰　2.5Y6/1　シルト～細砂〔第5層〕
19 黒褐　10YR3/1（上位）灰　5Y4/1（中位）黒　10YR2/1（下位）
粘土〔第5層〕
20 明黄褐　10YR6/6～灰黄　2.5Y6/2　細砂〔第5層〕
21 明褐　7.5YR5/8　極細砂～シルトが互層をなす〔第5層〕
22 黄褐　10YR5/8～暗灰黄　2.5Y5/2　細砂〔第5層〕
23 にぶい黄　2.5Y6/4　砂礫〔第5層〕
24 灰黄　2.5Y6/2　中砂　シルトを少量含む〔第5層〕
25 灰黄褐　10YR5/2　中砂混シルト～シルト混砂礫〔第5層〕
26 黄褐　10YR5/6　シルト（上位は中砂が混じる）〔第6層〕
27 黄褐　10YR5/8　シルト～中砂混シルト〔第6層〕
28 明黄褐　10YR6/8～暗灰黄　2.5Y5/2　中砂混粘質シルト〔第6層〕
29 明褐　7.5YR5/8～灰黄　2.5Y6/2　シルト混砂〔第6層〕
30 黄褐　10YR5/8～黄灰　2.5Y5/1　粘土〔第6層〕
31 明褐　7.5YR5/8～灰黄　2.5Y6/2　シルト混砂〔第6層〕
32 褐　10YR4/6（上位）にぶい黄褐　10YR5/4（中位）黄褐　10YR5/8（下位）
砂礫　粘質シルトの薄層介在〔第6層〕
33 褐灰　10YR6/1～明褐　7.5YR5/8　粘土〔第6層〕
34 褐灰　10YR4/1～灰黄褐　10YR4/2　粘質シルト（東端）～シルト混粗砂
（西端）小礫を含む〔第7層〕
35 暗灰黄　2.5Y5/2　シルト混粗砂〔第8層〕
36 灰黄　2.5Y6/2　細礫混中～細砂〔第8層〕
37 褐　10YR4/6　粘質シルト〔第8層〕
38 黒褐　2.5Y3/1　粘土〔第8層〕
39 灰黄褐　10YR5/2　粘質シルト　偽礫状をなす〔第8層〕
40 黒　N5/　粘質シルト　細砂～中砂を含む〔第9層〕
41 黒褐　10YR2/2　砂礫混シルト〔第9層〕
42 黄褐　2.5Y5/3　砂礫〔第10層〕
43 灰　7.5Y5/1　粘質シルト〔第10層〕
44 にぶい黄褐　10YR5/4（上位）明褐　7.5YR5/6（中位）にぶい黄褐
10YR5/4（下位）　砂礫〔第10層〕
45 にぶい黄　2.5Y6/3（上位）灰黄　2.5Y6/2（下位）　砂質シルト〔第10層〕
46 暗灰黄　2.5Y4/2（上位）明褐　7.5YR5/8（下位）　砂礫〔第10層〕
47 オリーブ灰　5GY5/1　砂混粘質シルト〔第10層〕
48 灰　7.5Y5/1　シルト質粘土〔第10層〕
49 灰　10Y5/1～黒褐　7.5YR3/1　粘質シルト〔第10層〕
50 オリーブ灰　2.5GY5/1～灰　5Y4/1　粘土〔第10層〕
51 灰　5Y4/1　シルト～中砂混シルト〔第11層〕
52 黄灰　2.5Y4/1　シルト〔第11層〕
53 灰　7.5Y4/1　シルト　下位中心に粗～中砂を多く含む〔第11層〕
54 黒褐　2.5Y3/1　シルト〔第11層〕
55 褐灰　10YR4/1　シルト〔第11層〕
56 黒　5Y2/1　粘質シルト〔第11層〕
57 灰　7.5Y4/1　シルト・砂・粘土の互層〔第11層〕
58 灰　7.5Y4/1　砂礫〔第11層〕
59 黒　10YR2/1　粘土〔第11層〕
60 緑灰　10GY5/1　粘土～粘質シルト〔第11層〕
61 オリーブ黒　7.5Y3/1　粘土〔第11層〕
62 黒褐　2.5Y3/2　粘質シルト〔第11～12層〕
63 黒褐　10YR3/1　シルト質粘土〔第11～12層〕
64 黒　7.5YR1.7/1　粘土〔第11～12層〕
65 褐灰　10YR4/1　粗砂　やや固結〔第11～12層〕
66 灰　7.5Y4/1　粘質シルト〔第11～12層〕
67 灰　5Y4/1　極細砂～砂質シルト〔第12層〕
68 オリーブ灰　5GY6/1　シルト～粘土〔第12層〕
69 褐灰　10YR4/1（上位）灰　10Y5/1（下位）　中～細砂〔第12層〕
70 暗灰黄　2.5Y5/2　粗砂〔第12層〕
71 暗灰黄　2.5Y5/2　粘質シルト　粗砂を多く含む〔第12層〕
72 灰　10Y5/1　粘質シルト～粘土〔第12層〕
73 灰　10Y5/1　粘質シルト　固結〔第12層〕
74 暗灰黄　2.5Y4/2～褐　10YR4/6　砂礫〔第12層〕
75 灰オリーブ　5Y5/2～黄褐　10YR5/6　粗砂〔第12層〕
76 灰　7.5Y5/1　シルト〔第13層〕
77 褐灰　10YR5/1　粘質シルト〔第13層〕
78 オリーブ灰　2.5GY6/1　シルト～粘土〔第13層〕
79 緑灰　10GY5/1　粘質シルト〔第13層〕
80 灰　5Y5/1　粘質シルト〔第14層〕
81 緑灰　10GY6/1　粗砂　シルトを含む〔第14層〕
82 黄褐　2.5Y5/6（上部）緑灰　7.5GY5/1（下部）　シルト混粗砂〔第14層〕
83 黄褐　2.5Y5/6（上部）緑灰　7.5GY5/1（下部）　砂質シルト〔第14層〕
84 灰　7.5Y5/1　砂礫〔第14層〕
85 緑灰　10GY5/1　シルト混砂礫～砂礫混シルト〔第15層？〕

第13層　灰色粘質シルト・灰色シルトなどからなる。層厚は0.08～0.30 mを測る。

第14層　灰色オリーブ粘質シルトなどからなる。層厚は0.09～0.28m 測る。

第15層　緑灰色の砂礫を含むシルトからなる。低位段丘構成層とみられ、層厚は不明である。

2．第1面（図39・40、図版5-2）

第1面は3-1区において検出した。遺構面の標高は、北東8.84m、南東8.98m、北西8.94m、南西

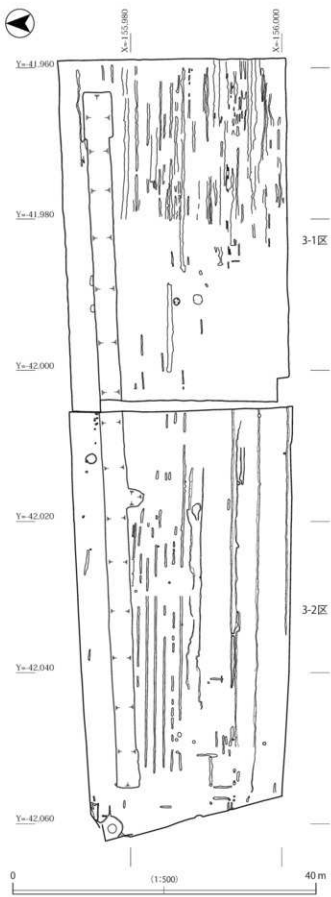


図39　3区　第1・2面　平面図

9.09m、中心部分 8.90m を測る。南側が約 0.15 ～ 0.28 m高く、北側に緩やかに下る地形を示す。

第 1 面では 3-1 区東側において鋤溝群を検出したが、西側ではほとんど検出できなかった。鋤溝は長いもので検出長約 27 mを測り、溝幅は 0.15 ～ 0.70 mを測る。細い鋤溝が大半である。鋤溝は東西方向のものが大半であるが、ごくわずかに南北方向の鋤溝が認められる。また、調査区中央西側に 8 井戸がみつかった。鋤溝群から弥生土器片、土師器杯、羽釜、須恵器甕、杯身・杯蓋（TK47 型式）、黒色土器内黒・両黒椀、瓦器椀（和泉型Ⅳ -1 ～ 2 期）、瓦器椀、緑釉陶器などが出土した。

3．第 2 面（図 39・41 ～ 43、図版 5-1）

3-2 区において検出した。遺構面の標高は、北東 8.90m、南東 9.08m、北西 8.94m、南西 9.06m、中心部分 9.03m を測る。南側が 0.12 ～ 0.18 m高く、北側に緩やかに下る地形を示す。

調査区北東では東西方向に走る平行な溝を 7 条検出した。これらの溝は 1.10 ～ 1.15 m 間隔で掘削されている。各溝は幅約 0.2 mである。断続的な検出であるが、最長のもので検出長 50 数mを数える。調査区南側には、東西に走る幅約 3.7 mを測る 695 溝がある。いずれも耕作に関わる遺構群と思われる。また、調査区北西隅で 692 井戸を検出した。近世陶磁器や瓦、井戸枠材が出土している。

各遺構からは、土師器杯・甕、須恵器、黒色土器両黒椀、瓦器などが出土した。出土した遺物の大半は細片となっているものが多く、下層に包含される遺物を巻き上げたものと考えられる。

このうち、695 溝出土の土師器甕（48）、2463 溝出土の甑（49）・「て」字口縁小皿（50）・須恵器杯身（51）、696 土坑出土の土

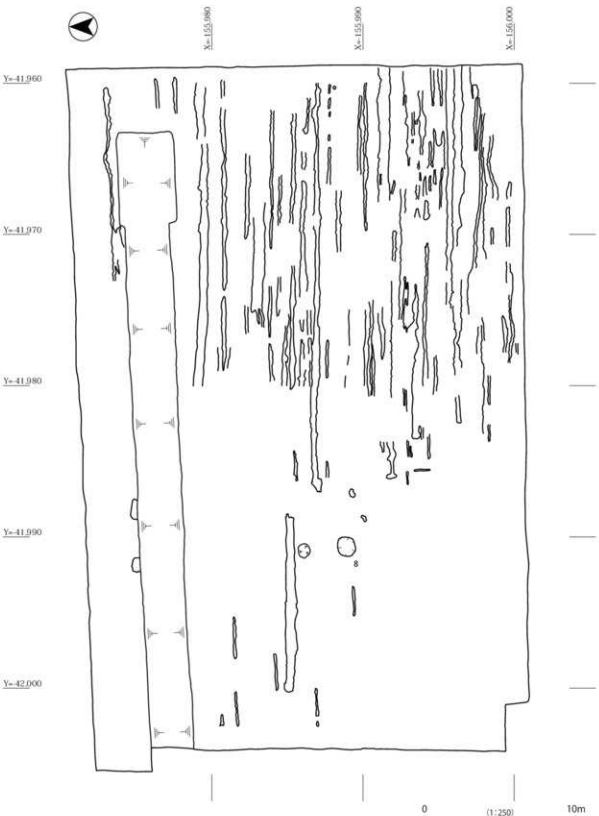


図40　3-1区　第1面　平面図

師器皿（52）、693 土坑出土のサヌカイト製石鏃（53）を図示した。

〔692 井戸〕（図 41・43）

3-2 区北西隅付近、1O-6h・7h で検出した。西北西方向に溝が取りつく。掘形径 2.87m を、井戸枠

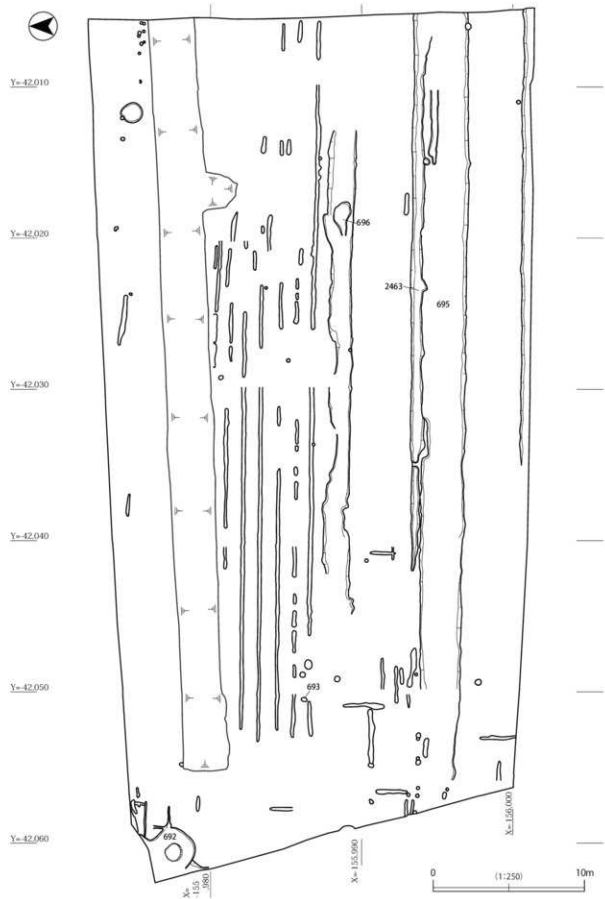


図41　3-2区　第２面　平面図

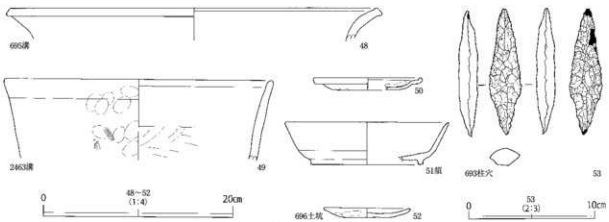


図42　3-2区　第2面　各遺構　出土遺物

長径 1.12m、短径 0.94m をそれぞれ測る。井戸枠の構造は、板材（62）26 枚を縦方向に組んだ桶状を呈する。

出土遺物には、瀬戸美濃染付蓋（54）、肥前染付碗（55）、肥前白磁小碗（56）、染付碗（57・58）、肥前白磁碗（59）、丸瓦（60）、井戸枠瓦（61）、井戸枠縦板材（62）がある。

この他に、陶磁器、瓦質製品、木製品などがある。この井戸の使用された時期は、近世後期以降と考えられる。

4．第3面（図 44 ～ 47）

第3面は、3-1 区では第 4a 層上面で、3-2 区では第 4 面（第 4b 層上面）にて検出した遺構のうち、第3面の帰属と判断した遺構によって構成される。

遺構面の標高は、3-1 区では北東 8.83m、南東 8.92m、北西 8.81m、南西 9.08m、中心部分 8.67m を測る。南側が 0.09 ～ 0.27m 高く、北側に緩やかに下る地形を示す。3-1 区西側では、褐色を呈する第 4a 層が薄く残存しているが、東側ではほとんど認められない。また、調査区南西側では、下層の 373 自然流路堆積の砂層が露頭しており、砂層上部にも第 4 層は確認できなかった。この遺構面では、第3層下面遺構である鋤溝を、東西方向と南北方向に検出した。その他の遺構としては、南北方向からやや東に振る 11 溝や、土坑を検出しており、耕作に伴う遺構群と思われる。

溝

〔9溝〕（図 45・46）

3-1 区南西側、200-9i・10i で検出した。第3層基底面の遺構である。長さ 12.51m、幅 0.62 ～ 0.90m、深さ 0.14m を測り、東西に長い溝である。埋土はにぶい黄色細砂混じりシルトである。

出土遺物には、土師器高杯・杯・甕、黒色土器内黒椀・両黒椀、瓦器椀、須恵器杯蓋・杯・甕、サヌカイト片、染付碗などがある。このうち、土師器甕（63）を図示した。

〔11溝〕（図 45・47）

3-1 区南西側、200-8h・8i・8j で検出した。第3層基底面の遺構である。長さ 29.27m、幅 0.72 ～ 1.48m を測る南北に走る溝である。

出土遺物には、土師器椀・杯または皿（平安京Ⅲ新頃）、黒色土器内黒椀、須恵器杯身または杯蓋・甕などがある。このうち、サヌカイト製の二次加工がある剥片（67）、土師器杯（68）を図示した。

〔952溝〕（図 44）

3-2 区北西側、10-4i・5i・6i で検出した。長さ 15.74m、幅 0.39 ～ 0.60m、深さ 0.10m を測り、

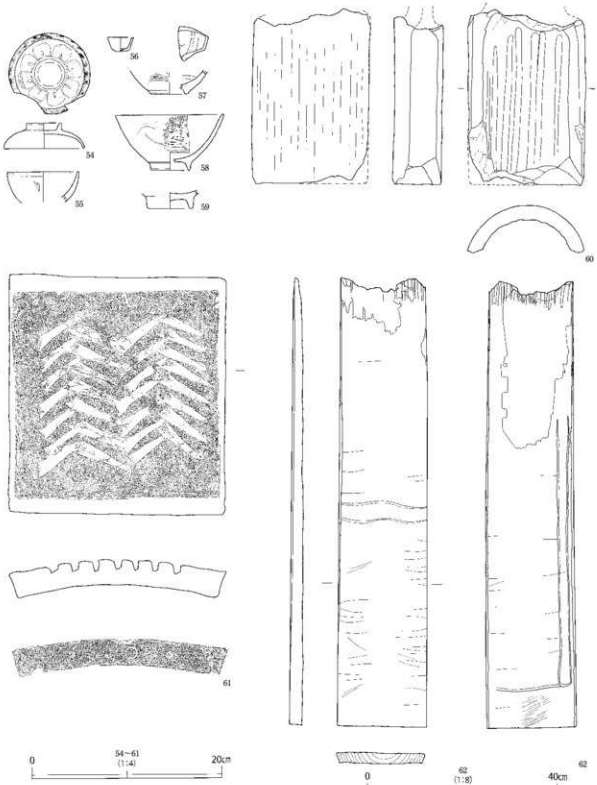


図43　3-2区　第２面　692井戸　出土遺物

東西に長い溝で、1088 溝から東側に分岐する。出土遺物には、弥生土器、土師器皿などがある。

〔1071 溝〕（図 44・47、図版 28）

3-2 区の中央やや西寄り、1O-4h・4・i4j で検出した南北に走る溝である。本溝は 1088 溝が埋没した後に再掘削されたものである。長さ 22.89m、幅 0.43 ～ 1.10m、深さ 0.19m を測る。

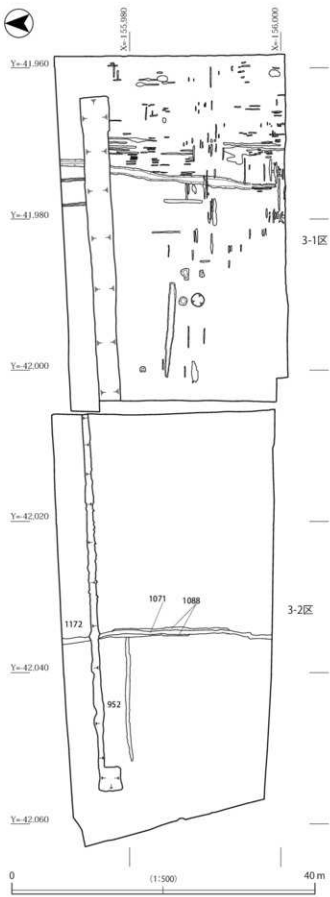


図44　3区　第3面　平面図

出土遺物には、弥生土器、土師器皿・椀、土師質移動式竈、黒色土器内黒椀・両黒椀、須恵器甕、砂岩製砥石などがある。このうち、土師器皿（69）・椀（72）、黒色土器内黒椀（70・73）・両黒椀（71・74・75）、土師質竈（76）を図示した。

〔1172 溝〕（図 44）

3-2 区の中央やや北西寄り、1O-4h で検出した南北に走る溝である。長さ 3.55m、幅 0.49 ～ 0.68m、深さ 0.19m を測る。南側の 1071 溝に続く。

出土遺物には、土師器杯・高杯、黒色土器内黒椀・両黒椀、須恵器甕などがある。

〔1088 溝〕（図 44）

3-2 区の中央やや西北寄り、1O-4h・4i・4j で検出した南北に流れる溝である。長さ 15.57m、幅 0.81 ～ 1.15m、深さ 0.18m を測る。

出土遺物には、砂岩製の砥石などがある。

土坑

〔5 土坑〕（図 45）

3-1 区中央付近、20O-9i で検出した。第 3 層基底面の遺構である。長径 0.93m、短径 0.68m、深さ 0.28m を測る。埋土は上層がにぶい黄色砂礫混じりシルト、下層が黄灰色シルト質粘土に、黄褐色細砂からなる偽礫を含む。

出土遺物には、土師器杯、黒色土器椀、瓦器椀などがある。

〔6 土坑〕（図 45）

3-1 区中央西側、20O-9i で検出した。第 3 層基底面の遺構である。長さ 1.11m、幅 0.52m、深さ 0.24m を測る不定形の土坑である。埋土はにぶい黄色細砂混じりシルトである。

〔7 土坑〕（図 45）

3-1 区中央西側、20O-10i で検出した。第 3 層基底面の遺構である。長径 1.14m、短

径 1.06m、深さ 0.44m を測る。埋土は灰黄褐色細砂混じりシルトなどである。

出土遺物には、黒色土器内黒椀（Ⅲ類Ⅵ期、Ⅲ類Ⅶ期）、須恵器甕などがある。

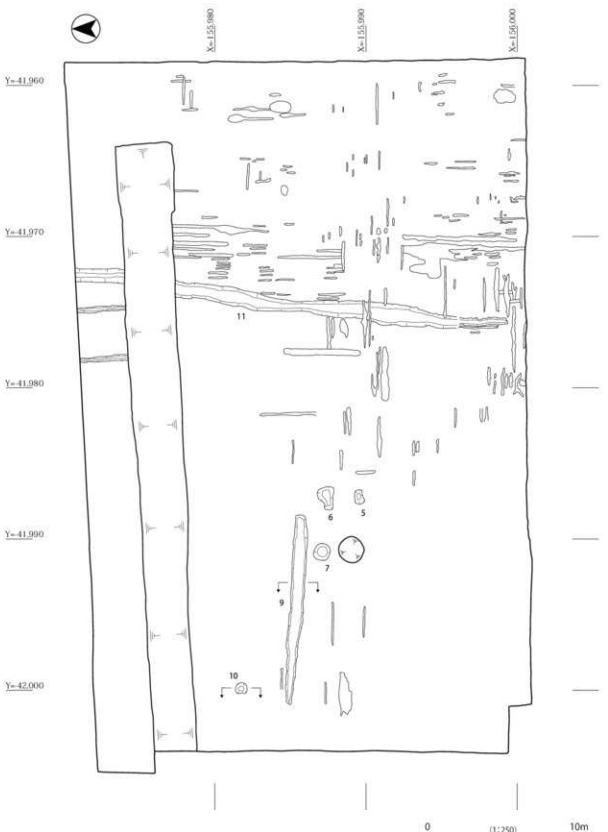


図45　3-1区　第３面　平面図

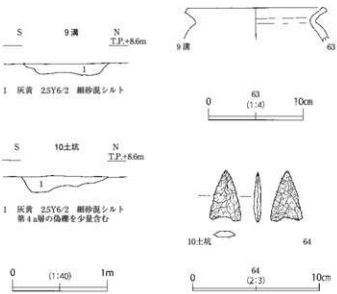


図46　3-1区　第3面　9溝・10土坑　断面図　出土遺物

〔10土坑〕（図45・46）

3-1区南西側、20O-10i、1O-1iで検出した。第3層基底面の遺構である。長径0.79m、短径0.64m、深さ0.18mを測る。掘形は南側が急な傾斜、北側は緩やかな傾斜を示し、遺構底面には凹凸が認められる。埋土はにぶい黄色細砂混じりシルトである。

出土遺物には、土師器甕、須恵器甕などがある。このうち、サヌカイト製石鏃（64）を図示した。

〔耕作溝群〕（図45・47）

3-1区東半を中心に、南北や東西方向を指向する鋤溝群を検出した。これらは第3層下面遺構に相当する。遺存状況が悪く、断続的に確認したに留まる。

出土遺物は土師器等であるが、大半が細片となっており、詳細を確認し難い。このうち、土師器甕2点（65・66）を図示した。

5．第4面（図48～50、図版7-2）

第4面の調査は3区のほぼ全域に分布する第4b層上面でおこなった。当調査区の第4面は、05-1調査を通じて、遺構・遺物の密度が最も高かった。本面では、掘立柱建物、溝、井戸、土坑などの集落関連遺構の密集する状況を検出した。

遺構面の標高は、3-1区では北東で8.81m、南東で8.96m、北西で8.91m、南西で8.96m、中心部分で8.92mを測る。南側が0.09～0.15m高く、北側に緩やかに下る地形である。また3-2区では北東で8.76m、南東で8.96m、北西で8.91m、南西で8.96m、中心部分で8.92mを測る。南側が約0.05～0.2m高く、3-1区同様北側に緩やかに下る地形である。

3-1区東側に掘立柱建物は認められず、中央やや東寄りから西側にかけて多数の柱穴が検出され、複数の建物が復元可能である。全容の分かる建物2・3は、いずれも南北棟である。この他の遺構としては、これらの建物に伴うと思われる井戸や土坑などを検出している。また、3-1区中央やや東寄りの位置には、幅約1.5mを測り106溝を検出した。

3-2区では、ほぼ同じ箇所に3～4回程度建て直された掘立柱建物を検出し、集落が営まれていたようである。それに伴うと思われる井戸も幾つか確認された。また、集落関連以外に、弥生時代後期から古墳時代前期頃などの土器が出土する遺構も検出された。

掘立柱建物

3-1区西半及び3-2区全域で掘立柱建物を17棟、塀1列を検出した。掘立柱建物のうち、建物5・7～11は、3-2区南西隅に位置する。また、3-2区中央やや東側には、重複する建物12・13及び建物16があり、3-2区東端付近には、重複する建物14・15・18及び建物17がある。そして、これらの3-2区東側の建物群の南側に塀1がある。さらに、3-1区中央には、建物2・3がある。以上の建物分布状況から、3区では4群の建物群が存在したと考えられる。

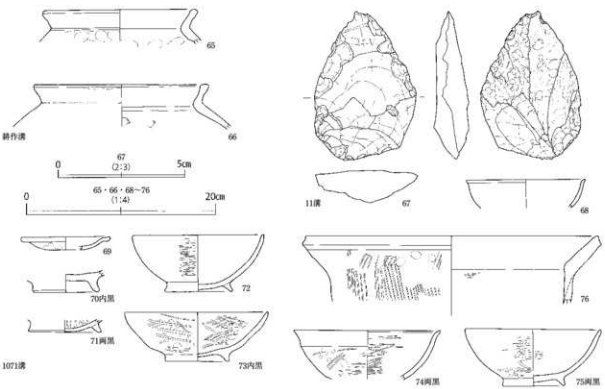


図47　3区　第3面　各遺構　出土遺物

〔掘立柱建物2〕（図49・51・52、図版6-3）

3-1区中央、200-9jで検出した。建物は2間×3間の南北棟で、軸をN-1°-Wにおく。柱の掘形は、長辺が0.60～0.70m、短辺が0.40～0.50mで、平面不整楕円形状を呈する。深さは0.30～0.40mを測る。柱間は、概ね2.20～2.40mを数え、建物の規模としては、桁行7.00m、梁間4.26mで面積は29.82㎡である。本建物は、106溝の埋没後に建てられており、西側に位置する12土坑が建物に伴う井戸または水溜めの機能を果たしていた可能性が考えられる。

各柱穴からは、弥生土器、土師器杯・甕、黒色土器片などが出土した。このうち、103柱穴出土の土師器甕（77）、114柱穴出土の土師器甕（78）、126柱穴出土の黒色土器内黒椀（79）、119柱穴出土の黒色土器両黒椀（80・81）を図示した。建物の時期は10世紀後半と考える。

〔掘立柱建物3〕（図49・51・52、図版7-1・13-1・28）

3-1区中央、200-9h・9iで検出し、掘立柱建物2の北側約6.5mに位置する。1間×3間の南北棟で、軸をN-2°-Wにおく。柱の掘形は、直径0.30m、深さ0.20～0.25mを測る。北西隅の柱掘形は後世の土坑の掘削により失われている。柱間は、概ね1.30mを測る。建物の規模は桁行7.75m、梁間4.75mで面積は36.81㎡である。

各柱穴からは、弥生土器、土師器、黒色土器両黒椀、須恵器杯身または蓋などが出土した。このうち、84柱穴出土の黒色土器両黒椀（82）、354柱穴出土の黒色土器両黒椀（83）を図示した。建物の時期は11世紀前半と考える。

〔掘立柱建物4〕（図49・53）

3-1区南西隅、1A-1aで1列に並ぶ柱穴3基を検出した。これらは建物北辺の柱列であり、建物の大半は調査区外に広がると考えられる。軸をN-87°-Wにおく。柱の掘形は、直径0.30m、深さ0.20～0.25mを測る。検出した柱列の長さは、約4.22mを測る。柱痕跡の直径は、0.10m前後である。

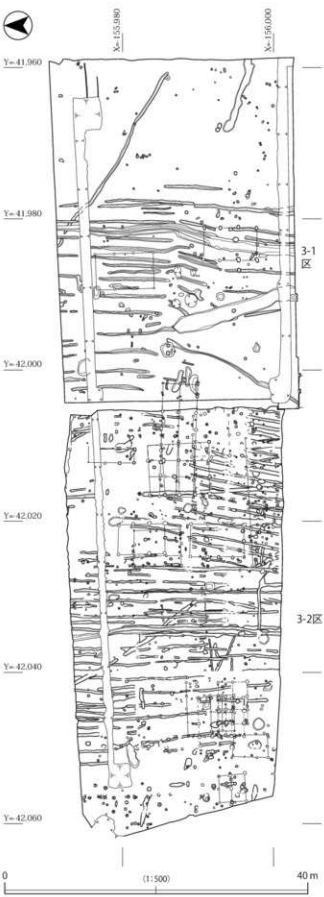


図48　3区　第4面　平面図

各柱穴からは、土師器体部破片、黒色土器内黒椀破片などの遺物が出土した。

〔掘立柱建物 5〕（図 50・54・58、図版 13-2・28）

3-2 区南西端、1O-6j で検出した。2 間×2 間の総柱建物で、軸を N -0.5° - E におく。柱の掘形は、長径 0.27 ～ 0.48 m を測る。中央列の東端とその西側に大型の柱掘形が認められる。建物の規模は、桁行 3.58m、梁間 3.55m で、面積は 12.71 ㎡を測る。

各柱穴からは、弥生土器、土師器杯または椀・甕、黒色土器内黒椀（Ⅲ類Ⅶ期）、両黒椀（Ⅳ類Ⅵ期）、須恵器杯身または蓋・甕、サヌカイト剥片などの遺物が出土している。このうち、785 柱穴出土の黒色土器両黒椀（84）・内黒椀（85）を図示した。

〔掘立柱建物 6〕（図 50・55・58）

3-2 区南西側、1O-5j・6j で検出し、掘立柱建物 5 の東側約 2.5m に位置する。東西 2 間×南北 3 間の長方形を示す南北棟の建物である。主軸は座標北を示す。柱の掘形は、長径 0.15 ～ 0.39 m を測る。柱間は、概ね 1.60m 前後である。建物の規模は、桁行 4.50m、梁間 3m を測り、面積は 13.5 ㎡である。北側柱列中央柱は検出できなかった。この建物は建物 11 と重複するが、柱穴の切り合い関係からは本建物が先行して建てられた可能性がある。

各柱穴からは、土師器杯または皿・椀・粗製椀または杯などが出土している。このうち、998 柱穴から出土した土師器椀（86）を図示した。建物の時期は 9 世紀前半と考える。

〔掘立柱建物 7〕（図 50・56、図版 9-1）

3-2 区南西側、1O-5i・5j で検出した。北側柱列 4 間分と、西側柱列 2 間分のみ確認できた。建物の軸は、ほぼ座標北を示す。柱の掘形は、長径 0.17 ～ 0.27 m を測る。建物の規模は、梁間 4.23m 前後、桁行 7.15m

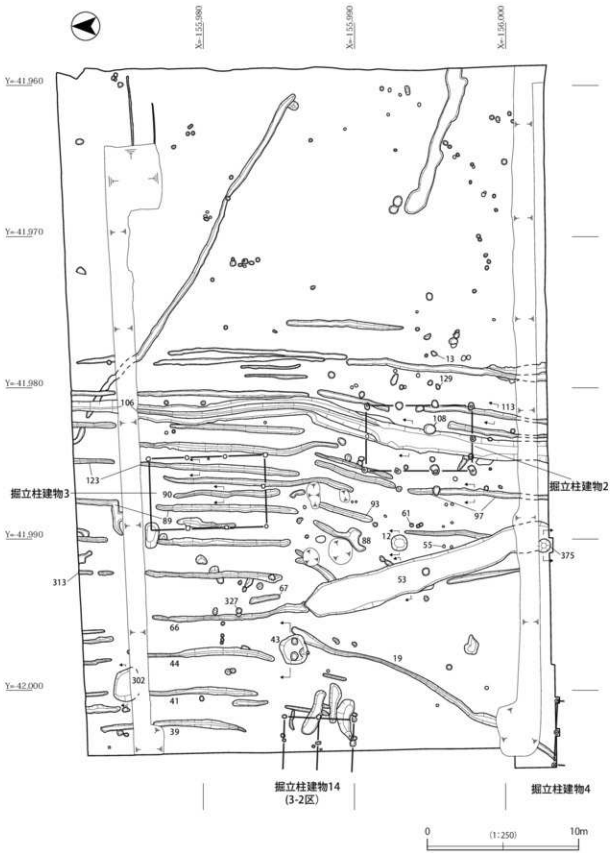


図49　3-1区　第４面　平面図

を測る。各柱穴からは土師器が出土した。細片のため図示し得なかったが、建物の時期は 11 世紀前半と考える。

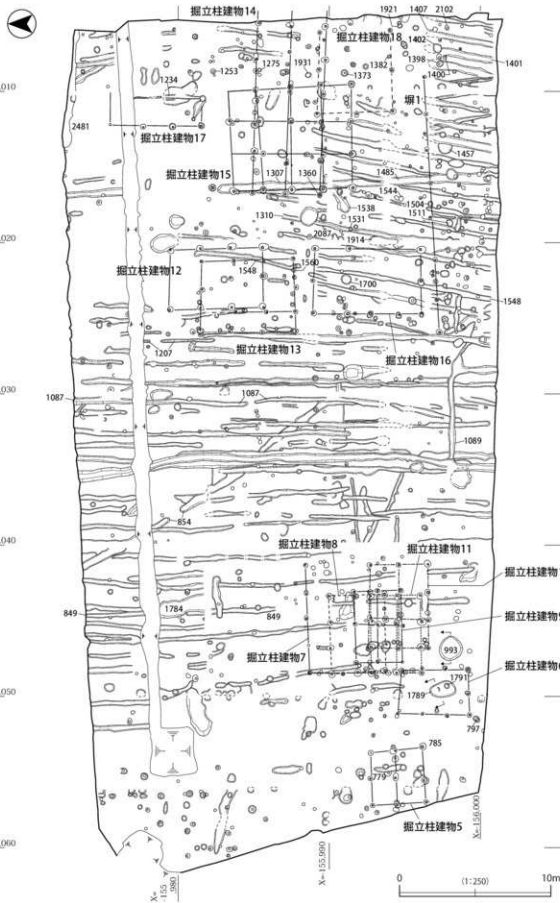


図50　3-2区　第４面　平面図

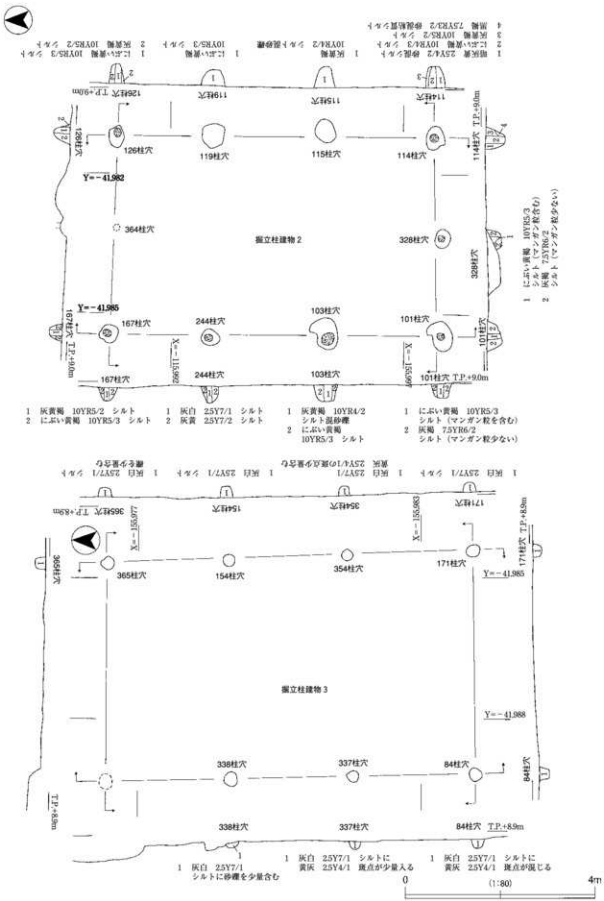


図51　3-1区　第４面　掘立柱建物２・３　平・断面図

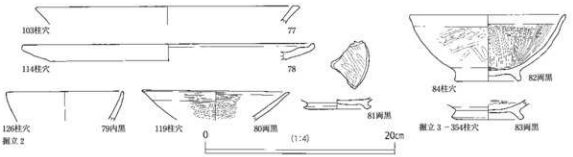


図52　3-1区　第４面　掘立柱建物２・３　出土遺物

〔掘立柱建物８〕

(図 50・57・58、図版 8-3・9-1)

3-2 区南西側、1O-5i・5j で検出した。2 間× 3 間の東西棟の建物で、軸をN - 5° - Wにおく。柱の掘形は、長径 0.32 m～ 0.48 mを測る。柱間は、概ね南北が 1.80m、東西が 1.60m を測る。建物の規模は、梁間 3.60m、桁行 5.10m を測り、面積は 18.4 ㎡である。

各柱穴からは、弥生土器、土師器杯または椀・粗製椀または杯・甕、黒色土器内黒椀、須恵器甕などが出土した。このうち、914 柱穴出土の土師器椀（87）、966 柱穴 出土の土師器椀（88・90）、955 柱穴出土の土師器椀（89）、966 柱穴出土の黒色土器内黒椀（91）を図示した。建物の時期は９世紀前半と考える。

〔掘立柱建物９〕（図 50・59、図版 8-3・9-1)

3-2 区南西側、1O-5j で検出した。2 間× 2 間の総柱建物で、軸をN - 2° - Wにおく。柱の掘形は、長径 0.14 ～ 0.38 mを測る。柱間は、南北約 1.50m、東西 2.30 ～ 2.50m を測る。建物規模は、梁間 3.10m、桁行 4.80m を測り、面積は 14.9 ㎡である。

各柱穴からは、土師器、黒色土器内黒椀などが出土した。建物の時期は９世紀後半と考える。

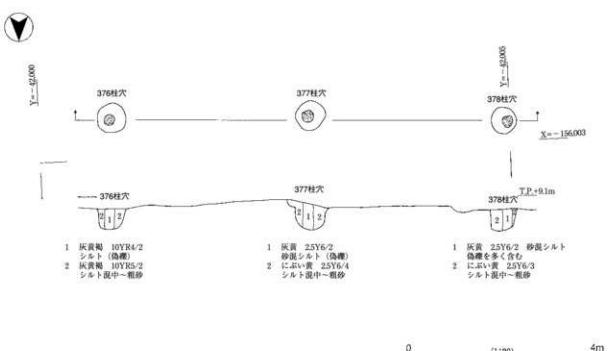


図53　3-1区　第４面　掘立柱建物４　平・断面図

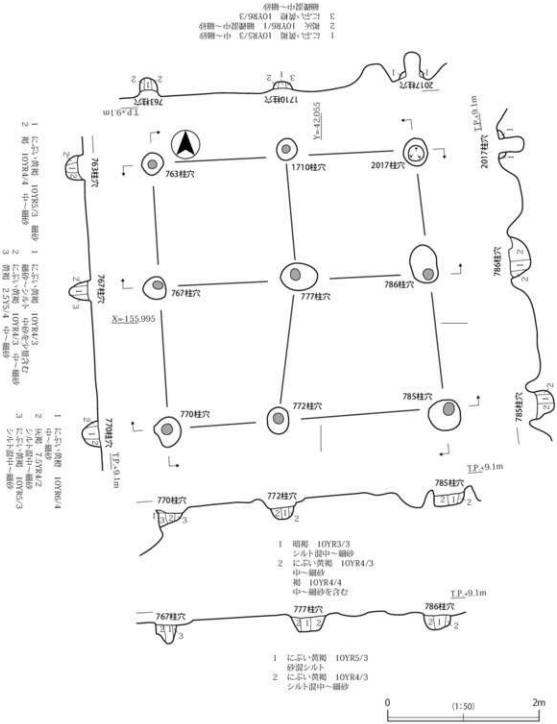


図54　3-2区　第４面　掘立柱建物５　平・断面図

〔掘立柱建物 10〕（図 50・58・60、図版 8-3）

3-2 区南西側、10-5j で検出した。2 間× 3 間の長方形を示す東西棟の建物で、軸はほぼ座標北を示す。柱の掘形は、長径 0.26 ～ 0.50 mを測る。西側２列目に 987 柱穴が位置する。柱間は、東西 1.80m、南北 2.00m である。建物規模は、梁間 3.90m、桁行 5.50m を測り、面積は 21.45 ㎡である。

各柱穴からは、土師器杯または皿・杯または椀・甕などが出土した。このうち、2031 柱穴出土の土師器甕（92）を図示した。建物の時期は 10 世紀前半と考える。

〔掘立柱建物 11〕（図 50・61・67、図版 8-3・13-3・28）

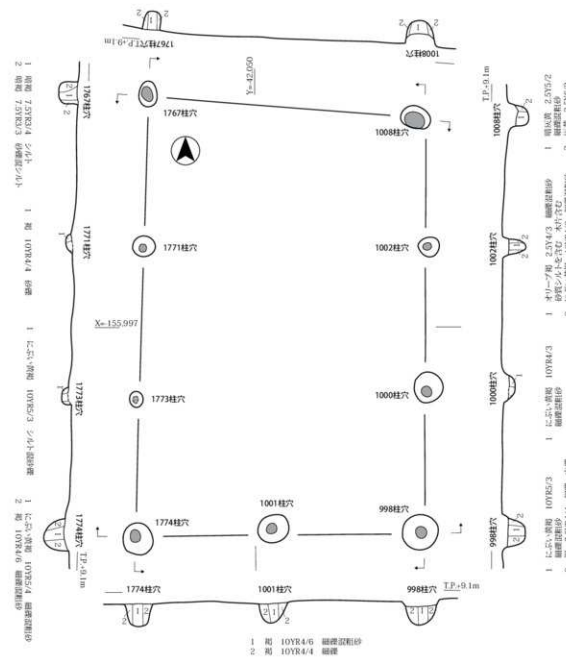


図55　3-2区　第４面　掘立柱建物６　平・断面図

3-2 区南西側、1O-5j で検出した。２間×３間の東西棟の総柱建物で、軸をＮ－１°－Ｗにおく。柱の掘形は、長径 0.35 ～ 0.61 ｍを測る。柱間は、南北 1.60m、東西 1.70m を測る。建物の規模は、梁間 3.27m、桁行 5.13m を測り、面積は 16.78 ㎡である。この建物は建物６と重複し、柱穴の切り合い関係から本建物の方が新しい。

各柱穴からは、弥生土器、土師器杯または皿・粗製椀、黒色土器内黒椀、両黒椀などが出土した。このうち、946 柱穴出土の土師器椀（93）、950 柱穴出土の土師器椀（94）、1021 柱穴出土の黒色土器

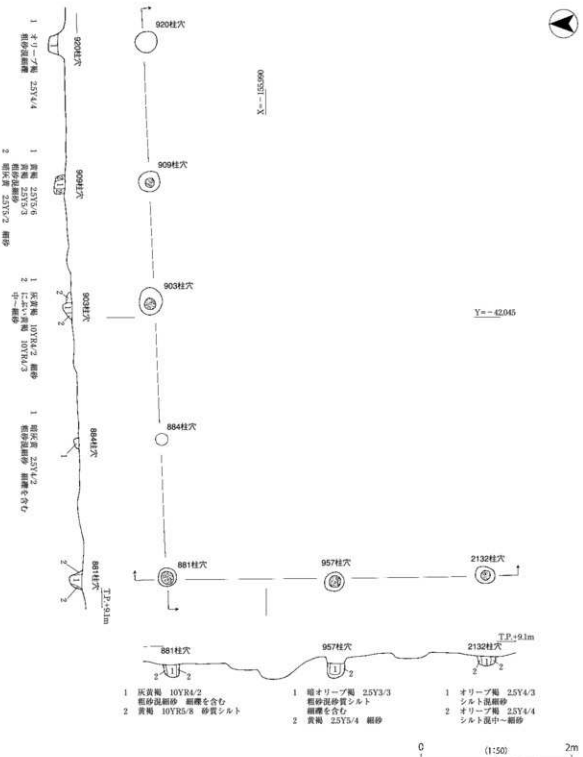


図56　3-2区　第4面　掘立柱建物7　平・断面図

内黒椀（95）と面取りをした石材（96）を図示した。建物の時期は10世紀後半と考える。

〔掘立柱建物12〕（図50・62、図版9-2・13-4）

3-2区中央の北側、1O-3h・3iで検出した。2間×3間の南北棟の建物で、軸をN－2°－Wにおく。北側柱列のうち、中央柱は検出できなかった。柱の掘形は、長径0.32～0.62mを測る。柱間は、東西・南北とも約2mである。建物の規模は、桁行6.2m、梁間3.96mを測り、面積は24.55㎡である。

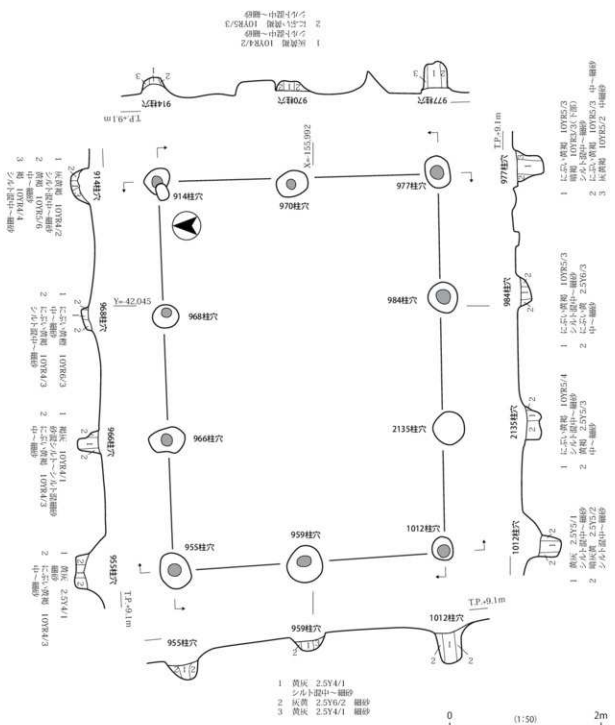


図57　3-2区　第４面　掘立柱建物８　平・断面図

各柱穴からは、外面にタタキ目が見られる弥生土器甕や、同じく外面にタタキ目が見られる小型の弥生土器（Ｖ様式）甕または壺底部、土師器甕、須恵器杯身または杯蓋体部・壺などが出土した。建物の時期は９世紀後半と考える。

〔掘立柱建物 13〕（図 50・63・67、図版 9-2）

3-2 区北東側、1O-3i で検出した。柱間は３間×３間であるが、長方形を呈する南北棟の建物で、軸をＮ - 2° - Ｗにおく。西側に 1578・2075 からなる柱列があるが、それに対応する柱穴が、北側柱列

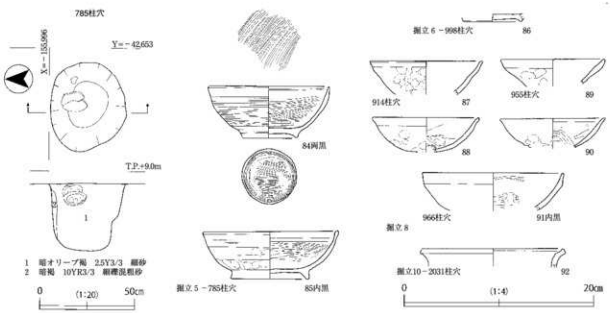


図58　3-2区　第４面　掘立柱建物５-785柱穴　平・断面図　各遺構　出土遺物

では欠落している。柱の掘形は、長径 0.20 ～ 0.36 mを測る。柱間は南北 2.20m、東西 1.30 ～ 1.80m を測る。建物の規模は、桁行 6.24m、梁間 4.82m を測り、面積は 30.08 ㎡である。

各柱穴からは、弥生土器甕、土師器（布留式）甕、土師器「て」字口縁皿・杯または椀・甕、黒色土器内黒椀などが出土した。このうち、1589 柱穴出土の土師器杯（97）を図示した。建物の時期は 10 世紀前半と考える。

〔掘立柱建物 14〕（図 50・64・69、図版 10-2・13-4・28）

3-2 区東側中央から 3-1 区西端にかけて、1O-12i で検出した。7 間× 2 間の細長い東西棟の建物で、軸をN - 3° - Eにおく。柱掘形は、長径 0.24 ～ 0.52 mを測る。柱間は概ね東西・南北とも 2.20m を測る。建物の規模は、梁間 4.60m、桁行 15m を測り、面積は 69.0 ㎡である。本建物は建物 15 と重複しており、柱穴の切り合い関係から本建物が先行して建てられたと考えられる。

なお、東西に長大な建物として復元したが、東側が総柱であり、2 間× 3 間の 2 棟の掘立柱建物が並列した可能性も想定される。この場合の建物面積は、東側建物が 27.6 ㎡、西側建物が 30.4 ㎡となる。

各柱穴からは、弥生土器、土師器杯または皿・粗製椀・甕、黒色土器内黒椀、緑釉陶器などが出土した。このうち、1319 柱穴出土の土師器椀（98）、1360 柱穴から逆位で出土した黒色土器内黒椀（99）、331 柱穴出土の土師器甕（100）を図示した。建物の時期は 10 世紀前半と考える。

〔掘立柱建物 15〕（図 50・65・69、図版 9-3・10-2）

3-2 区東側、1O-2i で検出した。3 間× 3 間の総柱建物で、北側に 1 間の庇が付く東西棟の建物である。軸をN - 3° - Wにおく。柱の掘形は、長径 0.32 ～ 0.67 mを測る。柱間は、東西 2.20m、南北 2 mを測る。建物の規模は、梁間約 6.0m、桁行 6. 80m を測り、少し歪んだ長方形を呈する。北庇は西側に寄り、長さ 4.65m を測る。建物 14 と重複しており、柱穴の切り合い関係から本建物の方が後出すると考えられる。

各柱穴からは、外面にタタキ目が見られる弥生土器甕、弥生土器長頸壺、土師器杯または皿・杯または椀、口縁部が内湾して端部が肥厚する土師器甕、須恵器杯身または蓋・甕、黒色土器内黒椀などが出土した。このうち、1354 柱穴出土の土師器甕（101）、1484 柱穴出土の土師器甕（102）、1964 柱穴

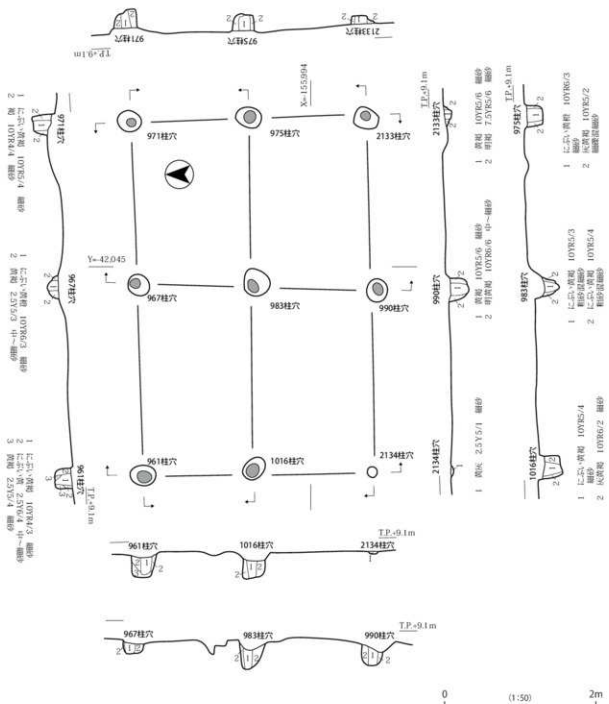


図59　3-2区　第4面　掘立柱建物9　平・断面図

出土の須恵器杯身（TK10 型式）（103）を図示した。建物の時期は 10 世紀後半と考える。

〔掘立柱建物 16〕（図 50・66・69、図版 10-1）

3-2 区中央南側、1O-3i・3j で検出した。4 間× 2 間の南北棟の建物で、軸はほぼ座標北を示す。柱の掘形は、長径 0.26 ～ 0.64 mを測る。建物の規模は、南北 7.10m、東西 4.27m を測り、少し歪んだ長方形状を呈する。

各柱穴からは、弥生土器甕、土師器皿・杯または椀・甕、黒色土器両黒椀、瓦器椀（和泉型 I-2 期か）

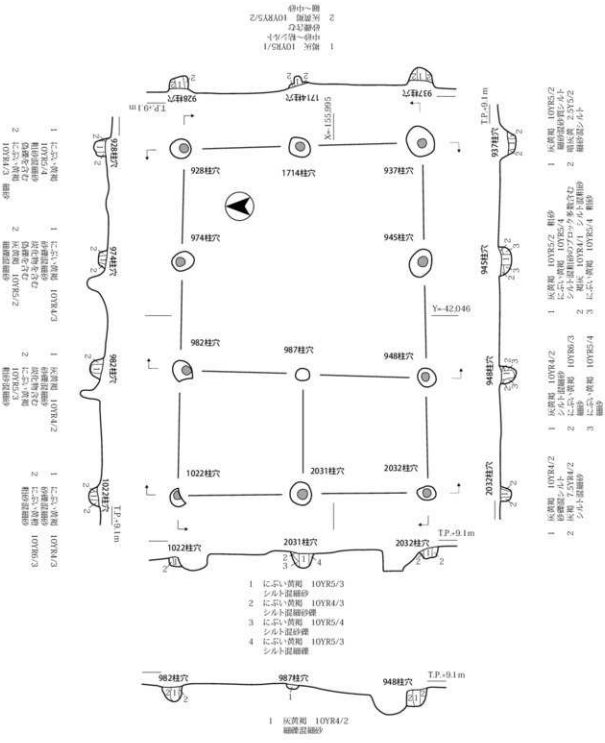


図60　3-2区　第4面　掘立柱建物10　平・断面図

が出土し、このうち2068柱穴出土の土師器杯（104）を図示した。建物の時期は10世紀前半と考える。

〔掘立柱建物17〕（図50・68）

3-2区南東側、1O-2hiで検出した。東側に対になる柱穴が存在し、その建物一部分のみを検出したと考えたことから、建物としたが、詳細は明らかでない。建物とした場合、南北方向の3間のみを検出したと考えられる。柱列の軸はほぼ座標北を示す。柱の掘形は、長径0.18 m～0.45 mを測る。柱間は、

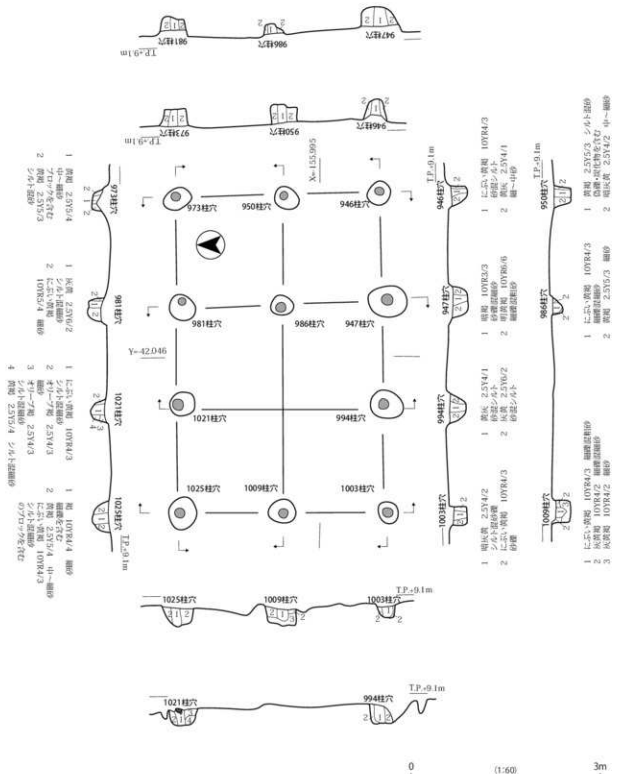


図61　3-2区　第４面　掘立柱建物11　平・断面図

1.9～2.0mを測り、南北約６mを測る。掘形の形状は、隅丸方形から楕円形を呈する。

各柱穴からは、土師器杯または皿、須恵器甕などが出土した。

〔掘立柱建物 18〕（図 50・69・70、図版 10-2・13-5）

3-2 区南東側、1O-1i・1j・2i・2j で検出した東西棟の建物である。南北２間×東西２間を確認したが、

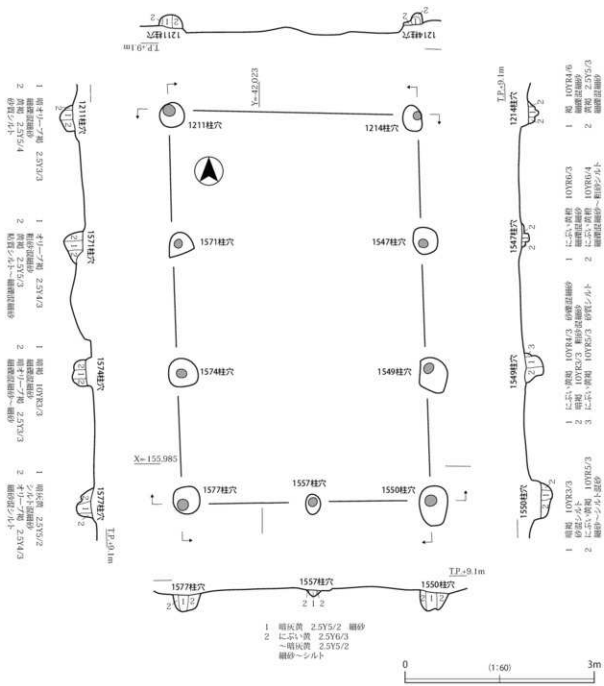


図62　3-2区　第４面　掘立柱建物12　平・断面図

東側にさらに延びる可能性もある。軸をN -1.5° - Wにおく。東側中央の柱穴は、1378 土坑と重複していたため見落とした可能性が高い。柱の掘形は、長径 0.28 ～ 0.42 mを測る。掘形の形状は、隅丸方形から楕円形である。柱間は、東西 2.70m、南北 2.50m を測る。建物の規模は、東側に延びないと仮定すると桁行 5.40 m、梁間５mである。

各柱穴からは、土師器椀・甕・羽釜、須恵器甕、黒色土器内黒椀、砂岩（砥石か）などが出土した。このうち、1227 柱穴出土の土師器杯（106）、1380 柱穴出土の土師質羽釜（107）を図示した。建物の時期は 11 世紀前半と考える。

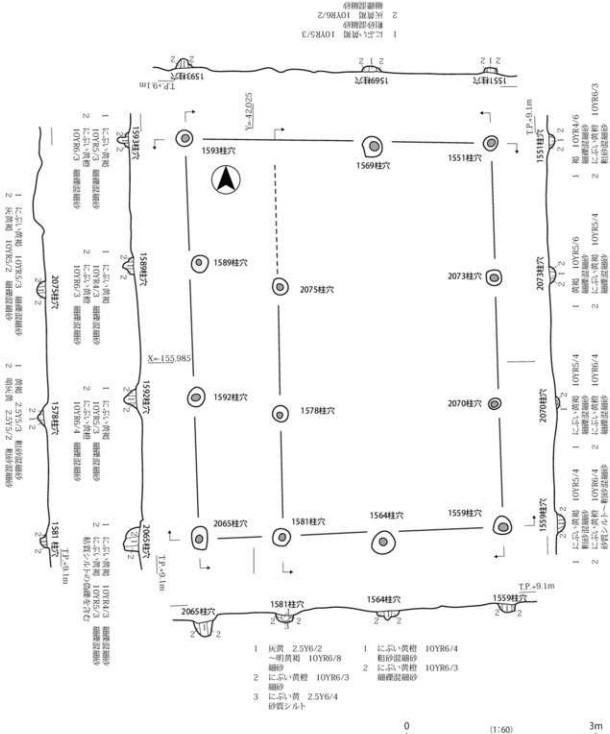


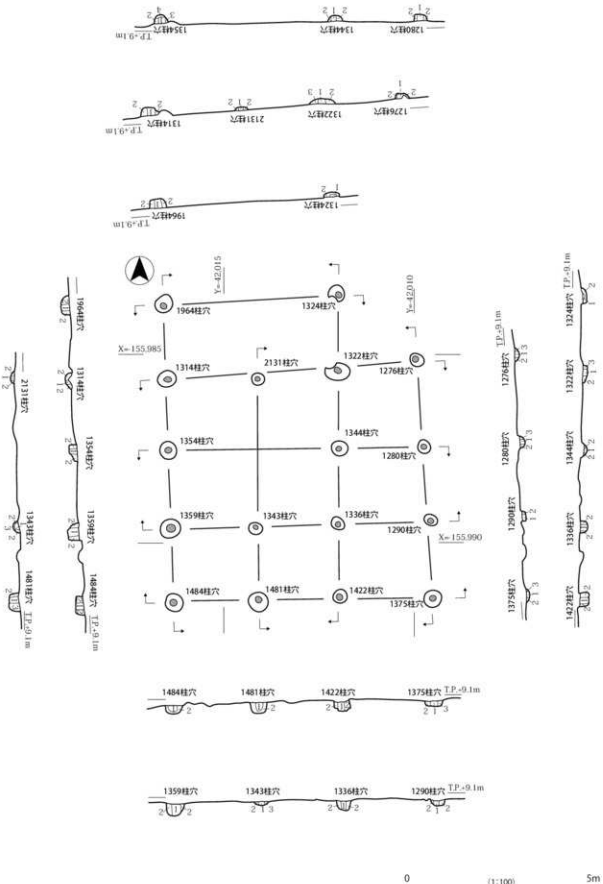
図63　3-2区　第4面　掘立柱建物13　平・断面図

〔塀1〕（図50・69・71、図版9-3）

3-2区南東側、10-1j・2j・3jで検出した。7間の東西方向を示す塀で、軸をN-86.5°-Eにおく。柱の掘形は、長径0.28～0.44 mである。柱間は、2.80～3.50mを測り、一定しない。東西の検出長は16.8mを測る。

各柱穴からは、弥生土器、土師器杯または椀、黒色土器内黒椀などが出土した。このうち、1436柱穴出土の黒色土器内黒椀（105）を図示した。

図64　3-2区　第4面　掘立柱建物14　平・断面図



0 (1:100) 5m

図65　3-2区　第４面　掘立柱建物15　平・断面図

掘立柱建物 15　埋土注記

1276 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y5/2　砂礫
2　暗灰黄　2.5Y4/2　シルト混細砂
3　暗灰黄　2.5Y5/2　砂礫
1280 柱穴
1　にぶい黄褐　10YR4/3　砂礫
2　灰黄褐　10YR6/2　シルト混細砂
3　暗灰黄　2.5Y5/2　黒褐　10YR2/3（混じる）砂礫
1290 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y4/2　シルト混細砂
2　灰黄褐　10YR4/2　砂礫
1314 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y4/2　細砂
2　暗灰黄　2.5Y4/2　小礫混中～細砂
1322 柱穴
1　にぶい黄褐　10YR4/3　シルト混砂礫
2　にぶい黄褐　10YR4/3　砂礫
1324 柱穴
1　黒褐　10YR2/3　砂礫
2　褐　10YR4/4　砂礫
1336 柱穴
1　灰黄褐　10YR4/2　シルト混中～細砂
2　にぶい黄褐　10YR4/3　砂礫
1343 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y5/2　中～細砂
2　灰黄褐　10YR5/2　中～細砂
3　黄褐　2.5Y5/3　中～細砂
1344 柱穴
1　灰黄褐　10YR4/2　シルト混中～細砂
2　にぶい黄褐　10YR4/3　砂礫
1354 柱穴
1　灰黄褐　10YR4/2（上部）褐　10YR4/4（下部）　シルト混粗砂～細砂
2　にぶい黄褐　10YR5/3（上部）褐灰　10YR4/1（下部）　中～細砂
3　にぶい黄　2.5Y6/4　中～細砂
4　にぶい黄褐　10YR5/4　細砂
1359 柱穴
1　灰黄褐　10YR4/2　シルト混中～細砂
2　褐灰　10YR5/1　細砂
1375 柱穴
1　灰黄褐　10YR4/2　砂礫
2　にぶい黄褐　10YR4/3　シルト混細砂
3　灰黄褐　10YR4/2　砂礫
1422 柱穴
1　灰黄褐　10YR4/2　礫混細砂
2　黄褐　2.5Y5/4　礫混中～細砂
1481 柱穴
1　灰黄褐　10YR4/2　シルト混中～細砂　シルトの偽礫を含む
2　にぶい黄褐　10YR5/4　粗砂　細礫を含む
3　灰黄褐　10YR4/2　シルト混中～粗砂　シルトの偽礫を含む
1484 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y4/2　細砂
2　灰黄褐　10YR4/2　シルト混細砂
1964 柱穴
1　灰黄褐　10YR4/2　シルト混細砂
2　黒褐　10YR3/2　シルト混細砂
2131 柱穴
1　にぶい黄褐　10YR4/3　シルト混砂礫
2　灰黄褐　10YR5/2　砂礫

小結

掘立柱建物６～11の建物群は、重複して建てられているものの、柱の掘形が切り合うものが少なかったため、建物相互の新旧関係を把握できなかった。また、文中ではかろうじて時期を推定したものの、出土遺物も少なく、細片が主体を成すため、遺物の面からも建物の新旧関係を把握しづらい。その中で、掘立柱建物６と掘立柱建物 11、掘立柱建物 14 と掘立柱建物 15 は、それぞれにおいて重複関係を確認することができ、建物６から建物 11 へ、建物 14 から建物 15 へと建て直された前後関係が想定できた。総体的にみて、これらの掘立柱建物群は９世紀前半から 11 世紀前半の集落を構成するものと考えられる。

溝

〔耕作溝群〕（図版 6-3）

3-1 区では、西半を中心に耕作溝が広がる。溝の分布は西側が粗く、東側が比較的密である。溝の方向や位置関係などから、一様に開削されたのではなく、複数時期に及ぶものを同時に検出したものと考えられる。溝は幅 0.30 ～ 0.60m、検出長 5 ～ 10m、深さ 0.10 ～ 0.20m を測る。中には溝底面に掘削時の工具痕跡と思われる三角形状の窪みが 2 列並んで検出されるものがあった。

3-2 区では、西端部を除きほぼ全域に耕作溝が広がる。溝の方向や位置関係などから、3-1 区同様、複数時期のものを同時に検出したものと考えられる。

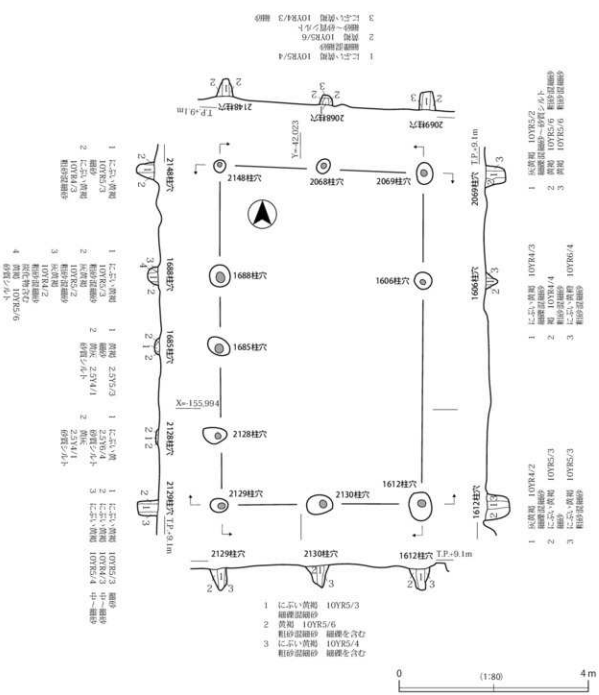


図66　3-2区　第４面　掘立柱建物16　平・断面図

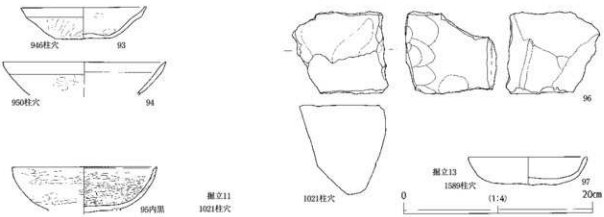


図67　3-2区　第4面　掘立柱建物11・13　出土遺物

〔19溝〕（図49・73）

3-1区中央、20O-10i・10j、1O-1jで検出した。長さ15.20m、幅0.22～0.66m、深さ0.10～0.15mを測る細長い溝である。南西から北東方向に流れる。埋土は灰色砂質シルトである。北端は、43土坑付近で消失する。甑底部蒸し穴部分（108）が出土している。

〔39溝〕（図49・73）

3-1区北端、1O-1h・1iで検出した。長さ6.20m、幅0.34～0.58m、深さ0.15mを測る。断面は、浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粘質シルトである。埋土中に第5層の粘土ブロックが入り、砂礫も含んでいる。

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器杯身・杯蓋、サヌカイト剥片等がある。このうち、須恵器杯蓋（MT85型式）（113）・杯身（114）を図示した。

〔41溝〕（図49・73）

3-1区西側、1O-1h・1i、20O-10h・10iで検出した耕作溝で、緩やかにS字状に屈曲する。本溝は土坑302を切る。長さ7.12m、幅0.28～0.52m、深さ0.18mを測る。断面は、浅い皿状を呈する。溝底には、三角形状の凹凸が認められ、鋤などによる掘削痕を残したまま埋没したものと考えられる。埋土は、暗褐色粘質シルトで砂礫を少し含む。

出土遺物には、弥生土器甕、土師器甕、須恵器杯身または蓋・甕などがある。このうち、須恵器杯身

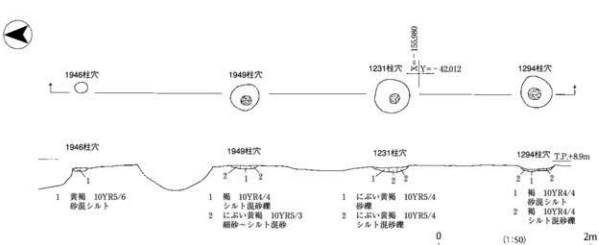


図68　3-2区　第4面　掘立柱建物17　平・断面図

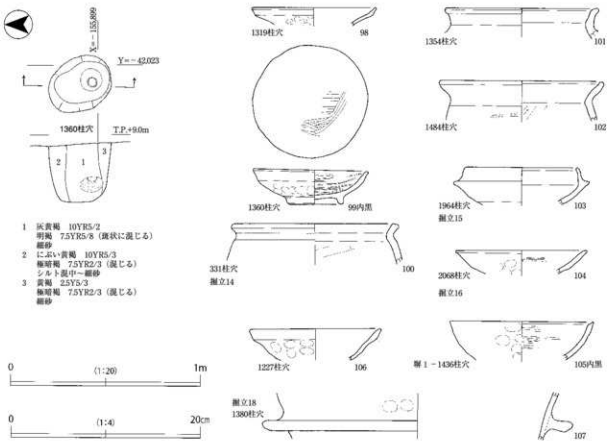


図69　3-2区　第4面　掘立柱建物14-1360柱穴　平・断面図　各遺構　出土遺物

（109）を図示した。

〔44 溝〕（図 49・73）

3-1 区西側中央、20O-10h・10i で検出した耕作溝で、緩やかに S 字状に屈曲する。長さ 8.40m、幅 0.24 ～ 0.52 m、深さ 0.28 m前後を測る。断面は、浅い皿状を呈する。埋土は、暗褐色砂混じり砂質シルトなどである。

出土遺物には、弥生土器、土師器高杯・甕、須恵器杯身または蓋・甕などがある。このうち、弥生土器壺（111）を図示した。

〔53 溝〕（図 49・72・73、図版 16-1）

3-1 区南西側、20O-9j・10i・10j、20A-9a・10a で検出した。長さ 16.80m、幅 1.80 ～ 2.25m、深さ0.05 ～ 0.15mを測る。幅広の非常に浅い溝で、他の耕作溝と異なる。埋土は、にぶい黄褐色シルト混砂礫などである。後述する 66 溝など、他の耕作溝と重複するが、その新旧関係は確認できなかった。

出土遺物には、土師器皿・椀・甕、須恵器杯身または杯蓋・甕・鼈、黒色土器内黒椀・両黒椀等がある。このうち、須恵器鼈（115）、土師器杯（116）・椀（117）、黒色土器両黒椀（118）を図示した。

〔66 溝〕（図 49・73）

3-1 区西側、20O-10h・10i で検出した耕作溝で、緩やかに S 字状に屈曲する。長さ 10.40m、幅 0.27 ～ 0.53 m、深さ 0.15 ～ 0.30 mを測る。断面は逆台形状であり、埋土は粗砂混じりの暗褐色粘質シルトなどである。

出土遺物には、弥生土器甕または壺、土師器、須恵器杯身または蓋（TK209 ～ 217 型式）・甕など

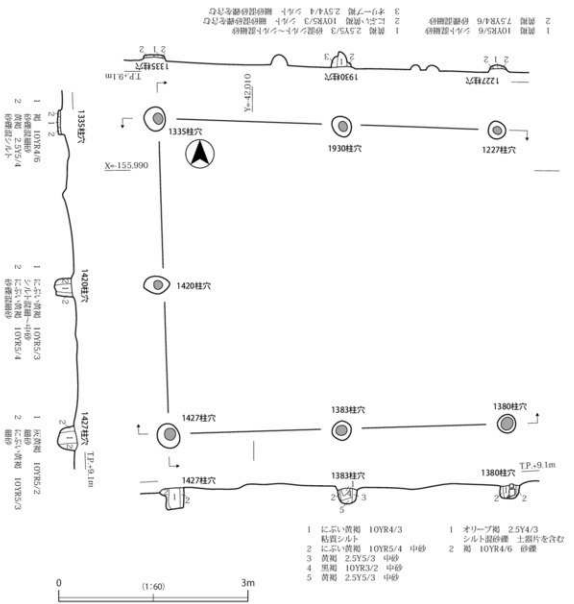


図70　3-2区　第４面　掘立柱建物18　平・断面図

がある。このうち、須恵器杯身（110）を図示した。

〔67溝〕（図49・73）

3-1区西側、20O-10i で検出した耕作溝である。長さ約２m 前後、幅 0.35 mを測る。溝の法面や底部は凹凸が激しい。出土遺物のうち、土師器甕（112）を図示した。

〔88溝〕（図49・73）

3-1区南側中央、20O-9i・9j・10i・10j で検出し、耕作溝と思われる。長さ 3.90m、幅 0.40 ～ 0.95 m、深さ 0.15 ～ 0.20 mを測る。断面は、逆台形状を呈する。溝底には、三角形状の凹凸が残存しており、鋤などによる掘削痕を残したまま埋没したと考えられる。埋土は、上層が灰褐色砂質シルト、下層が暗褐色粘質シルトである。出土遺物のうち、弥生土器（Ｖ様式）甕（119）を図示した。

〔89溝〕（図49・73）

3-1区中央北側、20O-9h・9i で検出した耕作溝である。長さ 14.50m、幅 0.40m、深さ 0.15 ～ 0.20 mを測る。断面は、浅い皿状を呈する。埋土は、上層が灰褐色砂混じり粘質シルト、中層以下が暗褐色

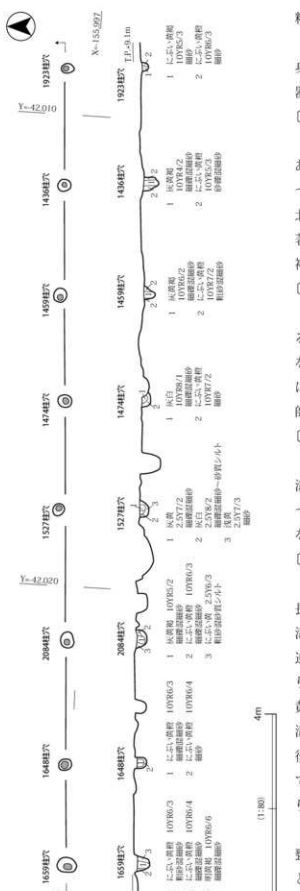


図71　3-2区　第4面　塀1　平・断面図

粘質シルトである。

出土遺物には、土師器杯または皿・高杯、須恵器杯身または蓋、サヌカイト片等がある。このうち、土師器高杯（120）を図示した。

〔90 溝〕（図 49・72）

3-1 区中央北側、20O-9h・9i で検出した耕作溝である。長さ約 7.0m、幅 0.30 ～ 0.50 m、深さ 0.07 ～ 0.18 mを測り、北側に向かって深くなる。断面は、北側の深い部分で逆台形を呈する。底面は、凹凸が顕著であるが、他の溝と比較して浅い。溝の埋土は、黄褐色シルトである。

〔93 溝〕（図 49・73）

3-1 区中央南側、20O-9i・9j で検出した耕作溝である。長さ 3.65m、幅 0.36 ～ 0.45 m、深さ約 0.30 m を測る。底面は、他の溝と同様に凹凸している。埋土は暗褐色粘質シルトなどである。出土遺物のうち、土師器高杯（121）を図示した。

〔97 溝〕（図 49・72）

3-1 区中央南側、20O-9j・20A-9a で検出した耕作溝である。長さ 9.40m、幅 0.31 ～ 0.46m、深さ 0.10 ～ 0.15 mを測り、少し蛇行する。断面は、浅い皿状を呈する。埋土は黄褐色シルトである。

〔106 溝〕（図 49・72・73、図版 16-2）

3-1 区中央、20O-9h・9i・9j、20A-9a で検出した。長さ 29.20m、幅 0.46 ～ 1.75m、深さ 0.30 mを測る。溝中央部より北側では２段掘りとなっており、断面が逆凸の字状を呈する。一方、中央部以南では２段掘りではなく、断面は浅い皿状を呈する。埋土は、暗灰黄色シルトで、砂礫を少し含む。本溝は、周辺の耕作溝や建物２と重複する。切り合い関係から、耕作溝の後に本溝が掘削され、本溝埋没後に掘立柱建物２が建てられたと考えられる。ほかの耕作溝と性格が異なり、農業用の灌漑水路と思われる。

出土遺物には、弥生土器、土師器杯または皿・椀・甕、須恵器杯身または杯蓋、サヌカイト片、礫石器などがある。このうち、磨石または敲き石（122）、土師器椀（124・125）・甕（126）を図示した。

〔113 溝〕（図 49・72・73）

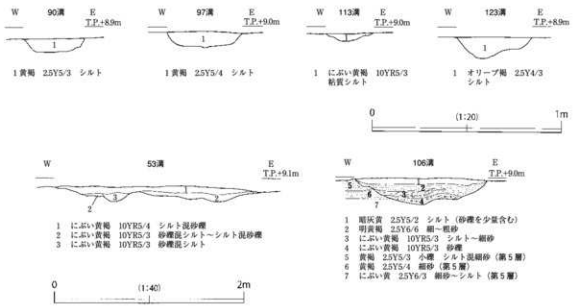


図72　3区　第4面　各遺構　断面図

3-1 区南側中央、20O-9j・20A-9a で検出した耕作溝である。長さ 8.25m、幅 0.31 ～ 0.44 m、深さ 0.15 mを測る。断面は、浅い皿状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトである。本溝は、建物2の 114・115 柱穴に切られており、耕作溝が建物に先行することは明らかである。また、建物2の 126 柱穴に切られる溝も、一連の溝であろう。

出土遺物には、弥生土器（V様式）甕、石鏃などがあり、サヌカイト製石鏃（123）を図示した。

〔123 溝〕（図 49・72）

3-1 区北側中央、20O-9h・9i で検出した耕作溝である。長さ 14.80m、幅 0.28 ～ 0.46 mを測り、深さ 0.10 ～ 0.20 mを測る。断面は、逆台形状を呈する。埋土は、オリーブ褐色シルトである。

〔313 溝〕（図 49・73）

3-1 区北側端、20O-10h で検出した耕作溝である。攪乱を挟んだ南側の溝と一連のものと考えられ、長さ約 11m、幅 0.24m、深さ 0.07 mを測る浅い溝である。断面は、浅い皿状を呈する。埋土は、灰褐色粘質シルトである。出土遺物のうち、弥生土器（Ⅰ様式）甕または鉢（127）を図示した。

〔779 溝〕（図 50・74）

3-2 区南西隅、1O-6j で検出した。南北方向の短い溝で、耕作溝と思われる。長さ 3.70 m、幅 0.20 mを測る。建物5と重複し、柱穴との切り合いはないが、他の耕作溝と建物との関係からは、建物に先行する可能性が考えられる。

出土遺物には、土師器杯・皿などがある。このうち、土師器椀（128）を図示した。

〔849 溝〕（図 50・74）

3-2 区北西側、1O-5h・5i で検出した。長さ 12.50 m、幅 0.18 ～ 0.34 m、深さ 0.03 mを測る。南北方向の、浅い耕作溝である。1784 溝と重複しており、本溝が先行する。

出土遺物には、弥生土器甕、土師器皿・椀などがある。このうち、土師器杯（129）を図示した。

〔1087 溝〕（図 50・74）

3-2 区中央付近、1O-4h・4i・4j で検出した、南北方向を示す細長い耕作溝である。長さ 25.79 m、幅 0.20 ～ 0.36 m、深さ 0.07 mを測る。北側では座標北方向を示すが、南半部は少し西側に振る。

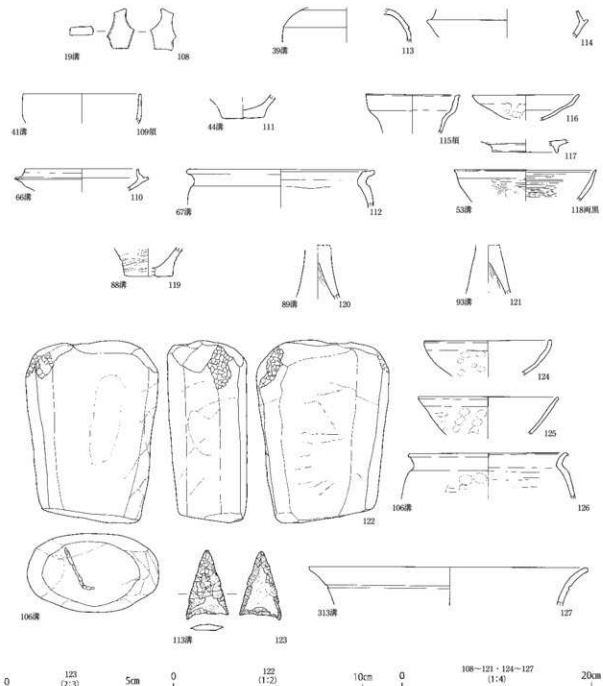


図73　3区　第4面　各遺構　出土遺物（1）

出土遺物には、弥生土器甕、土師器高杯、須恵器片などがある。このうち、土師器高杯（130）、須恵器杯（133）を図示した。

〔1089 溝〕（図 50・74）

3-2 区中央南側、10-3j・4j で検出した東西溝である。東側で南東方向と南方向に分岐する。東西溝部分は、長さ 4.41 m、幅 0.12 m～0.26 m、深さ 0.10 mを測る。本溝は、周辺にある南北方向の耕作溝の後に掘られている。出土遺物のうち、黒色土器両黒椀（131）を図示した。

〔1234 溝〕（図 50・74）

3-2 区北東側、10-2h・2i で検出した、南北方向の細い耕作溝である。長さ 4.41 m、幅 0.12 m～

0.26 m、深さ 0.10 mを測る。

出土遺物には、弥生土器甕、土師器「て」字状口縁皿・小型鉢、黒色土器内黒椀・両黒椀、須恵器杯蓋（MT15 型式）などがある。このうち、土師器鉢（132）を掲載した。

〔1307 溝〕（図 50・75）

3-2 区東側中央、1O-2ij で検出した。南側の 1485 溝に連続する。ほぼ直線状に南北方向に延びる。長さ 7.24 m、幅 0.42 ～ 0.63 m、深さ 0.14 mを測る。周辺の耕作溝と比較して少し幅が広く、他の耕作溝と異なる性格が考えられる。

出土遺物には、弥生土器長頸壺、土師器甕・高杯、須恵器杯身または蓋などがある。このうち、土師器鉢（138）、弥生土器小型鉢（139）、弥生土器高杯または脚付鉢の脚部（140）、弥生土器壺（141）を図示した。弥生時代から奈良・平安時代頃のものが混じるが、これは本溝が第 5 面の 1306 土坑を切っていることに起因し、同遺構を攪乱したために、下層の遺物を巻き上げたものである。本溝の時期としては、平安時代頃と思われる。

〔1310 溝〕（図 50・74）

3-2 区東寄りの中央付近、1O-2i・2j・3i・3j で検出した。南西から北東に延びる耕作溝である。長さ 13.95 m、幅 0.28 m～ 0.38 m、深さ 0.06 mを測る。

出土遺物のうち、土師器（布留式）高杯杯部（134）を図示した。

〔1401 溝〕（図 50・74）

3-2 区南東隅、1O-1j、1A-1a で検出した。南西から北東方向に延びる耕作溝である。長さ 3.54 m、幅 0.48 m、深さ 0.10 mを測る。

出土遺物には、弥生土器、土師器高杯・甕などがある。このうち、土師器甕（135）を図示した。

〔1485 溝〕（図 50・74）

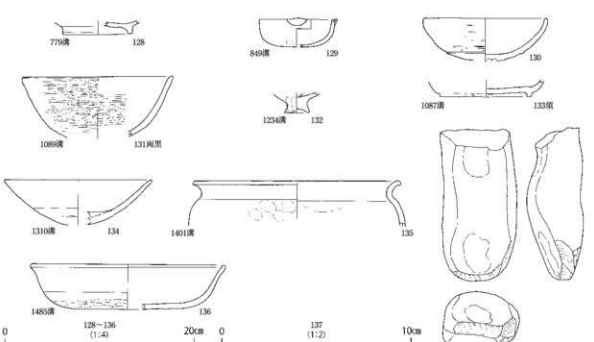


図74　3区　第4面　各遺構　出土遺物（2）

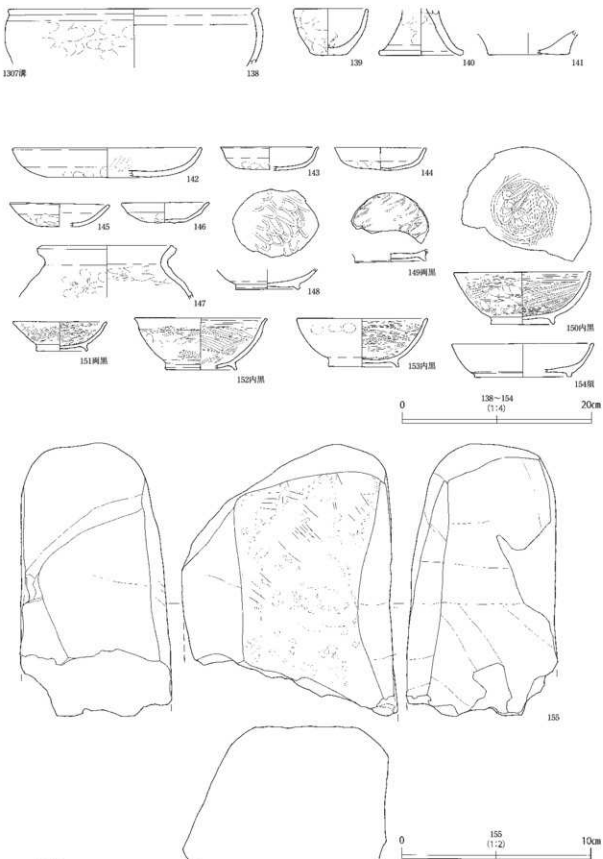


図75　3区　第4面　1307・2481溝　出土遺物

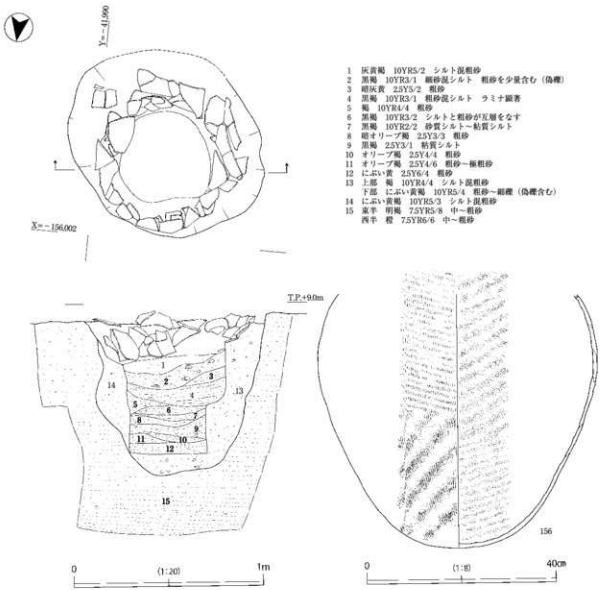


図76 3-1区 第4面 375井戸 平・断面図 出土遺物

3-2区南東、1O-2i・2j で検出した。南北方向にほぼ直線的に延びる。北側に位置する 1307 溝と連続する。長さ 9.58 m、幅 0.53 ～ 0.76 m、深さ 0.13 mを測る。

出土遺物のうち、土師器杯（136）を図示した。

〔1548 溝〕（図 50・74）

3-2区中央やや東南寄り、1O-3i・3j、1A-3a で検出した耕作溝である。南西から北東に延びる。長さ 18.62 m、幅 0.21 ～ 0.32 m、深さ約 0.08 mを測る。

出土遺物には、弥生土器、土師器「て」字状口縁皿、須恵器杯身または蓋、礫石器などがある。このうち、磨石または敲き石（137）を図示した。

〔2481 溝〕（図 50・74、図版 27）

3-2区北東隅、1O-1h・2h で検出した。東西方向に長く延びる。北辺は側溝によって失するが、南辺では北に向かう落ちが確認できたため、東西方向の溝と判断した。長さ 7.79 m、最大幅 0.64 m、深さ 0.24 mを測る。

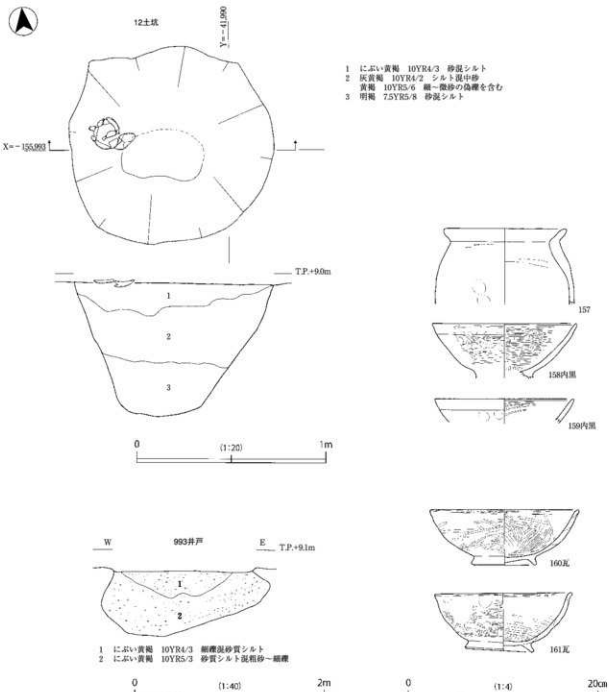


図77　3区　第4面　12土坑・993井戸　平・断面図　出土遺物

出土遺物には、弥生土器壺・甕、土師器皿・杯・高杯・甕、黒色土器内黒椀・両黒椀、須恵器甕などがある。このうち、土師器皿（142～146）・甕（147）・椀（148）、黒色土器両黒椀（149・151）・内黒椀（150・152・153）、須恵器杯身（154）、砥石（155）を図示した。

井戸

3-1区で1基、3-2区で1基を検出した。

〔375井戸〕（図49・76、図版15-1）

3-1区南西部、1O-1j・20A-9a・10aで検出した。長径1.02m、短径0.95m、深さ0.73mを測る。井戸上端部の周囲には、細かく割った須恵器大甕の破片を敷いて崩壊を防いでいる。断面は、上部が大

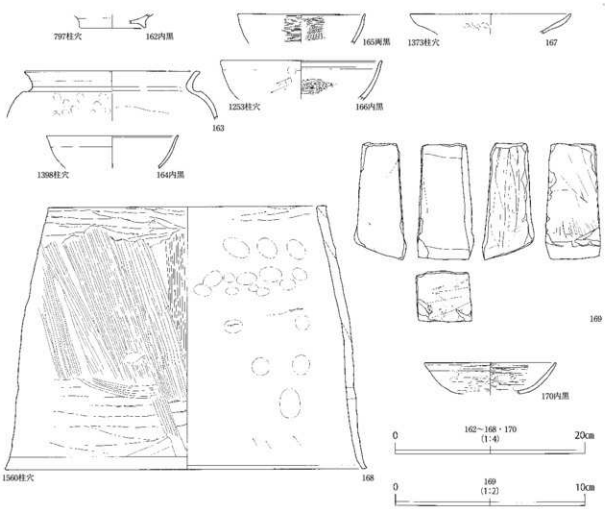


図78　3区　第4面　各遺構　出土遺物（3）

きく開き、中部以下径が小さくなり、2段に掘削される。埋土は、黒褐色細砂混じりシルトなどである。

出土遺物には、土師器杯・皿、黒色土器内黒椀などがある。このうち、井戸周囲に敷いた須恵器大甕（156）を図示した。

〔993 井戸〕（図 50・77、図版 27）

3-2 区南西隅、1O-5j で検出した。径 1.60m、深さ 0.54m を測り、平面は歪んだ円形を呈する。断面は、袋状を呈する。埋土は、にぶい黄褐色細礫混じり細砂シルトなどである。井戸とするが、水溜状の遺構である可能性が高い。

出土遺物には、弥生土器、土師器杯または皿・甕、黒色土器内黒椀・両黒椀、瓦器椀、須恵器甕などがある。このうち、瓦器椀（160・161）を図示した。これらの遺物は 12 世紀前半の時期を示し、これが 3 区における集落の最終末の時期を示すものと考えられる。

柱穴

掘立柱建物を構成しない柱穴を取り上げる。

〔797 柱穴〕（図 50・78）

3-2 区南西側、1A-6a で検出した。長径 0.48m、短径 0.36m、深さ 0.06 m を測り、平面は長楕円形を呈する。非常に浅く、遺存状況は良くない。

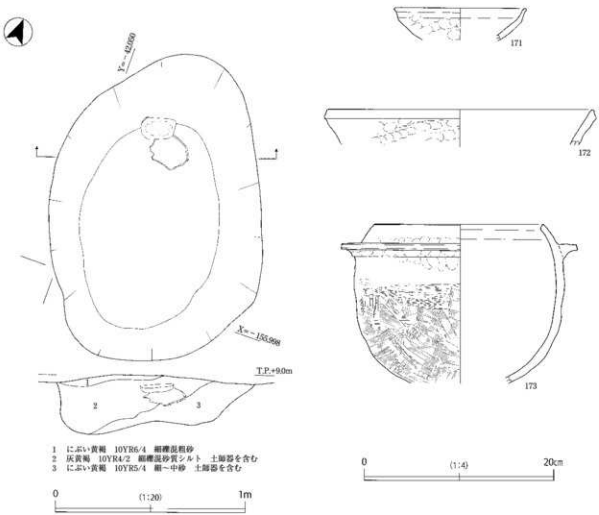


図79 3-2区 第4面 1789土坑 平・断面図 出土遺物

出土遺物のうち、黒色土器内黒椀（162）を図示した。

〔1253 柱穴〕（図 50・78）

3-2 区北東側、1O-1i で検出した。長径 0.35m、短径 0.34m、深さ 0.04 mを測り、平面は楕円形を呈する。非常に浅く、遺存状況は悪い。

出土遺物には、土師器杯・皿・甕・羽釜、黒色土器椀などがある。このうち、黒色土器両黒椀（165）・内黒椀（166）を図示した。

〔1373 柱穴〕（図 50・78）

3-2 区南東側、1O-1j で検出した。長径 0.45m、短径 0.44m、深さ 0.07 mを測り、平面は楕円形を呈する。非常に浅く、遺存状況は悪い。

出土遺物には、土師器杯または椀、黒色土器両黒椀などがある。このうち、土師器椀（167）を図示した。

〔1398 柱穴〕（図 50・78）

3-2 区南東側、1O-1j で検出した。長径 0.45m、短径 0.40m、深さ 0.07 mを測り、平面は卵形を呈する。非常に浅く、遺存状況は悪い。

出土遺物には、弥生土器、土師器杯または皿・椀・甕、黒色土器内黒椀、瓦器片などがある。このうち、土師器甕（163）、黒色土器内黒椀（164）を図示した。

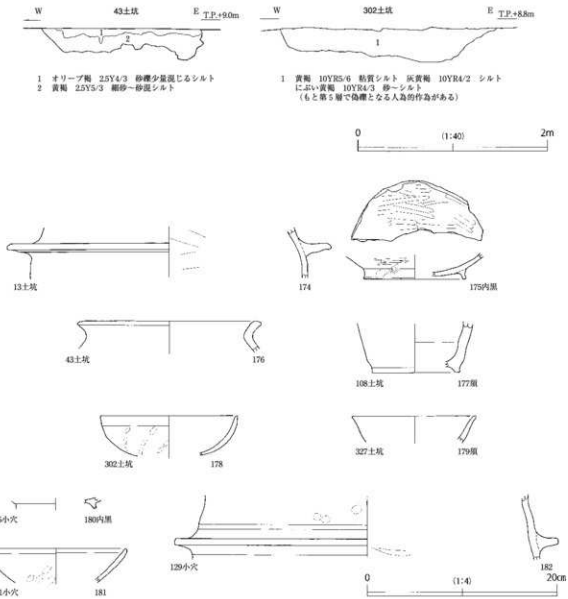


図80　3-1区　第4面　各遺構　平・断面図　出土遺物

〔1400 柱穴〕（図 50・78）

3-2 区南東側、1O-1j で検出した。長径 0.27m、短径 0.25m、深さ 0.04 mを測り、平面は楕円形を呈する。非常に浅く、遺存状況は悪い。

出土遺物には、土師器椀、黒色土器両黒椀、石製品などがある。このうち、砥石（169）を図示した。

〔1560 柱穴〕（図 50・78）

3-2 区中央やや東側、1O-3i で検出した。長径 0.33m、短径 0.29m、深さ 0.06 mを測り、平面は楕円形を呈する。非常に浅く、遺存状況は悪い。

出土遺物には、土師器杯・甕、黒色土器内黒椀などがある。このうち、土師質竈（168）を図示した。

〔2102 柱穴〕（図 50・78）

3-2 区南東側、1O-1j で検出した。長径 0.34m、短径 0.29m、深さ 0.03 mを測り、平面は楕円形を呈する。非常に浅く、遺存状況は悪い。

出土遺物には、土師器、黒色土器内黒椀がある。このうち、黒色土器内黒椀（170）を図示した。

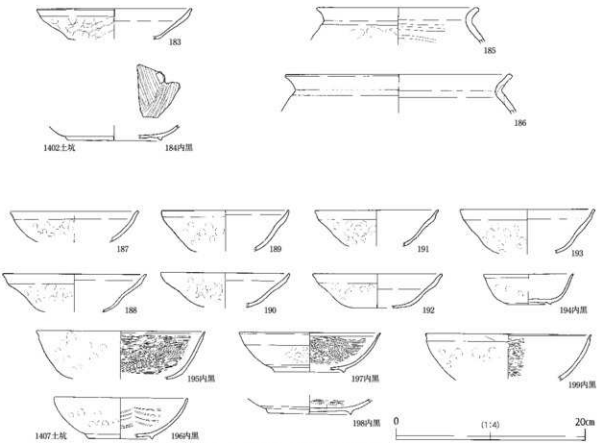


図81　3-2区　第４面　1402・1407土坑　出土遺物

土坑

平面形は多様であり、円・楕円・方・不定形なものが見られ、規模も様々であった。褐色系砂混シルトで埋まるものが多い。

〔12 土坑〕（図 49・77）

3-1 区中央やや南西側、20O-9j・10j で検出した。径 1.07m、深さ 0.70m を測る。断面は、逆台形を呈する。埋土は３層に分かれ、上層がにぶい黄褐色砂混シルト、中層が灰黄褐色シルト混中砂、下層が明褐色砂混シルトである。

出土遺物には、土師器甕、黒色土器内黒椀、須恵器杯身または蓋などがある。このうち、土師器甕（157）、黒色土器内黒椀（158・159）を図示した。

〔13 土坑〕（図 49・80）

3-1 区中央やや南東側、20O-8j で検出した。長径 0.42m、短径 0.28m、深さ 0.11m を測り、平面は長楕円形を、断面は逆台形を呈し、小型で浅い土坑である。

出土遺物には、土師質羽釜、黒色土器内黒椀、須恵器甕等がある。このうち、土師質羽釜（174）、黒色土器内黒椀（175）を図示した。

〔43 土坑〕（図 49・80）

3-1 区西側中央、20O-10i で検出した。長径 1.93m、短径 1.68m、深さ 0.30m を測る大型で浅い土坑である。埋土は２層に分かれ、上層がオリーブ褐色砂礫混シルト、下層が黄褐色細砂混シルトである。底面は、四周が窪み、中央部が盛り上がるなど、凹凸がやや激しい。

出土遺物には、土師器杯、須恵器甕、サヌカイト片などがある。このうち、土師器甕（176）を図示した。

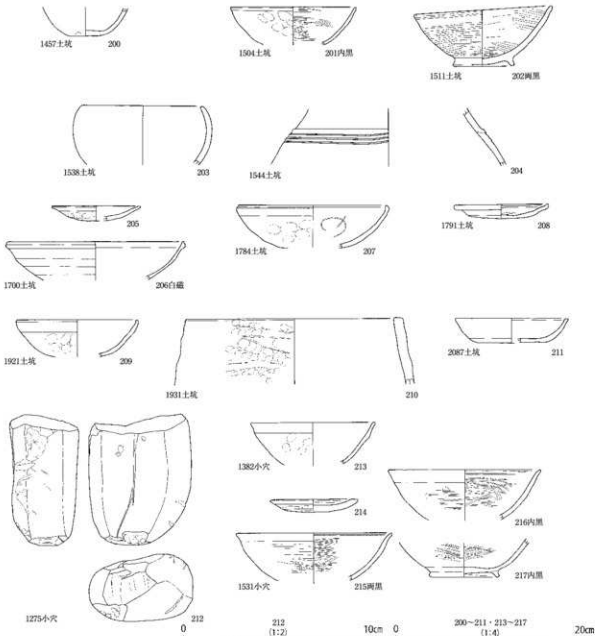


図82　3-2区　第４面　各遺構　出土遺物（４）

〔108 土坑〕（図 49・80）

3-1 区中央やや南側、200-9j で検出した。106 溝が埋没した後に掘られた土坑である。長径 0.78m、短径 0.66m、深さ 0.15m を測り、小型で浅い土坑である。埋土は、暗灰黄色シルト混じり砂礫である。

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器がある。このうち、須恵器壺（177）を図示した。

〔302 土坑〕（図 49・80）

3-1 区西北側の 10-1h、200-10h で検出した。土坑の南半分は確認調査トレンチによって失する。長辺 2.25m、残存幅約 1.1 m、深さ 0.35 mを測る。平面は、隅丸方形を呈するものと推定する。断面は逆台形で、底面には少し凹凸が認められる。本土坑は、遺構面のベースとなる第５層（黄褐色粘質シルト・灰黄褐色シルト・にぶい黄褐色微砂～シルト）を掘削した土砂で埋め戻されている。

出土遺物には、弥生土器壺または甕、土師器椀・甕、須恵器甕・杯身または蓋・広口壺、鉢などがあ

る。このうち、土師器椀（178）を図示した。

〔327 土坑〕（図 49・80）

3-1 区西側中央、20O-10i で検出した。長径 0.43 m、短径 0.40 m、深さ 0.13 mを測る。平面は、楕円形を呈する。埋土は、灰褐色砂質シルトである。出土遺物のうち、須恵器杯身（179）を図示した。

〔1402 土坑〕（図 50・81）

3-2 区南東側、1O-1j で検出した。長径 0.67m、短径 0.58m、深さ 0.04 mを測る。平面は楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物のうち、土師器椀（183）・甕（185・186）、黒色土器内黒椀（184）を図示した。

〔1407 土坑〕（図 50・81、図版 13-6・28）

3-2 区南東側、1O-1j で検出した。長径 0.34m、短径 0.30m、深さ 0.04 mを測る。平面は不整楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、土師器杯・椀・甕、黒色土器内黒椀などがある。このうち、土師器椀（187 ～ 193）、黒色土器内黒椀（194 ～ 199）を図示した。

〔1457 土坑〕（図 50・82）

3-2 区南東側、1O-2j で検出した。土坑の東半分は溝に切られて失するため、検出段階では半円状を呈していた。現状で長径 0.94m、短径 0.66m、深さ 0.54 mを測る。断面は逆台形を呈する。

出土遺物のうち、土師器壺（200）を図示した。

〔1504 土坑〕（図 50・82）

3-2 区南東側、1O-2j で検出した。長径 0.36m、短辺 0.33m、深さ 0.07 mを測る。平面は隅丸方形を、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、土師器杯または椀、黒色土器内黒椀、須恵器杯身または蓋などがある。このうち、黒色土器内黒椀（201）を図示した。

〔1511 土坑〕（図 50・82、図版 28）

3-2 区南東側、1O-2j で検出した。長辺さ 0.50m、幅 0.42m、深さ 0.05 mを測る。平面は不定形を、断面は浅い皿状を呈する。出土遺物のうち、黒色土器両黒椀（202）を図示した。

〔1538 土坑〕（図 50・82）

3-2 区東側中央、1O-2j で検出した。長さ 2.87m、幅 0.77m、深さ 0.11 mを測る。土坑東端は不明瞭で、平面は不定形である。断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、弥生土器（V様式）壺・鉢、土師器片などがある。このうち、弥生土器無頸壺（203）を図示した。

〔1544 土坑〕（図 50・82）

3-2 区南東側、1O-2j で検出した。長径 0.38m、短径 0.29m、深さ 0.04 mを測る。平面は楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、弥生土器甕または壺、土師器甕、黒色土器椀などがある。このうち、弥生土器（I様式）壺（204）を図示した。

〔1700 土坑〕（図 50・82）

3-2 区中央やや南東側、1O-3j で検出した。長径 0.67m、短径 0.63m、深さ 0.25 mを測る。平面は楕円形を、断面は逆台形を呈する。

出土遺物には、土師器杯・椀・「て」字状口縁皿、黒色土器内黒椀、瓦器椀、白磁碗などがある。このうち、土師器皿（205）、白磁碗（206）を図示した。

〔1784 土坑〕（図 50・82）

3-2 区中央やや北西側、1O-5h・5i で検出した。長径 2.98m、短径 1.21m、深さ 0.15 mを測る。北端及び南端は撹乱によって失する。現状で平面は、南北に長い形状をなす。断面は逆台形を呈する。

出土遺物のうち、土師器杯（207）を図示した。

〔1789 土坑〕（図 50・79、写真 13-7・図版 28）

3-2 区南西側、1O-5j・6j で検出した。長径 1.73m、短径 0.85m、深さ 0.30 mを測る。平面は不整楕円形を、断面は逆台形を呈する。埋土は 3 層に分かれ、上層がにぶい黄橙色細礫混粗砂、中層が灰黄褐色細礫混砂質シルト、下層がにぶい黄橙色細～中砂である。

出土遺物には、土師器皿・粗製椀・杯・大型甕・鉢・羽釜、黒色土器内黒椀・両黒椀、須恵器坏身などがある。このうち、土師器杯（171）・鉢（172）、土師質羽釜（173）を図示した。

〔1791 土坑〕（図 50・82　図版 27）

3-2 区南西側、1O-5j で検出した。1789 土坑に重複する。長径 0.38m、短径 0.34m、深さ 0.15 mを測る。平面は楕円形を、断面は浅い逆台形を呈する。

出土遺物には、土師器皿、粗製杯または椀、黒色土器内黒椀・両黒椀などがある。このうち、土師器皿（208）を図示した。

〔1921 土坑〕（図 50・82）

3-2 区南東側、1O-1j で検出した。長径 0.35m、短径 0.29m、深さ 0.06 mを測る。平面は楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、土師器椀・甕、黒色土器両黒椀などがある。このうち、土師器椀（209）を図示した。

〔1931 土坑〕（図 50・82）

3-2 区東側中央、1O-1i で検出した。長径 0.40m、短径 0.35m、深さ 0.06 mを測る。平面は楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、土師器杯または椀、黒色土器内黒椀・両黒椀などがある。このうち、土師質竈（210）を図示した。

〔2087 土坑〕（図 50・82）

3-2 区中央やや東側、1O-2j で検出した。土坑の西半部は、土層観察用アゼの下になったため、確認できなかった。現状で長径 0.40m、短径残存長 0.34m、深さ 0.15 mを測る。断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、弥生土器片、土師器杯・甕、土師質羽釜、黒色土器両黒椀などがある。このうち、土師器杯（211）を図示した。

小穴

3 区全域に点在する。柱痕跡が認められない小型の遺構である。

〔55 小穴〕（図 49・80）

3-1 区中央南東側、20O-10j で検出した。長径 0.21 m、短径 0.15 m、深さ 0.07 mを測る。平面は楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。埋土は、灰褐色砂質シルトである。

出土遺物のうち、黒色土器内黒椀（180）を図示した。

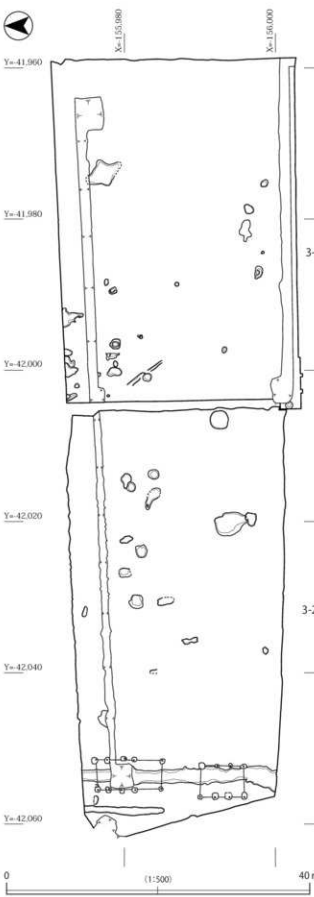


図83　3区　第5面　平面図

〔61小穴〕（図49・80）

3-1区中央南東側、200-9jで検出した。長径0.28 m、短径0.25 m、深さ0.07 mを測る。平面は楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。埋土は、灰褐色砂質シルトである。

出土遺物のうち、土師器椀（181）を図示した。

〔129小穴〕（図49・80）

3-1区中央南側、200-8j・9jで検出した。長径0.24 m、短径0.18 m、深さ0.11 mを測る。平面は楕円形を、断面は逆台形を呈する。埋土は灰褐色砂質シルトである。

出土遺物には、土師質羽釜、黒色土器両黒椀、須恵器甕などがある。このうち、土師質羽釜（182）を図示した。

〔1275小穴〕（図50・82）

3-2区東側中央、10-1iで検出した。建物14の1274柱穴に北側の一部を切られる。径0.25m、深さ0.04 mを測る。平面は円形を、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、土師器杯または皿・椀、黒色土器内黒椀、礫石器などがある。このうち、磨石または敲き石（212）を図示した。

〔1382小穴〕（図50・82）

3-2区南東側、10-1jで検出した。長径0.25m、短径0.22m、深さ0.04 mを測る。平面は楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。

出土遺物には、黒色土器内黒椀などがある。このうち、土師器椀（213）を図示した。

〔1531小穴〕（図50・82、図版27）

3-2区中央やや東側、10-2jで検出した。長径0.25m、短径0.24m、深さ0.10 mを測る。平面は楕円形、断面は逆台形を呈する。

出土遺物のうち、土師器皿（214）、黒色土器両黒椀（215）・内黒椀（216・217）を図示した。

6．第5面（図83～85）

第4b層を除去した遺構面を第5面として調査をおこなった。

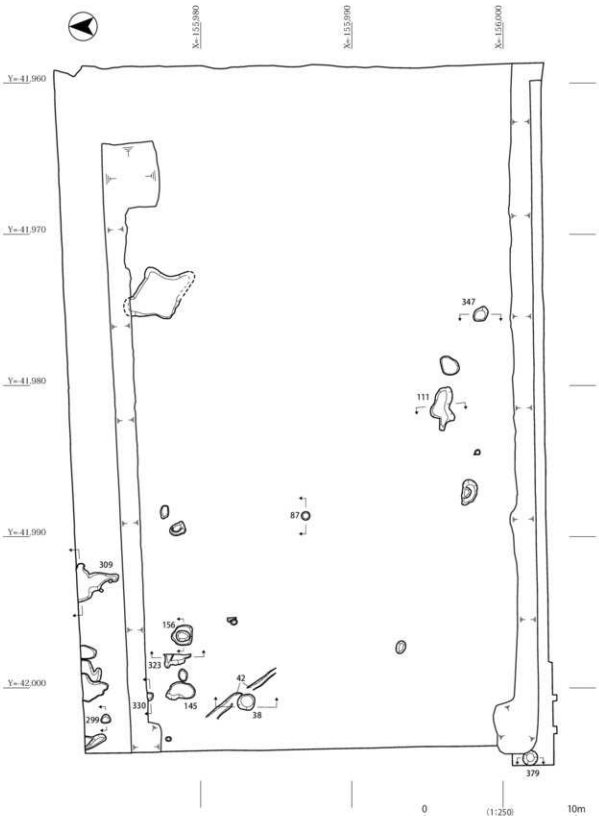


図84　3-1区　第5面　平面図

3-1区では、主に西側で土坑を主体とする遺構を確認した。

3-2区では、西端で掘立柱建物2棟と溝を、東半を中心に土坑を検出した。各遺構からは、弥生時代前・後期、古墳時代前・中期、奈良時代の遺物が出土している。

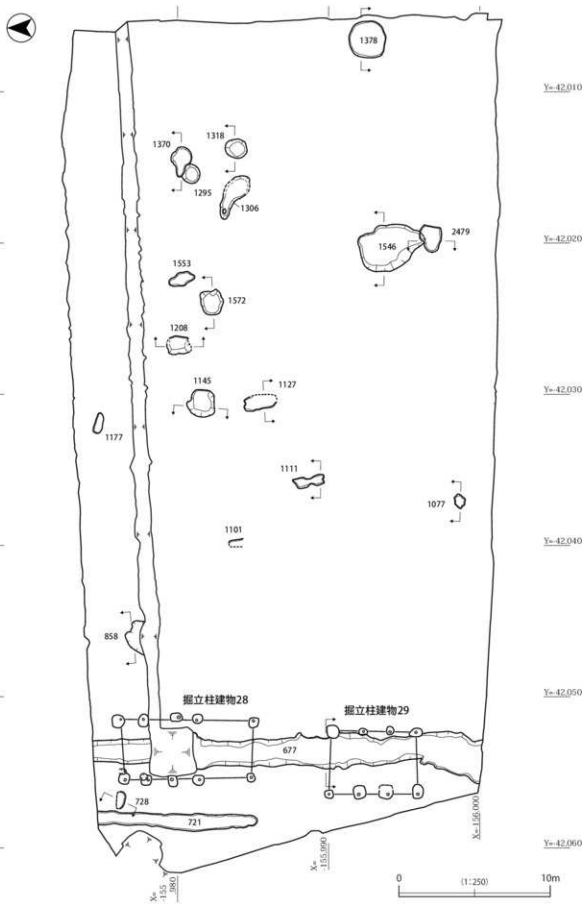


図85　3-2区　第5面　平面図

図86　3-2区　第５面　掘立柱建物28　平・断面図

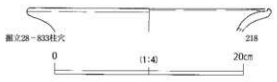


図87　3-2区　第５面　掘立柱建物28　出土遺物

掘立柱建物

掘立柱建物は、3-2 区西端において南北に並ぶ 2 棟を検出した。柱の掘形は、第 4 面で検出した掘立柱建物に比して少し大型である。

〔掘立柱建物 28〕（図 85 ～ 87、図版 8-1）

3-2 区北西隅、1O-6h・6i で検出した。東西 1 間×南北 4 間の、南北方向に長い建物である。主軸は座標北を示す。柱の掘形は大きく、大型のもので長径 0.86m、短径 0.82m、小型のもので長径 0.56m、

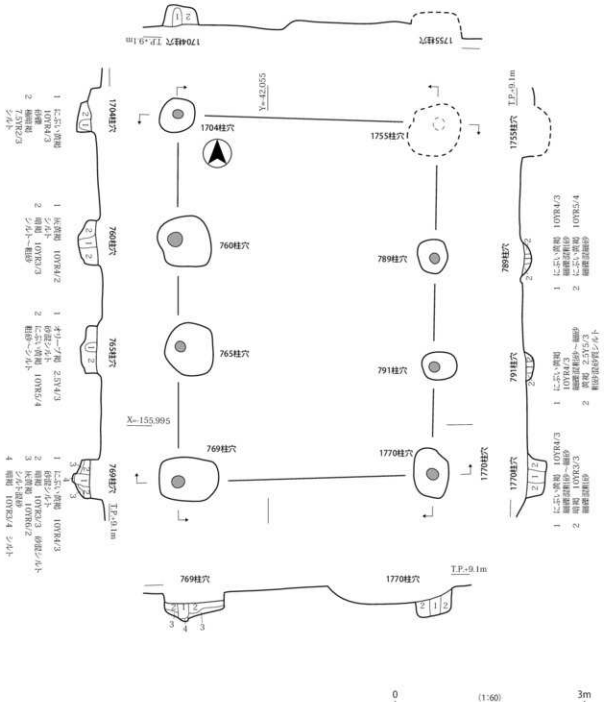


図88　3-2区　第５面　掘立柱建物29　平・断面図

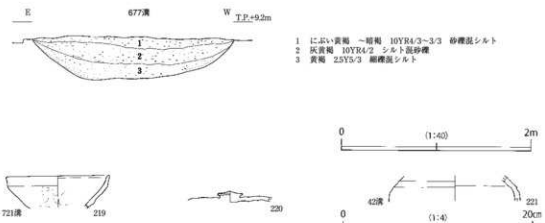


図89 3-2区 第5面 各遺構 断面図 出土遺物

短径 0.50m を測る。掘形の平面は、基本的に隅丸方形を呈する。柱間は、東西 4 m 弱、南北 1.5 ～ 2.0m である。建物の規模は梁間約 4.0 m、桁行約 8.5 mを測り、面積は約 34 ㎡である。南及び北辺の中央側柱は、677 溝が重複するために見落とした可能性がある。また、東及び西柱列の南側 1 間分は、柱間が非常に長くなっている。本建物は、全体的に掘形深度が浅く、後世に削平された可能性がある。

各柱穴からは、弥生土器（V様式）甕、土師器などが出土した。このうち、833 柱穴から出土した土師器甕（218）を図示した。

〔掘立柱建物 29〕（図 85・88、図版 8-2）

3-2 区南西隅、1O-6j で検出した。本建物は 677 溝が埋没した後に建てられている。東西 1 間×南北 3 間の長方形を示す南北棟の建物である。主軸は、ほぼ座標北を示す。柱間は東西 4.0m、南北 2.0m である。柱の掘形は、大型のもので長さが 0.8 ～ 0.9 mを測り、小型のもので長さが 0.5m 前後である。掘形の平面は、基本的に隅丸長方形を呈する。建物の規模は、桁行約 5.8m、梁間約 4.0m を測り、面積は 23.2 ㎡である。南及び北辺の中央側柱は 677 溝と重複していたため見落とした可能性もある。

各柱穴からは、弥生土器、土師器、須恵器甕などが出土したが、細片のため図化には至らなかった。

建物 28・29 の時期は、677 溝埋没後であり、8 世紀後半以降と考えられる。

溝

確認できた溝は非常に少なく、僅か 3 条に過ぎない。

〔42 溝〕（図 84・89）

3-1 区北西端、1O-1h・1i、2O0-10h・10i で検出した、南東から北西に走る溝である。長さ 5.65m、幅 0.33 ～ 0.58m、深さ 0.18m 前後を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色粘質シルトで、砂礫を少し含む。

出土遺物には、土師器、須恵器杯蓋などがあり、このうち須恵器杯蓋（221）を図示した。古墳時代の遺構と考えられる。

〔677 溝〕（図 85・89 ～ 92、 図版 10-3・14-4）

3-2 区西側、1O-6h・6i・6j で検出した。本溝は条里地割の坪境に位置する。ほぼ直線的に南北方向に流れるが、南端でやや西側に屈曲する。長さ 25.6m、幅約 1.4m、深さ 0.45 mを測る。断面は、逆台形を呈する。埋土は、3 層に分かれ、上層がにぶい黄褐色～暗褐色砂礫混シルト、中層が灰黄褐色シルト混砂礫、下層がにぶい黄褐色砂礫混シルトで水成層である。

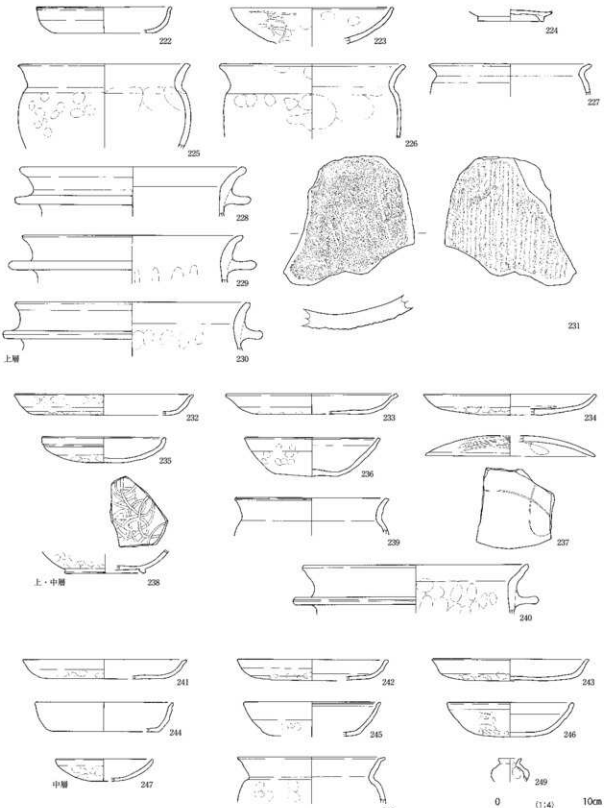


図90　3-2区　第5面　677溝　出土遺物（1）

溝内からは、土師器皿・杯・甕を中心に相当数の遺物が出土した。

上層出土遺物には、弥生土器片、土師器皿・杯・椀・ミニチュア壺・甕・鉢、土師質羽釜・移動式竈、黒色土器両黒椀・両黒ミニチュア壺、須恵器杯身・杯蓋・長頸壺・甕、瓦などがある。このうち、土師

器杯（222 ～ 224）・甕（225 ～ 227）、土師質羽釜（228 ～ 230）、瓦（231）を図示した。

上・中層出土遺物には、弥生土器甕、土師器皿・椀、黒色土器内黒椀、須恵器杯または椀・杯蓋（平城宮Ⅵ期）・長頸壺・壺・甕などがある。このうち、土師器皿（232 ～ 234）・杯（235・236・238）・杯蓋（237）・甕（239）、土師質羽釜（240）、平瓦（250）を図示した。

中層出土遺物には、土師器・黒色土器・須恵器などがある。このうち、土師器皿（241 ～ 243）・杯（244 ～ 247）・甕（248）・小壺（249）、土師質甑（251）、黒色土器内黒椀（252）、須恵器長頸壺（253）を図示した。なお、249 の小壺は器表面に炭素が吸着しており、黒色土器とすべきかもしれない。

下層出土遺物には、弥生土器片、土師器皿・杯・椀・鉢・羽釜・甕、黒色土器内黒椀、須恵器甕・壺などがある。このうち、土師器皿（254）・杯（255）、須恵器甕（256）・壺（257）を図示した。

出土層位不明遺物には、弥生土器、土師器皿・杯・椀・鉢・甕・高杯、土師質羽釜、黒色土器両黒皿・内黒椀、瓦器椀、須恵器杯・蓋・短頸壺、叩き石、サヌカイト剥片、砥石などがある。このうち、サヌカイト剥片（258）、土師器杯（259・261）・皿（260）・椀（262）・鉢（263）・甕（267）、土師質羽釜（268・269）、黒色土器内黒椀（266）、須恵器杯蓋（264）・短頸壺（265）を図示した。

これらの出土遺物のうち、土師器杯は出土層位の別なく形態にほとんど差が認められないため、短期間に埋没したものと考えられる。遺構の時期としては、奈良時代後半と考えたい。

〔721 溝〕（図 85・89）

3-2 調査区北西隅、1O-6h・6i で検出した、南北方向の溝である。長さ 10.56m、幅 0.78 ～ 1.18m、深さ 0.15m を測る。断面は、浅い皿状を呈する。

出土遺物のうち、土師器椀（219）、須恵器杯蓋（220）を図示した。

井戸

井戸の分布は、3 区のほぼ中央部分に集中している。

〔38 井戸〕（図 84・94、図版 14-2・30）

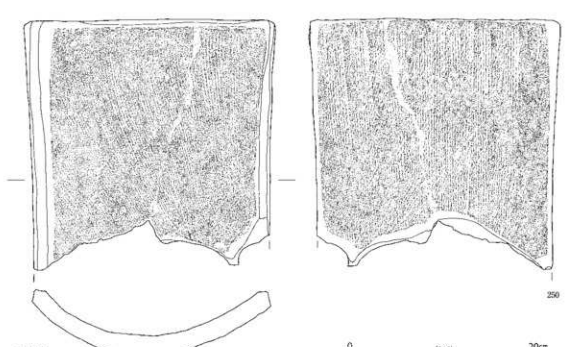


図91　3-2区　第5面　677溝　出土遺物（2）

3-1 区北西側、1O-1i で検出した。長辺 1.16m、短辺 1.12m を測り、平面は隅丸方形を呈する。深さ 1.0m を測る。埋土は 4 層に分かれ、上層から順に黒褐色砂混シルト、灰黄褐色シルト、黒色シル

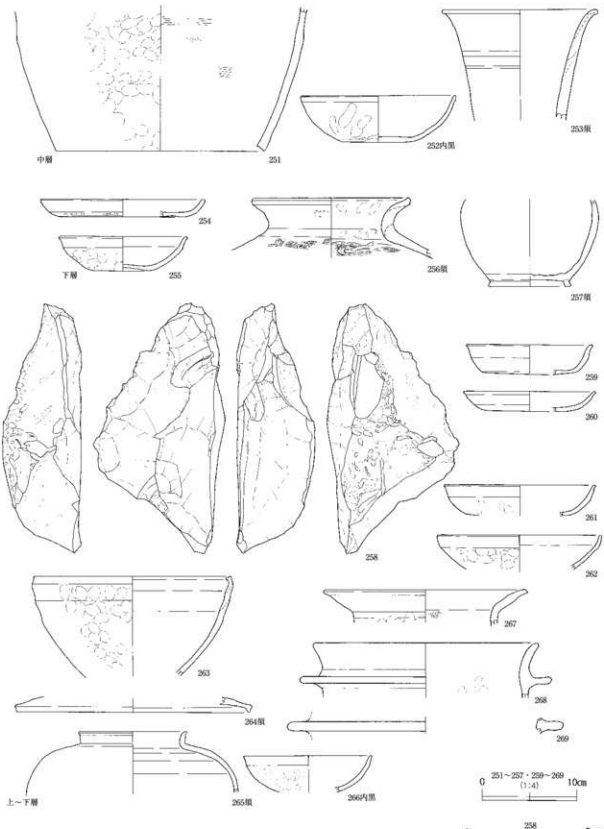


図92　3-2区　第５面　677溝　出土遺物（３）

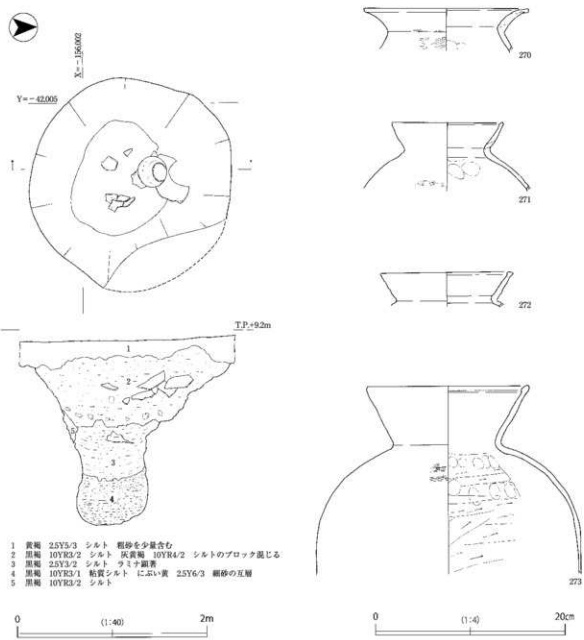


図93　3-1区　第5面　379井戸　平・断面図　出土遺物

ト、黄褐色粘質シルトで構成されている。本井戸は 42 溝と重複している。

出土遺物には、弥生土器小壺・甕・台付鉢・高杯、土師器小型丸底壺・長頸壺・二重口縁壺・高杯などがある。このうち、弥生土器壺（274）・甕（275）・台付甕（276）、土師器小型丸底壺（277）・二重口縁壺（279）・高杯（278・280）・甕（281）といった弥生時代後期から古墳時代前期頃の遺物を図示した。出土遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代前期（布留式）頃と思われる。

〔156 井戸〕（図 84・94・95、図版 16-3）

3-1 区北西側、200-10h で検出した。長辺 1.38m、短辺 1.33m を測り、平面は隅丸長方形を示す。断面は逆凸字状を呈する。掘形上段は 0.1 m程掘り下げ、その中央付近に径 0.80 m、深さ 0.80m の井筒相当部分が掘削されている。最深部は 1.3m を測る。埋土は 2 層に分かれ、上層は黒褐色砂礫混シルト、下層は黒色粘質シルトが堆積する。

出土遺物には、弥生土器甕、土師器杯・甕、須恵器杯身・杯蓋・甕・提瓶などがある。このうち、須

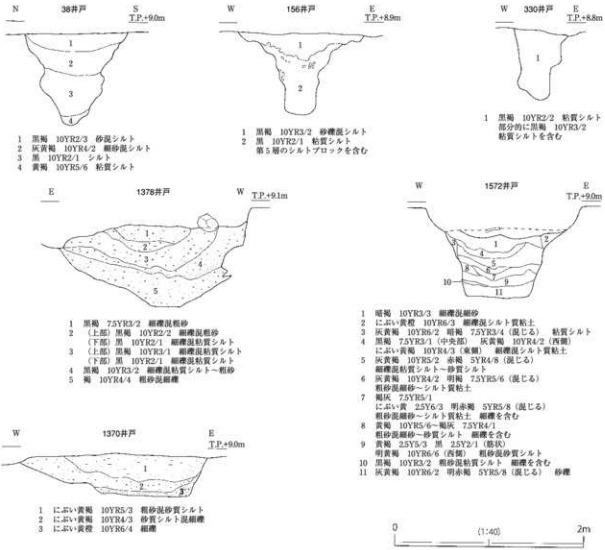


図94　3区　第5面　各遺構　断面図(1)

恵器杯身（282・283）・甕（284）を図示した。

〔330井戸〕（図84・94・95）

3-1区北西側、1O-1hで検出した。北半は攪乱によって失しており、現状で長径0.55m、短径0.37m、深さ0.75mを測る。埋土は、黒褐色粘質シルトや黒褐色シルト質粘土である。

出土遺物には、弥生土器壺・甕・ミニチュア土器、土師器鉢などがある。このうち、土師器鉢（285）、弥生土器壺（286）を図示した。出土遺物から、本遺構の埋没時期は弥生時代後期から古墳時代前期頃と考えられる。

〔379井戸〕（図84・93、図版14-3・15-2）

3-1区南西隅、1A-1aで検出した。径1.02m、深さ0.78mを測る。断面は漏斗形を呈する。埋土は大きく3層に分かれ、上層が灰黄褐色シルトブロックを含む黒褐色シルト、中層が黒褐色シルト、下層が黒褐色粘質シルトとなっている。

出土遺物には、弥生土器壺・甕、土師器壺・甕などがある。このうち、土師器甕（270・271・272）・直口壺（273）を図示した。出土遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代前期（布留式）頃と

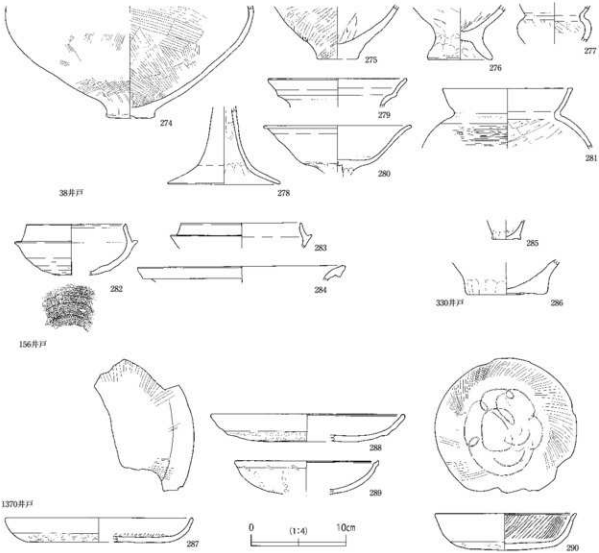


図95　3区　第5面　各遺構　出土遺物

考えられる。

〔1370 井戸〕（図 85・94・95、図版 29）

3-2 区北東側、1O-2i で検出した。長径 1.98m、短径 1.38m、深さ約 0.7m を測り、平面は東西に長い楕円形を呈する。埋土は 3 層に分かれ、上層がにぶい黄褐色粗砂混砂質シルト、中層がにぶい黄褐色砂質シルト混細礫、下層がにぶい黄橙色細礫である。断面は逆台形を呈する。

出土遺物には、土師器皿・杯、須恵器杯身または蓋などがある。このうち、土師器皿（287・288）・杯（289・290）を図示した。奈良時代前期の遺物と思われる。

〔1378 井戸〕（図 85・94・96、図版 29）

3-2 区南東側、1O-1j で検出した。径 2.44m、深さ 0.80m を測り、平面は不整円形を、断面は擂鉢状を呈する。埋土は大きく 3 層に分かれ、上層は黒褐色系の細礫混粗砂、中層は黒色系の細礫混粘質シルト、下層は褐色粗砂混細礫が堆積する。出土遺物には、弥生土器、土師器甕・高杯、須恵器杯身・杯蓋・甕・鉢などがある。このうち、土師器甕（291・292）、須恵器杯蓋（TK10・MT85 型式）（293・294）・杯身（TK47・MT85 型式）（295・296）、周囲を面取りした石材（297）を図示した。出土遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代中期と考えられる。

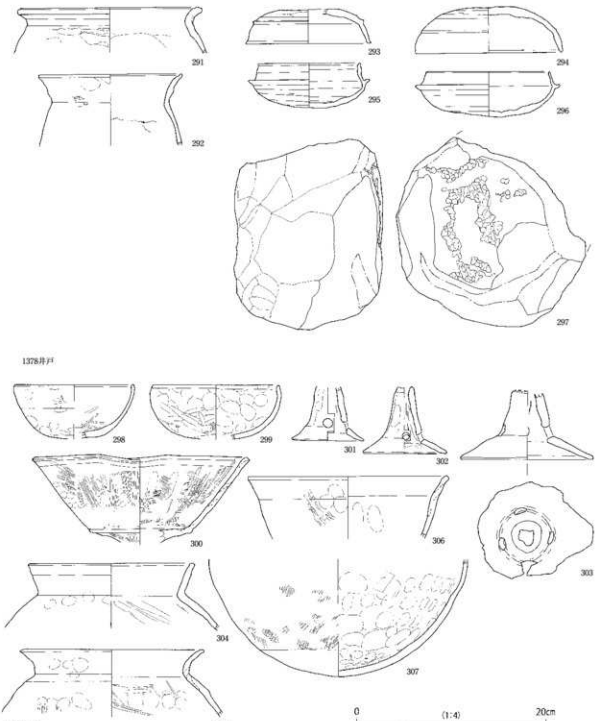


図96　3-2区　第５面　1378・1572井戸　出土遺物

〔1572 井戸〕（図 85・94・96、図版 29・30）

3-2 区北東側、10-3i で検出した。長径 1.6m を測り、平面は隅丸方形を呈する。深さは１mを測る。断面は逆台形を呈し、埋土は６層に大別できる。出土遺物には、弥生土器小壺・甕、土師器甕・鉢・高杯、須恵器甕などがある。このうち、土師器甕（304・305）・鉢（298・299）・大型鉢（306）・高杯（300 ～ 303）、須恵器甕（307）を図示した。古墳時代中期頃の所産と考えられる。

土坑

土坑の分布は、３区のほぼ中央部分に集中している。形態は不定形なものが多い。

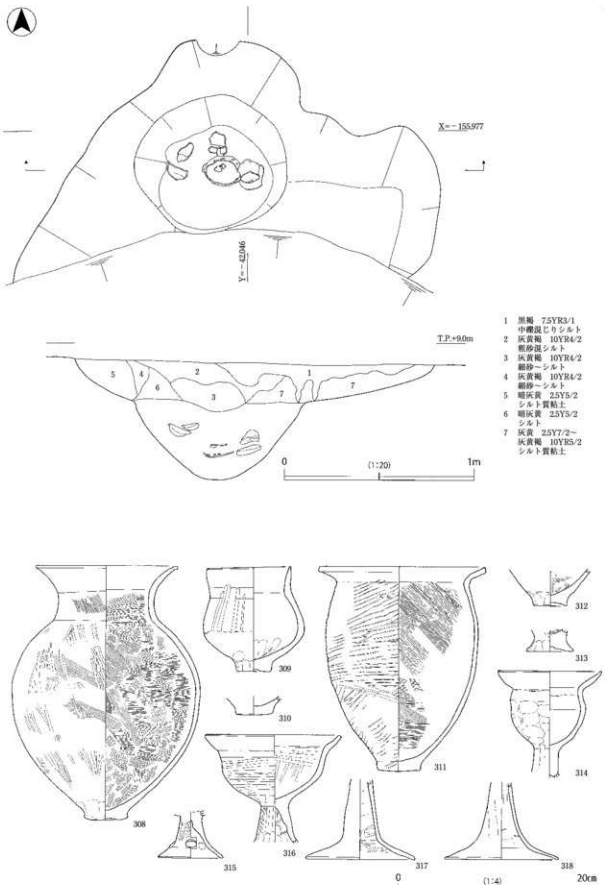


図97　3-2区　第5面　858土坑　平・断面図　出土遺物

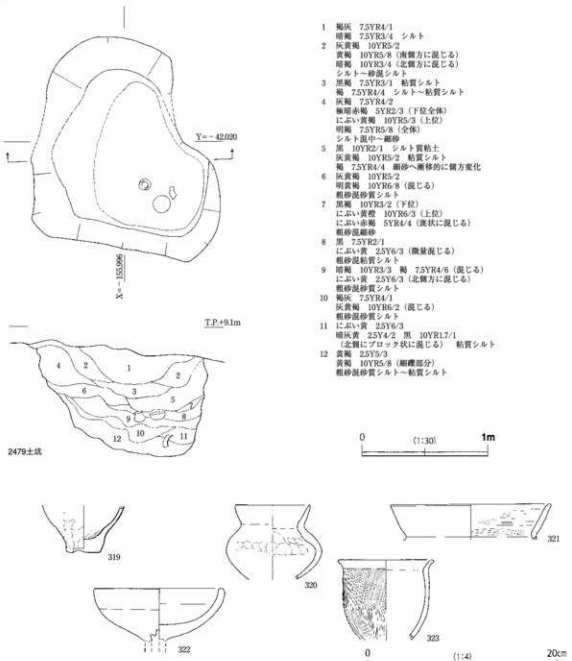


図98 3-2区 第5面 2479土坑 平・断面図 出土遺物

〔87 土坑〕（図 84・99・100）

3-1 区中央やや西寄り、20O-9i で検出した。長径 0.58m、短径 0.56m を測り、平面は楕円形を呈する。深さ 0.3 ～ 0.45m である。埋土は 2 層に分かれ、上層が黄褐色細砂、下層が褐色粘質シルトである。出土遺物には、弥生土器、土師器高杯などがあり、土師器高杯（324）を図示した。

〔111 土坑〕（図 84・99・100）

3-1 区中央南側、20O-9j で検出した。長さ 2.87m、幅 1.58m、深さ 0.60m を測り、平面は不定形で、断面は逆台形を呈する。埋土は 3 層に分かれ、上層が黒色粘質シルト、中層が灰黄褐色シルト混細砂、下層が黒褐色砂混シルトである。

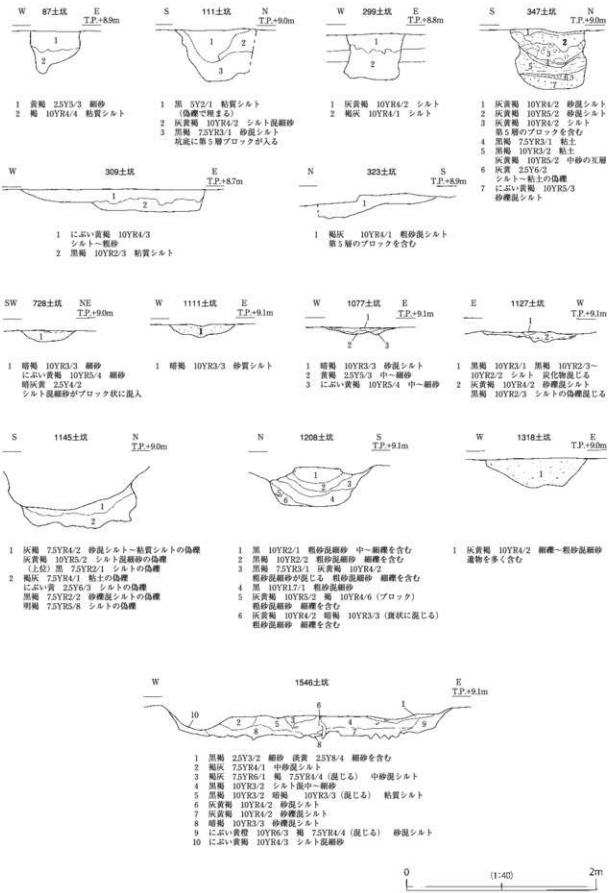


図99　3区　第5面　各遺構　断面図（2）

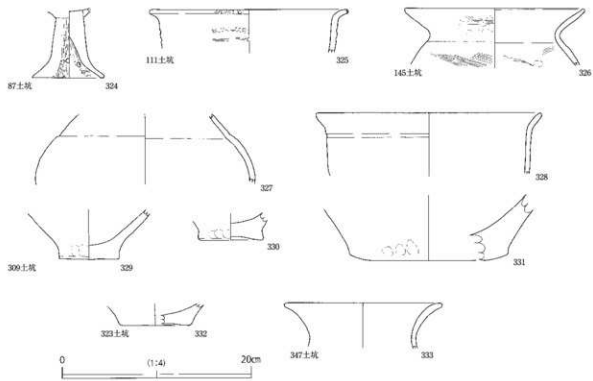


図100　3-1区　第5面　各遺構　出土遺物

出土遺物には、弥生土器甕、土師器壺・高杯などがある。このうち、弥生土器（Ⅰ様式）甕（325）を図示した。

〔145土坑〕（図84・100）

3-1区北西隅、1O-1h、20O-10hで検出した。長径1.93m、短径1.08m、深さ0.18mを測り、平面は不整楕円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、埋土は灰褐色粘質シルトである。上部を第4面の41溝に切られている。

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、サヌカイト片などがある。このうち、土師器甕（326）を図示した。

〔299土坑〕（図84・99）

3-1区北西隅、1O-1hで検出した。長辺0.64m、短辺0.58m、深さ0.17mを測り、平面は隅丸三角形を呈する。断面は逆台形を呈する。埋土は2層に分かれ、上層が灰黄褐色シルト、下層が褐灰色シルトである。

出土遺物には、土師器片、須恵器杯身または蓋などがある。古墳時代の所産と思われる。

〔309土坑〕（図84・99・100）

3-1区北西側、20O-10hで検出した。土坑北側は調査区外に広がり、現状で長さ2.75m、幅2.54m、深さ0.20mを測る。平面は不定形である。土坑内の西側部分は緩やかな二段掘りとなっているが、東側は急な掘り込みとなっている。遺構埋土は2層に分かれ、上層がにぶい黄褐色シルト～粗砂、下層が黒褐色粘質シルトとなっている。土坑底面から弥生時代前期の土器が出土した。

出土遺物のうち、弥生土器壺（327・329・331）・甕（328・330）を図示した。前期中頃だろう。

〔323土坑〕（図84・99・100）

3-1区北西側、20O-10hで検出した。東側は上面の溝に切られて失しており、現状では平面が不定

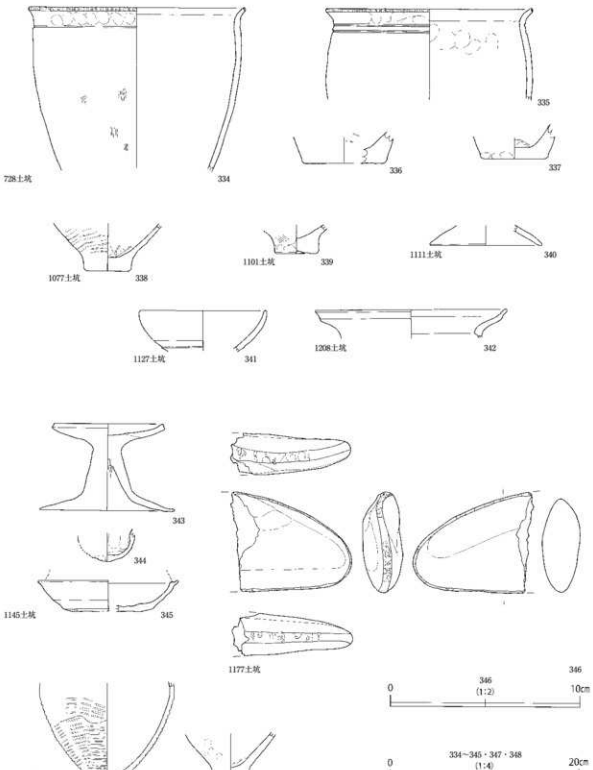


図101　3-2区　第5面　各遺構　出土遺物（1）

形な土坑である。長さ 1.78m、幅 0.89m、深さ 0.29m を測る。遺構底面は凹凸が著しい。埋土は褐灰色粗砂混シルトである。

出土遺物には、弥生土器壺、土師器壺、須恵器長頸壺などがある。このうち、弥生土器壺（332）を図示した。出土遺物から、古墳時代中期頃の遺構と考えられる。

〔347 土坑〕（図 84・99・100、図版 16-4）

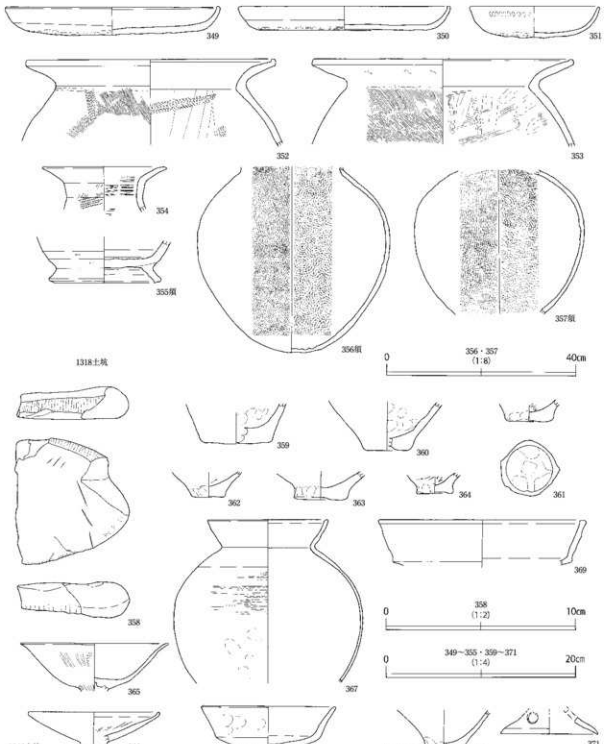


図102　3-2区　第5面　各遺構　出土遺物（2）

3-1区中央南東側、20O-8jで検出した。長さ1.14m、幅0.86m、深さ0.36mを測り、平面は不整形、断面は逆台形を呈する。埋土は7層に分かれるが、上層の灰黄褐色砂混シルト、中層の黒褐色粘土、下層のにぶい黄褐色砂礫混シルトの3層に大別できる。

出土遺物には、弥生土器壺・甕、土師器、黒色土器椀、須恵器甕などがある。このうち、弥生土器壺（333）を図示した。

〔728土坑〕（図85・99・101、図版14-5・31）

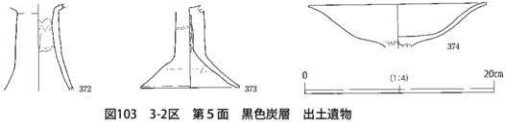


図103　3-2区　第5面　黒色炭層　出土遺物

3-2区北西隅、1O-6hで検出した。土坑北側は土層観察用アゼのため、全体形状が不明である。現状で長さ1.14m、幅0.39m、深さ0.23mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗褐色細砂、にぶい黄褐色細砂、暗灰黄色シルト混細砂が入り混じり、人為的な埋め戻しが行われたものと考えられる。遺物は、坑底付近から弥生土器片が出土した。このうち、弥生土器甕（334～337）を図示した。出土遺物から、弥生時代前期中頃の遺構と考えられる。

〔858土坑〕（図85・97、図版15-3・30・31）

3-2区北西側、1O-5hで検出した。土坑南側は撹乱によって失するため、全容は不明である。現状で、長さ2.21m、幅0.98m、深さ0.60mを測る。断面は逆凸字状を呈する。土坑上部の埋土は黒褐色中礫混シルト、灰黄褐色粗砂混シルト、暗灰黄色シルト～シルト質粘土などが混在した状況を呈し、人為的な埋め戻しを窺わせる。

遺物は、坑底付近から弥生土器がまとまって出土した。出土遺物には、弥生土器（V様式）甕・壺・鉢・高杯、土師器小型甕・高杯などがある。このうち、弥生土器広口壺（308）・小型壺（309）・壺（310）・甕（311）・鉢（312・313）・脚付鉢（314・316）・高杯（315）、土師器（布留式）高杯（317・318）を図示した。出土遺物から、本遺構の埋没時期は古墳時代前期頃と考えられる。

〔1077土坑〕（図85・99・101）

3-2区中央南西寄り、1O-4jで検出した。長さ0.98m、幅0.73m、深さ0.12mを測り、平面は東西に長く不定形である。断面は浅い皿状を呈する。埋土は大きく2層に分かれ、上層が暗褐色砂混シルト、下層が黄褐色系の中～細砂である。

出土遺物のうち、弥生土器甕（338）を図示した。弥生時代後期頃の所産と考えられる。

〔1101土坑〕（図85・101）

3-2区中央やや北西寄り、1O-4i・5iで検出した。土坑の西側、及び南側は撹乱によって失しており、全容は不明である。現状で、長さ0.92m、幅0.24m、深さ0.16mを測る。

出土遺物のうち、弥生土器壺（339）を図示した。弥生時代後期頃の所産と考えられる。

〔1111土坑〕（図85・99・101）

3-2区中央やや西寄り、1O-4iで検出した。長さ2.12m、幅0.73m、深さ0.12mを測り、平面は不定形である。断面は浅い皿状を呈し、埋土は暗褐色細砂混シルトである。

出土遺物には、土師器高杯、須恵器甕などがある。このうち、土師器高杯（340）を図示した。出土遺物から考えると、古墳時代中期頃の遺構であろう。

〔1127土坑〕（図85・99・101）

3-2区中央、1O-4iで検出した。土坑東側は撹乱を受け、不明瞭である。現状で、長さ2.18m、幅0.95m、深さ0.16mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は灰黄褐色の砂礫混シルトが主体で、上部に炭化物の混じる黒褐色シルトが僅かにみられた。出土遺物には、土師器皿または杯・高杯、須恵器甕などが

ある。このうち、土師器高杯（341）を図示した。

〔1145 土坑〕（図 85・99・101、図版 31）

3-2 区中央北側、1O-3i・4i で検出した。長さ 1.84m、幅 1.81 m、深さ 1.05 mを測り、平面は不整な方形である。断面は袋状を呈する。土坑底面は少し凹凸が認められる。埋土の上層は崩落のため記録できなかったが、下層は灰褐色砂混シルト～粘質シルトの偽礫、灰黄褐色シルト混細砂の偽礫、黒色シルトの偽礫などを含む堆積が認められる。

出土遺物には、弥生土器壺・甕・高杯、土師器小壺・器台、須恵器杯身・甕、砂岩製の砥石などがある。このうち、土師器器台（343）・小壺（344）、須恵器杯身（345）を図示した。須恵器杯身が MT85 型式であるため、6 世紀後半頃の遺構と考えられる。

〔1177 土坑〕（図 85・101）

3-2 区中央北側、1O-4h で検出した。長径 1.37m、短径 0.57m、深さ 0.25m を測り、平面は東西に長い楕円形を呈する。

出土遺物には、弥生土器甕・壺、土師器、須恵器杯蓋、砂岩製の礫などがある。出土遺物から、古墳時代後期の所産であろう。

〔1208 土坑〕（図 85・99・101）

3-2 区中央やや北側、1O-3h・3i で検出した。長さ 1.49m、幅 1.23m、深さ 0.42m を測り、平面は隅丸方形を、断面は逆台形を呈する。埋土は粗砂混細砂で、上層が黒褐色を、下層が灰黄褐色を呈する。

出土遺物には、土師器杯または皿・甕・壺・高杯などがあり、弥生時代後期～古墳時代前期頃と古代の土器が混在していた。このうち、土師器甕（342）を図示した。

〔1306 土坑〕（図 85・101）

3-2 区東側、1O-2i で検出した。土坑中央は攪乱により失している。現状で、長さ 3.22m、幅 1.22m、深さ 0.22m を測る。

出土遺物には、弥生土器、土師器、須恵器があり、弥生土器（V 様式）甕（347）、土師器鉢（348）を図示した。

〔1318 土坑〕（図 85・99・102、図版 14-6・29）

3-2 区東側、1O-2i で検出した。長径 1.47m、短径 1.28m、深さ 0.30m を測り、平面は楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色細礫～粗砂混細砂である。

出土遺物には、弥生土器甕、土師器皿・杯・甕、須恵器杯身・蓋・甕・壷などがある。このうち土師器皿（349・350）・杯（351）・甕（352 ～ 354）、須恵器壺（355）・甕（356、357）を図示した。出土遺物から、奈良時代前半の所産と考えられる。

〔1546 土坑〕（図 85・102、図版 31）

3-2 区中央やや南東側、1O-2j・3j で検出した。長さ 4.14m、幅 3.05m、深さ 0.18m を測り、平面は不定形を呈する大型の土坑である。断面は浅い皿状を呈する。埋土は褐灰色～黒褐色の細砂やシルトが混在し、人為的な埋め戻しを窺わせる。

出土遺物には、弥生土器甕・高杯、土師器皿・杯・椀・甕・鉢・高杯、黒色土器内黒椀・両黒椀、青磁蓮弁碗、サヌカイト片などがあり、弥生時代から中世までの遺物が混在する。このうち、弥生土器甕（359・360）・甕または壺（361 ～ 363）・鉢（364）、土師器甕（367・369）・高杯（365・366・368）、磨石の可能性のある砂岩（358）を図示した。

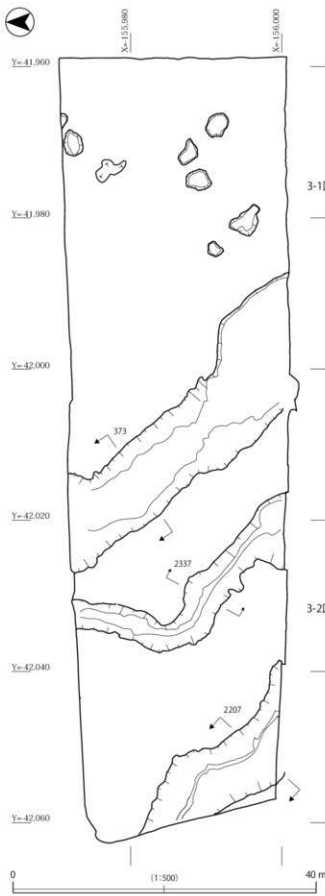


図104　3区　第6面　平面図

〔1553 土坑〕（図 85・102）

3-2 区中央北東寄り、1O-3h・3i で検出した。長径 1.78m、短径 0.89m、深さ 0.45m を測り、平面は不整楕円形を呈する。断面形は逆台形を呈する。

出土遺物には、弥生土器甕・壺・高杯、土師器鉢などがある。このうち、弥生土器高杯（371）、土師器鉢（370）を図示した。

〔2479 土坑〕（図 85・98、図版 14-7・14-8・29）

3-2 区中央やや南東側、1O-2j・3j で検出した。北側は 1546 土坑に、東側は耕作溝に切られている。長さ 1.60m、幅 1.44m、深さ 1.0m を測り、平面は不定形である。断面形は逆台形を呈する。埋土は細かく分かれ、褐灰色や黒褐色のシルト～粘質シルトや粗砂混シルトが、互層で堆積していた。土坑底面中央からは、土師器小型壺が逆位で出土した。また、土坑中位からは土師器小型壺・椀が出土した。

出土遺物には、弥生土器壺・甕、土師器小型壺・甕・杯または椀・高杯、須恵器甕、サヌカイト片などがある。このうち、弥生土器甕（319）、土師器小型壺（320）・甕（321・323）・高杯（322）を図示した。

〔第 5 層上面黒色炭層〕（図 103）

3-2 区北東側北壁付近の Y=-42,020 より東側 2 ～ 3m 付近で検出した炭層である。北側法面の断面で確認できたもので、遺構内埋土と思われる。ただし、規模や深さなどは不明である。出土遺物のうち、弥生土器高杯（372）、土師器高杯（373・374）を図示した。

7．第 6 面　（図 104・105）

3-1 区では第 5b 層上面を第 6 面として調査し、風倒木痕を幾つか検出した。遺構面の標高は、北東側 8.44m、南東側 8.56m、北西側 8.56m、南西側 8.55m、中央部分 8.51m をそれぞれ測る。北東側に緩やかに下がる地

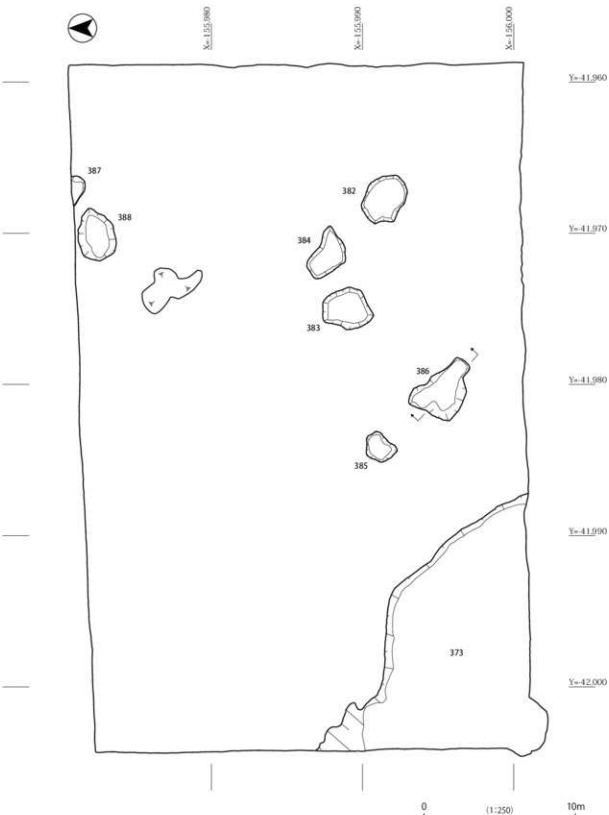


図105　3-1区　第6面　平面図

図106　3-1区　第６面　386風倒木痕　断面図

形となっている。

3-2区では第７層上面を第６面として調査し、自然流路を調査した。遺構面の標高は、北東側 8.46m、南東側 8.51m、北西側 8.31m、南西側 8.49m を測る。南から北側に緩やかに下がる地形となっている。

風倒木痕

〔386 風倒木痕〕（図 105・106）

3-1 区中央南寄り、20O-8j・9j で検出した。長さ 4.25m、幅 3.12m、深さ 0.58m を測る。平面は不定形で、断面は浅い皿状を呈する。埋土は、灰黄褐色礫混シルトや褐色系のシルト～粘土などが混在している。3-1 区ではこのような風倒木痕を８基検出した。

流路

〔373 流路〕（図 104 ～ 107・109、図版 17-1・18-1・18-2）

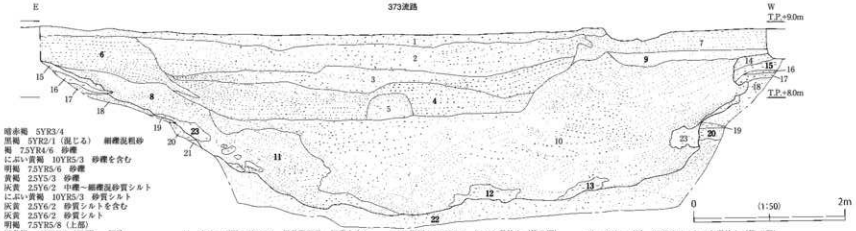
20O-9j・10j、1O-1h・1i・1j・2h・2i・2j・3h・3i で検出した、3-1 区南西隅から 3-2 区の北東側へ抜けるやや蛇行した幅広の深い流路である。長さ約 40m、幅 9.0 ～ 14.0m、深さ 2.5m を測る。断面は逆台形を呈する。埋土上層～中層には褐色系の砂礫が、下層にはオリーブ色系の粘土～細砂が堆積している。出土遺物には、サヌカイト剥片（375）、木片などがある。

〔2207 流路〕（図 104・107、図版 17-2・17-3）

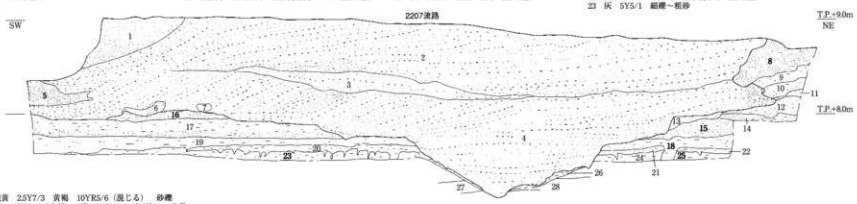
3-2 区西側、1O-4j・5j・6i・6j・7i で検出した。３区西端を南東から北西方向に流れる。長さ約 29.5 m、幅 8.5 ～ 9.5m、深さ約 1.2m を測る。流路東壁は砂礫によって削られ、部分的にオーバーハングしている。流路底は深くＶ字状に削り込まれている。埋土には褐色砂礫、灰黄褐色砂礫などがあり、各層にはラミナがみられる。サヌカイト剥片（376）が出土した。

〔2337 流路〕（図 104・108）

3-2 区中央やや西寄り、1O-2j・3i・3j・4h・4i・4j で検出した。長さ約 29m、幅 3.5 ～ 9.8m、深さ 1.23m を測り、南側から蛇行しながら北側へ流れる。断面は緩やかなＶ字状を呈し、南西側の壁は砂礫によって削られ、所々オーバーハングしている。埋土は上方細粒化を示し、上層に黄褐色細砂～シルトが、下層には黄褐色砂礫などが堆積している。自然木などが出土した。



1 暗赤褐 5YR3/4
黒褐 5YR2/1（混じる） 細礫混粗砂
2 褐 7.5YR4/6 砂礫
にぶい黄褐 10YR5/3 砂礫を含む
3 明褐 7.5YR5/6 砂礫
4 黄褐 2.5Y5/3 砂礫
5 灰黄 2.5Y6/2 中礫～細礫混砂質シルト
6 にぶい黄褐 10YR5/3 砂質シルト
灰黄 2.5Y6/2 砂質シルトを含む
7 灰黄 2.5Y6/2 砂質シルト
8 明褐 7.5YR5/8（上部）
灰黄褐 10YR5/2（下部） 細砂
9 黄褐 10YR5/8 黄褐 2.5Y5/3 細砂
10 黄褐 2.5Y5/4 粘質シルト混細砂～粗砂
細礫を含む
11 オリーブ灰 5GY5/1 粗砂混細砂 細礫を含む
12 灰オリーブ 5Y4/2 粗砂混粘土 細砂を含む
13 灰オリーブ 5Y4/2 粗砂混粘土 細砂を含む
14 明黄褐 10YR6/8 細砂混粘質シルト（第5層）
15 褐灰 7.5YR4/1 シルト質粘土（第7層）
16 灰黄褐 10YR5/2 粘土（第8層）
17 黒褐 5YR2/1 細礫～粗砂混シルト（第9層）
18 灰 5Y5/1 細礫～粗砂（第10層）
19 オリーブ灰 2.5GY5/1 シルト質粘土（第10層）
20 黒褐 7.5YR3/1 細砂混粘質シルト（第11層）
21 オリーブ灰 2.5GY5/1 砂質シルト（第11層）
22 灰オリーブ 5Y5/2 細砂混砂礫（第12層）
23 灰 5Y5/1 細礫～粗砂



1 浅黄 2.5Y7/3 黄褐 10YR5/6（混じる） 砂礫
2 褐 10YR4/4（上部） 褐 7.5YR4/3（下位） 砂礫
3 にぶい黄褐 10YR5/4 灰 N4/（下部）
明褐 7.5YR5/8（細い帯状に混じる） 砂礫
4 灰黄褐 10YR5/2 黄褐 2.5Y5/3（下部）
褐 7.5YR4/6（細い帯状に混じる） 砂礫
5 灰黄褐 10YR5/2 褐灰 10YR4/1（筋状に混じる） 細砂
6 オリーブ黒 7.5Y2/2 粘土塊
7 黒 7.5YR2/1 粘土
8 灰黄 2.5Y6/2 細砂（第5層）
9 灰黄褐 10YR4/2 粘土 砂を少量含む（第5層）
10 黒 10YR2/1 粘土（第7層）
11 黒褐 10YR3/2 砂礫混シルト（第9層）
12 褐 10YR4/4 砂礫（第10層）
13 黒褐 2.5Y3/2 粘土（第10層）
14 灰黄 2.5Y6/2 細砂～シルト（第10層）
15 オリーブ灰 2.5GY5/1 砂礫～粘質シルト（第10層）
16 オリーブ灰 5GY5/1 細砂（第10層）
17 緑灰 7.5GY6/1 砂礫～粘質シルト（第10層）
18 オリーブ黒 5Y3/1 粘土（第11層）
19 黒褐 10YR2/2 砂礫（第11層）
20 黒褐 10YR3/2 粘質シルト
（火山ガラス（K-Ahの可能性有り）を多く含む）（第11層）
21 褐灰 10YR4/1 粘質シルト（第11層）
22 褐灰 10YR4/1 粘質シルト（第11層）
23 灰 5Y4/1 粘質シルト（第12層）
24 オリーブ灰 5GY5/1 粘質シルト（第12層）
25 オリーブ灰 5GY5/1 粘質シルト（第12層）
26 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粘土（第12層）
27 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粘土（第12層）
28 黄灰 2.5Y6/1 粘質シルト（第12層）

図107 3.2区 第6面 373・2207流路 断面図

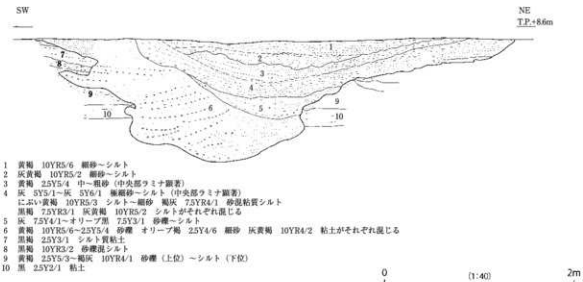


図108　3-2区　第６面　2337流路　断面図

包含層出土遺物

〔第２・３層出土遺物〕（図 110）

第２・３層からは、弥生土器甕、土師器皿・杯・鉢・大型高杯・高杯・把手付き甕、須恵器杯身・杯蓋・甕・壺・長頸壺、黒色土器内黒椀・両黒椀、瓦器椀、瓦質土器こね鉢、緑釉陶器、東播系須恵質こね鉢、輸入陶磁器、近世陶磁器、サヌカイト片、金属片、瓦など、多種多様な遺物が出土している。このうち、弥生土器高杯（377）・甕（378）、土師器甕（379・380）・椀（382）・皿（383）・羽釜（384・385）、黒色土器内黒椀（381）、白磁碗（386）・皿（388）、青磁碗（387）・皿（389）、湊焼甕（390）、瀬戸美濃染付小碗（391）を図示した。

〔第３層出土遺物〕（図 110）

第３層からは、弥生土器広口壺・甕、土師器杯・皿・椀・高杯、土師質羽釜・移動式竈、黒色土器内黒椀・両黒椀、瓦器椀、須恵器杯身・杯蓋・高杯・椀・甕、東播系須恵器こね鉢、瓦などが出土した。このうち、土師器皿（392・393）・椀（394）・甕（395）、黒色土器内黒椀（396）を図示した。

〔第 4a 層出土遺物〕（図 110）

第 4a 層からは、弥生土器壺・甕、土師器椀・杯、土師質羽釜、黒色土器内黒椀・両黒椀、瓦器椀、須恵器杯身・杯蓋・壺・甕、灰釉陶器などが出土した。このうち、弥生土器壺（397）・甕（398）、土師器杯（399）、須恵器杯身（400）、灰釉陶器壺（401）を図示した。

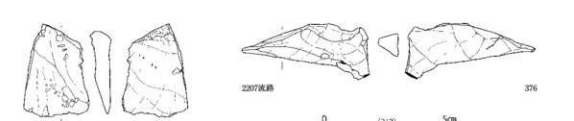


図109　3-2区　第６面　373・2207流路　出土遺物

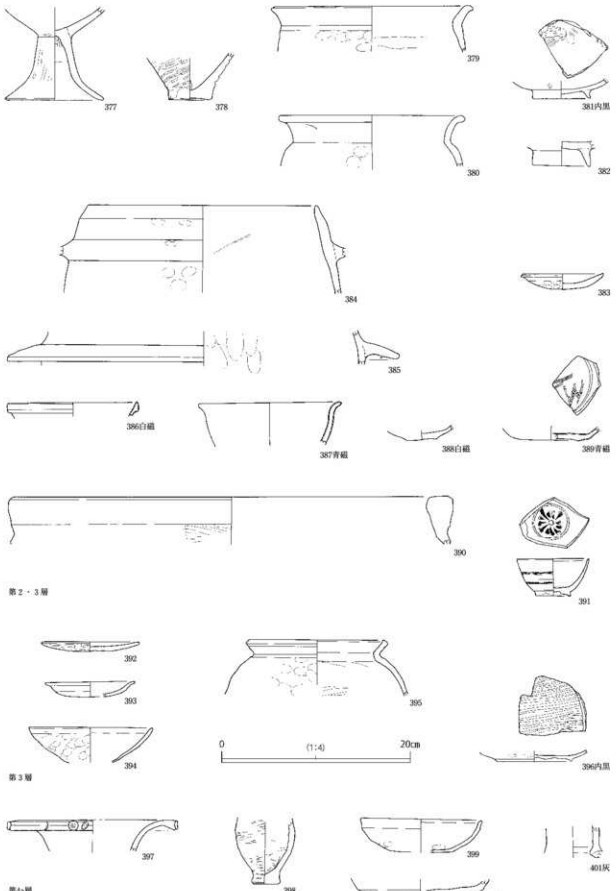


図110　３区　第２～４a層　出土遺物

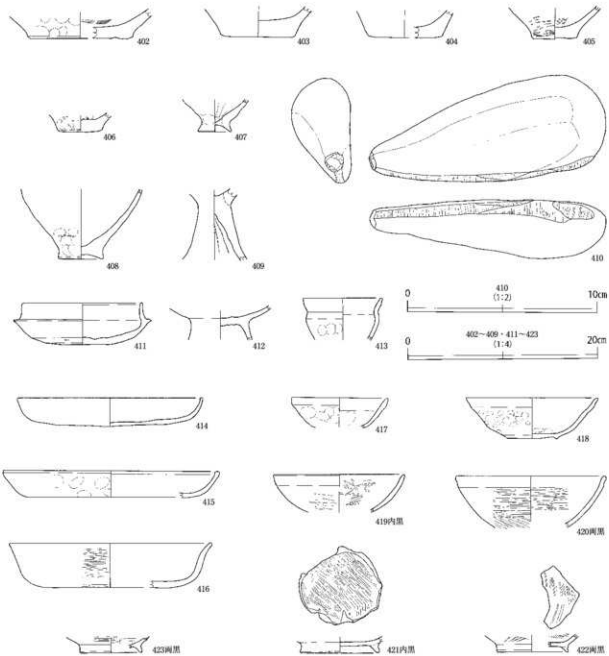


図111　3区　第4b層　出土遺物

〔第 4b 層出土遺物〕（図 111・112）

第 4b 層からは、弥生土器甕・壺・鉢・高杯、土師器皿・杯・高杯・小型鉢・甕、黒色土器内黒椀・両黒椀、瓦器椀、須恵器杯身・杯蓋・高杯・長頸壺・甕・鉢・竈、輸入陶磁器、瓦、石器、鉄製品などが出土した。このうち、弥生土器壺（402・403）・甕（404 ～ 406）・高杯（409）、土師器鉢（407・408）・小形壺（413）・皿（414・415）・杯（416）・椀（417・418）・盤（424）・鉢（425・427・428）・甕（426、429）、磨石または敲石（410）、須恵器杯身（411）・高杯（412）、黒色土器内黒椀（419・421）・両黒椀口縁部（420・422・423）、土師質鍋（430）・羽釜（431）を図示した。

〔第 5 層出土遺物〕（図 112）

弥生土器壺（432）を図示した。下部の第 5 面遺構に由来する混入資料と考えられる。

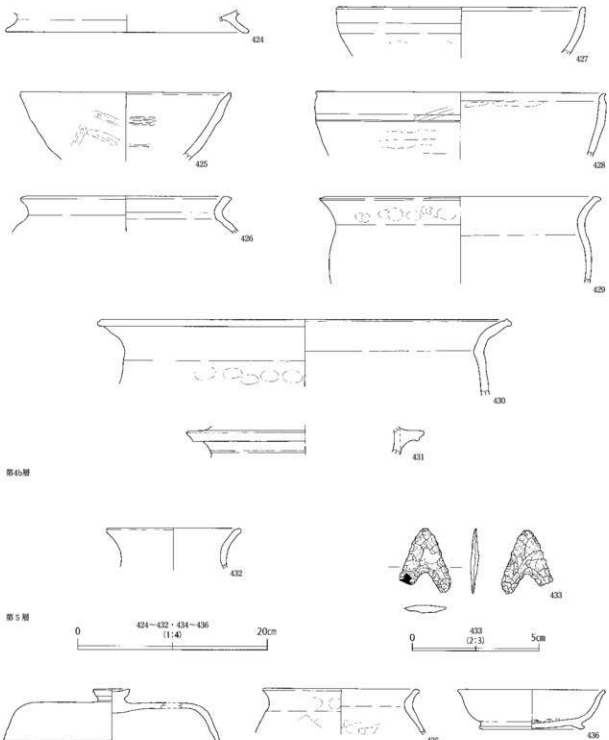


図112　3区　第4b・5層　出土遺物

〔第7層出土遺物〕（図112）

サヌカイト製石鏃（433）を図示した。

なお、土層観察用アゼの掘削時にも遺物が出土しており、土師器杯蓋（434）・甕（435）・杯（436）を図示した。ただし、これらの遺物の出土層位は不明である。

第３節　４・５区の成果

４・５区は、東側が今井戸川、西側が阪南大学野球グランド東側を流れる水路に挟まれた範囲である。なお、この範囲の南東隅には南西から北東方向に屈曲して流れる水路があり、これによって画された部分を４区とし、それ以外を５区とした。５区は土地使用条件から東西に二分し、５区東側にあたる４区の北側の区画を 5-1 区、西側の広い区画を 5-2 区とした。また、４区に関しては、東西に二分し、東側を 4-1 区、西側を 4-2 区とした。

１．基本層序　（図 113）

第１層　現代耕作土である。この上部に盛土が被る。

第２層　灰オリーブ色～にぶい黄色シルト混細砂などからなる。４・５区とも同じような堆積を示し、層厚は 0.15 ～ 0.21m を測る。

第３層　灰オリーブ色～灰黄褐色中砂混シルトなどからなる。４区での層厚は 0.01 ～ 0.10 mで、場所によってはみられない箇所がある。５区での層厚は 0.02 ～ 0.10m を測る。本層上面を第１面として調査をおこなった。第１面では東西方向の鋤溝群を検出した。

第4a層　褐色～暗灰黄色中砂混シルトからなる。層厚は 0.02 ～ 0.10 mを測る。４区ではほとんどみられず、５区においても堆積しない箇所があった。本層上面を第２面として調査をおこなった。４区では南北・東西方向の短く細い鋤溝や土坑、５区では東西方向を基調とした鋤溝を検出した。

第4b層　褐色シルト、にぶい黄橙色砂質シルトなどからなる。層厚は 0.01 ～ 0.08 mの非常に薄い層である。基本的に５区で僅かに認められたものの、４区には存在しなかった。本層上面を第３面として調査をおこない、5-2 区全域では南北方向に走る溝を、西側で掘立柱建物６棟・塀２列、土坑などを検出した。

第５・６層　第５層は黒褐色細砂混シルト・褐色粘土～シルト・灰黄色シルト・灰オリーブ色シルト混中～細砂からなる。第６層は黄灰色粘質シルト・暗灰黄色砂礫・オリーブ黒色粘土・明褐色粘土などからなる。層厚 0.23 ～ 0.80m を測る。第５・６層は部分的に分けられたが、大半の箇所では分離できなかった。第５層上面を第４面として調査をおこなった。第４面では、調査区東側の４区および 5-1 区で掘立柱建物、土坑や溝など、5-2 区で溝、土坑を検出した。

第７層　土壌化の進んだ黒褐色シルト質粘土からなる。層厚は 0.05 ～ 0.30 mを測る。５区では下位の第８・９層と分離して明確に確認できたが、４区では下位層と分離しえなかった。

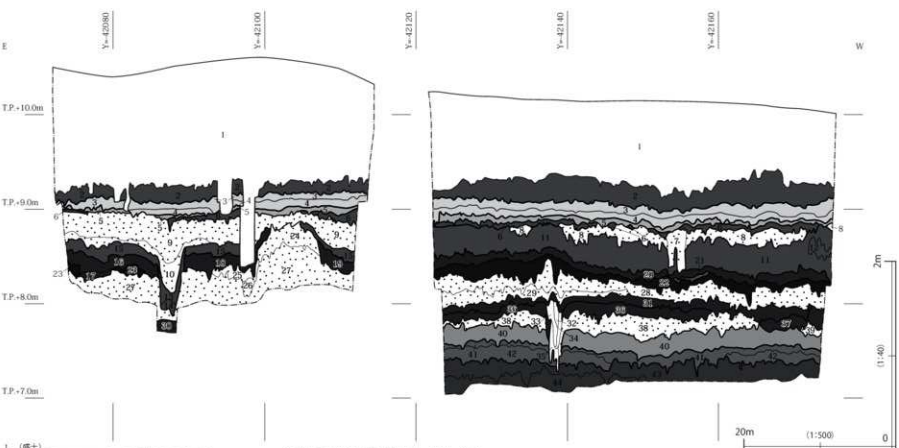
第８層　褐灰色粘質シルト～粘土からなる。全体的に層厚が薄いため、明瞭に第８層を確認できたのは５区の一部分のみであった。層厚は約 0.05 mを測る。

第９層　４区では第７～９層が明瞭に分離できず、僅かに東寄りの部分で確認できたのみである。褐灰色砂礫混粘質シルトからなり、層厚は約 0.10m である。５区では黒褐色砂礫混粘質シルトとして明瞭に確認できた。層厚は 0.02 ～ 0.27 mを測る。

第 10 層　暗灰黄色砂礫～粗砂・褐灰色シルト・暗灰黄色シルト～粘土などからなる。層厚は 0.30 ～ 0.80 mを測る。本層上面を第５面として調査をおこなった。

第 11 層　黒褐色シルト質粘土・暗オリーブ褐色細砂混シルトなどからなる、暗色帯である。層厚 0.15 ～ 0.30 mを測る。

第 12 層　暗灰黄色～黄褐色砂礫・灰色中砂からなり、少し固結する。層厚は 0.10 ～ 0.30 mを測る。



1 （盛土）
2 オリーブ黒 5Y3/2 シルト （現代耕作土層）[第1層]
3 浅黄 2.5Y7/4 土部は黄褐 10YR5/6 細礫混シルト [第2層]
4 灰オリーブ 5Y5/2～にぶい黄 2.5Y6/3 シルト混細砂 [第2層]
5 灰オリーブ 5Y4/2～灰黄褐 10YR6/2 中砂混シルト [第3層]
6 褐 10YR4/6 ～暗灰黄 2.5Y5/2 中砂混シルト [第4a層]
7 黒褐 7.5YR3/2 細砂混シルト [第5層]
8 褐 10YR4/6 粘土～シルト 灰黄 2.5Y6/2 シルト [第5層]
9 黄灰 2.5Y5/1 粘質シルト [第5層]
10 灰オリーブ 5Y5/2 シルト混中～細砂 [第5層]
11 黄灰 2.5Y5/1 粘質シルト [第6層]
12 暗灰黄 2.5Y5/2 砂礫 [第6層]
13 オリーブ黒 5Y3/1 粘土 僅かに細砂を含む [第6層]
14 黄灰 2.5Y5/1 砂礫 [第6層]
15 明褐 7.5YR5/8 粘土 [第6層]
16 黒褐 10YR3/1 砂礫混粘質シルト [第7～8層]
17 暗灰 5YR4/1 砂礫 [第7～8層]
18 黒褐 10YR3/2 砂混粘質シルト [第7～9層]
19 黄灰 2.5Y6/1 砂礫混粘質シルト [第7～9層]
20 黒褐 7.5YR3/1 シルト質粘土 [第7層]
21 暗灰 7.5YR4/1 粘質シルト～粘土 [第8層]
22 黒褐 2.5Y3/2･黒褐 10YR2/3 砂礫混粘質シルト [第9層]
23 暗灰 5YR4/1 砂礫混粘質シルト [第9層]
24 暗灰黄 2.5Y5/2 砂礫～粗砂 [第10層]
25 黄灰 2.5Y5/1 砂混シルト [第10層]
26 暗灰 10YR5/1 シルト 僅かに砂を含む [第10層]
27 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂～シルト [第10層]
28 灰黄褐 10YR4/2･褐 10YR4/4 礫 [第10層]
29 暗灰黄 2.5Y5/2･暗灰黄 2.5Y5/2･にぶい黄褐 10YR5/4 粘質シルト～粘土 [第10層]
30 黒褐 2.5Y3/1 シルト質粘土 [第11層]
31 暗オリーブ褐 2.5Y3/3～黒褐 10YR3/2 細砂混シルト [第11層]
32 灰黄褐 10YR6/2～にぶい黄褐 10YR5/3 細砂～中砂 [第11層中の流路]
33 にぶい黄橙 10YR7/2･暗灰 10YR5/1 シルト [第11層中の流路]
34 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト [第11層中の流路]
35 黒褐 2.5Y3/2～黒褐 10YR2/3～灰黄褐 10YR5/2 粘質シルト [第11層中の流路]
36 灰黄褐 10YR4/2 砂質シルト 黒褐 10YR2/2 シルト混砂礫 [第11～12層]
37 黒褐 2.5Y3/2 砂礫 [第11～12層]
38 （上部）暗灰黄 2.5Y4/2（下部）黄褐 2.5Y5/3 砂礫 [第12層]
39 灰 10Y5/1 中砂 [第12層]
40 灰オリーブ 5Y6/2 シルト～細砂 下半は黄褐 10YR5/8を呈する [第13層]
41 灰黄褐 10YR5/2 粘質シルト [第14層]
42 暗灰黄 2.5YS/2～緑灰 10G6/1 礫混シルト～粘質シルト [第14層]
43 灰 7.5Y6/1 砂礫混粘土～シルト [第15層]
44 緑灰 5G6/1 砂礫 [第15層]

図113 4・5区 南壁 断面図

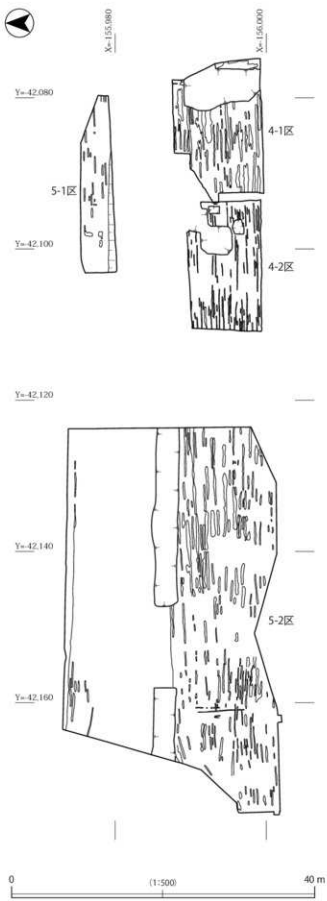


図114　4・5区　第1面　平面図

第13層　灰オリーブ色シルト～細砂からなる。層厚は0.13～0.31 mを測る。

第14層　灰黄褐色粘質シルト・暗灰黄色～緑灰色礫混シルト～粘質シルトからなる。層厚は0.20m前後である。

第15層　灰色砂礫混粘土～シルト・緑灰色砂礫からなる。層厚は調査範囲より下層に続くため最大0.40mまで確認できる。

2．第1面（図114～117、図版5-3・6-1・18-4）

4・5区の第1面の様相は次の通りである。

4-1区（図115）

遺構面の標高は、北東隅9.01m、北西隅8.99m、南東隅9.03m、南西隅9.02m、中央部分9.10mを測り、ほぼ平坦な地形を呈する。東西方向に走る鋤溝を検出した。確認した鋤溝の幅は、0.07～0.55mで、0.20～0.30mが主体をなす。また、中には複数の鋤溝が錯綜した状況を示すものもあり、幅が0.70～0.85mになるものがある。なお、検出長は様々で0.95～7.2mを測る。

4-2区（図115、図版5-3）

遺構面の標高は、北東隅8.87m、北西隅8.98m、南東隅8.91m、南西隅8.98m、中央部分8.99mを測り、ほぼ平坦な地形を呈する。東西方向に走る鋤溝を検出した。溝幅は、約0.10 mの細い溝が大半である。検出長は様々で1～6 mを測る。鋤溝群は東西両側に多く認められ、中央部では少ない。

5-1区（図116、図版6-1）

遺構面の標高は、北東隅8.95m、北西隅8.90m、南東隅8.98m、南西隅8.93m、中央部分8.97mを測り、ほぼ平坦な地形を呈する。東西方向に走る鋤溝を検出した。溝幅が0.2m前後の細い鋤溝が多く認められた。断続的な検出であったため、確認した長さは0.5～3.0mと短い溝が多かった。調査区南辺では東西に長い溝、あるいは落ち込みが確

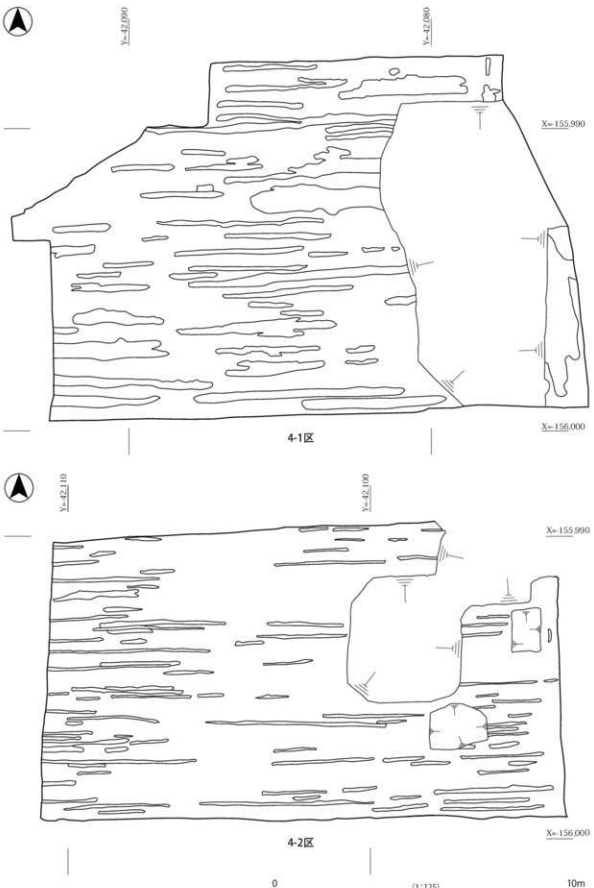


図115　4-1・2区　第1面　平面図

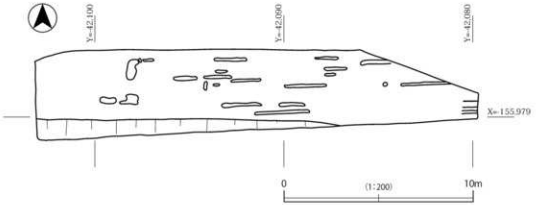


図116　5-1区　第1面　平面図

認できた。

5-2区（図117、図版18-4）

遺構面の標高は、北東隅8.96m、北西隅8.90m、南東隅9.04m、南西隅9.00m、中央部分8.98mを測り、ほぼ平坦な地形を呈する。東西方向の鋤溝を検出した。調査区中央部では、東西方向の攪乱を境として、北側では鋤溝がほとんど検出できなかった。これは、後世に北側部分が3層上層の土壌改良を行ったためと考えられる。南側で検出した鋤溝は長いもので約21.8mを測るが、大半の鋤溝は長さ10m未満であり、長さが10mを越す鋤溝は少ない。東側の一部で幅0.5～0.6mを測る幅広の鋤溝が認められたが、大半は幅0.2～0.3m前後の細い溝である。なお、南西部において、南北方向の鋤溝が僅かに認められた。

3．第2面（図118～120、図版5-4・5-5）

4-1区（図118・119、図版5-4）

遺構面の標高は、北東隅8.80m、北西隅8.89m、南東隅8.95m、南西隅8.90m、中央部分8.89mで、北東に向かって緩やかに下がる地形を呈する。鋤溝群などを検出した。

鋤溝の多くは南北方向を指向し、東西方向の鋤溝は少ない。溝幅は第1面の鋤溝と同様に幅の狭いものが多く、長さも2mを越すものは少ない。図119で鋤溝が第2面の本来の遺構下面として表現しているが、実際は鋤溝が上位の遺構である。

また、鋤溝以外に溝群や土坑を確認した。南北に走る424溝を西端として、東側に幾つかの直交する421・425・427溝が掘られている。421・425・427溝は、幹線水路である424溝に繋がっており、排水や取水のための溝として機能していたと考えられる。これらの溝以外にも、417・426・430溝などの東西に走る溝が認められる。こうした溝群の上部は第3層の形成時に削られ、溝の下部のみが残存したものと考えられる。

4-2区（図118、図版5-5）

遺構面の標高は、北東隅8.95m、北西隅8.90m、南東隅8.96m、南西隅8.83m、中央部分8.92mで、南西に向かって緩やかに傾斜を持つ。第3層下面の遺構と第4層上面の遺構を重複して検出した。第3層下面の遺構は鋤溝で、東西・南北方向が見られる。両者の切り合いからは、概ね南北方向の溝が古く、東西方向が新しいことが分かる。鋤溝の幅は0.10～0.50mを測るが幅0.10～0.30mの細い溝が主体をなす。長さは0.30～6.00mを測り、やや長い溝か、1m未満の短い溝に大分できる。

第4層上面の遺構としては、調査区西端で南北に走る655・656溝、中央付近で654土坑が認め

図117　5-2区　第1面　平面図

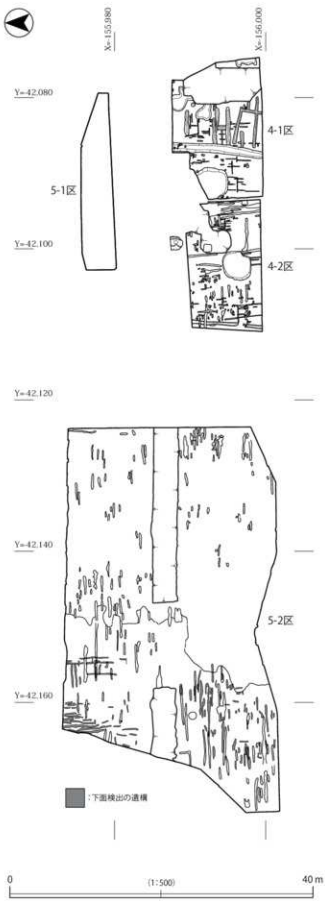


図118　4・5区　第2面　平面図

られた。

5-1 区

遺構面の標高は、北東隅 8.89 m、北西隅 8.90 m、南東隅 8.89 m、南西隅 8.90 m、中央部 8.90 mで、ほぼ平坦な地形を呈する。遺構は検出されなかった。中央部のみ第 4b 層の暗褐色層がきわめて薄く堆積していた。

5-2 区（図 118・121）

遺構面の標高は、北東隅 8.82 m、北西隅 8.76 m、南東隅 8.82 m、南西隅 8.81 m、中央部分 8.83 mを測り、ほぼ平坦な地形を呈する。全域で東西方向の鋤溝群を検出した。鋤溝は西側に多く認められ、東側では少ない。また、北東部においては第 1 面の同箇所で確認できなかった鋤溝群がみられる。鋤溝の幅は 0.30 m 未満の狭いものが多い。検出長は最長 10.5m を測るが、大半のものは約 1 ～ 5m の長さである。

鋤溝からの出土遺物には、瓦器小皿（444）がある。

溝

4-1 区では、ほぼ正方位を示す溝群を検出した。4-2 区では、西端で南北方向の溝を検出した。

〔417 溝〕（図 119・121、図版 5-4）

4-1 区中央北側付近、10-9i で検出した。東西方向の溝である。後述する溝のように 424 溝には接続していない。長さ 3.30m、幅 0.40 ～ 0.63m、深さ 0.10m を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土である。遺物は出土しなかった。

〔421 溝〕（図 119・121、図版 5-4）

4-1 区中央付近、10-9j で検出した。424 溝の中程より東側に分岐する東西方向の溝である。また、溝の中程で二又に分かれる。長さ 3.42m・2.75mで、幅は双方とも約 0.5m前後、深さは双方とも 0.05 ～ 0.11m を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は黄褐色粘質シルトで

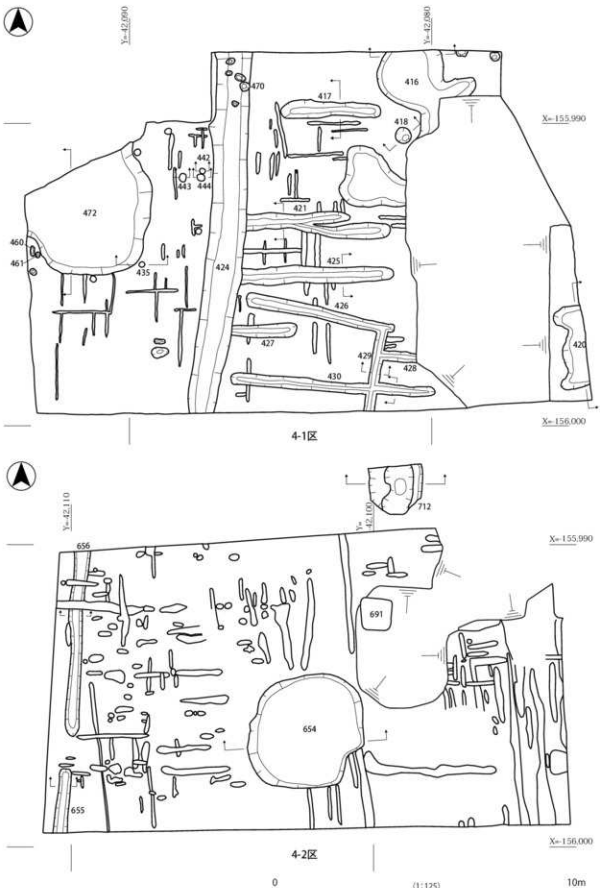


図119　4-1・2区　第2面　平面図

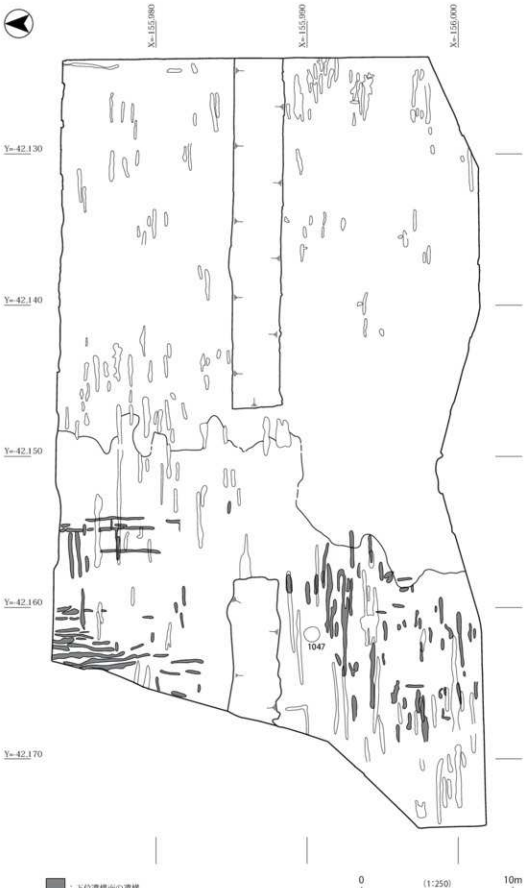


図120　5-2区　第２面　平面図

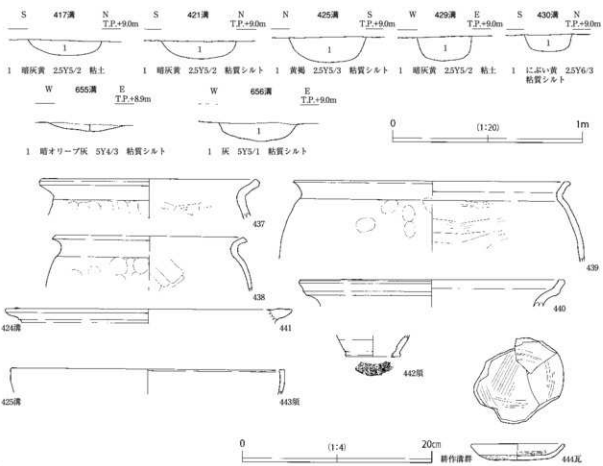


図121　4区　第2面　各遺構　断面図　出土遺物

ある。出土遺物には、土師質鉢などがある。

〔424 溝〕（図 119・121、図版 5-4）

4-1 区中央付近、10-9i・9j で検出した、南北方向の溝である。本溝から東側に、421・425・427 溝が分岐している。長さ 12.05m、幅 0.98 ～ 1.16m、深さ 0.1m 前後を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は灰オリーブ色シルト、暗褐色砂質シルトなどである。

出土遺物には、土師器杯・鉢・甕・羽釜・鍋、黒色土器内黒椀、須恵器などがある。このうち、土師器甕（437 ～ 440）、土師質羽釜（441）、須恵器壺（442）を図示した。

〔425 溝〕（図 119・121、図版 5-4）

4-1 区中央付近、10-9j で検出した。424 溝の中程より東側に分岐する東西方向の溝である。長さ約 5.0m、幅 0.48 ～ 0.62m、深さ 0.12m を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は黄褐色粘質シルトである。

出土遺物には、土師器、須恵器などがある。このうち、須恵器鉢（443）を図示した。

〔429 溝〕（図 119・121、図版 5-4）

4-1 区中央南側付近、10-9j で検出した。426 溝東端より南側に分岐する南北方向の溝である。また溝の北側では 428 溝が東側に分岐し、南側では 430 溝が交差する。この交差部分の切り合いは認められない。長さ 2.95m、幅 0.35m、深さ 0.12m を測る。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土である。出土遺物には、土師器小皿・鉢などがある。

〔430 溝〕（図 119・121、図版 5-4）

4-1 区中央南側付近、1O-8j・9j で検出した、東西方向に走る溝である。溝東側で 429 溝と交差する。長さ 6.74m、幅 0.35m、深さ 0.05m ～ 0.08m を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土はにぶい黄色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

〔655 溝〕（図 119・121、図版 5-5）

4-2 区西端、2O-1j・2j で検出した。南北方向に延びるが、北側が少し東に振る。溝の南側は調査区外へと延びている。656 溝と本来は一続きであったと考えられる。長さ 2.13m、幅 0.39 ～ 0.48m、深さ 0.06m を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は暗オリーブ色シルト質粘土である。遺物は出土しなかった。

〔656 溝〕（図 119・121、図版 5-5）

4-2 区西端、2O-1j・2j で検出し、南北方向に走る。溝の北側は調査区外へと延びている。断面は浅い皿状を呈する。埋土は灰色シルト質粘土である。長さ 6.13m、幅 0.36 ～ 0.53m、深さ 0.08m を測る。この溝を切って東西方向の撹溝が掘られている。遺物は出土しなかった。

井戸

〔691 井戸〕（図 119、122 ～ 124、図版 12-1 ～ 12-3）

4-2 区中央やや北東寄り、1O-10j、2O-1j で検出した。大きな攪乱坑の底に残存していた。掘形の大きさは、長辺 1.04m、短辺 1.02m を測り、深さ 1.50m で、ほぼ垂直に掘り込まれている。攪乱によって井戸上部は削平されていたが、遺存していた部分においては、上位部分に板材による井戸枠が構築されており、下位は素掘りで湧水層に至る。なお、井戸底には曲げ物や土器を利用した水溜部分は存在しなかった。

井戸の構造は、4 隅の隅柱を支柱にし、横桟を南・北辺と東・西辺の高さを違えて隅柱に差し込んでいる。この外側に 1 面につき 2 枚の板材を縦方向に入れて井戸枠としている。

なお、廃絶後、井戸内の堆積が進まないうちに壊れたためか、西及び北辺の井戸枠が外れて歪んだ状態で検出された。本来、井戸枠は東西南北の正方位を指向していたものと思われる。

出土遺物には、井戸枠内からの土師器、須恵器甕、黒色土器などが、掘形内からの須恵器壺などが、それぞれある。このうち、東面北縦板（445）、東面南縦板（446）、東面横桟（447）、南東隅柱（448）、西面南縦板（449）、北東隅柱（450）の井戸枠材を図示した。

土坑

〔416 土坑〕（図 119・125、図版 5-4）

4-1 区北東隅付近、1O-8i・8j・9i・9j で検出した。長さ 2.78m、幅 2.11m、深さ 0.27m を測る。平面は不定形である。底面には凹凸がみられ、最深部は北側に寄っている。埋土は、にぶい黄色粘質シルト、灰黄色粘質シルトである。

出土遺物には、弥生土器甕、土師器杯、須恵器などがあり、このうち、土師器杯（451）を図示した。

〔418 土坑〕（図 119・125、図版 5-4）

4-1 区北東隅付近、1O-9j で検出した。416 土坑の南側に位置する。長径 0.54m、短径 0.50m、深さ 0.28m を測る。平面は楕円形を、断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土である。

出土遺物には、弥生土器、土師器などがある。

〔420 土坑〕（図 119・125、図版 5-4）

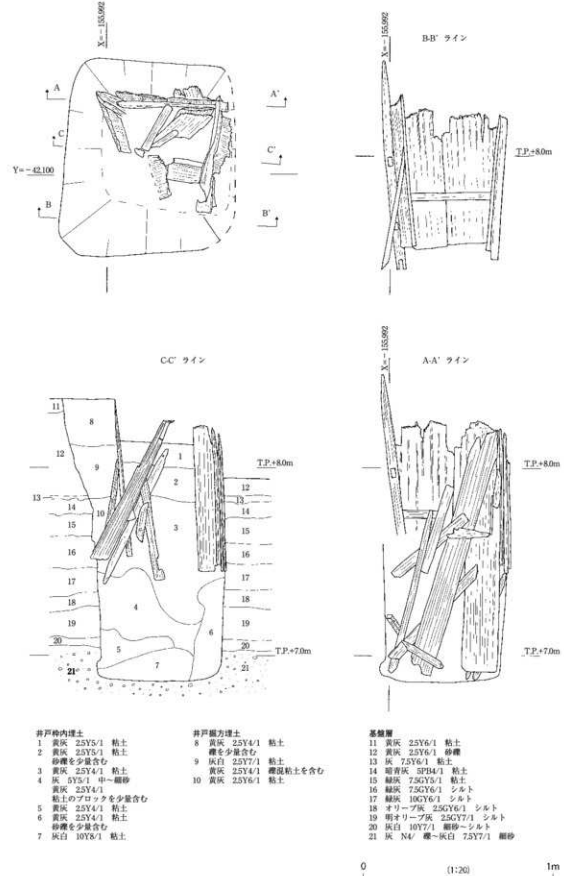


図122 4-2区 第2面 691井戸 平・断・立面図

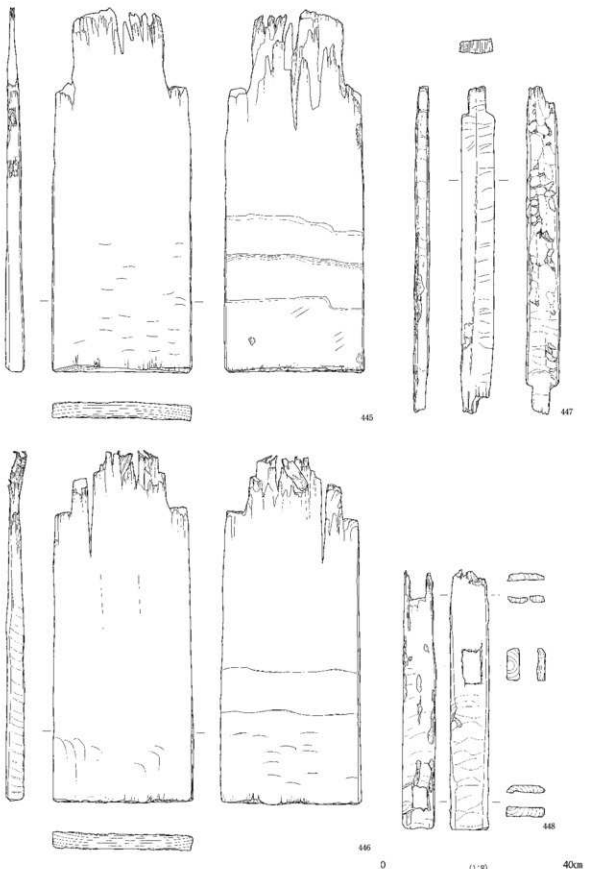


図123　4-2区　第2面　691井戸　出土遺物（1）

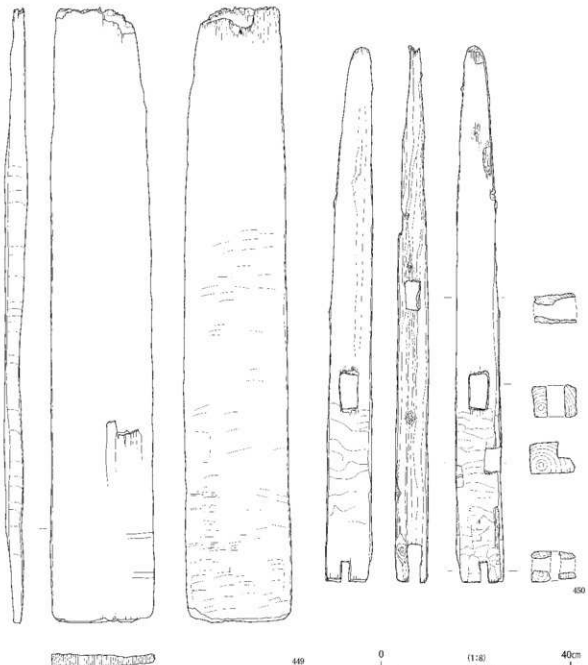


図124　4-2区　第2面　691井戸　出土遺物（2）

4-1 区の南東隅付近、1O-8j で検出した。南北 3.02m、東西残存長 0.97m、深さ 0.17m を測る。東側は側溝に切られているが、現状で平面は不定形である。断面は浅い皿状を呈する。埋土はにぶい黄色粘質シルト、浅黄色粘質シルトである。出土遺物には、弥生土器、土師器などがある。

〔470 土坑〕（図 119・125、図版 5-4・14-1）

4-1 区中央北端付近、1O-9i で検出した。424 溝が埋没した後に掘削されている。長径 0.32m、短径 0.30m、深さ 0.19m を測る。平面は楕円形を呈する。

出土遺物には、土師器皿・椀、黒色土器両黒椀、瓦器椀などがあり、このうち土師器「て」字口縁皿（452 ～ 454）・椀（455）、黒色土器両黒椀（456 ～ 461）を図示した。10 世紀後半から 11 世紀前半

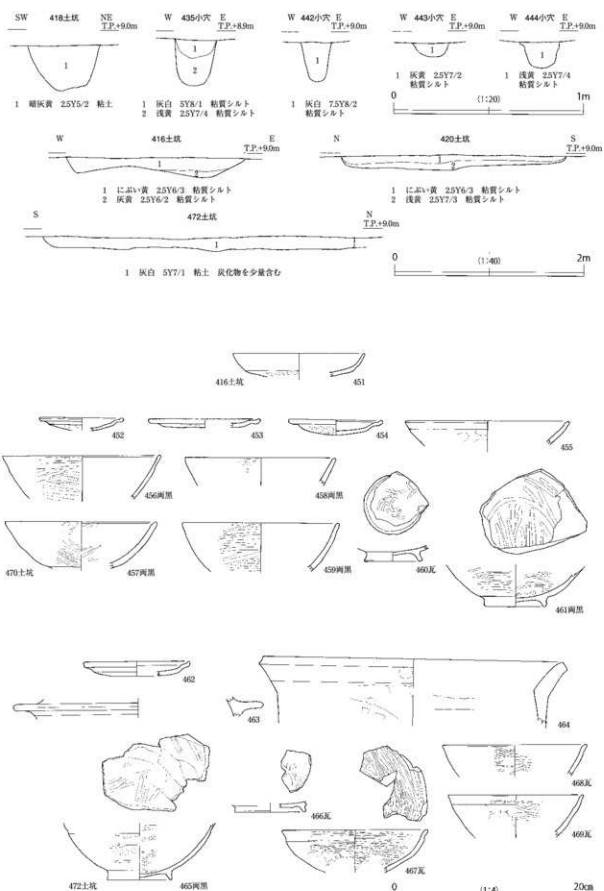


図125　4・5区　第2面　各遺構　断面図　出土遺物

の所産と思われる。

〔472 土坑〕（図 119・125、図版 5-4）

4-1 区北西端、1O-9j・10j で検出した。長辺 4.08m、短辺 3.95m、深さ 0.13m を測る。平面は隅丸方形に近い形状を呈する。北側は攪乱のために削られている。断面は浅い皿状を呈する。埋土は灰白色粘土で、炭化物を僅かに含む。

出土遺物には、土師器皿・甕、土師質羽釜・鍋、黒色土器両黒椀、瓦器椀、須恵器壺などがあり、このうち土師器皿（462）、土師質羽釜鍔（463）・鍋（464）、黒色土器両黒椀（465）、瓦器椀（466 ～ 469）を図示した。土師器皿や瓦器椀の様相から、11 世紀後半から 12 世紀前葉の所産と考えられる。

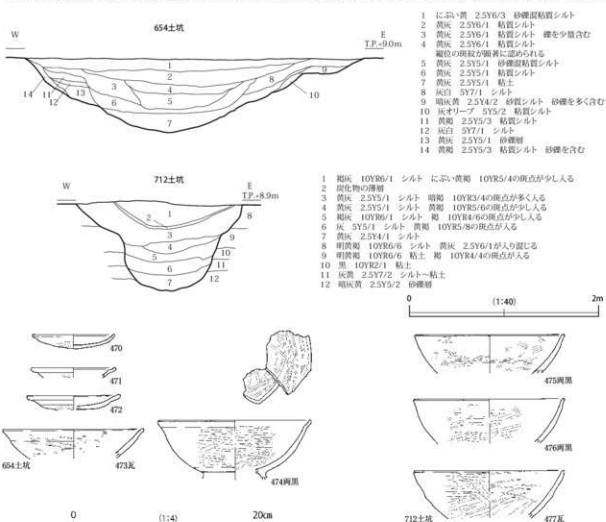
〔654 土坑〕（図 119・126、図版 5-5）

4-2 区中央、2O-1j で検出した。東西・南北とも 3.75m、深さ 0.75m を測る。平面は少し歪んだ隅丸方形を呈する。埋土はにぶい黄色砂礫混粘質シルトや粘土である。

出土遺物のうち、土師器皿（470 ～ 472）、瓦器椀（473）、黒色土器両黒椀（474）を図示した。11 世紀前半後葉頃の所産と考えられる。

〔712 土坑〕（図 119・126、図版 13-8）

4-2 区北東側、側溝外の北側斜面の 1O-10i、2O-1i で検出した。長さ 1.76m、幅 1.61m、深さ 0.93m



1 にぶい黄 2.5Y6/3 砂礫混粘質シルト
2 黄灰 2.5Y6/1 粘質シルト
3 黄灰 2.5Y6/1 粘質シルト 礫を少量含む
4 黄灰 2.5Y6/1 粘質シルト
縦位の斑状が顕著に認められる
5 黄灰 2.5Y5/1 砂礫混粘質シルト
6 黄灰 2.5Y5/1 粘質シルト
7 黄灰 2.5Y5/1 粘土
8 灰白 5Y7/1 シルト
9 暗灰黄 2.5Y4/2 砂質シルト 砂礫を多く含む
10 灰オリーブ 5Y5/2 粘質シルト
11 黄褐 2.5Y5/3 粘質シルト
12 灰白 5Y7/1 シルト
13 黄灰 2.5Y5/1 砂礫層
14 黄褐 2.5Y5/3 粘質シルト 砂礫を含む

1 褐灰 10YR6/1 シルト にぶい黄褐 10YR5/4の斑点が少し入る
2 炭化物の薄層
3 黄灰 2.5Y5/1 シルト 暗褐 10YR3/4の斑点が多く入る
4 黄灰 2.5Y5/1 シルト 黄褐 10YR5/6の斑点が少し入る
5 褐灰 10YR6/1 シルト 褐 10YR4/6の斑点が少し入る
6 灰 5Y5/1 シルト 黄褐 10YR5/8の斑点が入る
7 黄灰 2.5Y4/1 シルト
8 明黄褐 10YR6/6 シルト 黄灰 2.5Y6/1が入り混じる
9 明黄褐 10YR6/6 粘土 褐 10YR4/4の斑点が入る
10 黒 10YR2/1 粘土
11 灰黄 2.5Y7/2 シルト～粘土
12 暗灰黄 2.5Y5/2 砂礫層

図126　4区　第2面　654・712土坑　断面図　出土遺物

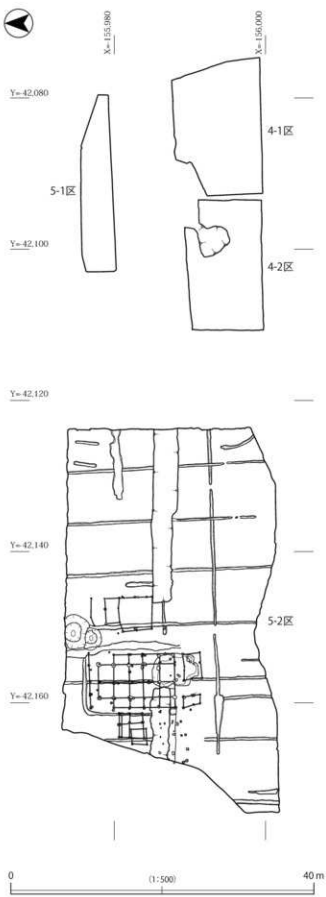


図127　4・5区　第3面　平面図

を測る。調査区北側を横切る水路の南向き斜面に土坑の断面が見えたため調査をおこなった。一部しか確認できなかったため、平面形は不明である。埋土は褐灰色シルトや黄灰色シルト、灰色シルトで、途中に薄い炭層を挟む。

出土遺物には、土師器椀・甕、土師質羽釜、黒色土器両黒椀、瓦器椀などがあり、このうち黒色土器両黒椀（475・476）、瓦器椀（477）を図示した。

小穴

〔435 小穴〕（図 119・125、図版 5-4）

4-1 区中央西側付近、1O-9j で検出した。472 土坑の南東側に位置する。長径 0.20m、短径 0.18m、深さ 0.5m を測る。平面は楕円形を呈する。埋土は灰白色粘質シルト、浅黄色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

〔442 小穴〕（図 119・125、図版 5-4）

4-1 区北西隅付近、1O-9j で検出した。424 溝の西岸に位置する。規模は、長径 0.30m、短径 0.17m、深さ 0.40m を測る。埋土は灰白色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

〔443 小穴〕（図 119・125、図版 5-4）

4-1 区北西隅付近、1O-9j で検出した。424 溝の西岸に位置する。長径 0.27m、短径 0.21m、深さは 0.10m を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は灰黄色シルトである。遺物は出土しなかった。

〔444 小穴〕（図 119・125、図版 5-4）

4-1 区の北西隅付近、1O-9j で検出した。424 溝の西岸に位置する。長径 0.29m、短径 0.21m、深さは 0.25m を測る。埋土は浅黄色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。

小結

小穴は、深くしっかりとした掘形をもつものが多かったが、性格は不明である。また、攪乱底部から検出した 691 井戸と、調査区北断面にかかり検出した 712 土坑は、いずれも第 3 面か第 4 面の遺構と考えられる。

4．第3面（図 127・128、図版 19-5）

第3面の調査は、第 4b 層上面でおこなったが、同層が確認できたのは5区のみである。また、遺構が確認できたのは、5区のうちの 5-2 区のみである。従って、以下の記述は 5-2 区に関してのものとなる。

遺構面の標高は、北東隅 8.82 m、北西隅 8.76 m、南東隅 8.82 m、南西隅 8.81 m、中央部分 8.83 mを測り、北西側がやや下がるがほぼ平坦な地形を呈する。東西・南北方向に走る溝や土坑、掘立柱建物5棟などを検出した。

主要な溝としては、調査区全域において、東西方向が1条、南北方向が7条認められる。また、調査区西側においては掘立柱建物群や溝、土坑などを検出した。建物の中には、3面庇かと想定される比較的大きなものも存在する。

掘立柱建物（図 128、図版 19-5）

5-2 区の北西側付近で、瓦器椀などを出土する建物群や土坑、溝などを検出した。大型の建物である建物 19 の西・北側は 1040 溝で区画する。建物 19 廃絶後、建物の南東隅に大型土坑である 1044 土坑が掘られている。また、建物北東側にも大型土坑である 1038・1717 土坑が掘られている。

建物 19 は同一箇所に柱の掘形が複数検出できることから、部分的な建替えがあったとみられる。また、この建物の西側では小型の掘立柱建物2棟を、1038 土坑南東側では塀1条と掘立柱建物1棟を、1044 土坑南側では掘立柱建物2棟を、それぞれ検出した。

〔掘立柱建物 19〕（図 128 ～ 130、図版 19-5・20-1・21-2）

5-2 区の北西隅付近、2O-6h・6i・7h・7i で検出した。西側および北側を 1040 溝で区画された2面庇の総柱建物である。一見すると、東側も 1039 溝によって画されているようだが、塀2の東端である 1913 柱穴がこの溝に切られていることから建物との関係は希薄と思われる。建物北側の 1040 溝との間には、塀2が存在する。

本建物は、南北5間×東西2間の建物に、東西両側に1間の庇が付く2面庇の構造をとる。ただし、東西の庇は北側1間分には存在せず、南側4間分にのみ取り付く。建物は軸をN - 1° - Wにおく。柱間は南北約 2.0m・東西約 2.2m を測る。建物の規模は、桁行 10.12m、梁間 4.43m を測り、面積は 44.8 ㎡である。東側庇の張り出しは約 1.3m を測り、南北長は 7.95m を測る。西側庇の張り出しは約 1.4m を測り、南北長は 8.07m を測る。西側庇列の柱掘形は同一箇所で2～3基認められる部分があり、また建物にも部分的に柱痕跡が2個認められる箇所があることから、全体的な建替えではなく、部分的な建替えが想定できる。

各柱穴からの出土遺物には、1152 柱穴から瓦器椀（478・479）が、1155 柱穴から土師器皿（480）、瓦器小皿（481）・椀（482）、土師質羽釜（483）が、1158 柱穴から土師器小皿（487）、瓦器小皿（488）・椀（489）、土師器甕または土師質羽釜（490）が、1797 柱穴から土師器杯（484）、瓦器椀（485）が、1810 柱穴から瓦器椀（486）が、1866 柱穴から土師器小皿（491）、瓦器椀（492）、土師質羽釜（493）が、1877 柱穴から土師質羽釜（494）が、1910 柱穴から瓦器椀（495）が、それぞれある。この他に土師器椀・鉢、黒色土器両黒椀、須恵器や、用途不明だが被熱痕がある石材などが出土した。

〔塀2〕（図 128 ～ 130、図版 19-5）

5-2 区の北西隅付近、2O-6h・7h で検出し、建物 19 の北側約 1.0m、1040 溝の南約 0.5 m付近に位置する。塀は東西方向4間で、軸をN -87.5- Eにおく。柱間は約 2.0m、全長約 7.4 mを測る。

各柱穴からは、土師器皿・椀、瓦器皿・椀などが出土しており、このうち、1807 柱穴から出土した

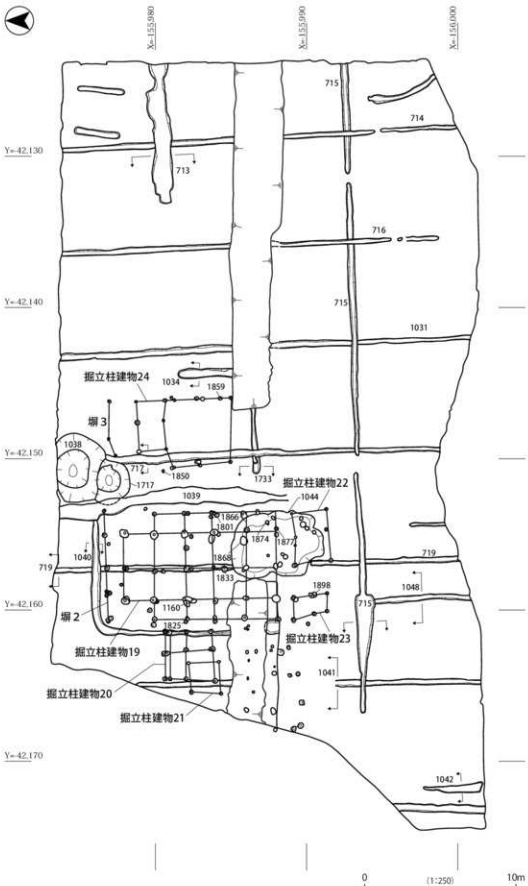


図128　5-2区　第3面　平面図

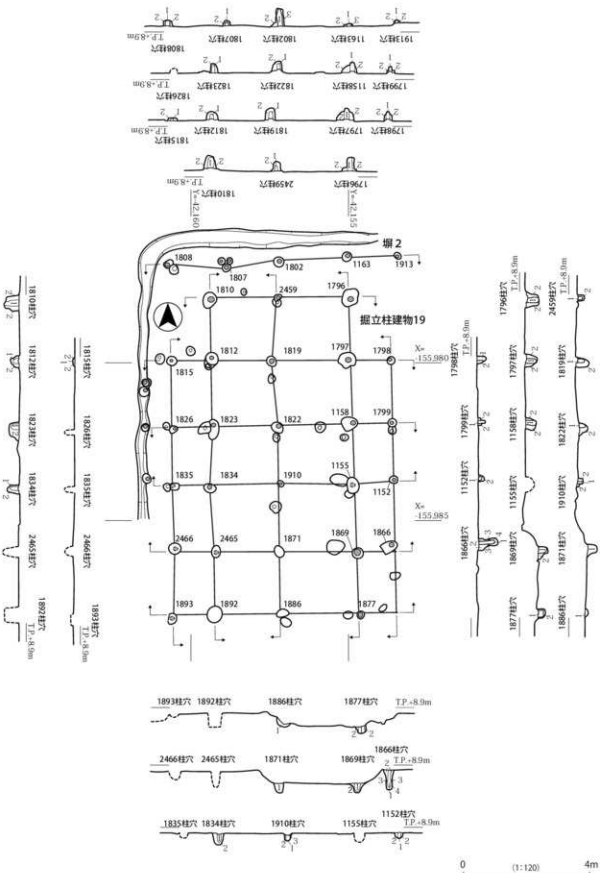


図129　5-2区　第3面　掘立柱建物19・塀2　平・断面図

掘立柱建物 19・塀 2　埋土注記

〔掘立柱建物 19〕

1152 柱穴
1　灰黄　2.5Y7/2　細砂
2　黄褐　2.5Y5/6　シルト　土器を含む

1158 柱穴
1　黄褐　2.5Y5/3　細砂～シルト
2　オリーブ褐　2.5Y4/3　細砂～シルト

1796 柱穴
1　灰黄褐　10YR5/2　シルト黄褐　10YR5/6
　シルトブロック・炭化物を少量含む
2　灰黄　2.5Y6/2　細砂　オリ・ブ褐　2.5Y4/4
　シルトブロックを含む

1797 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y4/2　シルト　にぶい黄褐
　10YR5/4　シルトブロック・土器・炭化物含む
2　灰黄　2.5Y6/2　細砂　土器を含む

1798 柱穴
1　にぶい黄　2.5Y6/3　シルト
2　黄灰　2.5Y5/1　シルト

1799 柱穴
1　オリーブ褐　2.5Y4/3　シルト　土器を含む
2　灰黄　2.5Y7/2　細砂

1810 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y5/2　砂質シルト
2　黄褐　2.5Y5/3　砂質シルト

1812 柱穴
1　灰黄　2.5Y6/2　細砂
2　暗灰黄　2.5Y4/2　シルト

1815 柱穴
1　黄灰　2.5Y6/1　シルト
2　にぶい黄橙　10YR7/4　シルト

1819 柱穴
1　にぶい黄褐　10YR5/3　細砂～シルト
2　暗灰黄　2.5Y5/2　シルト

1822 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y4/2　シルト
2　黄灰　2.5Y5/1　シルト

1823 柱穴
1　黄灰　2.5Y5/1　シルト
2　黄灰　2.5Y6/1　シルト　にぶい黄橙
　10YR6/4　シルトがブロック状に入り混じる

1834 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y5/2　シルト
　暗灰黄　2.5Y4/2　シルトが全体に混じる
2　暗灰黄　2.5Y5/2　シルト
　オリーブ褐　2.5Y4/3　シルト
　が点状に混じる

1866 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y4/2　砂質シルト　土器を含む
2　黄灰　2.5Y4/1　シルト
3　灰　5Y4/1　シルト
4　灰　5Y5/1　シルト

1869 柱穴
1　オリーブ黒　5Y3/2　シルト　土器を含む
2　灰オリーブ　5Y4/2　シルト
　褐　10YR4/6　シルトブロックが混じる

1871 柱穴
1　黒褐　2.5Y3/2　シルト
　暗灰黄　2.5Y5/2　シルトブロックを含む
　炭化物を少量含む

1877 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y4/2　シルト
2　褐　10YR4/4　シルト

1886 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y5/2　シルト

1910 柱穴
1　灰黄褐　10YR5/2　シルト
　炭化物を少量含む
2　にぶい黄　2.5Y6/3　シルト
3　灰黄　2.5Y6/2　細砂

2459 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y4/2　シルト
2　灰黄褐　10YR5/2　細砂～シルト

〔塀 2〕

1163 柱穴
1　灰黄　2.5Y6/2　細砂
2　灰黄　2.5Y6/2　細砂　褐　10YR4/4
　砂質シルトが混じる
3　黄褐　2.5Y5/3　細砂

1802 柱穴
1　黄灰　2.5Y4/1　粘土
2　黄褐　2.5Y5/3　細砂
3　灰黄　2.5Y6/2　粘質シルト

1807 柱穴
1　灰黄　2.5Y6/2　細砂
2　黄灰　2.5Y5/1　シルト

1808 柱穴
1　暗灰黄　2.5Y5/2　細砂
2　にぶい黄　2.5Y6/3　細砂

1913 柱穴
1　黄灰　2.5Y4/1　粘土
2　黄灰　2.5Y5/1　シルト

瓦器小皿（496・497）・椀（498）を図示した。

〔1040 溝〕（図 128～130・139、図版 19-5）

5-2 区の北西隅付近、2O-6h・6i・7h・7i で検出した。建物 19 の西側と北側を囲うように、L 字状の配置をなしている。南北部分で長さ 8.6m、幅 0.24 ～ 0.33 m、深さ 0.04m を、東西部分で長さ 7.25m、幅 0.38 ～ 0.67 m、深さ 0.04 ～ 0.19m を、それぞれ測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は黄灰色シルトである。建物 19 との位置関係から、建物を画する溝としての機能が想定できる。

出土遺物には、土師器小皿、黒色土器内黒椀、瓦器、須恵器甕・長頸壺、白磁碗などがあり、このうち、瓦器椀（499）を図示した。

〔掘立柱建物 20〕（図 128・131・135、図版 19-5・20-2・21-3）

5-2 区西端中央付近、2O-7i で検出した。南北 2 間×東西 2 間の建物で、北側に庇を取り付ける構造

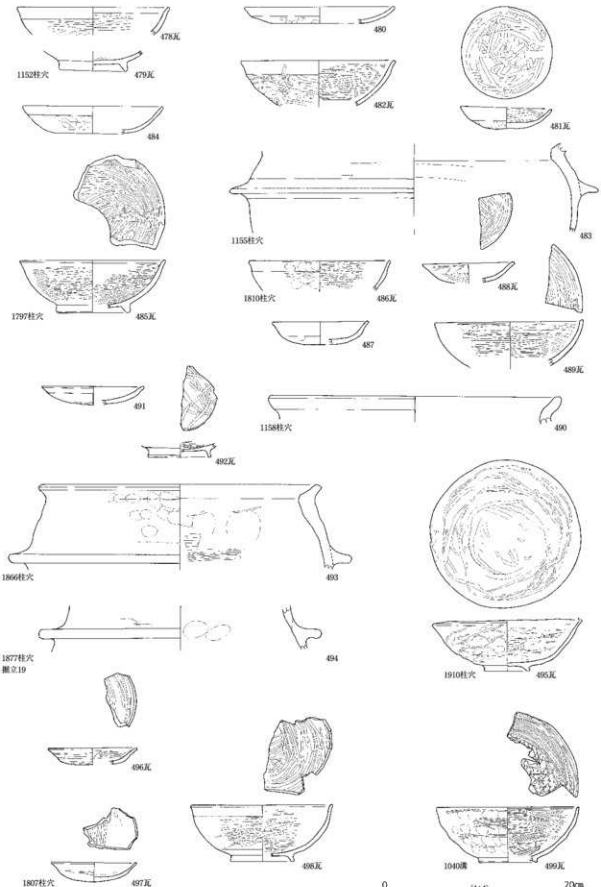


図130　5-2区　第3面　各遺構　出土遺物（1）

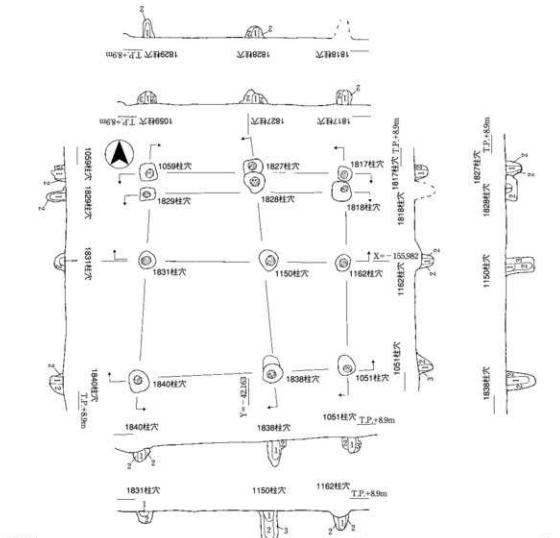


図131　5-2区　第3面　掘立柱建物20　平・断面図

を想定した。軸をN－1°－Eにおく。建物の規模は、桁行が南側で3.36 m、北側で3.18 m、梁間が東側で2.90 m、西側で2.98 mを測る。北側の庇の張り出しは約0.3mと短く、束柱や建て替えの可能性も想定できる。

建物の南西側には建物21が重複し、東側には建物19がある。また、建物20の東側柱列は1040溝に切られる形で検出した。1040溝と建物19との関係を考え合わせると、建物20は建物19に先行する可能性が高い。

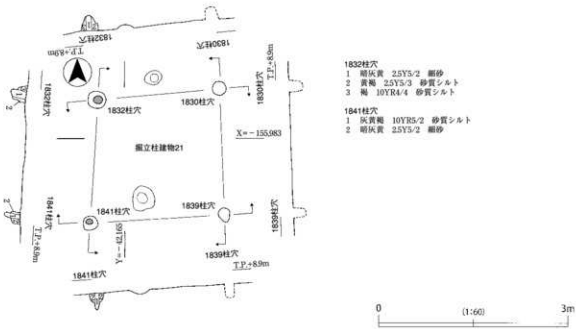


図132　5-2区　第3面　掘立柱建物21　平・断面図

各柱穴からは、土師器皿・甕または土師質羽釜、黒色土器両黒椀、瓦器椀または皿、石材などが出土した。このうち、1817柱穴から出土した土師器甕または土師質羽釜（500）を図示した。

〔掘立柱建物21〕（図128・132、図版19-5・20-2・21-4）

5-2区西端中央付近、2O-7iで検出した。南北1間×東西1間の建物で、主軸はほぼ座標北を示す。建物規模は、東西が北側で1.90m、南側で2.12m、南北が東側で2.04m、西側で1.96mを測り、平面は不整な正方形を呈する。各柱穴からの出土遺物はない。

〔掘立柱建物22〕（図128・133、17、図版19-5・20-1）

5-2区西側中央付近、2O-6i・6jで検出し、建物19の南東側に位置する。軸をN-82.5°-Eにおく。建物の西側柱列は2間、東側柱列は1間、南・北側柱列は2間の不整な東西棟の建物である。桁行3.40m、梁間2.40mを測る。各柱穴からの出土遺物はない。

〔掘立柱建物23〕（図128・134、図版19-5・20-1）

5-2区西側中央付近、2O-6i・6j・7i・7jで検出し、建物19の南西側に位置する。南北2間×東西1間の不整な南北棟の建物である。軸をN-11°-Wにおく。梁間は北側で1.48m、南側で1.20m、桁行は約2.3mを測る。

各柱穴からは、土師器皿、黒色土器内黒椀、瓦器皿・椀、砥石などが出土した。このうち、1895柱穴出土の瓦器椀（501）を図示した。

〔掘立柱建物24〕（図128・134・135、図版19-5・20-3・21-5）

5-2区の中央部北側付近、2O-5h・5i・6h・6iで検出し、建物19の東側に位置する。北側に張り出し部をもつ南北棟の建物である。母屋は東・西・南側柱列が2間、北側柱列が3間の南北棟である。軸をN-4°-Wにおく。母屋の規模は、南北が東側で4.34m、西側で3.78m、東西が北側で4.45m、南側で4.22mを測る。北側の張り出し部は東西2間（約3.3m）、南北1間（約1.8m）の規模である。

また、本建物に関係する遺構として、建物の北側約1.8mの位置にある塀3がある。建物の復元では、南側柱列の中央柱が認められないため、開口する形とした。したがって簡単な作業小屋か馬か牛など家

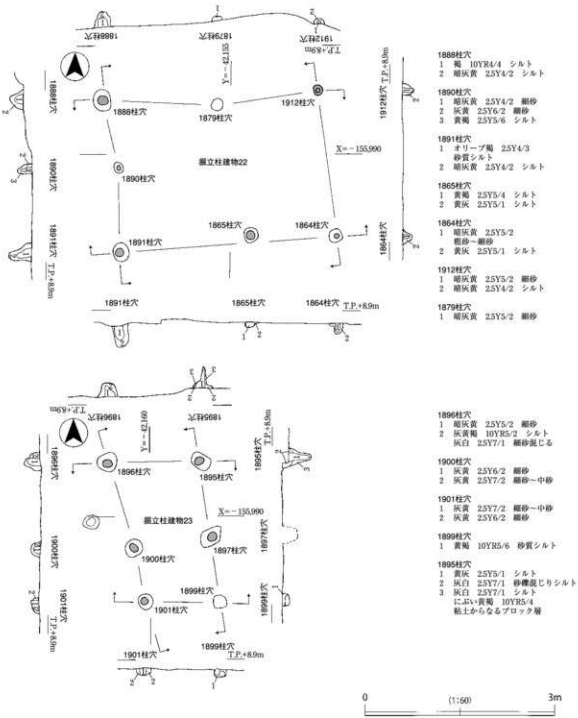
畜を飼う為の小屋であった可能性を考えたい。

各柱穴からは、土師器皿・甕、瓦器皿・椀などが出土した。このうち、1863 柱穴出土の瓦器椀（502）、1844 柱穴出土の瓦器椀（503）を図示した。

なお、この建物から東側は、柱痕跡や土坑などの遺構は少なく、包含層の遺物出土量も減少する。

〔塀 3〕（図 128・134、図版 20-3）

5-2 区の北側中央付近、2O-5h で検出し、建物 24 の北側約 1.8m 付近に位置する。東西 2 間の塀である。全長は 3.62 mを測る。出土遺物には土師器甕などがある。



1888柱穴
1 褐 10YR4/4 シルト
2 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト

1890柱穴
1 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂
2 灰黄 2.5Y6/2 細砂
3 黄褐 2.5Y5/6 シルト

1891柱穴
1 オリーブ褐 2.5Y4/3
砂質シルト
2 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト

1865柱穴
1 黄褐 2.5Y5/4 シルト
2 黄灰 2.5Y5/1 シルト

1864柱穴
1 暗灰黄 2.5Y5/2
粗砂～細砂
2 黄灰 2.5Y5/1 シルト

1912柱穴
1 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂
2 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト

1879柱穴
1 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂

1896柱穴
1 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂
2 灰黄褐 10YR5/2 シルト
灰白 2.5Y7/1 細砂混じる

1900柱穴
1 灰黄 2.5Y6/2 細砂
2 灰黄 2.5Y7/2 細砂～中砂

1901柱穴
1 灰黄 2.5Y7/2 細砂～中砂
2 灰黄 2.5Y6/2 細砂

1899柱穴
1 黄褐 10YR5/6 砂質シルト

1895柱穴
1 黄灰 2.5Y5/1 シルト
2 灰白 2.5Y7/1 砂礫混じりシルト
3 灰白 2.5Y7/1 シルト
にぶい黄褐 10YR5/4
粘土からなるブロック層

図133　5-2区　第３面　掘立柱建物22・23　平・断面図

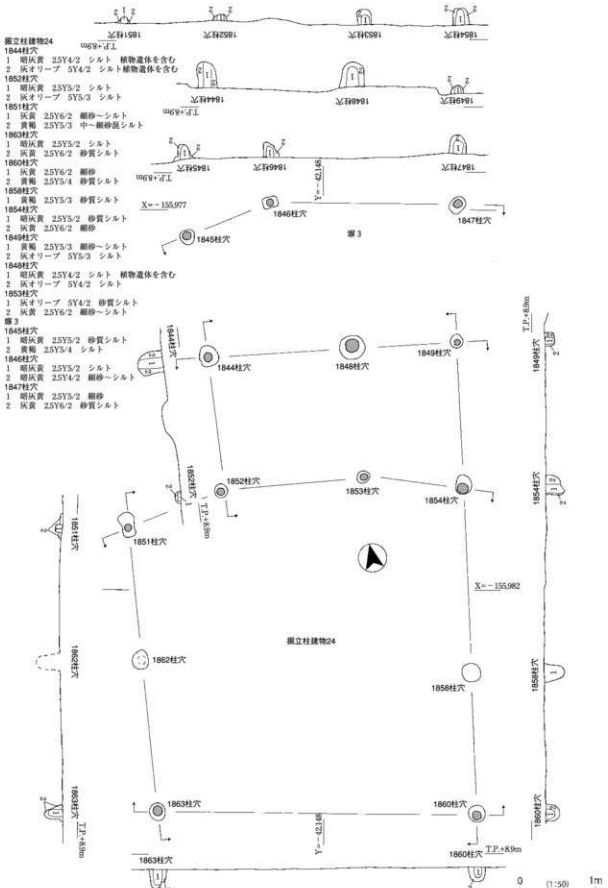


図134 5-2区 第3面 掘立柱建物24・塀3 平・断面図

溝

溝は、東西・南北に走る。これらの溝の検出状況は第 4a 層の削平に起因する遺構面の遺存状況により異なり、途中で溝が確認できない箇所がある。719・1041 溝といった南北方向の溝は、東西に走る 715 溝と切り合い関係が存在することから、全てが同時期に掘削されたのでない。南北方向の溝は、ほぼ等間隔に整然と並ぶように掘削されていた。

〔713 溝〕（図 128・139）

5-2 区の北東側、2O-3h・3i・4h・4i で検出した。東西方向の幅広の溝である。東側は調査区外に延びる。長さ 9.42m、幅 0.62 ～ 1.34m、深さ 0.16m を測る。埋土は浅黄色シルト、明黄褐色シルト、黄灰色シルトが混じる。断面は浅い皿状を呈する。なお、本溝は 714 溝を切る。

出土遺物には、土師器皿・椀・甕、黒色土器内黒椀・両黒椀、瓦器椀・甕、須恵器壺・甕、瓦片、磁器、サヌカイト片などがある。このうち、瓦器椀高台（552）、土師質羽釜（553）を図示した。

〔715 溝〕（図 128・139、図版 19-3・19-5）

5-2 区南側、2O-3j・4j・5j・6j・7j で検出した、東西方向に走る溝である。東側は調査区外へと延びる。途中で 2 箇所途切れているが、元は続いていたと考えられる。長さ 42.03m、幅 0.22 ～ 0.48 m、深さ 0.10m を測る。西側 2O-6j・7j 地区で、急に横幅が広くなる箇所がある。この部分の幅は 1.30m を測り、深さは 0.17 mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は黄褐色シルトである。

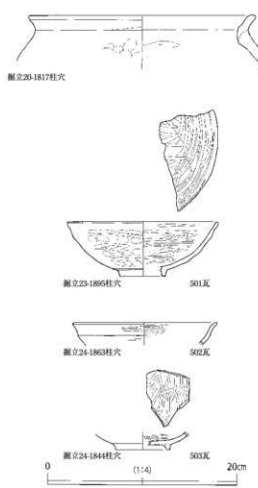


図135　5区　第3面
掘立柱建物20・23・24　出土遺物

溝は N -86° - E を指向する。この溝と直交する溝が 6 条ある。その切り合い関係は、必ずしも一定しない。東側の 2 条の 714・716 溝が 715 溝の後に掘られ、西側の 1041・1048・719・717・1031 溝の 5 条は 715 溝に先行する。このような溝は後述する 6-2 区でも少ないが検出している。

出土遺物には、土師器甕・鉢、黒色土器両黒椀、瓦器椀、須恵器甕などがある。このうち、瓦器椀（554・555）、土師質鉢（556）を図示した。

〔717 溝〕（図 128・139、図版 19-5）

5-2 区の中央付近やや西側、2O-5h・5i・5j・6h・6i・6j で検出した。軸を N - 3° - W におき、東側の 1031 溝とは 6.4 ～ 6.8m 離れている。長さ 22.37m、幅 0.23 ～ 0.69 m、深さ 0.09m を測る。断面は逆台形を呈する。埋土は上層が黄褐色粘土、下層が暗灰黄色中砂～細砂である。本溝は、北側に位置する 1038・1717 土坑に切られている。

出土遺物には、土師質羽釜、瓦器椀などがあり、このうち土師質羽釜（557）を図示した。

〔719 溝〕（図 128・139、図版 19-5）

5-2 区のやや西側、2O-6h・6i・6j で検出した。軸

をN－3°－Wにおき、南北にほぼ一直線に掘られているが、中央部付近で僅かに西側に蛇行する。東側の717溝とは6.7～6.9m離れている。長さ26.8m、幅0.28～0.46m、深さ0.08mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は暗灰黄色粘土である。

出土遺物には、瓦器椀、須恵器甕などがあり、このうち、瓦器椀（558）を図示した。

〔1034溝〕（図128・139、図版19-5）

5-2区の中央付近、20-5iで検出した、ほぼ南北方向に走る溝である。東側に位置する1031溝とは0.9～1.1m離れている。長さ3.57m、幅0.48～0.69m、深さ0.10mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は黄灰色シルトである。この溝は、715・717・719溝などのように、地区を東西南北に区画する溝群とは異なるものであろう。

出土遺物のうち、土師器小皿（559）を図示した。

〔1039溝〕（図128・136～138、図版19-5・20-1・32）

5-2区中央やや西側、20-6h・6iで検出した、南北に走る溝である。長さ15.05m、幅0.27～1.28m、深さ約0.1mを測る。本溝はやや湾曲しており、西側に位置する建物19に直接重複することはない。しかし、本溝は建物19を囲う1040溝や塀2の柱穴を切っており、さらには1039溝の北側が調査区外へと延びていることから、建物19と有機的な関係を持つものとは考え難い。なお、この溝は北側で1038土坑、1717土坑を切る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は浅黄色シルトににぶい黄橙色シルトブロックが混じる。717・719溝のような規格性のある溝群とは、規模や形態などの点で異なる。溝埋土上層から、土師器小皿・椀、瓦器小皿・羽釜などの破片が集中して出土した。

出土遺物には、土師器椀・皿・甕、土師質羽釜、黒色土器両黒椀、瓦器椀・皿、白磁碗などがあり、このうち、土師器小皿（504～515）・椀（516）・甕（518・521・522）、土師質羽釜（519・520・523）、瓦器小皿（525～534）・椀（517・524・535～547）、白磁碗（548）、瓦質土器鉢（549）、東播系須恵器鉢（550）、鉄製品（551）を図示した。瓦器椀や土師器皿の様相から、11世紀後葉から12世紀中葉に帰属するものと考えられる。

〔1041溝〕（図128・139、図版19-5・20-2）

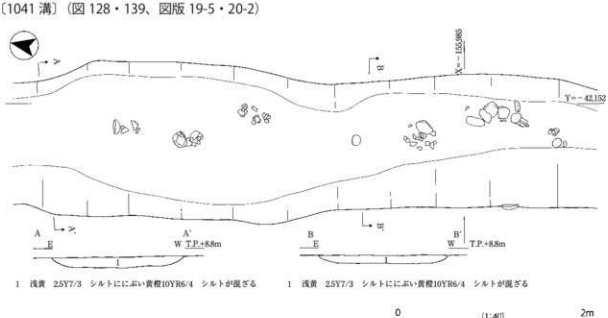


図136 5区 第3面 1039溝 平・断面図

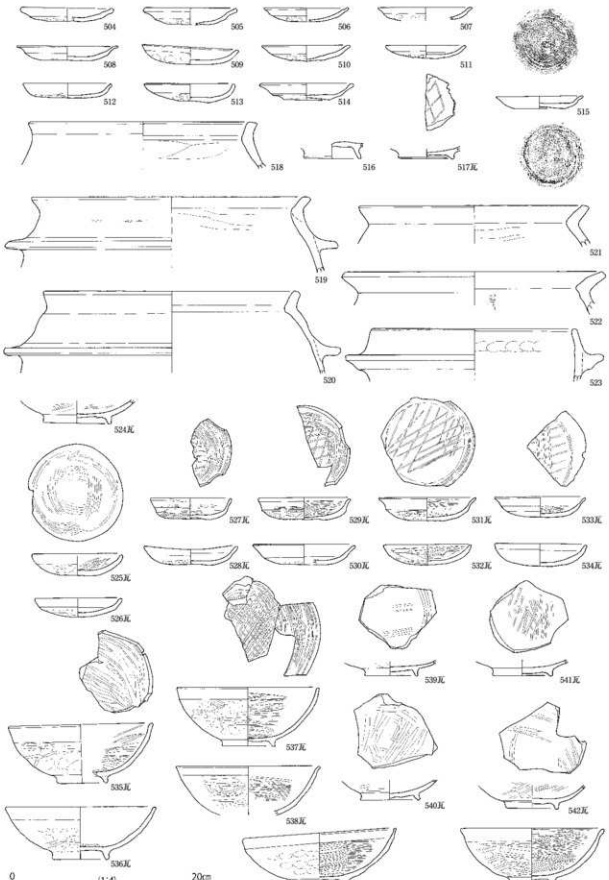


図137　5区　第3面　1039溝　出土遺物(1)

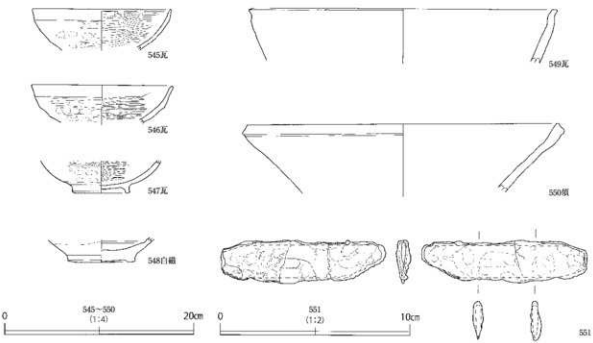


図138　5区　第3面　1039溝　出土遺物（2）

5-2区西側、2O-7h・7i・7jで検出した、南北に走る溝である。東側の719溝とは7.3～7.7m離れている。軸をN－3°－Wにおく。北側には同方向・同規模の溝が存在しており、中央部が確認できなかったものの、本来は接続していたと考えられる。長さ23.0m、幅0.28～0.41m、深さ約0.1mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は黄灰色シルトである。715溝とは重複関係にあり、本溝が先行する。また、図上では表現しきれていないが、建物20-1840柱穴との重複関係から本溝が後出する。

出土遺物のうち、瓦器小皿（560）を図示した。

〔1042溝〕（図128・139、図版19-5）

5-2区南西隅、2O-8j、2A-8aで検出した、南北に走る、浅い溝である。ほぼ一直線に掘られるが、北端で細くなり不明瞭になる。長さ約4.0m、幅0.19～0.67m、深さ0.05mを測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色細砂混シルトである。

出土遺物には、土師器皿、須恵器甕などがあり、このうち、土師器小皿（561）を図示した。

〔1048溝〕（図128・139、図版19-5）

5-2区南西側、2O-6j、2A-6aで検出した、南北に走る溝である。中央が東側に緩やかに湾曲する。東側の719溝とは2.0～2.2m離れている。長さ4.38m、幅0.30～0.43m、深さ0.15mを測り、他の溝と比較して少し深い。断面は逆台形状を呈する。埋土はオリーブ褐色細砂まじりシルトである。他の南北溝とは規模や断面形、埋土などの諸点で差異が認められ、性格の違いが想定できる。

出土遺物には、土師器、瓦器椀などがあり、このうち瓦器椀（562）を図示した。

〔1733溝〕（図128・139）

5-2区の中央付近、2O-5i・6iで検出した、ほぼ東西方向に走る溝である。東側は撹乱によって不明である。南側の715溝とは約6.5m離れている。長さ約6.5m、幅0.23～0.48m、深さ0.15mを測る。断面は浅い皿状を呈する。なお、1733溝は第5層上面で調査を行ったが、埋土、方向、出土遺物から検討し、第3面帰属の遺構と判断した。

出土遺物のうち、瓦器椀（563）を図示した。

柱穴

〔1160 柱穴〕（図 128・145、図版 20-1）

5-2 区北西側、2O-6i で検出した。建物 19 の 1823 柱穴西側に位置する。長径 0.40m、短径 0.25m、

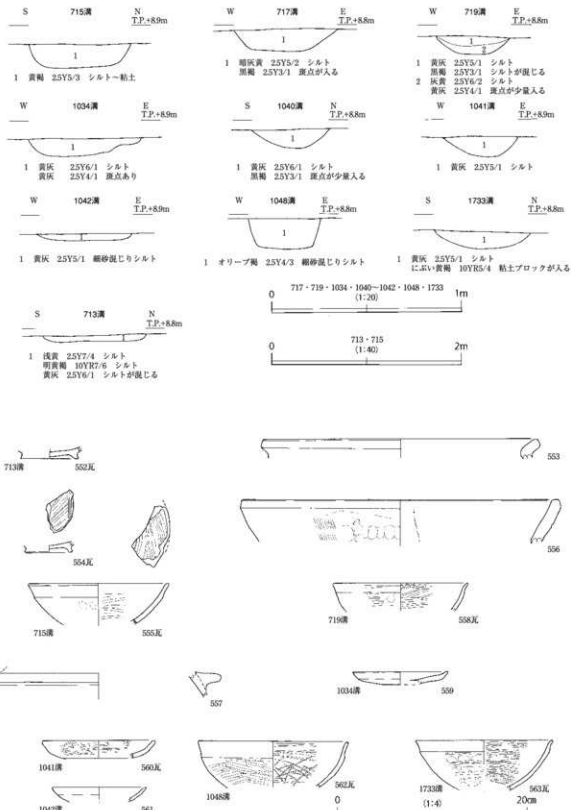


図139　5区　第3面　各遺構　断面図　出土遺物

深さ 0.37 mを測る。

出土遺物には、土師器皿、瓦器椀などがあり、このうち瓦器椀（636）を図示した。

〔1801 柱穴〕（図 128・145、図版 20-1）

5-2 区北西側、2O-6i で検出した。建物 19 の 1152 柱穴すぐ南西側に位置する。長径 0.33m、短径 0.27m、深さ 0.26 mを測る。

出土遺物には、土師質羽釜、瓦器椀などがあり、このうち瓦器椀（630・631）を図示した。

〔1825 柱穴〕（図 128、図版 20-1・21-6）

5-2 区北西側、2O-7i で検出した。建物 19 の 1826 柱穴西側に位置する。長径 0.27m、短径 0.22m、深さ 0.47 mを測る。埋土は柱痕部分が灰黄色シルト、掘形は灰黄色粘質シルトである。

〔1833 柱穴〕（図 128・145、図版 20-1）

5-2 区北西側、2O-6i で検出した。長径 0.39m、短径 0.38m、深さ 0.39 mを測る。

出土遺物には、土師器甕、土師質羽釜、瓦器椀があり、このうち土師質羽釜（632）、瓦器椀（633）を図示した。

〔1850 柱穴〕（図 128・145、図版 20-3）

5-2 区中央やや北西寄り、2O-6i で検出した。建物 24 の北西側に位置する。長径 0.25m、短径 0.15m、深さ約 0.20 mを測る。

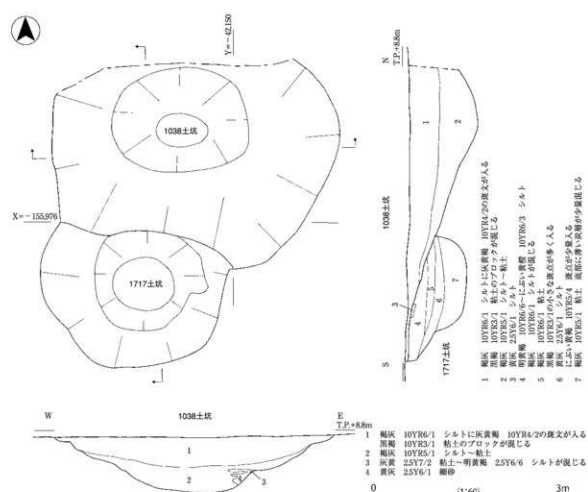


図140　5-2区　第３面　1038・1717土坑　平・断面図

出土遺物のうち、土師器皿（634）を図示した。

〔1859 柱穴〕（図 128・145、図版 20-3）

5-2 区中央やや北西寄り、2O-5i で検出した。長径 0.23m、短径 0.19m、深さ 0.22 mを測る。

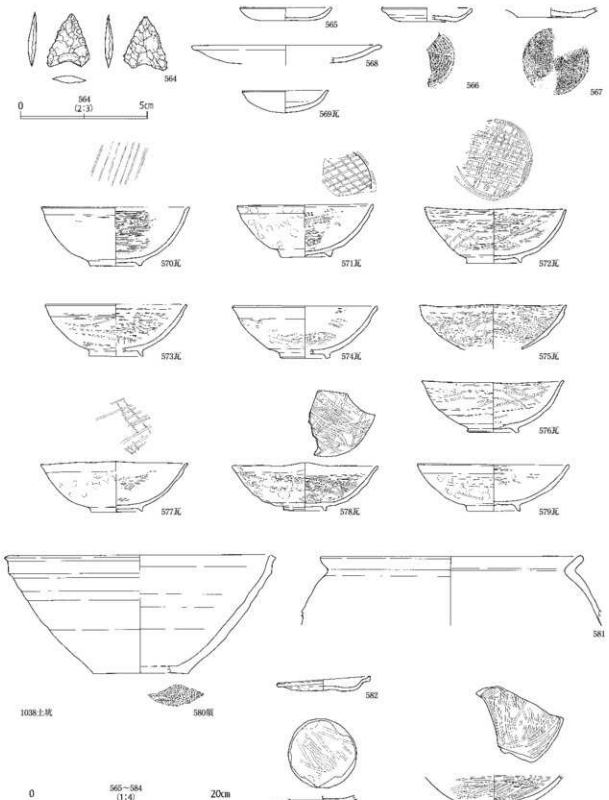


図141　5-2区　第３面　1038・1717土坑　出土遺物

出土遺物には、土師器小皿・甕、土師質羽釜・鉢、瓦器椀・皿などがある。このうち土師器皿（637）、瓦器小皿（638）・椀（639）、土師質羽釜（640）・鉢（641）を図示した。

土坑

〔1038 土坑〕（図 128・140・141、図版 20-3・21-7・32）

5-2 区中央やや北西寄り、2O-5h・6h で検出した。北側が調査区外に延びるため形態は不明だが、大型で平面は長楕円形を呈する。南側に接する 1717 土坑が埋没した後に掘られている。長径 4.49m、深さ 1.05 mを測る。二段掘りとなっており、東西断面は逆凸字状を呈している。埋土は上層が褐灰色シルトに黒褐色粘土ブロックが混じり、下層は褐灰色シルト～粘土である。

出土遺物には、土師器椀・皿・甕、土師質羽釜、黒色土器内黒椀、瓦器小皿・椀、瓦質土器鉢、須恵器杯蓋または杯身・鉢、石器などがある。このうち、サヌカイト製石鏃（564）、土師器小皿（565・567、土師器皿（568）、瓦器小皿（569）、瓦器椀（570 ～ 579）、須恵器こね鉢（11 世紀末～ 12 世紀前葉頃）（580）、土師器甕または土師質羽釜（581）を図示した。

〔1044 土坑〕（図 128・142 ～ 144、図版 19-5・20-1・21-8・33）

5-2 区中央西側付近、2O-6i・6j で検出した。長径 6.04m、短径 4.25m、深さ 0.21 ～ 0.42m を測る。平面は不整長楕円形を呈する、大きな土坑である。埋土は、上層が灰白色シルト、下層が黄灰色や褐灰色シルトである。断面観察から、本来は北側に深い土坑が存在し、それが埋没した後、全体に浅い土坑が再度掘削されたと想定できる。調査では、土坑の前後関係を認識できなかったため、遺物を分離して取り上げることはできなかった。また、本土坑は建物 19 が廃絶した後に掘られている。

出土遺物には、土師器へそ皿・杯または椀・甕、土師質羽釜、須恵器長頸壺、黒色土器椀、瓦器皿・椀、瓦質土器片口鉢、白磁碗、青花碗、石製品（砥石・硯）などがある。このうち、土師器小皿（585 ～ 595）、土師器椀（596）、土師器甕（597･598）、土師質羽釜（599 ～ 603）、瓦器小皿（604 ～ 613）、瓦器椀（614 ～ 624）、白磁碗（625）、瓦質土器片口鉢（626）、東播系須恵器鉢（11 世紀末～ 12 世紀前葉頃）（627・628）、硯（629）を図示した。

〔1717 土坑〕（図 128・140・141、図版 19-5・20-3・21-7）

5-2 区中央やや北西側付近、2O-5h・6h で検出した。長径 2.32m、短径 2.02m、深さ 0.68 mを測る。平面は不整楕円形を呈する比較的大型のものである。土坑は二段掘りとなっており、断面形は逆凸字状を呈する。埋土は明黄褐色シルトや黄灰色シルト、褐灰色粘土などである。本土坑は、北側に位置する 1038 土坑に切られる。

出土遺物には、土師器皿、土師質羽釜、瓦器椀、東播系須恵器片口鉢などがある。このうち、土師器「て」字口縁小皿（582）、土師器椀（583）、瓦器椀（584）を図示した。

〔1868 土坑〕（図 128・145、図版 20-1・21-8）

5-2 区中央やや北西側付近、2O-6i で検出した。本土坑は、1044 土坑が一旦埋没した後に掘削されている。長径 0.46m、短径 0.40m を測り、平面は不整楕円形を呈する。埋土は、黄灰色礫混じりシルトなどである。

出土遺物のうち、土師器椀（635）を図示した。

小穴

〔1874 小穴〕（図 128・145、図版 20-1・21-8）

5-2 区の北西寄り、2O-6i、1044 土坑の底面で検出した。長径 0.25m、短径 0.24m を測る。

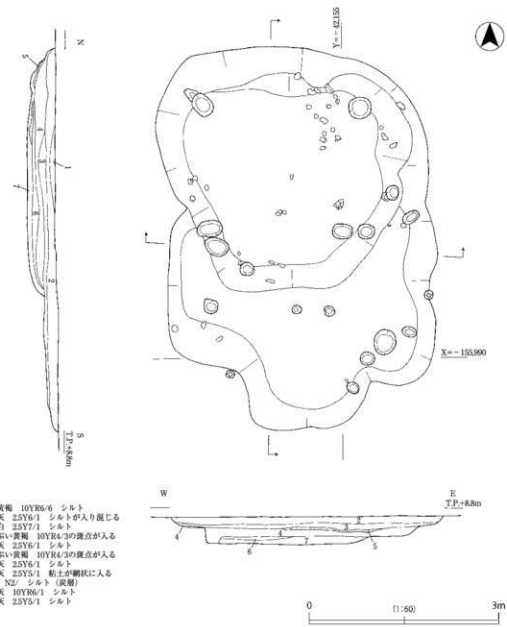


図142　5-2区　第3面　1044土坑　平・断面図

出土遺物には、土師器皿、土師質羽釜、瓦器皿・椀、東播系須恵器こね鉢などがある。このうち、瓦器椀（642・643）、土師質羽釜（644）、東播系須恵器こね鉢（11世紀末～12世紀前葉頃）（645）を図示した。

小結

本面では、建物19を中心とする掘立柱建物から構成される居住域を確認することができ、一定の成果を挙げることができた。建物19周辺の状況を簡単に整理しておく。

建物19は、北と西側に区画溝である1040溝を、北側に塀2を備えており、母屋が東西2間×南北5間の比較的大型の建物である。調査時には、この建物は東西に庇が付く2面庇の建物を想定し、南側には歪な小規模の建物22・23が存在すると考える。

一見すると建物19東側も1039溝によって画されるかのように見受けられるが、建物を囲う1040

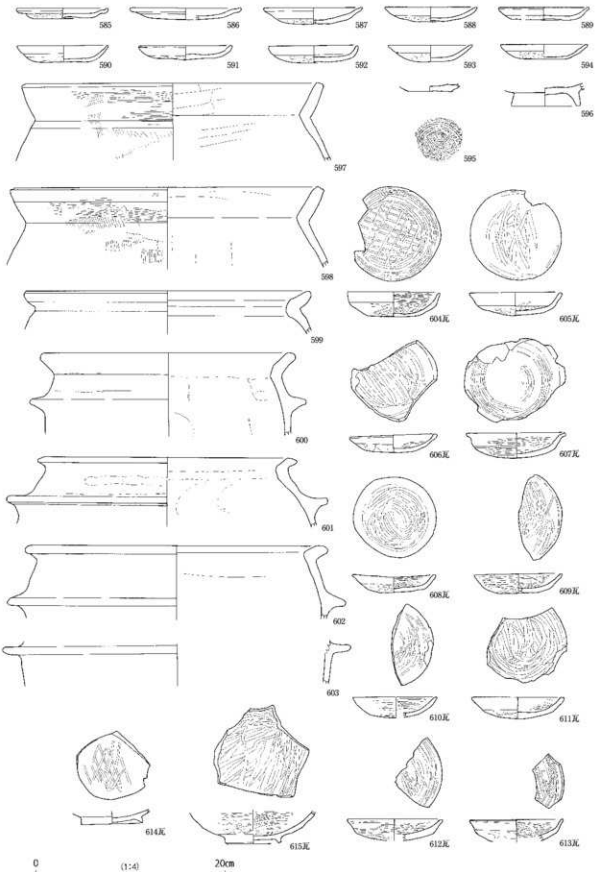


図143　5-2区　第3面　1044土坑　出土遺物（1）

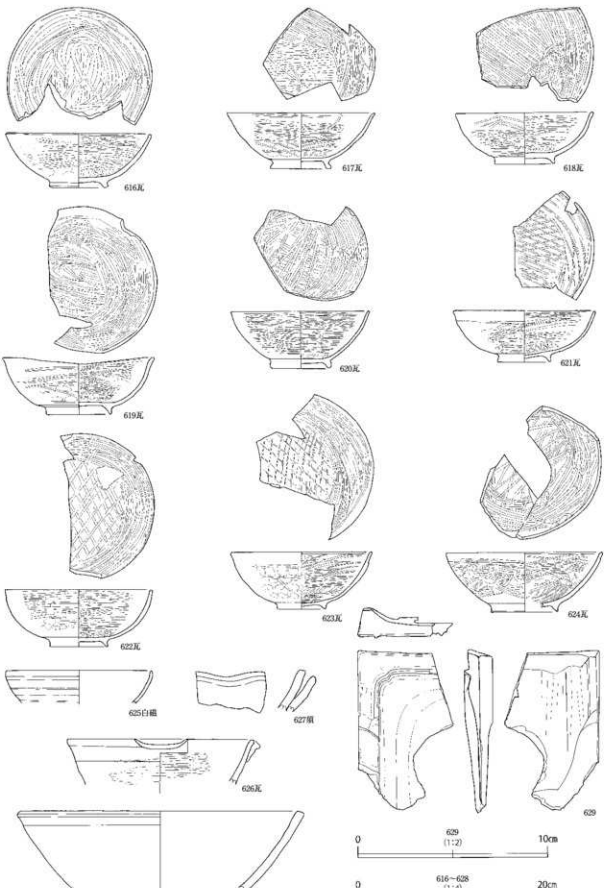


図144　5-2区　第3面　1044土坑　出土遺物（2）

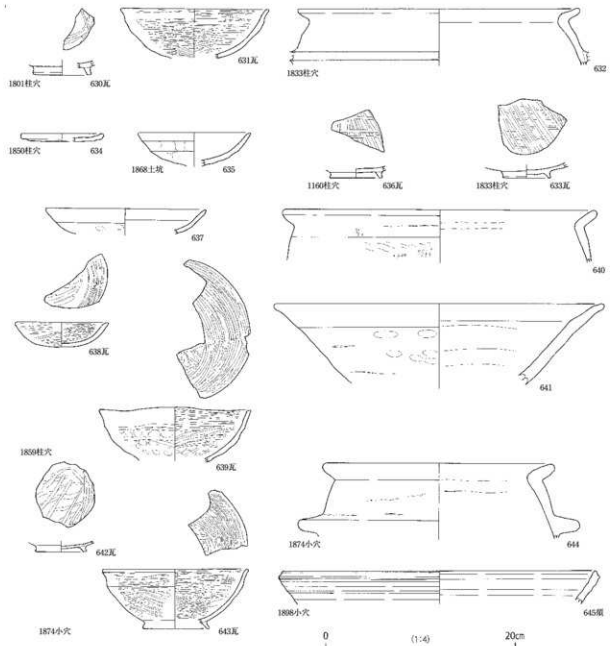


図145　5-2区　第3面　各遺構　出土遺物（2）

溝および塀2の東端柱穴をこの1039溝が切っていること、この溝が建物を越えて北へと延びることなどを勘案すれば、建物19と1039溝は有機的な関連を持つものではない。むしろ、この1039溝の位置には、1040溝が南へと折れ曲がり東側の区画溝を形成していた可能性を考えるべきであろう。

建物北東の2基の大型土坑は、埋土から水溜め・井戸としての性格が想定でき、その位置関係からは一見、建物19と有機的な関連を有するようにも見受けられる。しかしながら、建物19と関連する諸遺構（1040溝・塀2）を切る1039溝は、これら2基の大型土坑にさらに切られていることから、時期が異なることが明らかである。これらの大型土坑が水溜め・井戸としての機能を有するならば、その水の供給先は現状では不明と言わざるを得ない。

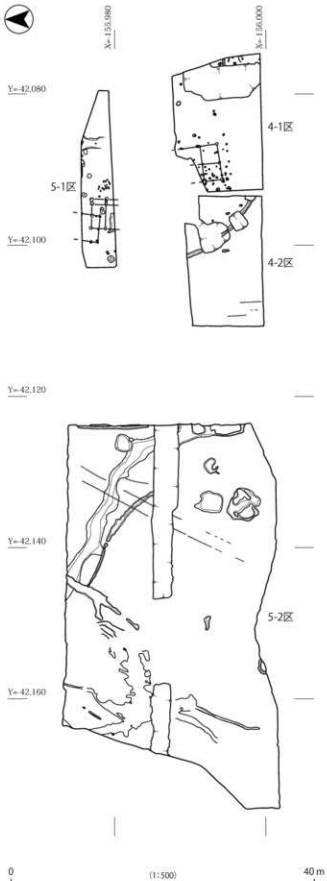


図146　4・5区　第4面　平面図

5．第4面（図146～149、図版11-1・11-2・22-1）

第4b層を除去した第5層上面を第4面として調査をおこなった。各調査区の様相は以下の通りである。

4-1区（図147、図版11-1）

遺構面の標高は、北東隅8.83m、北西隅8.87m、南東隅8.98m、南西隅8.86m、中央部分8.91mを測る。南東隅がやや高いものの、ほぼ平坦な地形となっている。調査区西側で掘立柱建物などを検出した。

4-2区（図146、図版11-2）

遺構面の標高は、北東隅8.61m、北西隅8.59m、南東隅8.67m、南西隅8.61m、中央部分8.62mを測り、ほぼ平坦である。調査区東側で、南東から北西方向に弧を描くように走る溝1条と土坑4基を検出した。調査区西側では、南北方向に走る轍跡を2条検出した。

5-1区（図147、図版11-3）

遺構面の標高は、北東隅8.84m、北西隅8.78m、南東隅8.84m、南西隅8.78m、中央部分8.87mを測り、東から西へと緩やかに下がる地形となる。調査区西側では掘立柱建物や大型土坑などを、東側では南北に走る幅広の溝を検出した。

5-2区（図148、図版22-1）

遺構面の標高は、北東隅8.84m、北西隅8.65m、南東隅8.79m、南西隅8.78m、中央部分8.67mを測り、北西側に向かって緩やかな傾斜を有している。調査区西側では不定方向に流れる溝群を、東側では土坑や轍、北西から南東に弧を描くように走る溝を検出した。

掘立柱建物

掘立柱建物は4-1区、5-1区において3棟を検出した。

図147　4-1・2区　第4面　平面図

〔掘立柱建物 30〕（図 147・150、図版 11-1）

4-1 区北西隅、1O-9i・9j・10i・10j で検出した。建物北側は撹乱によって失われており、確認できたのは南側の東西２間、南北２間分である。軸をＮ - 8° - Wにおく。柱間は南北 2.4m、東西 2.2m 前後である。検出した範囲での建物の規模は、南北 4.92 m、東西 5.00m を測る。

各柱穴からの出土遺物には、土師器「て」字口縁小皿・甕、黒色土器椀、瓦器椀などがある。このうち、土師器小皿（646）、黒色土器両黒椀（647）・内黒椀（648）を図示した。11 世紀前半の所産と考えられる。

〔掘立柱建物 31〕（図 148・151、図版 11-3）

5-1 区中央付近やや西より、1O-10h で検出した。南北棟の建物で、建物南側は調査区外へと延びる。東側には庇を取り付ける構造をとり、軸をＮ - 2° - Eにおく。柱掘形は、隅丸方形を呈するものが多い。検出範囲での建物の規模は、東西約 4 m（庇含む）、南北約 1.8m である。庇の張り出しは 0.75m を測る。

各柱穴からの出土遺物には、弥生土器甕、土師器、黒色土器内黒椀などがある。11 世紀初めから前半頃の所産と考えられる。

〔掘立柱建物 32〕（図 148・151、図版 11-3）

5-1 区北西側、1O-10h で検出した。南北棟の建物で、北側は調査区外へと延びると考えられる。軸をＮ - 8° - Eにおく。柱掘形は、隅丸方形を呈するものが多い。建物の規模は、東西約 3.5m、南北約 2.5m を測る。各柱穴からの出土遺物には、弥生土器甕または壺、土師器などがある。

小結

掘立柱建物は調査区が狭く全体像を把握できていないが、建物や柱穴の分布より、4-1 区北西隅から 5-1 区西側にかけて集中しており、建物群が形成されていたと推測する。復元した柱穴以外にも建物にならなかった柱穴が数多くあり、他にも建物が存在していた可能性が高い。

溝

〔524 溝〕（図 147・152）

4-1 区東端、1O-8j で検出した、東西方向に走る溝である。溝の東側は撹乱によって失われ、西側は調査区外へと延びる。長さ 0.95m、幅 0.30m、深さ 0.14m を測る。断面は逆台形を呈する。埋土は黄灰色粘質シルトである。出土遺物には、土師器椀がある。

〔661 溝〕（図 147・152、図版 11-2）

図148　5-1区　第４面　平面図

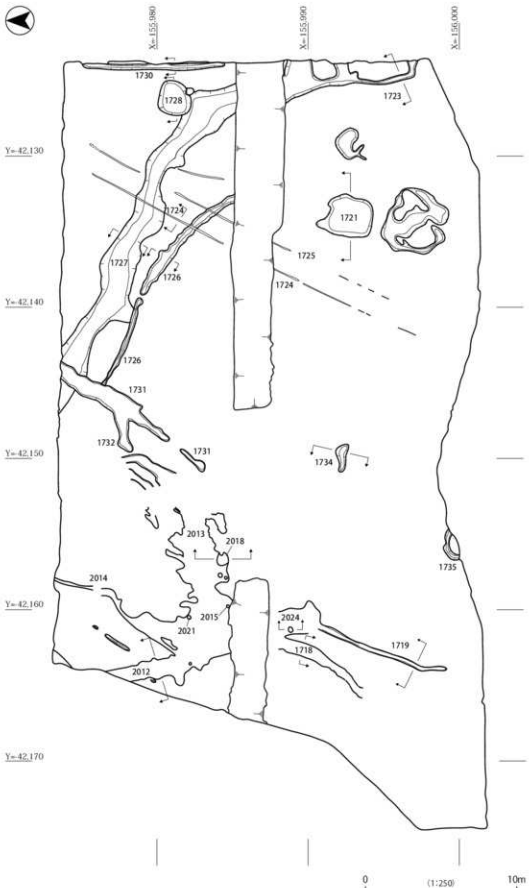


図149　5-2区　第4面　平面図

4-2 区東側、10-10j・20-1i・1j で検出した。南東から北西方向に弧を描く。途中 2 箇所攪乱のため消失し、東端は 664 土坑に切られる。長さ 11.6m、幅 0.43 ～ 0.66m、深さ 0.18 ～ 0.26m を測る。断面は浅い皿状を呈する。

〔1718 溝〕（図 147・152）

5-2 区南西側、20-7i・7j で検出した。南西から北東に走るやや湾曲した溝である。溝の北および南側部分は後世の削平を受けて消失している。長さ 7.35m、幅 0.47 ～ 1.05m、深さ 0.08m を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は黄灰色シルトである。出土遺物には、土師器甕、黒色土器内黒椀などがある。

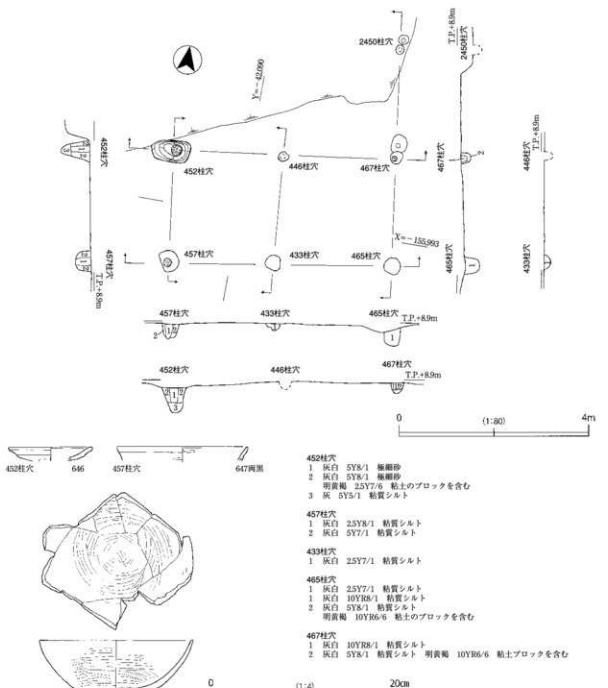


図150　4-1区　第4面　掘立柱建物30　平・断面図　出土遺物

〔1719 溝〕（図 147・152）

5-2 区南西側、2O-7i・7j で検出した、南西から北東に走る溝である。長さ約 9 m、幅 0.28 ～ 0.45m、深さ 0.06m を測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は黄灰色粘土である。北側は撹乱によって切られるため不明瞭ではあるが、不定形な 2013 落ち込みに繋がると考えられる。

〔1723 溝〕（図 149・152、図版 22-1）

5-2 区の南西隅 2O-3j から北側に延びて 1727 溝に繋がる溝である。長さ約 6.5m、幅 0.22 ～ 0.69m、深さ 0.02m を測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は 2 層に分かれ、上層がにぶい黄褐色粘土、下層がにぶい黄色粘土である。

〔1726 溝〕（図 148・152・153、図版 22-1）

5-2 区北東側、2O-4h・4i・5h・5i で検出した。後述する 1727 溝にほぼ平行しつつ、弧を描きながら南東側から北西側に抜ける溝である。長さ約 15.1m、幅 0.15 ～ 0.96m、深さ 0.14m を測る。断面は皿状を呈し、埋土は上層が灰黄褐色粘土、下層が褐灰色粘土である。切り合い関係から、本溝が 1727 溝より後出すると考えられる。

出土遺物には、サヌカイト製石鏃（652）がある。

〔1727 溝〕（図 149・152・153、図版 22-1）

5-2 区北東側、2O-3h・3i・3j・4h・4i・4j・5h・5i・5j で検出した。上述の 1726 溝と同様に、弧を描きながら北西から南東に走る幅広の溝である。溝の南端付近で、南からの 1723 溝が繋がっている。溝の北および南側は調査区外へと延びる。長さ約 37.1m、幅 1.01 ～ 2.55m、深さ 0.29m を測る。断面は皿状を呈する。埋土は 3 層に分かれ、上層がオリーブ褐色粘土、中層が黒褐色粘土、下層が褐灰色細砂である。北東隅には 1728 土坑があり、本溝を切っている。

出土遺物には、弥生土器甕・壺、土師器椀、瓦器などがある。このうち、土師器杯（653）を図示した。

〔1730 溝〕（図 149・152、図版 22-1）

5-2 区北東隅、2O-3h・3i で検出した。調査区東辺に平行するように位置する。長さ約 9.3m、幅 0.34 ～ 0.44m、深さ 0.10m を測る。断面は浅い皿状を呈し、埋土は上層が黒褐色粘土、下層が黄灰色シルトである。

〔1731・1732 溝〕（図 149・153、図版 22-1）

5-2 区中央北側、2O-5h・5i・6h・6i で検出した。1731 溝は北東から南西方向の溝で、途中で 1732 溝と分岐する。1731 溝は 1726・1727 溝が埋没した後に掘られている。長さ約 12m、幅 0.53 ～ 1.43m、深さ 0.07 ～ 0.15m を測る。

出土遺物には、弥生時代の所産と思われるミニチュアの壺（654）がある。

〔2012 溝〕（図 149・152）

5-2 区北西側付近、2O-7h・7i で検出した。北西から南東に走る溝で、南側は不定形な 2013 落ち込みに繋がる。長さ 4.75 m、幅 1.00 ～ 1.46m、深さ 0.07 ～ 0.15m を測る。埋土は上層が灰白色シルト、下層が褐灰色シルト～粘土である。

〔2477 溝〕（図 148・152・153、図版 11-3）

5-1 区中央やや北東側、1O-9h で検出した、南北方向に走る溝である。北側は調査区外に延び、南側は撹乱に切られる。長さ 3.05m、幅 1.21 ～ 1.82m、深さ 0.15 mを測る。断面は浅い皿状を呈する。埋土は 2 層に分かれ、上層が黄灰色粘質シルト、下層が灰黄色砂質シルトである。

出土遺物には、弥生土器、土師器杯または椀・羽釜、黒色土器椀、瓦器椀などがある。このうち、黒色土器両黒椀（649）、瓦器椀（650）、土師質羽釜（651）を図示した。

柱穴

〔427 柱穴〕（図 147・155、図版 11-1）

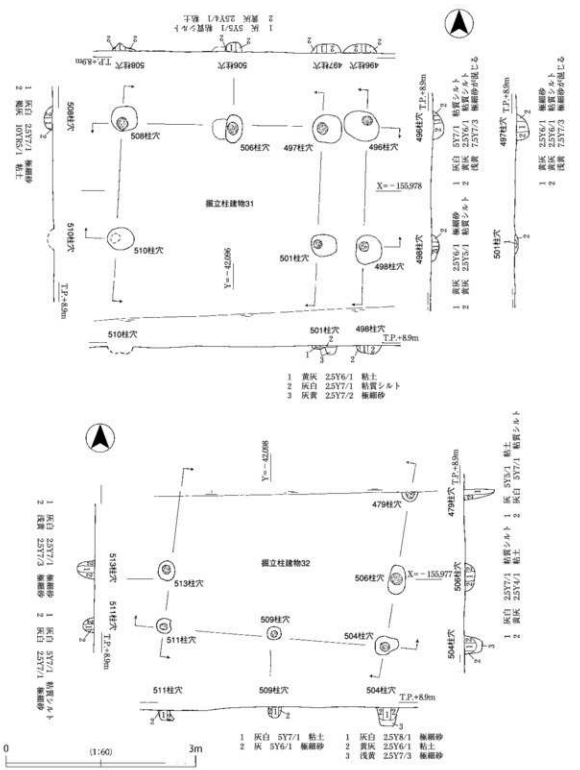


図151　5-1区　第４面　掘立柱建物31・32　平・断面図

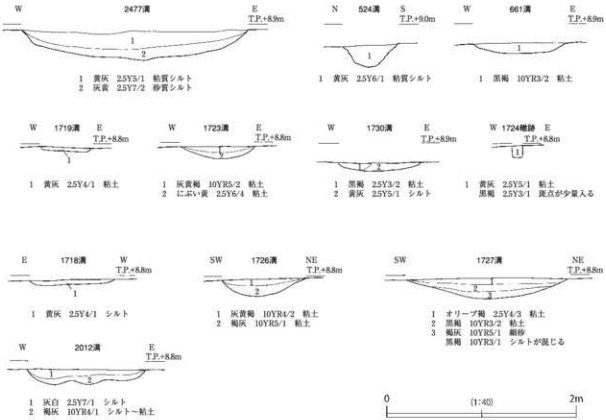


図152　4・5区　第4面　各遺構　断面図(1)

4-1 区中央付近、1O-9j で検出した。建物 30 の南東側に位置する。長径 0.31m、短約 0.21m、深さ 0.25m を測る。埋土は、柱痕部分が灰白色粘質シルト、裏込め土が灰白色粘質シルトである。

出土遺物のうち、黒色土器両黒椀（655）を図示した。

〔448 柱穴〕（図 147・155、図版 11-1）

4-1 区北西側、1O-9j で検出した。長径 0.21m、短径 0.17m、深さ 0.16m を測る。埋土は灰白色砂質シルトである。

出土遺物のうち、土師器甕（659）を掲載した。

〔456 柱穴〕（図 147・155、図版 11-1）

4-1 区北西側、1O-10j で検出した。建物 30 内に位置する柱穴である。長径 0.54m、短径 0.38m、

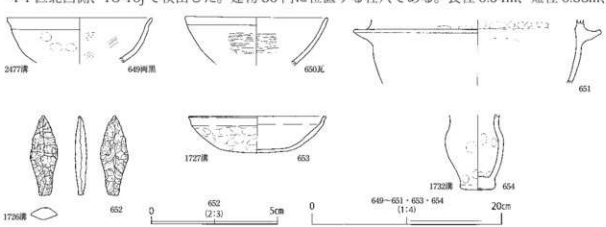


図153　4・5区　第4面　各遺構　出土遺物(1)

深さ 0.22m を測る。埋土は灰白色粘質シルトである。

出土遺物には、土師器椀・甕などがあり、このうち、土師器椀（656）を図示した。

〔463 柱穴〕（図 147・155、図版 11-1）

4-1 区北西側、1O-10j で検出した。建物 30 の南西側に位置する柱穴である。長径 0.43m、短径 0.36m、深さ 0.28m を測る。埋土は、柱痕部分が灰白色砂質シルト、裏込め土が浅黄色粘質シルトブロックの入る灰白色砂質シルトである。

出土遺物には、土師器杯・皿、須恵器杯などがあり、このうち、土師器「て」字状口縁小皿（657）・椀（658）を図示した。

〔468 柱穴〕（図 147・155、図版 11-1）

4-1 区中央やや北西側、1O-9j で検出した。建物 30 の東側柱列に重なるが、建物は構成しない。長径 0.37m、短径 0.28m、深さ 0.22m を測る。埋土は、上層が灰白色砂質シルト、下層がにぶい黄橙色粘土ブロックである。

出土遺物のうち、土師器甕（660）を図示した。

〔478 柱穴〕（図 148・154・155、図版 11-3）

5-1 区中央北端、1O-10h で検出した。建物 31 の北東側に位置する。長径 0.67m、短径 0.52m、深さ約 0.25m を測る。埋土は、柱痕部分が黄灰色粘質シルト、裏込め土が黄灰色粘質シルトである。

出土遺物には、土師器椀・甕、土師質羽釜などがある。このうち、土師器椀（663・664）・甕（665）を図示した。

土坑

〔476 土坑〕（図 148・154、図版 11-3）

5-1 区北東側、1O-9h・10h で検出し、北側は側溝によって失われている。径 2.43m、深さ 0.42m を測る。埋土は 2 層に分かれ、上層が灰白色粘質シルト、下層が黄灰色粘質シルトに黄灰色粘質シルトブロックを含む。断面は縦長の逆台形を呈する。出土遺物には、弥生土器、土師器がある。

〔518 土坑〕（図 148・154、図版 11-3）

5-1 区南西端付近、2O-1h で検出した。長辺 0.85m、短辺 0.82m、深さ 0.59m を測る。平面は隅丸方形を、断面は縦長の逆台形を呈する。埋土は 2 層に分かれ、上層が黒褐色粘土、下層が浅黄色砂質シルトブロック混黄灰色粘土である。上・下層の間には浅黄色砂質シルトが薄く堆積する。出土遺物には、弥生土器鉢、土師器（布留式）甕などがある。

〔520 土坑〕（図 148・154、図版 11-3）

5-1 区の南西付近、1O-10h で検出した。南側は調査区外に延び、全容は不明である。長さ 2.41m、幅 0.57m、深さ 0.20m である。埋土は黄灰色粘質シルトなどである。出土遺物には、弥生土器、土師器などがある。

〔525 土坑〕（図 147）

4-1 区東側中央付近、2O-8j で検出した。長径 0.35m、短径 0.31m、深さ 0.28 m を測る。平面は楕円形を呈する。埋土は上層が灰白色粘質シルト、下層が灰白色粘土である。出土遺物には、土師器甕、土師質羽釜などがある。

〔532 土坑〕（図 147・154）

4-1 区北東側、2O-9i で検出した。長径 0.61m、短径 0.40m、深さ 0.19 m を測る。平面は長楕円形

を呈する。断面は逆台形で、埋土は黄灰色粘質シルトである。出土遺物はない。

〔664 土坑〕（図 147・154、図版 11-2）

4-2 区南東隅、1O-10j で検出し、遺構の東側は調査区外へと延びる。一辺 1.42m、深さ 0.12m を測る。検出状態から、平面は方形を呈する。断面は逆台形で、埋土は暗灰黄色細砂混じり粘土である。661 溝を切ることから、本土坑は溝より後出することが明らかである。

〔1728 土坑〕（図 149・154・155、図版 22-1）

5-2 区北東側、2O-3i で検出した。長辺 2.24m、短辺 2.18m、深さは 0.45m を測る。平面は隅丸方形を、断面は皿状を呈する。埋土は 3 層に分かれ、上層が褐灰色粘土、中層が明黄褐色粘土、下層が褐灰色粘土である。

出土遺物のうち、土師器杯（661）、黒色土器内黒椀（662）を図示した。

〔1734 土坑〕（図 149・154、図版 22-1）

5-2 区中央やや南寄り、2O-5j・6j で検出した。長さ 1.80m、幅 0.71m、深さ 0.15m を測る。平面はヘ字状を呈し、東西に長い。断面は浅い皿状を呈し、埋土は 2 層に分かれ、上層が黒褐色粗砂混じり

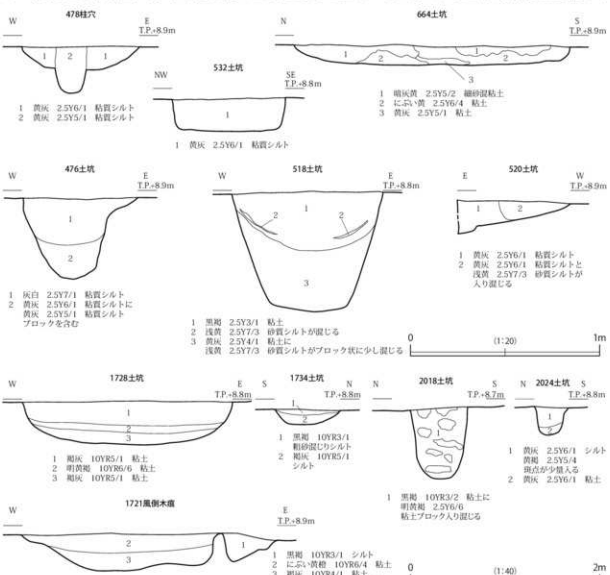


図154　4・5区　第4面　各遺構　断面図（2）

シルト、下層が黄灰色シルトである。

〔2018 土坑〕（図 149・154）

5-2 区中央やや西側付近、2O-6i で検出した。長辺 0.76m、短辺 0.60m、深さ 0.7 mを測る。平面は隅丸方形を呈する。埋土は黒褐色粘土に明黄褐色粘土ブロックが混じる。北側に位置する 2013 落ち込みはこの土坑が埋没した後に掘られている。

〔2024 土坑〕（図 149・154）

5-2 区中央やや南西寄り、2O-7i で検出した。長径 0.34m、短径 0.33m、深さ 0.4 mを測る。平面は楕円形を呈する。埋土は上層が黄灰色シルト、下層が黄灰色粘土である。

轍痕

〔1724・1725 轍跡〕（図 149・152、図版 22-1・23-1）

5-2 区東側、2O-3h・3i・3j・4h・4i・4j・5h・5i・5j で検出した南西から北東方向に延びる 2 条の轍跡である。2 条の轍間は約 1.4m である。所々途切れてはいるが、全体の検出長は約 23.8 mを測る。轍の幅は 0.05 m、深さは 0.05 mである。

風倒木痕

〔1721 風倒木痕〕（図 149・154、図版 22-1）

5-2 区南東側、2O-4j で検出した。長径 3.86m、短径 2.79 m、深さ 0.38 mを測る。埋土は、上層がにぶい黄橙色粘土、下層が褐灰色粘土で黒色の斑点が入る。

小結

調査区の東半を中心に数棟の掘立柱建物を検出できたが、調査範囲の狭小さもあり建物群としての把握や集落景観の復元には至っていない。一方、西半では不定方向に走る溝や不定形な土坑が点在している状況で、人為的な開発の姿が捉え難い。

6．第 5 面（図 156 ～ 159、図版 24-1）

洪水砂層である厚い第 5 層を除去した第 7 層上面を、第 5 面として調査をおこなった。各調査区の様相は、以下の通りである。

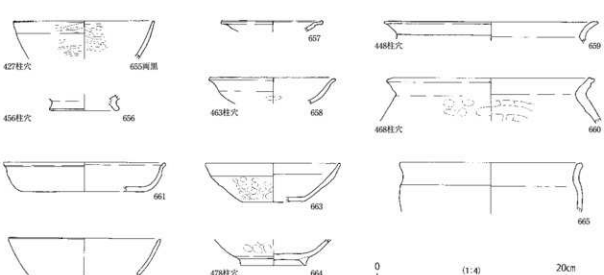


図155　4・5区　第4面　各遺構　出土遺物（2）

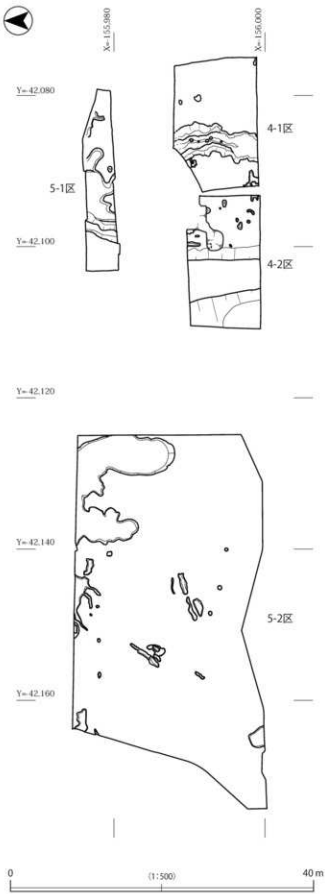


図156　4・5区　第5面　平面図

4-1区（図156・157）

遺構面の標高は、北東隅8.20m、北西隅8.29m、南東隅8.26m、南西隅8.27m、中央部分8.32mを測り、ほぼ平坦な地形となる。584自然流路や不定形土坑を検出した。

4-2区（図156・157）

遺構面の標高は、北東隅8.16m、北西隅8.49m、南東隅8.29m、南西隅8.39m、中央部分8.53mを測る。調査区の中央やや西側に、第10層段階に埋没した流路の自然堤防状の高まりが南北に走っており、その両側には低位部が広がる。低位部と高まりの比高差は約0.2mである。なお、東側の低位部では土坑を検出した。

5-1区（図156・159）

遺構面の標高は、北東隅8.07m、北西隅7.92m、南東隅8.13m、南西隅8.10m、中央部分8.08mを測り、北西に向けてやや下がる地形となる。調査区西側では、自然流路を検出した。流路は、南側の4-1区では幅が狭いものであったが、5-1区では幅が非常に広くなる。流路からは土器等の遺物が出土しなかったが、植物遺体が多く堆積していた。

5-2区（図156・158、図版24-1）

遺構面の標高は、北東隅8.07m、北西隅7.92m、南東隅8.13m、南西隅8.10m、中央部分8.10mを測り、北西に向けてやや下がる地形となる。自然流路と風倒木痕を検出した。

流路

〔584流路〕（図157、図版18-3）

4-1区中央やや西側、1O-9i・9jで検出した。南側から北側にやや蛇行しながら流れる。長さ10.16m、幅3.05～4.63m、深さ0.57～1.10mを測る。流路底面に、平面楕円形を呈する窪みが4基みられる。窪みの大きさは、長径0.45m、短径0.40m、深さ0.30mである。流路埋土はオリーブ黒色粘土、黄灰色砂礫などである。

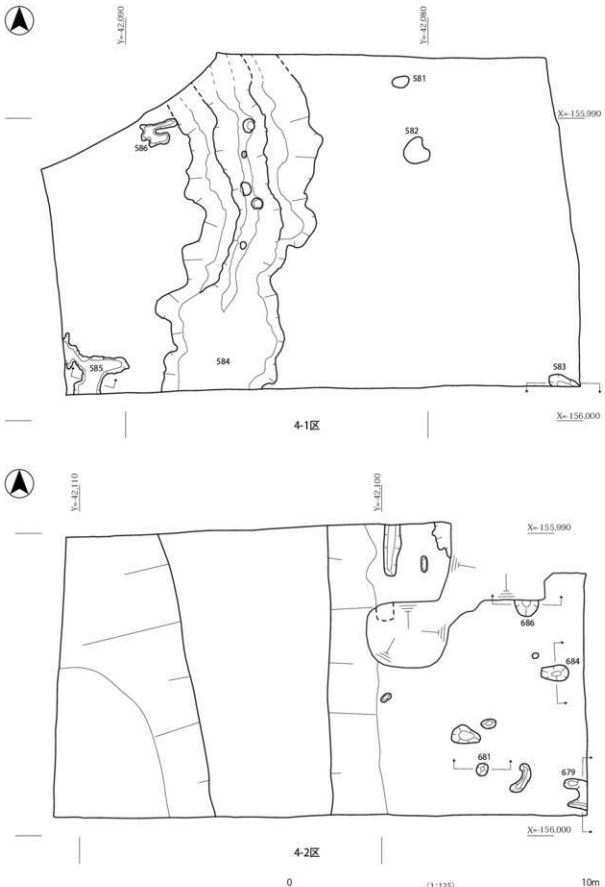


図157　4-1・2区　第5面　平面図

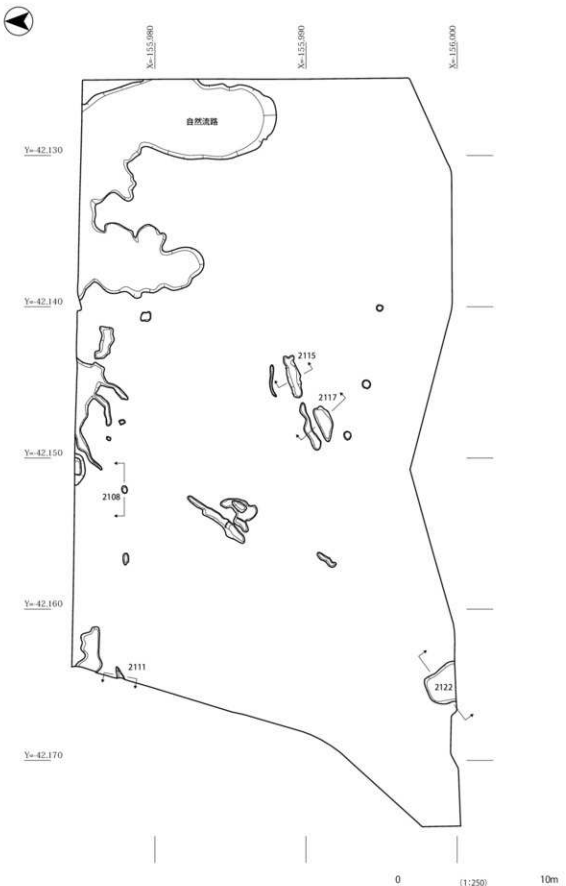


図158　5-2区　第5面　平面図

土坑

〔578 土坑〕（図 159・160）

5-1 区中央南側、1O-9h・10h で検出し、自然流路の東側に位置する。長径 0.78m、短径 0.54m、深さ 0.24m を測る。平面は楕円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルトである。

〔681 土坑〕（図 159・160）

4-2 区南東側、1O-10j で検出した。長辺 0.40m、短辺 0.39m、深さ 0.06m を測る。平面は隅丸方形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、埋土は黒褐色礫混じり砂質シルトである。

〔684 土坑〕（図 157・160）

4-2 区東側、2O-1j で検出した。長径 0.90m、短径 0.52m、深さ 0.17m を測る。平面は楕円形を、断面は浅い皿状を呈する。埋土は 3 層に分かれ、上層がオリーブ黒色粗砂、中層が灰色粘土、下層が灰黄色粘土である。

〔686 土坑〕（図 157・160）

4-2 区北東側、1O-10j で検出した。長径 0.80m、深さ 0.17m を測る。北側が撹乱に切られるため、現状で平面は半円形を呈する。断面は浅い皿状を呈し、埋土は 2 層に分かれ、上層が黒色粘土、下層が灰色粘土である。

〔2108 土坑〕（図 158・160）

5-2 区中央北側、2O-6h で検出した。長径 0.80m、短径 0.37m、深さ 0.18m を測る。平面は楕円形を、断面形は逆台形を呈する。埋土は 2 層に分かれ、上層が黒色シルト、下層が暗灰黄色シルト～細砂である。

〔2111 土坑〕（図 158・160）

5-2 区北西隅、2O-7h で検出した。西側は調査区外に延びる。長さ 0.85m、幅 0.51m、深さ 0.31m を測る。平面は三角形状を、断面は逆台形を呈する。埋土は 3 層に分かれ、上層が中礫を含む黒色粘質シルト、中層が中礫を含む褐灰色～にぶい黄褐色粘質シルト、下層が中礫を含む黒褐色～暗灰黄色粘質シルトである。

〔2122 土坑〕（図 158・160）

5-2 区南西隅、2O-7j で検出した。南側は調査区外に延びる。長辺 2.66m、短辺 2.06m、深さ 0.14m を測る。平面は隅丸方形を、断面は浅い皿状を呈する。埋土は、上層が黒色粘土或いは暗灰黄色粘質シルト、下層が灰色シルトである。

落ち込み

〔579 落ち込み〕（図 159・160）

5-1 区中央やや東寄り、1O-9h で検出した。自然流路の東側に接し、流路に向かって下る。長さ 3.52m、幅 1.58m、深さ 0.53m を測る。埋土は 3 層に分かれ、上層がオリーブ黒色粘土、中層が黄灰色粗砂～極粗砂、下層が灰色粘土である。

〔580 落ち込み〕（図 159・160）

5-1 区北東側、1O-9h で検出した。不定形な落ち込みで、北側は調査区外へ延びる。長さ 3.46m、幅（検出値）1.77m、深さ 0.26m を測る。埋土は黄灰色粘土である。

〔583 落ち込み〕（図 157・160）

4-1 区南東隅、1O-8j で検出した。長径 1.05m、短径 0.40m、深さ 0.24m を測る。南・東側は側溝

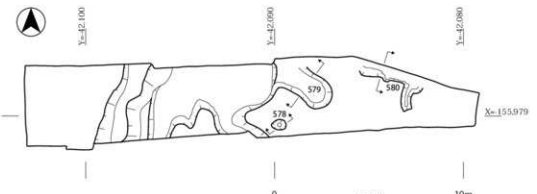


図159　5-1区　第5面　平面図

に切られるが、平面は長楕円形を呈する。断面は西側で二段落ちとなっている。埋土は2層に分かれ、上層が黒褐色中砂混粘質シルト、下層が黒色粘質シルトである。

〔585 落ち込み〕（図 157・160）

4-1 区南西隅、1O-10j で検出した。長さ 2.15m、幅 1.24m、深さ 0.12m を測る。南側から北西側へと延びる不定形な平面を呈する。埋土は灰色砂質シルトである。

〔679 落ち込み〕（図 157・160）

4-2 区南東隅、1O-10j で検出した。長さ 0.97m、検出幅 0.77m、深さ 0.15m を測る。東側は側溝に切られ、現状で平面が「コ」の字状を呈する。底面は凹凸が著しい。埋土は黒褐色礫混砂質シルトとにぶい黄橙色砂質シルト、黒褐色粗砂混シルトが混在しており、風倒木痕の可能性がある。

風倒木痕

〔2115 風倒木痕〕（図 158・160、図版 24-1）

5-2 区中央のやや南寄り、2O-5i で検出した。長さ 2.98m、幅 0.92m、深さ 0.40m を測る。平面は東西方向に長い溝状を呈する。北側に対となる幅の狭い溝状の落ち込みが伴う。断面は南側が二段落ちとなるが、概ね逆台形を呈する。埋土は3層に分かれ、上層が細礫を含む黒色シルト、中層が黄灰色シルトなど、下層が中砂を含む灰オリーブ色シルトである。

〔2117 風倒木痕〕（図 158・160、図版 24-1）

5-2 区中央やや南寄り、2O-5i・5j で検出した。長さ 3.28m、幅 0.97m、深さ 0.13m を測る。平面はやや東西に長い溝状を呈している。北側に対となる幅の狭い溝状の落ち込みが伴う。断面は浅い皿状を呈する。

小結

第5面では、自然流路、不定形土坑、風倒木痕等を検出したが、出土遺物は認められず人為的な営みの痕跡を確認するには至らなかった。

包含層出土遺物

〔第3層出土遺物〕（図 161）

第3層からは、弥生土器、土師器小皿・「て」字口縁小皿・杯・椀・甕、土師質羽釜、黒色土器椀、瓦器小皿・椀、瓦質土器こね鉢・甕体部・羽釜、須恵器杯身・蓋・鉢・壺・長頸壺・甕、灰釉陶器、備前甕、常滑甕、白磁碗・皿、青磁碗、瓦類、石製品、サヌカイト製石器など、多岐に亘る遺物が出土している。

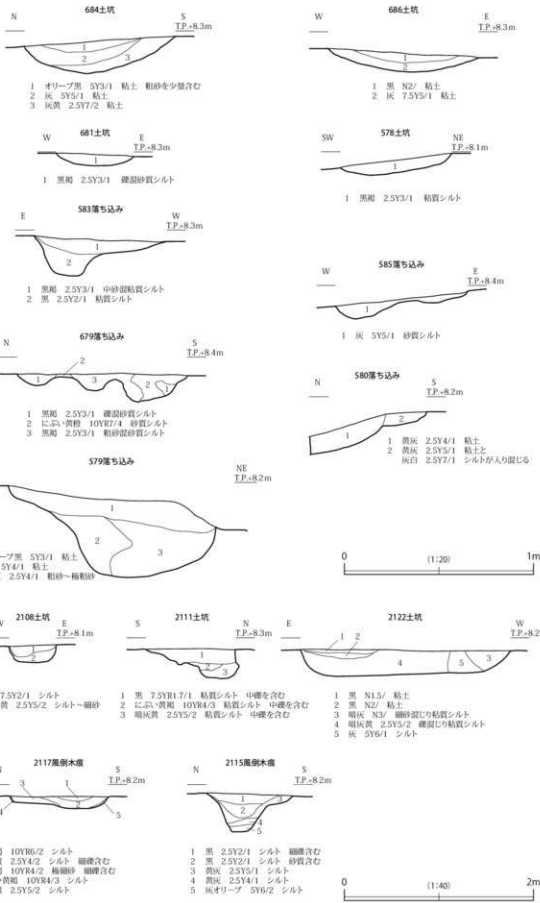


図160　4・5区　第5面　各遺構　断面図

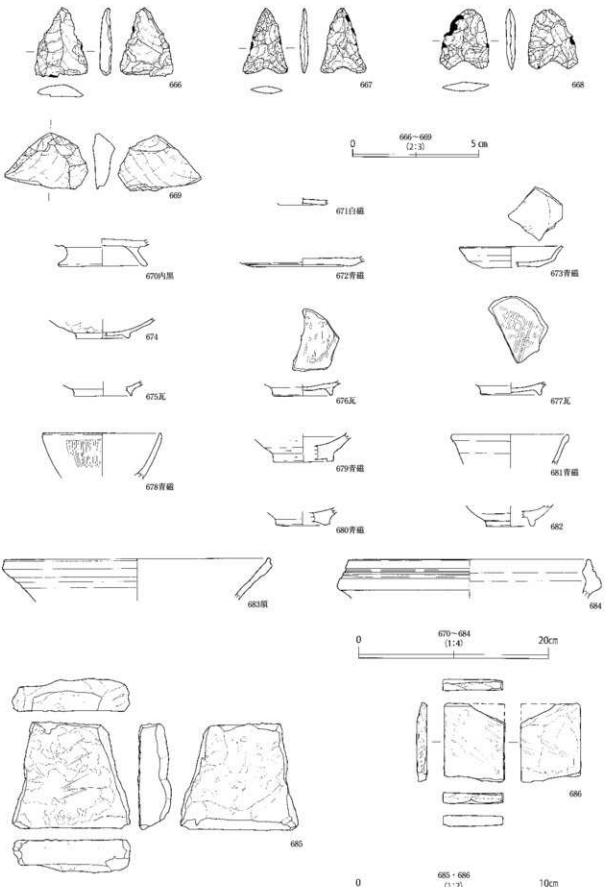


図161　4・5区　第3層　出土遺物

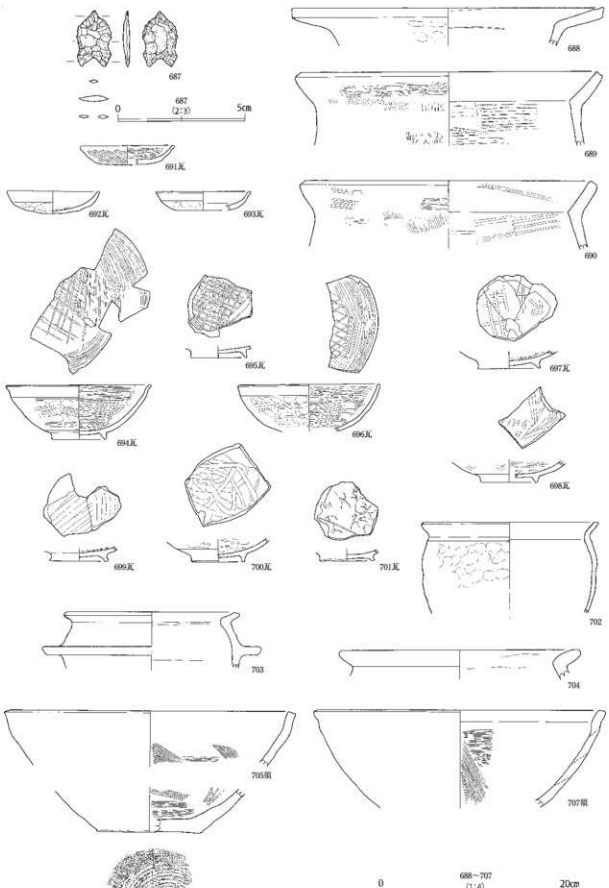


図162　4・5区　第4a層　出土遺物

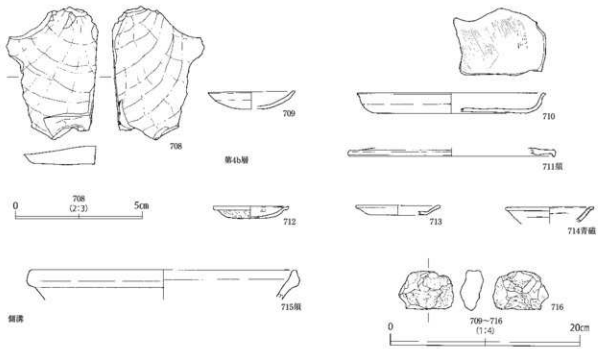


図163　4・5区　第4b層・側溝　出土遺物

このうち、サヌカイト製石鏃（666～668）、サヌカイト剥片（669）、黒色土器内黒椀または鉢（670）、白磁皿（671）、青磁皿（672・673）、土師器椀（674）、瓦器椀（675～677）、青磁碗（678～681）、染付碗（682）、東播系須恵器こね鉢（683）、備前擂鉢（684）、砥石（685・686）を図示した。

〔第4層出土遺物〕（図162）

第4層からは、土師器小皿・杯・椀、黒色土器皿・椀、瓦器椀・皿、瓦質土器鉢・甕、須恵器杯身・杯蓋・杯・壺・甕、湊焼甕、白磁碗・皿、青磁皿、サヌカイト製石器、瓦など多岐に亘る遺物が出土している。

このうち、サヌカイト製石鏃（687）、土師器鉢（688）・甕（689・690）、瓦器小皿（691～693）・椀（694～701）、土師器甕（702）、土師質羽釜（703・704）、須恵器こね鉢（705～707）を図示した。

〔第4b層出土遺物〕（図163）

第4b層からは土師器皿・碗・甕、土師質羽釜、黒色土器椀、瓦器椀・皿、瓦質土器甕、東播系須恵器片口鉢、サヌカイト剥片などが出土している。

このうち、サヌカイト剥片（708）、土師器小皿（709）を図示した。

〔側溝出土遺物〕（図163）

出土層位を確定し難いものとして、弥生土器甕・壺、土師器杯・椀・高杯・甕、土師質羽釜、須恵器杯蓋・杯・壺・長頸壺・甕、黒色土器椀、瓦器小皿・椀、瓦質土器鉢・甕、白磁碗、染付、灰釉陶器椀、瓦、金属製品などが出土している。

このうち、土師器皿（710）、須恵器杯蓋（711）、土師器小皿（712・713）、青磁小皿（714）、須恵器こね鉢（715）、鋳造炉片（716）を図示した。

第4節　6・7区の成果

6・7区は05-1調査の中で、やや西側に位置する。東西道路を挟んで北側が6区、南側が7区である。阪南大学野球グランド東側を流れる水路を東端、阪南大学野球グランド西側付近を西端とする。調査区区内には、複数の生活道路が存在するため、細分して調査をおこなった。細分した各調査区名は、調査を実施した順に命名しているため順番に並ばない。6区では東側から6-4区、6-2区、6-1区、6-3区となり、7区では東側から7-4区、7-1区、7-2区、7-3区となる。

1．基本層序　（図164）

第1層　現代耕作土である。この上部に盛土が被る。

第2層　シルトを主とした層である。層厚は0.13～0.46mを測る。なお、東側に位置する6-4区・6-2区では、2層に細分できる。6-2区では、上層が灰白色～黄灰色細礫混シルト、下層が灰色～灰白色細礫混シルトである。6-4区では、上層がにぶい黄色砂混シルトで、西半では細粒化し、下層が暗灰黄色細礫混シルトである。西側に位置する6-1区では、これらのうちの下層のみが見られる。

第3層　6-4区・6-2区では、明オリーブ灰色砂混粘質シルトからなり、西半部分は粗粒化している。6-3区では、灰黄色シルトからなり、西半部分は細粒化している。層厚は0.04～0.19mを測る。本層上面を第1面として調査をおこない、東西方向の鋤溝群を検出した。

第4a層　灰オリーブ色～明オリーブ灰色シルト・褐色～暗灰黄色中砂混シルトなどからなり、6-2区の東側、6-3区で堆積が認められた。層厚は0.01～0.06mを測る。本層上面を第2面として調査をおこなった。6-1区、6-4区では南北方向の短く細い鋤溝、井戸や土坑を検出した。7-1区では、南北方向の鋤溝を検出した。

第4b層　紫灰色粘質シルト・黒褐色粘質シルトなどからなる。6-1区では北側に薄く堆積する。6-2区では地形によって堆積の厚さに差がある。6-4区・6-3区では検出しなかった。層厚は0.06～0.30mを測る。本層上面で、遺構は認められない。

第5層　灰色～黄褐色砂質シルトなどからなる。西側の6-1区・6-3区で認められた。層厚は0.03～0.45mを測る。本層上面を第3面として調査をおこない、溝や土坑などを検出した。

第6層　灰白色～にぶい黄色砂混粘土質シルト・黄灰色細砂などからなり、ラミナが顕著な層である。第5層が堆積しない東側の6-2区・6-4区において認められ、6-4区溜池下層の流路側では厚くなり、全体的な層厚は0.05～1.50mを測る。本層上面も第3面として調査をおこなった。

第7～9層　第7～8層は黒褐色砂混粘質シルトからなり、第7～9層は黒褐色～灰黄褐色砂礫混シルトなどからなる。層厚は0.03～0.33mを測る。第9層は褐灰色シルト混粗砂からなる。6区では7層と9層が接している箇所がある。本層上面を第4面として調査をおこない、6-3区では溝などを検出した。

第10層　灰黄褐色砂礫混シルト・にぶい黄色中～細砂・灰色～緑灰色粘質シルトなどからなる。層厚は0.07～0.82mを測る。本層上面を第5面として調査をおこなった。

第11～12層　黒褐色シルト混砂礫・灰色砂混粘質シルト・褐灰色粘質シルト・灰色粘質シルト・黄灰色シルトなどからなる。第11層と第12層を分離できない箇所があった。層厚は0.15～0.55mを測る。

第13層　灰色細砂混シルト・緑灰色砂混粘質シルトからなり、固結している。層厚は0.04～0.27m

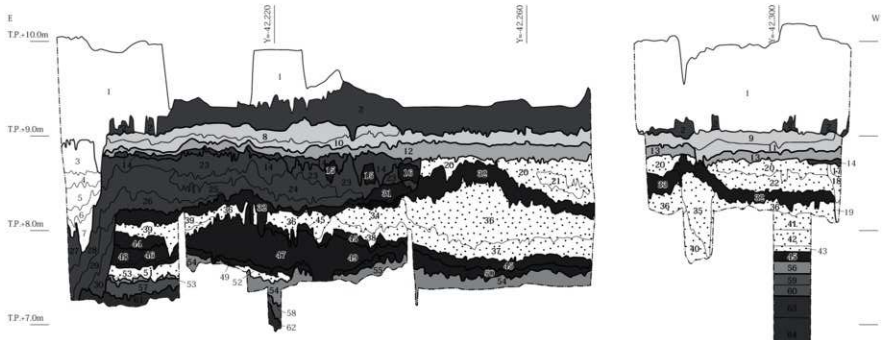


図164　6区　断面図

1　（盛土）
2　暗オリーブ褐　2.5Y3/3　シルト混粘砂（現代耕作土層）[第1層]
3　黒褐　10YR3/2　シルト（湿地埋土）
4　オリーブ黒　7.5Y3/1　粘質シルト（湿地埋土）
5　暗緑灰　10GY4/1　砂礫～シルト（湿地埋土）
6　灰　10Y5/1　粗砂～細礫混粘質シルト（湿地埋土）
7　灰　10Y5/1　砂礫～シルト（湿地埋土）
8　黄灰　2.5Y6/1　細礫混シルト[第2層]
9　にぶい黄　2.5Y6/3　砂混シルト　西平細粒化[第2層]
10　灰　5Y6/1　細礫混シルト[第2層]
11　暗灰黄　2.5Y5/2　細礫混シルト[第2層]
12　明オリーブ灰　5GY7/1　砂混粘質シルト　西平粗粒化[第3層]
13　灰黄　2.5Y6/2　シルト　西平細粒化[第3層]
14　灰オリーブ　7.5Y5/2　シルト[第4a層]
15　緑灰　5/6/1　粘質シルト[第4b層]
16　黒褐　7.5YR3/2　粘質シルト[第4b層]
17　灰黄　2.5Y6/2　細砂混シルト[第5層]
18　黄灰　2.5Y5/1　中～粗砂[第5層]
19　にぶい黄橙　10YR6/3　粗砂[第5層]
20　黄褐　10YR5/6　砂質シルト[第5層]
21　黄灰　2.5Y5/1　シルト[第5層]
22　灰黄褐　10YR6/2　粘質シルト～粘土[第5層]
23　にぶい黄　2.5Y6/3　砂混粘質シルト[第6層]
24　灰　10Y6/1　中～粗砂[第6層]
25　灰白　2.5Y8/1　粘質シルト　中砂～粗砂を含む[第6層]
26　黄灰　2.5Y6/1　細砂　ラミナ顕著[第6層]
27　灰　7.5Y5/1　砂礫（水成層）[第6層]
28　オリーブ黒　5Y3/1　中～細砂　植物遺体を含む[第6層]
29　灰　5Y4/1　細砂～粘土[第6層]
30　オリーブ黒　5Y3/1　粘土　植物遺体を含む[第6層]
31　黒褐　2.5Y3/2　砂混粘質シルト[第7～8層]
32　黒褐　2.5Y3/1　砂礫混シルト
　東側方で褐灰　5YR4/1　砂混シルトに変化[第7～9層]
33　黒褐　10YR3/2　砂礫混シルト[第7～9層]
34　褐　7.5YR4/4　シルト混粗砂[第9層]
35　褐　10YR4/6　砂礫[第10層]
36　灰黄褐　10YR6/2　砂礫混シルト　中～細砂を含む[第10層]
37　灰　5Y6/1～緑灰　7.5GY6/1　粘質シルト[第10層]
38　緑灰　7.5GY6/1　粘土　[第10層]
39　灰黄褐　10YR4/2　粘質シルト　上方粗粒化[第10層]
40　オリーブ灰　2.5GY5/1　砂礫（砂岩礫多い）[第10層]
41　黄灰　2.5Y5/1　砂質シルト[第10層]
42　灰　7.5Y5/1　極細砂～中砂[第10層]
43　灰　7.5Y5/1　粘質シルト　[第10層]
44　黒褐　7.5Y3/2　シルト混砂礫[第11層]
45　暗灰　10YR5/1　粘質シルト[第11層]
46　暗灰黄　2.5Y5/2　砂礫[第11～12層]
47　黄褐　2.5Y5/3　砂礫[第11～12層]
48　黄褐　2.5Y5/3　砂礫　西端はシルト主で細粒化[第11～12層]
49　黒褐　7.5Y3/2　シルト混砂礫[第11～12層]
50　灰　7.5Y5/1　シルト[第11～12層]
51　灰　10Y5/1　シルト[第12層]
52　オリーブ灰　5GY6/1　シルト～粗砂[第12層]
53　緑灰　5G6/1　粘質シルト[第13層]
54　灰　10YR6/1　細砂混シルト　固結[第13層]
55　緑灰　5G6/1　砂混粘質シルト　固結[第13層]
56　灰　7.5Y5/1　シルト　[第13層]
57　黄灰　2.5Y5/1　シルト　[第14層]
58　オリーブ黒　5Y3/1　粘質シルト[第14層]
59　灰　10YR6/1　細砂混シルト[第14層]
60　灰　10Y5/1　緑灰　5RP6/1　砂質シルト[第14層]
61　オリーブ灰　2.5GY5/1　砂礫混粘質シルト[第15層]
62　オリーブ灰　2.5GY6/1　粘質シルト　固結[第15層]
63　緑灰　5G6/1　砂質シルト[第15層]
64　緑灰　5G6/1　シルト　細砂を含む
　上方細粒化[第15層]
65　緑灰　10G6/1　細砂～シルト[第15層]
66　緑灰　10G5/1　細砂～中砂[第15層]
67　灰　10Y6/1　砂礫　粗砂～細礫を含む[第15層]
68　灰　7.5Y6/1　粗砂　細礫を含む
　緑灰色のクサリ礫を含む[第15層]

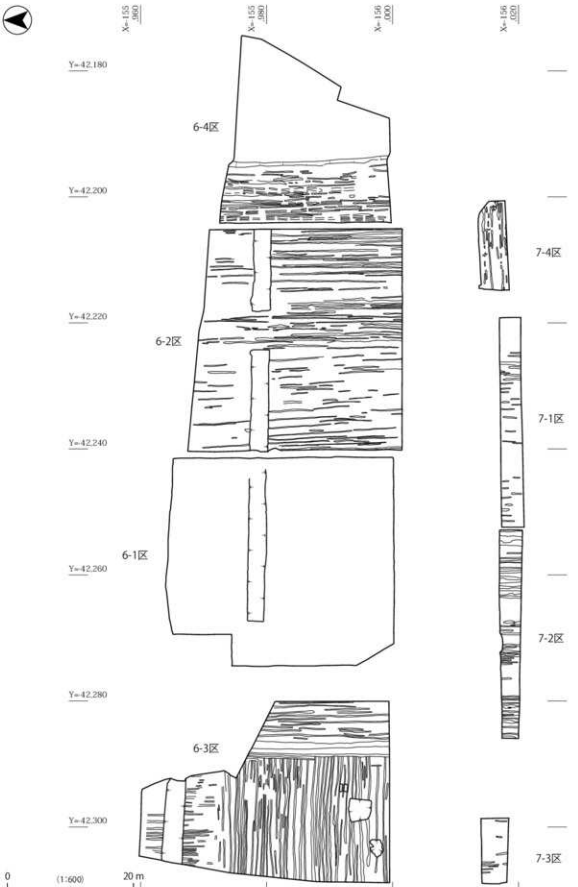


図165　6・7区　第1面　平面図

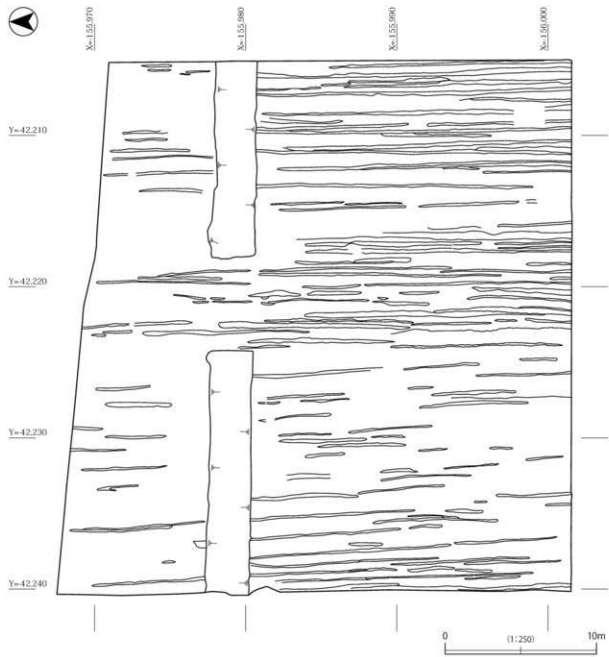


図166　6-2区　第1面　平面図

を測る。

第14層　オリーブ黒色粘質シルト・灰色細砂混シルトなどからなる。層厚は0.14 mを測る。

第15層　緑灰色細～中砂や灰色砂礫に粗砂～細礫を含む層である。

2．第1面（図165～169、図版18-6・18-7）

6-2～6-4区、7-1～7-4区において、遺構を検出した。

6-2区（図165・166）

遺構面の標高は、北東隅9.00 m、北西隅8.96 m、南東隅9.03 m、南西隅9.02 m、中央部分9.02 mを測る。南北方向に長い鋤溝群を多数検出した。溝幅0.15～0.60m、長さ約1～29 mを測る。直線状の鋤溝が多く、中には他の鋤溝と重複する溝もある。調査区中央付近に集中し、西・東側ではやや数が少ない。溝の規模から、溝の芯間距離約1.2～1.3mごとに基礎的な単位をなす鋤溝が掘られてい

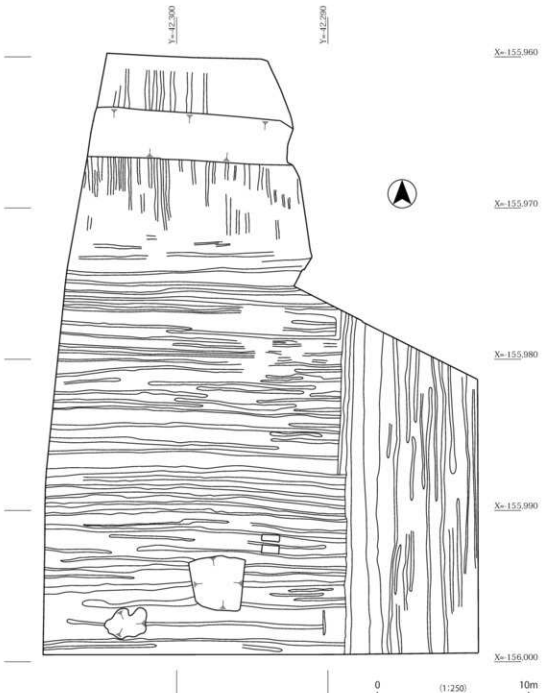


図167　6-3区　第1面　平面図

たようである。

鋤溝からの出土遺物には、土師器鉢、甕体部、陶磁器　天目碗、唐津、青磁、染付、瓦などがある。

6-3 区（図 165・167、図版 18-6）

遺構面の標高は、北東隅 8.87 m、北西隅 8.84 m、南東隅 8.99 m、南西隅 8.99 m、中央部分 8.98 mを測る。方向の異なる鋤溝群を 3 群検出した。北側の約 10 mの範囲において、南北方向の鋤溝群が認められる。それ以外の中央から南西側では、東西方向の鋤溝群が検出された。溝幅は 0.30 ～ 0.60m である。一部、幅が広い鋤溝も認められるが、大部分が細い鋤溝である。南半では調査区の端まで続く長い鋤溝が多く、北半では短いものが多い。

図168　6-4区　第1面　平面図

6-4区（図165・168・170）

この地区では東側に溜池があり、西側遺構面と東側溜池では高さが異なる。遺構面の標高は、西側が、北東隅8.95m、北西隅8.99m、南東隅8.96m、南西隅8.93m、中央部分8.96mを測り、東側の溜池部分は、北東隅8.46m、北西隅8.58m、南東隅8.61m、南西隅8.54m、中央部分8.56mを測る。東側は厚さ0.70～0.80mを測るヘドロ状の溜池埋土が堆積する。西側は他の6区同様の堆積を示す。第1面では、西側に南北方向の鋤溝群を検出した。鋤溝は長さ1～15mを測り、大半は3～7mである。幅は0.20～0.60mを測り、大半は幅0.30～0.40mである。

溜池の埋土上層から出土した遺物には、唐津（717・718・720）、陶器高台（719）、備前擂鉢（721）、染付碗（722・723）・瓶（724）がある。また、溜池の埋土上・下層から出土した遺物には、瓦質風炉（725）、瀬戸美濃壺体部（726）、湊焼甕口縁部（727）、唐津碗（728･729）、染付碗（730･731・732）がある。これらは、16世紀末から18世紀前半頃の時期を示す。

7-1区（図165・169、図版18-7）

遺構面の標高は、北東隅8.96m、北西隅9.12m、南東隅8.97m、南西隅9.12m、中央部分9.09mを測る。南北方向の鋤溝を28条検出した。鋤溝の幅は0.15～0.50m、長さは最長でも約2.5mを測り、大半が2m以下と短い鋤溝である。

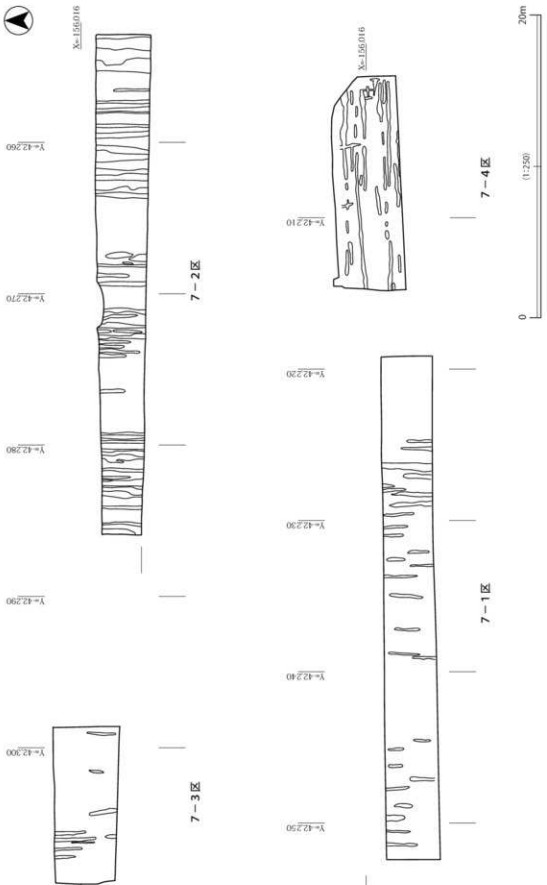


図169　7-1～4区　第１面　平面図

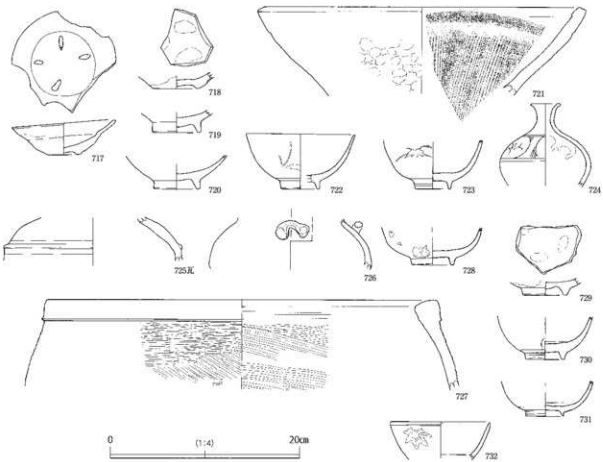


図170　6-4区　第１面　溜池　出土遺物

7-2 区（図 165・169）

遺構面の標高は、北東隅 9.05 m、北西隅 9.08 m、南東隅 9.11 m、南西隅 9.09 m、中央部分 9.09 mを測る。南北方向の鋤溝群を検出した。溝の南北端が調査区外に達するものが多く認められ、この地区では長い溝が多い。途中で途切れる溝も数少ない。鋤溝は、幅の狭いものと広いものの２者がある。このうち、幅広のものは、調査区東側に集中する傾向があり、溝幅は約 0.15 ～ 1m を測る。また、中央付近では２箇所、鋤溝の密度が希薄になる地点が認められる。

7-3 区（図 165・169）

遺構面の標高は、北東隅 9.08 m、北西隅 9.10 m、南東隅 9.10 m、南西隅 9.12 m、中央部分 9.10 mを測る。南北方向の鋤溝群を検出した。鋤溝は、長さ約 0.8 ～ 3.0m、幅 0.20 ～ 0.30m を測る。

7-4 区（図 1165・169）

遺構面の標高は、北東隅 9.15 m、北西隅 9.13 m、南東隅 9.12 m、南西隅 9.14 m、中央部分 9.11 mを測る。他の７区と違い、東西方向の鋤溝群を検出した。鋤溝の長さは約 0.4 ～ 9.8 mを測り、短い鋤溝が多くみられる。鋤溝の幅は約 0.1 ～ 0.4 mを測り、細い鋤溝が多い。この中に、僅かであるが、南北方向の鋤溝が混じる。東西方向と南北方向の鋤溝の切り合い関係は分からなかった。

３．第２面（図 171・172・174、図版 18-5・19-2）

6-1 区、6-4 区、7-1 区において、遺構を検出した。

6-1 区（図 171・172、図版 18-5）

遺構面の標高は、北東隅 8.68 m、北西隅 8.87 m、南東隅 8.80 m、南西隅 8.76 m、中央部分 8.76

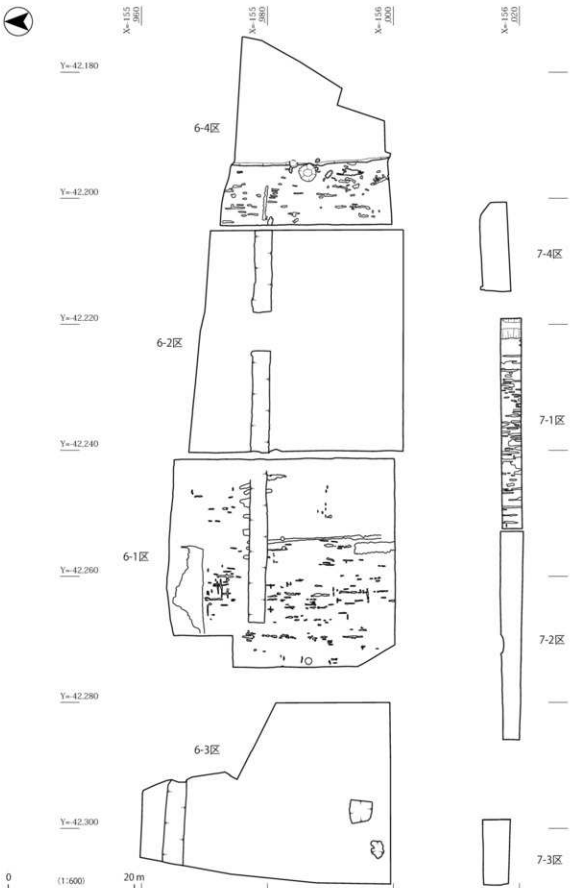


図171　6・7区　第2面　平面図

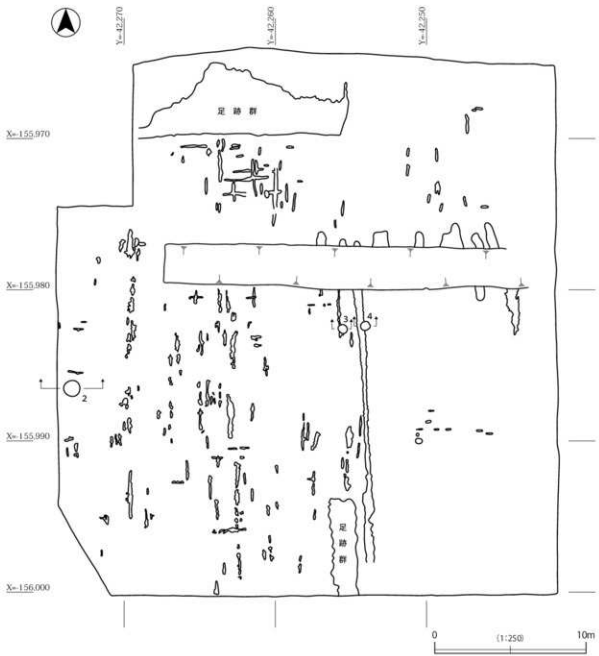


図172　6-1区　第2面　平面図

mを測る。主に南北方向の鋤溝群を検出した。ごく僅かであるが、東西方向を示す鋤溝がみられる。南北方向と東西方向の鋤溝が交差する部分では、切り合い関係は分からなかった。幅は0.20～0.50mを測る。最も長い鋤溝は長さ約17.8mを測る。この溝は鋤溝ではなく排水溝の可能性もある。大半の鋤溝は検出長3m未満が多く、その中でも1m未満のものが大半を占める。南北方向の鋤溝に混じって東西方向の短い鋤溝が調査区北側の中央付近を中心に少し認められる。

足跡群は、調査区北端西寄りと南端中央で密集して検出された。相当深く窪み、当時の水田区画を示している可能性がある。

このほかに調査区中央西端および、中央部において井戸を検出した。

鋤溝からの出土遺物には、土師器椀高台、土師質羽釜、須恵器こね鉢口縁部、杯、杯身（6世紀代）、瓦器椀高台・椀口縁部、瓦質土器甕、鉱滓などがある。

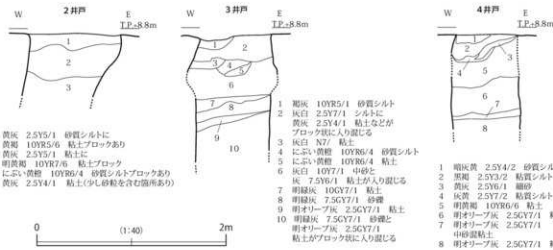


図173　6-1区　第2面　各遺構　断面図

6-4区（図171・174、図版19-2）

遺構面の標高は、北東隅8.70 m、北西隅8.72 m、南東隅8.77 m、南西隅8.77 m、中央部分8.78 mを測る。東側の溜池部分の標高は、北東隅8.26 m、北西隅8.30 m、南東隅8.37 m、南西隅8.34 m、中央部分8.37 mを測る。南北方向の短い鋤溝を検出した。上層の第3層上面の鋤溝と異なり、長さが非常に短い。埋土には灰色粘質土層、暗褐色粘質土層が認められる。また、鋤溝の平面形も凹凸が著しく点で様相が異なる。東西方向の鋤溝が1条認められる。この他に第4層上面の遺構として、井戸や土坑を検出した。

7-1区（図171・174）

遺構面の標高は、北東隅8.91 m、北西隅8.94 m、南東隅8.96 m、南西隅8.92 m、中央部分8.93 mを測る。南北方向の鋤溝群と、土坑や大溝などを検出した。鋤溝群は第1面と同様に南北方向を示している。第2面で検出した鋤溝群の大半は、第3層下面遺構である。第1面における鋤溝群の検出数と違って、その数は2倍を越す。鋤溝は長さ約3mを測り、調査区内で途切れる鋤溝が7条認められる。このほか約1m前後の短い鋤溝群が認められる。

井戸

井戸は6-1区で3基、6-4区で1基を検出した。このうち、2基の井戸は鋤溝群を切って作られている。

〔2井戸〕（図171～173）

6-1区西端付近、30-8iで検出した。径0.97mを測り、平面は円形に近い。肩部から急な角度で堀り下げられている。埋土は、上層で黄褐色砂質シルトに黄褐色粘土ブロックを含む、黄灰色粘土などが認められる。底面が調査掘削深度以下まで掘り下げられているため、深さは不明である。

〔3井戸〕（図171～173）

6-1区中央付近、30-6iで検出した。径0.74mを測り、平面は円形である。肩部から垂直に掘り下げられている。埋土は、上層が褐灰色砂質シルト、中層が明緑灰色粘土、下層が明オリーブ灰色粘土層がブロック状に混じる明緑灰色砂礫などである。出土遺物には、土師器、瓦器椀高台部、丸瓦などがある。

〔4井戸〕（図171～173）

6-1区中央付近、30-6iで検出した。径0.66mを測り、平面は少し歪んだ円形を呈する。肩部から垂

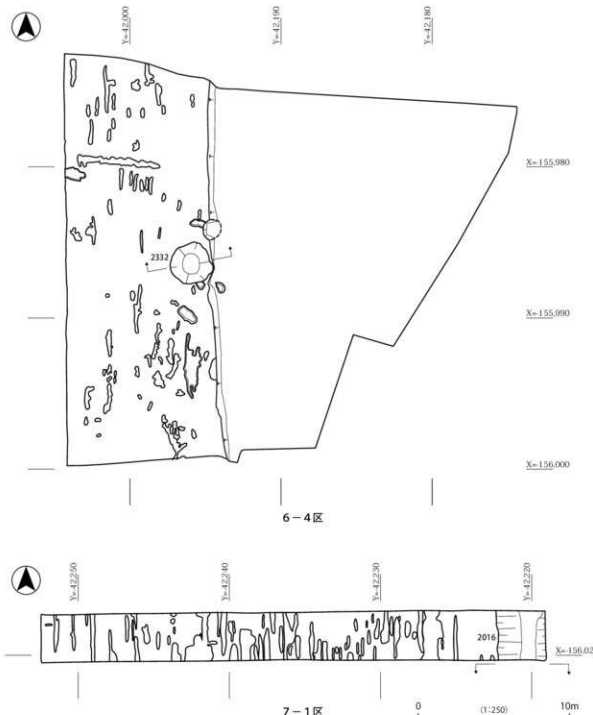


図174　6-4・7-1区　第２面　平面図

直に下る部分と緩やかな傾斜をもって下る部分とがある。埋土は、上層が暗灰黄色砂質シルト、中層が明黄褐色シルト、下層が明オリーブ灰色粘土などである。出土遺物には、瓦質土器羽釜などがある。〔2332 井戸〕（図 171・174・176、図版 19-2、21-1）

6-4 区西側高台部分東端、2O-10i で検出した。長径 2.82m、短径 2.68m を測る。平面は少し凹凸の認められる楕円形である。底面が調査掘削深度以下まで掘り下げられているため、深さは不明である。断面は肩からやや急な傾斜で約 1 m 下り、ここからほぼ垂直に下っている。北東側に小さな土坑が少し離れて位置し、南東側にも土坑が接する。埋土は、上層がにぶい黄橙色の斑紋が入る灰白色砂混シル

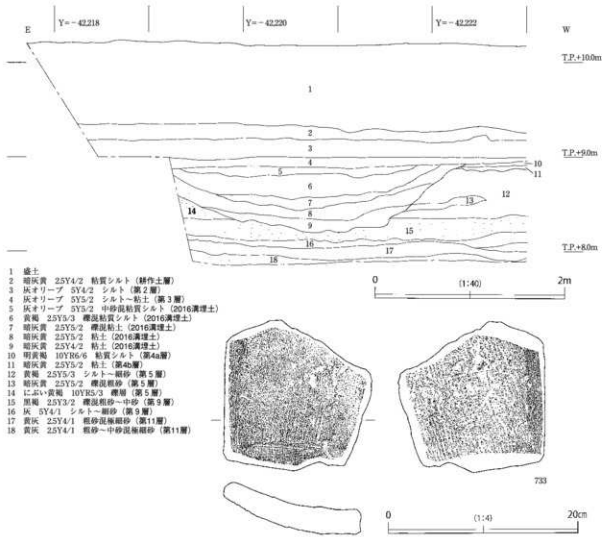


図175　7-1区　第２面　2016溝　断面図　出土遺物

ト、下層が黄灰色粘土などである。

出土遺物には、土師器椀、瓦器椀などがあり、このうち、砥石（714）を図示した。

溝

〔2016 溝〕（図 1171・174・175、図版 19-1）

7-1 区東端、3A-3b・3c で検出した、南北方向の溝である。長さ約 3.3m、幅約 3.1m、深さ 0.70 m を測る。断面は肩から急な傾斜で下り、途中から曲線を描いて底部に至る。埋土は、上層が灰オリーブ中砂混じり粘質シルト、中層が黄褐色礫混じり粘質土、下層が暗灰黄色粘土層などである。

出土遺物には、平瓦（733）があり、凸面には縄目タタキが残る。

４．第３面（図 177 ～ 182、図版 22-2・23-2 ～ 23-7）

6-1 区（図 177・178、図版 23-2）

調査区北側では、第 4b 層が厚く残るが、大半は第３層を除去すると第５層が露出し、同層上面を第３面とした。遺構面の標高は、北東隅 8.61 m、北西隅 8.70 m、南東隅 8.70 m、南西隅 8.73m、中央部分 8.67 mを測る。土坑、溝状遺構などを検出した。

6-2 区（図 177・179、図版 23-3）

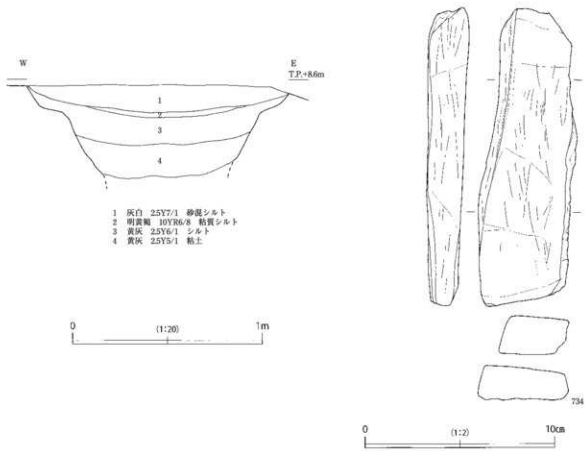


図176　6-4区　第２面　2332井戸　断面図　出土遺物

遺構面の標高は、北東隅 8.65 m、北西隅 8.60 m、南東隅 8.72 m、南西隅 8.71 m、中央部分 8.73 mを測る。溝や土坑などを検出した。

6-3 区（図 177・180、図版 22-2）

遺構面の標高は、北東隅 8.58 m、北西隅 8.65 m、南東隅 8.74 m、南西隅 8.67 m、中央部分 8.65 mを測る。南北溝、土坑、轍跡、風倒木痕などを検出した。

6-4 区（図 177・181、図版 23-4）

遺構面の標高は、西側で、北東隅 8.71 m、北西隅 8.68 m、南東隅 8.72 m、南西隅 8.73 m、中央部分 8.73 mを測り、東側の溜池部分で、北東隅 7.59 m、北西隅 7.76 m、南東隅 7.39 m、南西隅 7.71 m、中央部分 7.66 mを測る。西側では、南北方向の溝、南西から北東方向の斜めの溝、落ち込みの他、東側では、溜池と自然流路を検出した。

7-1 区（図 177・182、図版 23-5）

遺構面の標高は、北東隅 8.75 m、北西隅 8.86 m、南東隅 8.80 m、南西隅 8.87 m、中央部分 8.89 mを測る。東側で土坑２基、西側で溝１条と、この溝に切られる落ち込み１基を検出した。

7-2 区（図 177・182、図版 23-7）

遺構面の標高は、北東隅 8.64 m、北西隅 8.86 m、南東隅 8.62 m、南西隅 8.83 m、中央部分 8.84 mを測る。中央北側付近で、大きな落ち込みを検出した他、南北方向の溝、土坑などを検出した。

7-3 区（図 177・182、図版 23-6）

遺構面の標高は、北東隅 8.71 m、北西隅 8.76 m、南東隅 8.80 m、南西隅 8.77 m、中央部分 8.78

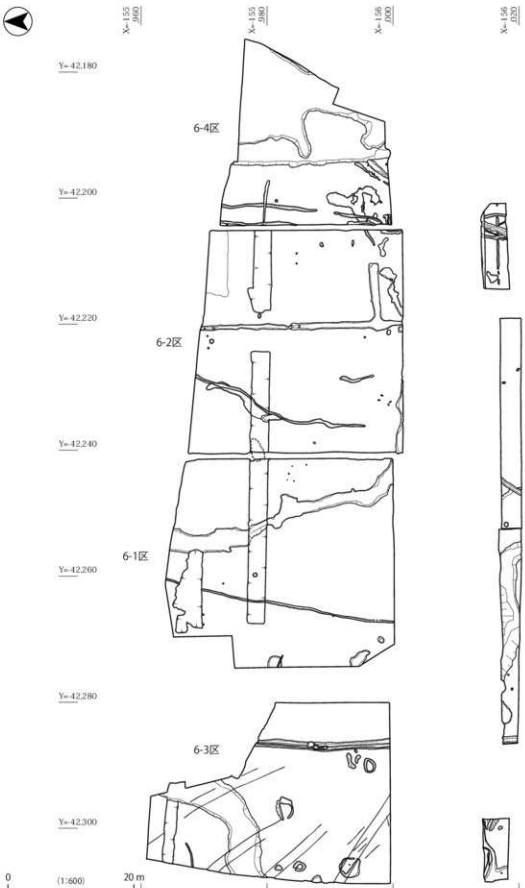


図177　6・7区　第3面　平面図

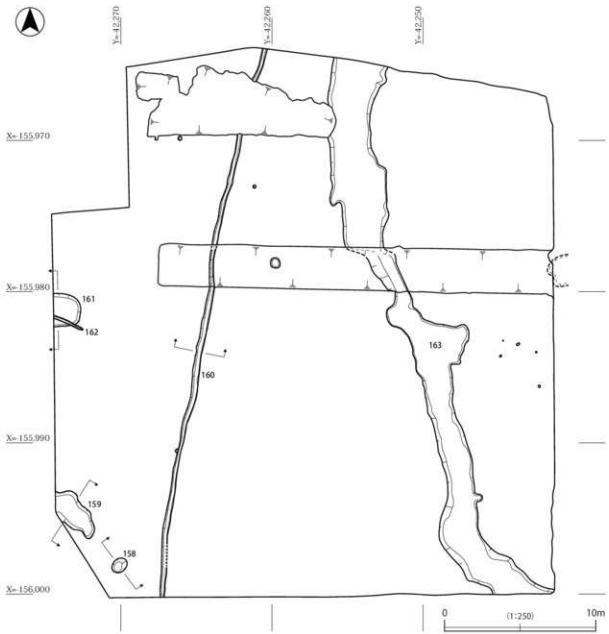


図178　6-1区　第3面　平面図

mを測る。調査区西端には南北方向の溝が流れ、この溝から分岐して東側に流れる溝がある。東側では溝状遺構2条、北端に落ち込みや土坑などを検出した。また、片側だけではあるが、轍跡と考えられる溝を検出した。

7-4区（図177・182）

遺構面の標高は、北東隅8.87 m、北西隅8.81 m、南東隅8.84 m、南西隅8.83 m、中央部分8.87 mを測る。南北方向や斜め方向、東西方向の溝や土坑を検出した。

自然流路

〔2483自然流路〕（図177・181・186、図版33）

6-4区東側、2O-8h・8i・8j・9h・9i・9j・10h・10i・10jで検出した。長さ23.13m、幅16.65mを測る。流路の下部は調査対象外となったため、深さは不明である。埋土は、にぶい黄色礫・オリーブ灰色礫などである。自然流路の上層は、客土によって埋められている。この直上に溜池の埋土がある。

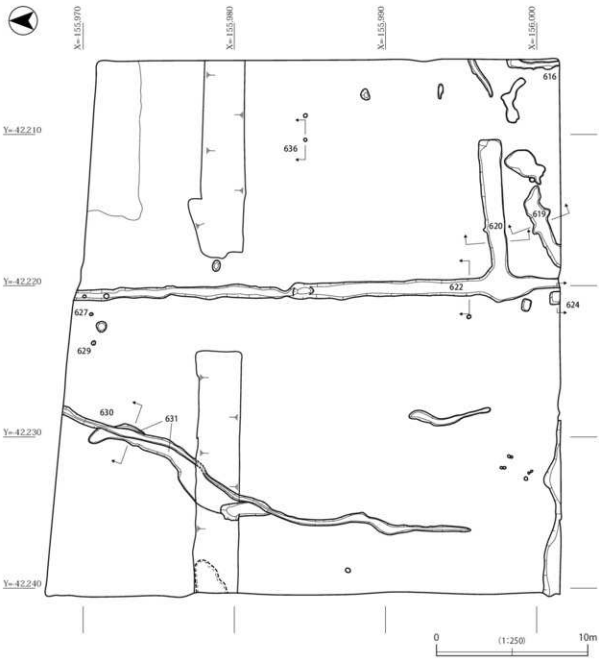


図179　6-2区　第3面　平面図

遺物は、上層から軒丸瓦（735）が出土した。

溝

〔160 溝〕（図 177・178・184、図版 23-2）

6-1 区西側、3O-7g・7h・7i・7j で検出した。長さ 36.8m、幅 0.23 ～ 0.47m、深さ 0.08 mを測る。僅かに蛇行しながら北北東に流れる。断面は皿状を呈する。埋土は暗褐色粘土である。

〔163 溝〕（図 177・178、図版 23-2）

6-1 区東側から 6-2 区南西隅、3O-3j・5i・5j・6g・6h・6i で検出した。長さ 36.31m、幅 1.17 ～ 3.77m、深さ 0.17 ～ 0.36m を測る。全体的に緩やかな弧を描いている。埋土は、上層が粗砂を含む明黄褐色粘土、下層がにぶい黄橙色中～粗砂などである。

〔620 溝〕（図 177・179・184・186、図版 23-3）

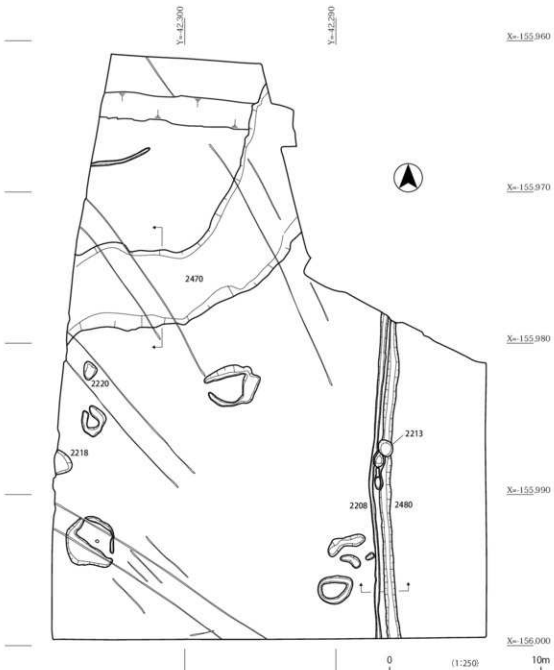


図180　6-3区　第3面　平面図

6-2 区南東隅、3O-2j で検出した。長さ約 9.0m、幅 1.07 ～ 1.57m、深さ 0.24 mを測る。 東西方向の溝で、西側にある 622 溝から東側へほぼ直角に枝分かれしている。断面は椀状を呈する。埋土は灰白色粘土で、明黄褐色粘土ブロックを含む。622 溝合流地点から東側 4m 付近が最も深い。

出土遺物のうち、瓦器椀（736）を図示した。この他には、土師器、須恵器杯身などが出土した。なお、この溝は第 2 面に帰属する遺構の可能性がある。

〔622 溝〕（図 177・179・184、図版 23-3）

6-2 区、3O-2h・2i・2j・3h・3i・3j で検出した。長さ約 26.8m、幅 0.35 ～ 1.09m、深さ 0.09 ～ 0.13 mを測る。南北方向の溝で、調査区中央のやや東寄りを南から北へ抜ける。溝の北側は幅狭で浅く、南側は幅広で深い。断面は皿状を呈する。底面は大きく波打って凹凸が激しい。検出した中央付

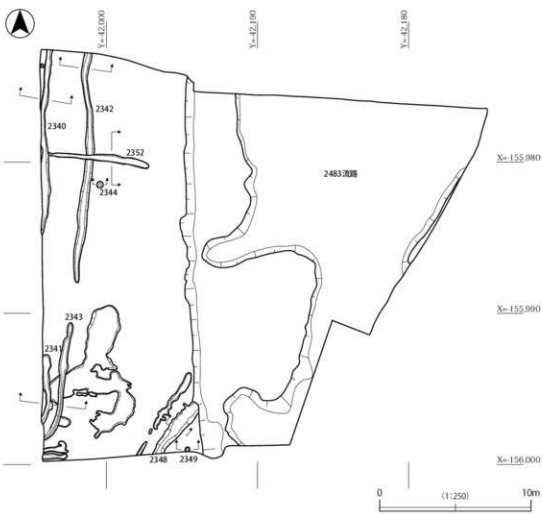


図181　6-4区　第3面　平面図

近で幅が狭くなり、この部分は浅い。埋土は灰黄褐色粘土である。出土遺物には、須恵器壺などがある。

〔630 溝〕（図 177・179・188、図版 23-3）

6-2 区西側、3O-3g・3h・3i・3j・4g・4h・4i・4j で検出した。631 落ち込みの中央を北側に流れる細い溝である。長さ約 27.9m、幅 0.32 ～ 0.71m、深さ 0.09 ～ 0.13 mを測る。左右に蛇行しながら北へと流れる。断面は椀状を呈する。埋土はにぶい黄褐色粘土である。溝の南端は調査区外まで延びず、消失する。

〔2028 溝〕（図 177・182・184、図版 23-5）

7-1 区西側、3A-5b・5c で検出した。長さ 3.74m、幅 0.65 ～ 0.81m、深さ 0.08 mを測る。南西から北東方向に流れる溝で、断面は浅い椀状を呈する。埋土は黒褐色粘土などである。

〔2208 溝〕（図 177・180・184、図版 22-2）

6-3 区東寄り、3O-9h・9i・9j で検出した。長さ 21.45m、幅 0.21 ～ 0.46m、深さ 0.05 mを測る。南から北へ流れる。断面は皿状を呈する。埋土は中礫を含む褐灰色シルトである。条里地割に一致しており、坪境溝である可能性が想定できる。

〔2334 溝〕（図 177・182・184）

7-2 区西端、3A-9b で検出した南北溝である。長さ 2.31m、幅 0.92 ～ 1.02m、深さ 0.29 mを測る。断面は段をなして中央が椀状に落ち込む形状である。埋土は黒褐色が斑状に入る褐灰色粘質シルトや、

図182　7-1～4区　第３面　平面図

シルトを含む黄灰色粘土である。本溝は後述の 6-3 区 2480 溝に続き、坪境溝の可能性が想定できる。出土遺物には、土師器がある。

〔2340 溝〕（図 177・181・184、図版 23-4）

6-4 区西端、3O-1h・1i で検出した。長さ約 12.2m、幅 0.30 ～ 0.43m、深さ 0.08 mを測る。南北方向の溝で、少し蛇行しながら途中は途切れるものの、南側の 2341 溝に続く。東側には 2342 溝が平行する。断面は皿状を呈する。埋土は灰白色シルト～細砂などである。

〔2341 溝〕（図 177・181・184、図版 23-4）

6-4 区西端、3O-1j で検出した。長さ約 4.6m、幅 0.31 ～ 0.47m、深さ 0.10 mを測る。南北方向の溝で、少し蛇行しながら、南端では向きを西側に屈曲しつつ調査区外へ延びる。東側には 2343 溝が同様に屈曲しながら平行する。断面は浅い椀状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。

〔2342 溝〕（図 177・181・184、図版 23-4）

6-4 区西側、3O-1h・1i で検出した。長さ約 15.2m、幅 0.35 ～ 0.68m、深さ 0.07 ～ 0.15 mを測る。南北方向の溝で、少し蛇行しながら途中で途切れつつも、南側の 2343 溝に続く。西側には平行して 2340 溝がある。西側には 2340 溝が平行する。断面は鉢状を呈する。埋土は褐灰色シルトなどである。

〔2343 溝〕（図 177・181・184、図版 23-4）

6-4 区西側、3O-1j で検出した。長さ 8.07m、幅 0.31 ～ 0.64m、深さ 0.08 mを測る。南北方向の溝で、少し蛇行しながら南端では屈曲しつつ、西側に向きを変えている。西側には 2341 溝が平行する。断面は浅い椀状を呈する。埋土はにぶい黄橙色シルトなどである。

〔2348 溝〕（図 177・181・184、図版 23-4）

6-4 区南西部、2O-10j で検出した、南西から北東方向に流れる溝である。長さ 4.40m、幅 0.65 ～ 1.05m、深さ 0.27 mを測り、少し幅の広い溝である。平面は凹凸が著しい。東側は後世の溜池によって失われている。北西側には平行する溝がある。断面は椀状を呈する。埋土は、上層がにぶい黄橙色シルト～細砂、下層が灰黄色砂礫混じり粗砂である。

〔2352 溝〕（図 177・181・184、図版 23-4）

6-4 区北側、3O-1h、2O-10h・10i で検出した東西方向の溝である。長さ 6.69m、幅 0.14 ～ 0.53m、深さ 0.02 ～ 0.10 mを測る。東端は調査区外まで延びずに途中で消失する。本調査区で東西方向の溝は、この溝のみである。幅は西側が狭く東側が広い。断面は浅い椀状を呈する。埋土はにぶい黄橙色シルト

1 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂混シルト
2 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 シルト
3 黄褐 2.5Y5/3 細砂
4 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂
5 オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂
6 オリーブ褐 2.5Y4/4 細砂
7 灰黄褐 10YR4/2 細砂
8 黒褐 10YR3/1 細砂
オリーブ褐 2.5Y4/4 細砂を含む 植物遺体を含む
9 黄灰 2.5Y4/1 シルト
10 オリーブ褐 2.5Y4/4 中砂
11 オリーブ黒 5Y3/1 細砂
12 オリーブ褐 2.5Y4/4 シルト
13 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂
14 暗褐 10YR3/4 粗砂混シルト
15 黄褐 2.5Y5/4 極細砂
16 暗灰黄 2.5Y4/2 中～細砂
炭化物を含む
17 オリーブ黒 5Y3/2 細砂
灰オリーブ5Y5/3 細砂
炭化物を含む
18 黄灰 2.5Y4/1 粗砂
植物遺体を含む
19 灰黄 2.5Y6/2 粗砂
暗灰黄 2.5Y4/2 シルトブロックを含む
20 オリーブ褐 2.5Y4/6 粗砂混シルト
21 黄褐 2.5Y5/3 粗砂
22 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂～粗砂
23 オリーブ黒 5Y3/1 シルト
24 黄灰 2.5Y4/1 細砂～粗砂
植物遺体を含む
25 灰 7.5Y4/1 シルト
0 (1:50) 2m

図183　6-3区　第３面　2470流路　断面図

などである。本溝と2342・2340溝との切り合い関係から、南北方向の溝に時期差が存在することが分かる。

〔2395溝〕（図177・182・185）

7-4区やや東側、3A-1bで検出した。長さ4.34m、幅0.82～1.19m、深さ0.33mを測る。南西から北東方向に延びる。平面は多少蛇行している。断面は椀状を呈し、肩から急な傾斜で下り、丸みを帯びた底部に至る。埋土は上層が灰白色細砂、下層が灰白色細砂～中砂などである。2398・2399溝に切られ、2396溝を切る。出土遺物には、土師器体部片がある。

〔2396溝〕（図177・182・185）

7-4区東側、3A-1bで検出した。長さ3.85m、幅0.40～0.62m、深さ0.15mを測る。やや屈曲しつつ南から北へ流れる。断面は逆台形状を呈し、肩から曲線を描きつつ下り丸みを帯びた底部に至る。埋土は黄灰色粘土などである。2395・2398・2399溝に切られる。

〔2397溝〕（図177・182・185、図版19-4）

7-4区東側、3A-1bで検出した。長さ約3.2m、幅0.36～0.49m、深さ0.08mを測る。少し湾曲しているが、南北方向を示す溝である。断面は皿状を呈し、肩から曲線状を示して下り、平坦な底部に至る。埋土は黒褐色斑点が入る暗灰黄色粘土である。

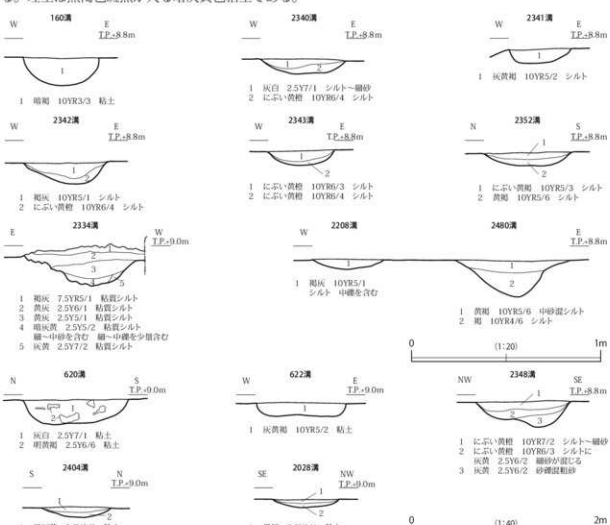


図184　6・7区　第3面　各遺構　断面図（1）

〔2398 溝〕（図 177・182・185、図版 19-4）

7-4 区北側、3A-1b・2b で検出した。長さ 12.28m、幅 0.44m、深さ 0.06 ～ 0.16m を測る。東西方向の直線的な溝で、軸をN -87° - E におく。断面は皿状を呈する。埋土は黄灰色粘土ににぶい黄色粘土ブロックが少し入る。

〔2399 溝〕（図 177・182・185）

7-4 区中央付近、3A-1b・2b で検出した。長さ 12.75m、幅 0.28 ～ 0.39m、深さ 0.03 ～ 0.06m を測る。調査区中央付近を東西方向に直線的に掘られている。西側は上部が削られて途切れるが、元は連続する同一の溝である。軸をN -88° - E におく。断面は皿状を呈する。埋土は灰白色粘土である。

〔2403 溝〕（図 177・182・185・186、図版 23-6）

7-3 区西端、4A-1b で検出した。長さ 3.82m、幅 1.80m、深さ 0.55 m を測る。南から北西方向に流れる。断面は椀状を呈し、途中緩やかな傾斜面がある。埋土は褐灰色粘質シルトに黒色が混じり、褐色の斑紋が入る。

出土遺物のうち、土師器小皿（737）、黒色土器両黒皿（738）・内黒椀（739・740）を図示した。

〔2404 溝〕（図 177・182・184、図版 23-6）

7-3 区中央部北側、4A-1b、3A-10b で検出した。長さ約 8.1m、幅 0.52 ～ 1.17m、深さ 0.12m を測る。調査区の北東から東西方向に延び、西側の 2403 溝に流入する。断面は皿状を呈する。埋土は暗灰黄色粘土などである。

〔2470 溝〕（図 177・180・183、図版 22-2）

6-3 区北側、3O-10g・10h、4O-1h で検出した。長さ約 21m、幅 4.12 ～ 5.53m、深さ 0.76 mを測る。西から調査区内に入り、屈曲しながら北東方向に延びる太い溝である。断面はおおむね鉢状を呈するが、北肩にやや緩やかな箇所が認められる。埋土は、上層が暗灰黄色細砂混じりシルト、中層がオリーブ褐色シルト、下層が黄灰色細砂～粗砂などである。

〔2480 溝〕（図 177・180・184、図版 22-2）

6-3 区東側、3O-9i・9j で検出した。長さ 20.83m、幅 0.58 ～ 0.80m、深さ 0.13 ～ 0.20 mを測る。南から北へ流れる。断面は東側に段を持つ椀状を呈する。埋土は黄褐色中砂混じりシルトなどである。本溝は、先述の 2334 溝と一連のもので条里地割に一致しており、坪境溝と考えられる。

柱穴

〔636 柱穴〕（図 177・179・187）

6-2 区東側、3O-2i で検出した。小型の柱穴で、長径 0.25m、短径 0.22 m、深さ 0.25 mを測る。断面は側面が垂直に下り、底部は平坦である。埋土は、柱痕部分が灰白色粘質シルト、掘形が黒褐色粘質シルトである。

〔2344 柱穴〕（図 177・181・187）

6-4 区やや北西側、3O-1i で検出した。西側に 2342 溝、北側に 2352 溝がある。径 0.44 m、柱痕径 0.20m、深さ 0.32 mを測る。断面は側面がほぼ垂直に掘り込まれ、底部は平坦である。埋土は上層がにぶい黄色シルト、下層が灰黄色シルトなどである。

〔2349 柱穴〕（図 177・181・187）

6-4 区南側、2O-10j で検出した。北西側に 2348 溝が隣接する。径 0.34 m、深さ 0.46 mを測る。柱痕跡は径 0.25m を測る。断面は長方形状を呈する。埋土は柱痕部分は黒褐色粘土、掘形が灰黄褐色

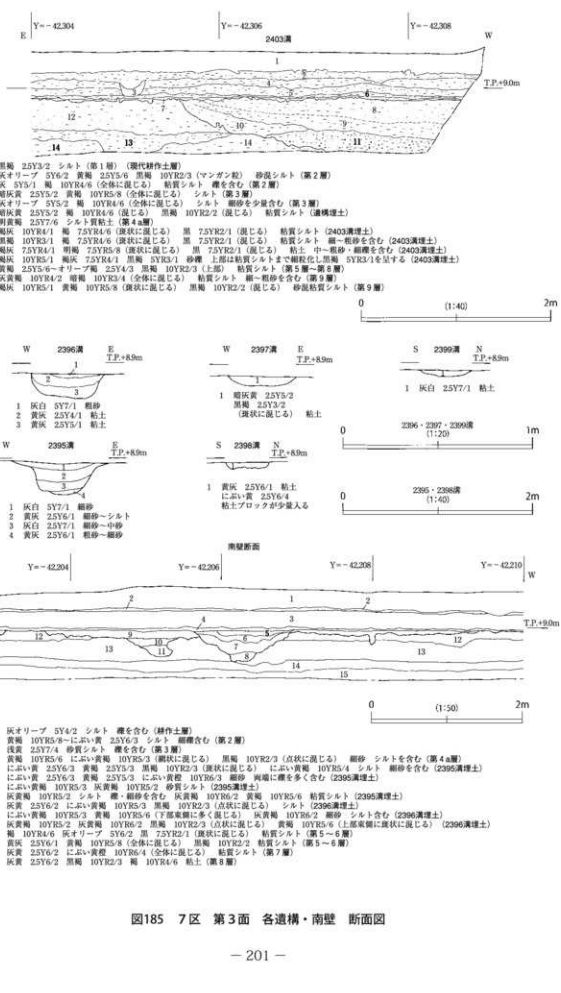


図185　7区　第3面　各遺構・南壁　断面図

粘土などである。

土坑

〔158 土坑〕（図 177・178・187）

6-1 区南西隅近く、3O-7j・8j で検出した。長径 1.13m、短径 0.86m、深さ 0.49 mを測り、平面は楕円形を呈する。断面は椀状を呈する上半から屈曲し、下半は鉢状を呈する。埋土は、上層が暗灰黄色粗砂混じり粘土、中層が暗灰黄色粘土、下層が黒褐色粘土などである。

〔159 土坑〕（図 177・178・187）

6-1 区西端、3O-8j で検出した。長さ 3.82m、幅 1.61m、深さ 0.31 mを測る。平面は不整形である。断面は浅い皿状を呈し、北東肩は急で、南西肩は緩やかである。埋土は灰黄褐色粘土などで、底部付近に炭層が堆積している。

〔161 土坑〕（図 171・172・181、図版 23-2）

6-1 区西端、3O-8i で検出した。長さ 2.11m、幅 1.81m、深さ 0.17 mを測る。平面は隅丸方形状を呈する大型の土坑で、西半分は調査区外に広がる。断面は浅い皿状を呈し、南側がやや深まる。埋土は黒褐色粘土などである。本土坑埋没後に、162 溝が掘られる。

〔619 土坑〕（図 177・179・187）

6-2 区南東隅、3O-2j、3A-2a で検出した。長さ 5.63m、幅 0.76 ～ 1.20m、深さ 0.18 mを測る。平面はやや幅広で長い。断面は浅い皿状を呈する。埋土は黄灰色砂質シルトなどである。

〔624 土坑〕（図 177・179・187）

6-2 区中央南端、3A-3a で検出した。長径 0.84m、短径 0.67m、深さ 0.26 mを測る。小型の方形土坑と思われ、南側は調査区外へ広がる。断面は逆台形状を呈する。埋土は黄灰色粘土に明黄褐色粘土ブロックが混じる。

〔2026 土坑〕（図 177・182・187、図版 23-5）

7-1 区西端、3A-6b で検出した。長さ 0.75 m、幅 0.65 m、深さ 0.09 mで、平面は隅丸長方形状を呈する。断面は浅い皿状を呈し、肩部はやや急である。埋土は灰黄褐色シルトと黄灰シルトが入り混じる。

〔2029 土坑〕（図 177・182・187、図版 23-5）

7-1 区東側、3A-3b で検出した。長さ 0.55 m、幅 0.29 m、深さ 0.35 mで、平面は隅丸長方形状を

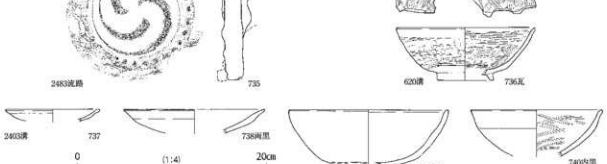


図186　7-3区　第3面　各遺構　出土遺物

呈する。埋土は暗灰黄色粘質シルトである。

〔2030 土坑〕（図 177・182・187、図版 23-5）

7-1 区、3A-3b・3c で検出した。長さ 0.55 m、幅 0.33 m、深さ 0.23 mで、平面は隅丸長方形状を呈する。埋土は暗灰黄色粘質シルトである。出土遺物には、サヌカイト片がある。

〔2400 土坑〕（図 177・182・187）

7-4 区北西側、3A-2b で検出した。長さ 2.06m、幅 1.36m、深さ 0.16m を測る。平面は南北に少し長く、くの字状に折れ不整形である。断面は皿状を呈する。埋土は灰黄色細砂～シルトなどである。

落ち込み

〔631 落ち込み〕（図 177・179・188、図版 23-3）

6-2 区北西側、3O-3h・3i・4h・4i で検出した。長さ 13.0m、幅 1.72m、深さ 0.07 ～ 0.13 mを測る。平面は南北に細長く、630 溝と一部重複する。断面は皿状を呈する。埋土はにぶい黄橙色粘土である。630 溝に切られる形で検出したが、630 溝が水溜め機能を必要としたため、幅広く掘り貯水した時の痕跡の可能性がある。

〔2330 落ち込み〕（図 177・182・188、図版 23-7）

7-2 区東側、3A-6b・6c・7b・7c・8b・8c で検出した。長さ 22.3m、幅 2.8m、深さ 1.09m を測る。中央付近から東側の広い範囲で検出した。非常に大きな落ち込みで、調査区内を東から西に蛇行しなが

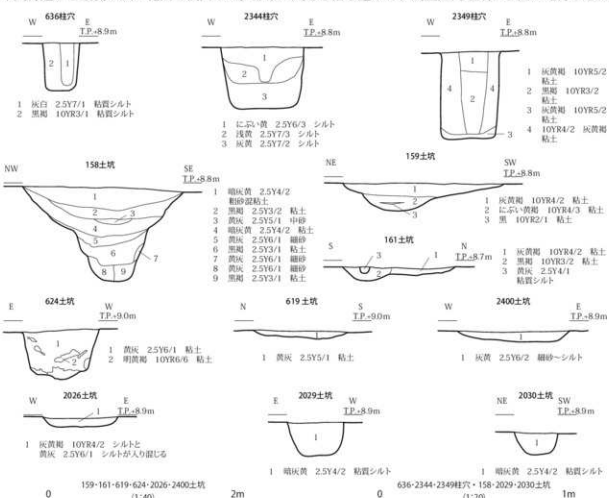
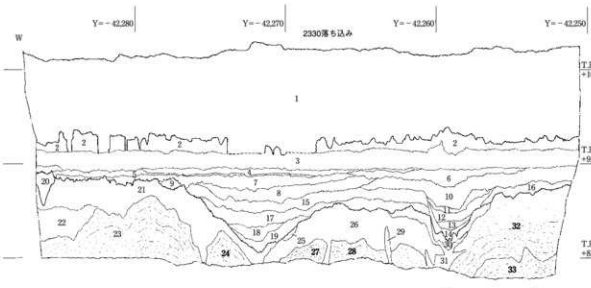


図187　6・7区　第3面　各遺構　断面図（2）



1 盛土
2 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 シルト（第1層）
3 灰オリーブ 5Y5/3 シルト 鉄分を含む（第3層）
4 暗灰黄 2.5Y4/2 褐 7.5YR4/6（斑状に混じる）
粘質シルト（第3層）
5 褐 10YR4/6 黄灰 2.5Y4/1（混じる） シルト（第4a層）
6 黄灰褐 10YR5/2 シルト 鉄分・マンガンを含む（第4a層）
7 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト マンガンを含む（2330落ち込み埋土）
8 黒褐 7.5YR2/2 黄灰 2.5Y5/1（混じる） 粘質シルト マンガンを含む（2330落ち込み埋土）
9 灰黄褐 10YR4/2 黄褐 10YR5/6（混じる） 粘質シルト（2330落ち込み埋土）
10 褐灰 7.5YR4/1 灰褐 5YR4/2 シルト 鉄分・マンガンを含む（2330落ち込み埋土）
11 褐灰 7.5YR5/1 褐 7.5YR4/6（混じる） シルト（2330落ち込み埋土）
12 褐 10YR4/4 褐 7.5YR4/6（混じる） シルト（2330落ち込み埋土）
13 暗褐 10YR3/4 褐 10YR4/6（斑状に混じる） 粘質シルト（2330落ち込み埋土）
14 黒褐 10YR2/2 灰黄褐 10YR6/2（混じる） 粘質シルト（2330落ち込み埋土）
15 褐灰 7.5YR4/1 シルト 鉄分を多く含む（2330落ち込み埋土）
16 灰黄褐 10YR5/2 シルト マンガン・鉄分を含む（2330落ち込み埋土）
17 褐灰 5YR4/1 褐 7.5YR4/6（全体に混じる） シルト（2330落ち込み埋土）
18 黒褐 7.5YR2/2 褐 7.5YR4/6（斑状に混じる） 粘土 シルトを含む（2330落ち込み埋土）
19 黒褐 7.5YR3/1 褐 10YR4/6（斑状に混じる） 細砂（2330落ち込み埋土）
20 暗灰黄 2.5Y5/2 黒 2.5Y2/1（斑状に混じる） 粘質シルト 炭を含む（2334満埋土）
21 黄灰 2.5Y5/1 灰黄褐 10YR5/2（上位） 黒褐 10YR2/3（斑状に混じる）
黄褐 10YR5/6（全体に混じる）細砂 上方細粒化（第5層）
22 黄褐 10YR5/8 礫～中砂 粘土を含む（第5層）
23 にぶい黄褐 10YR5/4 にぶい黄 2.5Y6/3 細～粗砂 下位には礫を含む（第5層）
24 灰黄褐 10YR5/2 黄褐 10YR5/8 粗砂（第5層）
25 灰黄褐 10YR6/2 にぶい黄褐 10YR5/3 黄褐 10YR5/8（斑状に混じる） 粘質シルト（第5層）
26 灰黄 2.5Y6/2 明黄褐 10YR6/8 灰褐 7.5YR5/2（下位） 細砂 上方細粒化（第5層）
27 灰黄褐 10YR5/2 細砂（第5層）
28 にぶい褐 7.5YR5/3 灰黄褐 10YR5/2（下位） 中～粗砂 上位に細礫を含む（第5層）
29 灰黄褐 10YR4/2 にぶい黄褐 10YR4/3（混じる） 砂質シルト 上方粗粒化（第5層）
30 黄褐 2.5Y5/3 黒 2.5Y2/1（斑状に混じる） 細砂（第5層）
31 灰黄褐 10YR5/2 暗褐 10YR3/3 中砂 植物遺体を含む（第5層）
32 黄灰 2.5Y4/1 明褐 7.5YR5/8（全体に混じる） シルト（第5層）
33 黄灰 2.5Y4/1 にぶい黄褐 10YR5/4 細～粗砂 細～中礫を含む（第5層）

0 縦（1:40） 1m

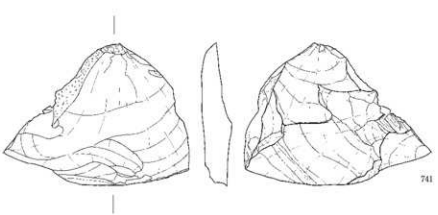
0 横（1:250） 10m

1 黒褐 10YR3/1 シルト
2 にぶい黄 2.5Y6/3 シルト
3 黒褐 10YR2/2 シルト
4 灰黄 2.5Y6/2 シルト

1 にぶい黄褐 10YR5/3 粘土
（630満埋土）
2 にぶい黄橙 10YR6/4 粘土
（631落ち込み埋土）

1 黄灰 2.5Y5/1 粘土
2 黄灰 2.5Y6/1 粘土
3 灰白 2.5Y7/1 シルト

0 （1:40） 1m



0 （2:3） 5cm

図188 7-2区 第3面 各遺構 断面図 出土遺物

ら延びる。断面はW字状を呈し、溝底は全体的に東側から西側に向かって低くなり、西端が最も深い。埋土は、上層がマンガンを含む暗灰黄色シルト、中層が鉄分を含む褐灰色シルト、下層がシルトを含む黒褐色粘土などである。

出土遺物のうち、サヌカイト片（741）を図示した。

〔2331 落ち込み〕（図 177・182・188、図版 23-7）

7-2 区東側、3A-8b・9b で検出した。長さ 3.75m、幅 1.6m、深さ 0.12 mを測る。北側は側溝のために消失している。断面は皿状を呈する。埋土はにぶい黄色シルトなどである。

〔2405 落ち込み〕（図 177・182・188、図版 23-6）

7-3 区北西寄り、4A-1b で検出した。長さ 4.02m、幅 0.83m、深さ 0.26m を測る。平面はやや不定形な長円形を示し、北側は調査区外へ広がる。埋土は黄灰粘土などである。

5．第 4 面（図 189・190）

6-3 区において遺構を検出した。

遺構面の標高は、北東隅 8.26 m、北西隅 8.26 m、南東隅 8.54 m、南西隅 8.39 m、中央部分 8.34 mを測る。

流路

〔2255 流路〕（図 189 ～ 191）

6-3 区西側、4O-1h・1i で検出した。西側の調査区外から屈曲しながら北東方向に延びる。検出した範囲より北は、第 3 面の 2470 溝によって削られ、不明である。長さ 11.56m、幅 1.16 ～ 2.37m、深さ 0.77m を測る。幅が狭く深い流路である。断面は鉢状を呈する。埋土は黄褐色シルト、オリーブ褐色細砂～粗砂などである。

土坑

〔2256 土坑〕（図 189 ～ 191）

6-3 区中央南寄り、3O-10j で検出した。長さ 3.10m、幅 1.12m、深さ 0.18m を測る。南東から北西方向に屈曲しつつ延びる細長い土坑である。断面は浅い逆台形状を呈する。埋土は黄褐色シルトなどである。

6．第 5 面（図 192 ～ 195、図版 24-2 ～ 24-5）

6-1 区、6-2 区、6-3 区、7-1 区において遺構を検出した。

6-1 区（図 162・193、図版 24-2）

遺構面の標高は、北東隅 8.24 m、北西隅 8.06 m、南東隅 8.40 m、南西隅 8.22 m、中央部分 8.21 mを測る。土坑を検出した。これらは、風倒木痕とは異なった深いものがも幾つか認められるが、比較的小型のものが多い。遺構内からは遺物が全く出土しなかったが、第 9 層の除去中に、凹基式石鏃を 1 点検出した。

6-2 区（図 192・194、図版 24-3）

遺構面の標高は、北東隅 8.05 m、北西隅 8.19 m、南東隅 8.07 m、南西隅 8.34 m、中央部分 8.04 mを測る。風倒木痕を検出した。

6-3 区（図 192・195、図版 24-4・24-7）

遺構面の標高は、北東隅 8.16 m、北西隅 8.16 m、南東隅 8.39 m、南西隅 8.31 m、中央部分 8.22 mを測る。調査区東側で南北方向に流れる流路を検出した。また、調査区全域で風倒木痕または立木痕

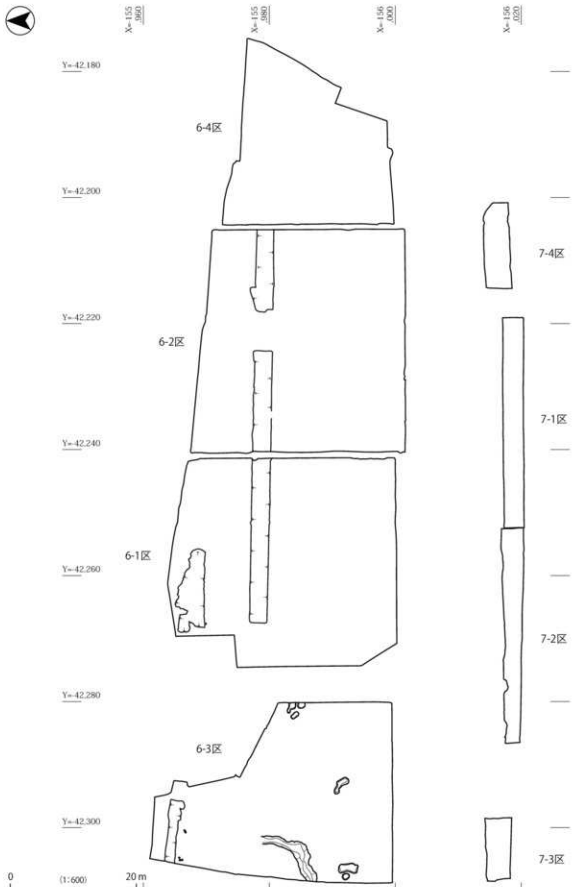


図189　6・7区　第4面　平面図

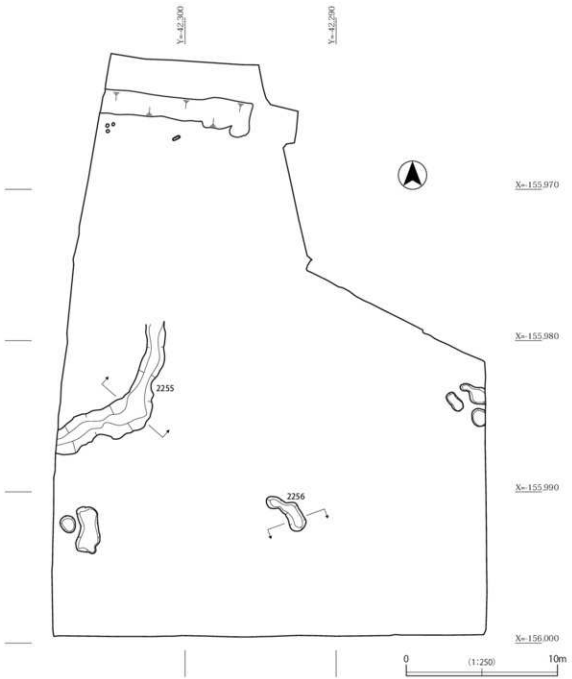


図190　6-3区　第4面　平面図

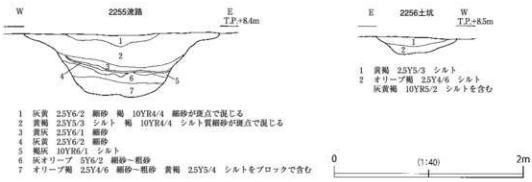


図191　6-3区　第4面　2255流路・2256土坑　断面図

跡を検出した。平面がドーナツ状を示す形状は風倒木痕、放射状に広がるものは立木痕跡の可能性が高い。これらの立木痕跡や風倒木痕は、大木が生育していた環境を示している可能性がある。
風倒木や立木の痕跡であることを反映したものか、遺物は出土していないが、部分的に炭化物、焼土状のものが出土した。

7-1 区（図 192・195、図版 24-5・24-7）

遺構面の標高は、北東隅 8.12 m、北西隅 8.76 m、南東隅 8.14 m、南西隅 8.72 m、中央部分 8.27 mを測る。第 9 層の褐灰色シルト混粗砂を除去した下層の、灰黄褐色砂礫混シルト上面が遺構面である。土坑、小穴を検出した。遺構からの出土遺物はなかった。

流路

〔2278 流路〕（図 192・195・196、図版 24-4・24-6）

6-3 区の東側、3O-9h・9i・9j で検出した。南から調査区内に入り、北側へ直線的に抜ける幅広の自然流路である。長さ 21.16m、幅 4.98 ～ 6.23m、深さ 0.70 mを測る。断面は逆台形状を呈する。埋土は褐色・明黄褐色・灰黄褐色砂礫などである。

本流路を充填する水成層と、第 5 面のベースとなる第 10 層との境界は極めて漸移的で不明瞭であり、流路として把握した範囲は粒径の粗い砂礫層の分布域を示したものである。このことから、本流路は第 10 層の供給源であった可能性が高い。

土坑

〔400 土坑〕（図 192・193・197、図版 24-2）

6-1 区中央やや北西寄り、3O-6h・7h で検出した。長径 2.97m、短径 1.18m、深さ 0.36 mを測る。平面は南西から北東方向に細長く、中央部分は確認調査トレンチで既に調査されている。断面は、逆台形状を呈する。埋土は、上層が暗灰黄色砂礫混じり粘質シルト、下層が黒色粘土などである。

〔401 土坑〕（図 192・193・197、図版 24-2）

6-1 区北側中央、3O-6g で検出した。小型の土坑で、長径 0.55m、短径 0.50m、深さ 0.27m を測る。断面は袋状を呈し、貯蔵穴であった可能性がある。埋土は黒色粘土などである。

〔670 土坑〕（図 192・194・197、図版 24-3）

6-2 区南端、3O-2j・3j で検出した。南側は調査区外に延びるため、全容は不明である。大型の土坑で、長さ 4.41m、深さ 0.48 mを測る。平面は不整な三角形状を呈する。埋土は周囲が黒褐色礫混じり砂質シルト、中央が灰黄褐色礫混じり砂質シルトなどである。中央は下層の黄褐色粘質土が盛り上がって残っていることから、風倒木痕の可能性がある。

〔2123 土坑〕（図 192・195・197、図版 24-5）

7-1 区西側、3A-5b で検出した。北半は側溝のために削られている。長さ 2.74m、幅 1.14m、深さ 0.18 mを測る。断面は皿状を呈する。埋土は黒色砂礫混じり砂質シルトである。

落ち込み

〔2127 落ち込み〕（図 192・195・197、図版 24-5）

7-1 調査区東側、3A-3b で検出した。北側は側溝のために削られおり、南側は調査区外である。検出長 3.80m、幅 2.10m、深さ 0.18 mを測る。断面は皿状を呈する。埋土は黒色粘土などである。

風倒木痕

〔2285 風倒木痕〕（図 192・195・197、図版 24-4）

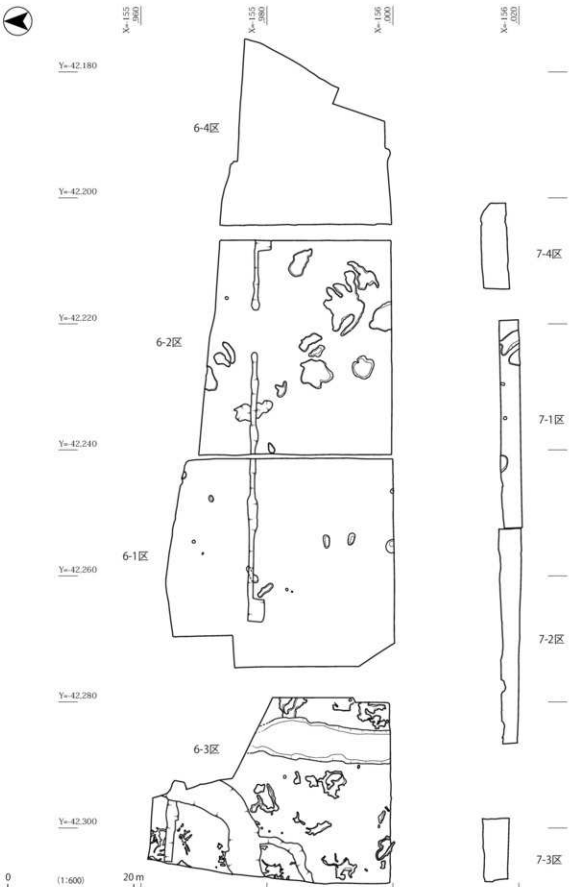


図192　6・7区　第5面　平面図

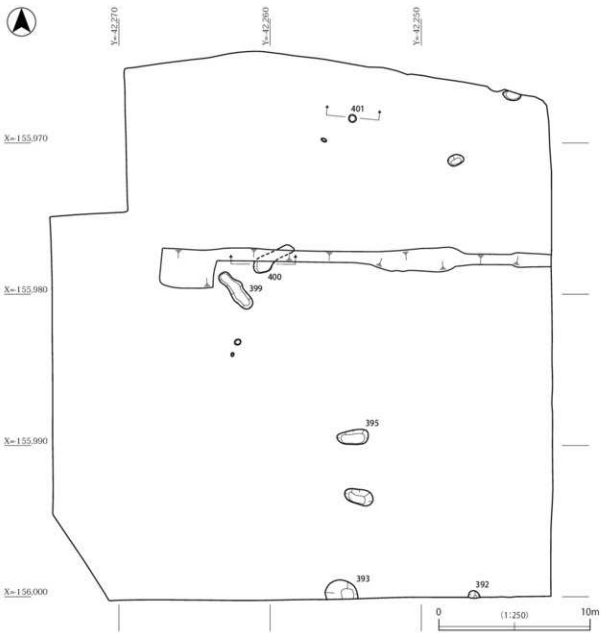


図193　6-1区　第5面　平面図

6-3区東端、3O-8i・9iで検出した。長さ4.80m、幅3.30m、深さ0.45mを測る。平面は南東側が開いたU字状の不整形を呈する。東側は調査区外となり、西側部分は2278自然流路によって削られる。断面は上半が皿状、下半が鉢状を呈し、北側から西側にかけてが深く、南側が浅い。埋土はにぶい黄褐色シルトなどである。

〔2289 風倒木痕〕（図192・195・197、図版24-4）

6-3区中央南端、3O-10i・10jで検出した。長径4.40m、短径4.28m、深さ0.36mを測る。平面はドーナツ状を呈し、凹凸が著しい。断面は北東側の溝が細くて浅く、南西側が幅広で深い。埋土は黒色シルトなどである。

〔2307 風倒木痕〕（図192・195・197、図版24-4）

6-3区南東端、3O-8j・9jで検出した。長さ4.20m、幅3.75m、深さ0.42mを測る。平面は凹凸して不整形であり、2つに分かれている。東側は調査区外に達する。北側や東側の溝は深く、西側の短い

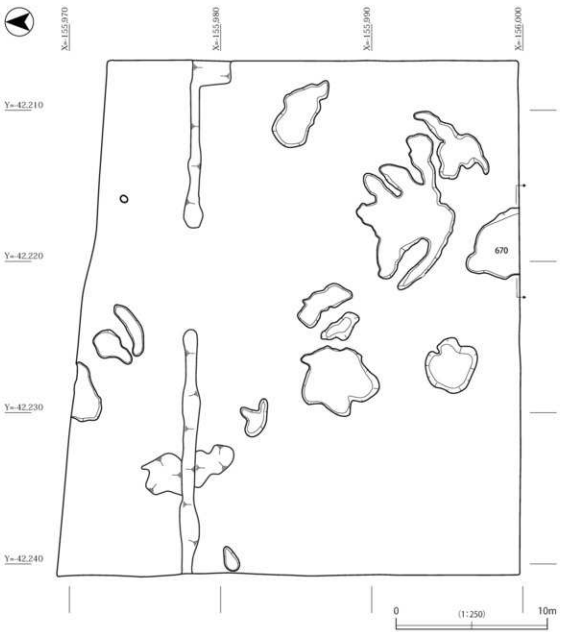


図194　6-2区　第5面　平面図

溝は浅い。埋土は黒色礫混じり粘質シルトなどである。

包含層出土遺物（図 198 ～ 200）

〔第 3 層出土遺物〕

第 3 層出土遺物のうち、須恵器杯身（TK209 ～ 217 型式）（744）、軒丸瓦（745）、土師器小皿（746）、瓦器椀（747 ～ 750）、白磁碗（751 ～ 755）、東播系須恵器鉢（11 世紀末～ 13 世紀初頭）（756 ～ 761）、瓦質土器擂鉢（762・763）、備前擂鉢（764）、瓦質土器羽釜（765 ～ 767）、陶器片（768 ～ 775）、青磁碗口縁（776）、唐津碗（777・779）、染付碗（778・783・784）、伊万里（780 ～ 782）、石製銙帯（785）、鉄製品（786）、滑石製石鍋（12 世紀頃）（787）、鉱滓（788 ～ 790）、土人形（791）、元祐通寶（北宋銭・1086 年初鋳）（792）を図示した。

これ以外の第 3 層出土遺物には、弥生土器甕底部、土師器皿・杯・椀・椀高台、土師質羽釜、瓦器椀口縁部・椀高台、瓦質土器甕口縁部・叩き甕・甕体部・三足の脚部、須恵器高杯脚柱部・壺底部・壺底

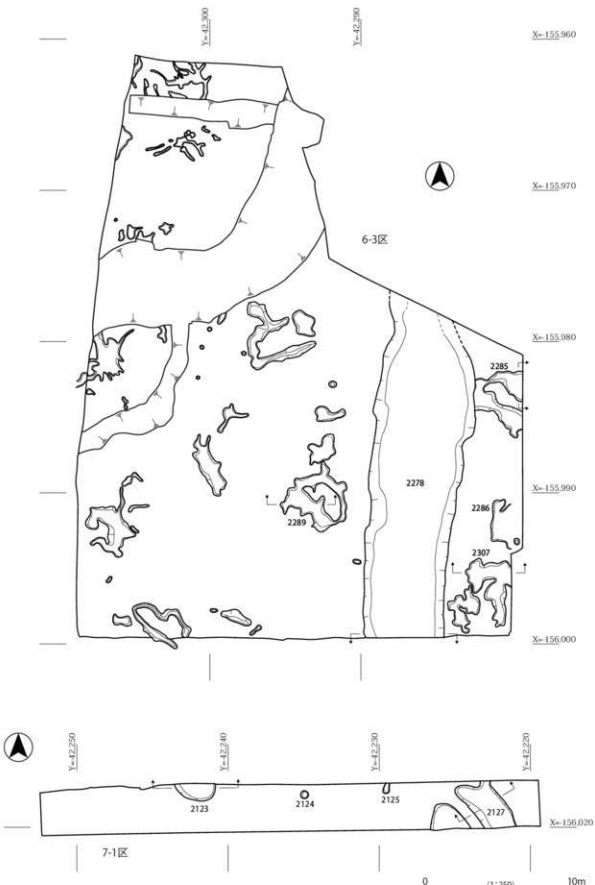
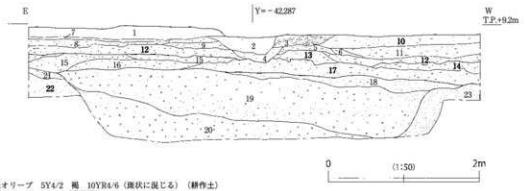


図195　6-3・7-1区　第5面　平面図



1　灰オリーブ　5Y4/2　褐　10YR4/6（混状に混じる）（耕作土）
2　灰オリーブ　5Y4/2（現代溝）
3　暗灰黄　2.5Y5/2　砂礫　黄橙　10YR7/8　シルトブロックを多く含む（現代溝）
4　黄灰　2.5Y6/1　シルト　細砂～中砂を少量含む（2480溝）
5　灰黄　2.5Y6/2　黄褐　10YR5/6（混じる）　砂混シルト（坪境畦畔1）
6　灰黄　2.5Y6/2　黒褐　10YR2/3（混状に少量混じる）　シルト混中～粗砂（第1層）
7　黄褐　2.5Y5/3　褐　10YR4/6（混状に混じる）　中～粗砂（第2層）
8　灰オリーブ　5Y6/2　黄褐　10YR5/8（含む）　シルト～砂混シルト（第2層）
9　灰黄　2.5Y6/2　明黄褐　10YR6/8（混じる）　シルト混中～粗砂（第2層）
10　にぶい黄　2.5Y6/3　褐　10YR4/6（混じる）　砂混シルト（第2層）
11　暗灰黄　2.5Y5/2　褐　10YR4/6（混じる）　砂混シルト（第2層）
12　灰黄　2.5Y6/2　黒褐　10YR2/3（混状に混じる）　砂混シルト（第3層）
13　灰黄褐　10YR5/2　明褐　7.5YR5/8（混じる）　砂混シルト（砂少ない）（坪境畦畔2）
14　灰黄褐　10YR6/2　明黄褐　10YR6/6　粘質シルト～粘土（第4層）
15　灰黄褐　10YR4/2　黒褐　10YR3/2（混じる）　褐　10YR4/6（混状に混じる）　シルト混砂礫（第9層）
16　にぶい黄褐　10YR5/3　黄褐　10YR5/8（混状に混じる）砂礫（第9層）
17　灰褐　7.5YR4/2　灰黄褐　10YR5/2　黒褐10YR2/3　褐　10YR4/6（混状に混じる）シルト混砂礫（第9層）
18　灰黄褐　10YR6/2　褐　10YR4/4（混じる）　砂礫（第9層）
19　褐　10YR4/6　明黄褐　10YR6/8　灰黄褐　10YR5/2　黄褐　10YR5/6　砂礫（流路推積層）
20　オリーブ灰　2.5GY5/1　砂礫（もろい砂片の礫多い）（流路推積層）
21　灰黄褐　10YR4/2～黒褐　10YR3/2　極暗褐　7.5YR2/3（混状に混じる）　明黄褐　10YR6/8（ブロック状に混じる）　砂礫混シルト（流路推積層）
22　にぶい黄　2.5Y6/3　明褐　7.5YR5/8（混状に混じる）　中～細砂（第10層）
23　灰黄　2.5Y7/2～灰黄褐　10YR4/2　中砂（第10層）

図196　6-3区　第5面　2278流路　断面図

部（糸切り）・甕・大甕・小型甕口縁部、陶磁器、平瓦、丸瓦、サヌカイト片、石鏃、砥破片、古銭、鉄製品がある。

なお、瓦のうち、平瓦には、凸面に縄目叩き、凹面に布目が残るものが3点、凸面に縄目叩き、凹面に糸切り痕と布目が残るものが1点、凸面に縄目叩きが残り離れ砂が見られ、凹面に布目が残るものが1点、凸面に縄目叩きが残り離れ砂が見られ、凹面に離れ砂が見られるものが4点、凹面・凸面ともナデによる擦り消しが施され、凹面に離れ砂が見られるものが4点、凹面・凸面とも離れ砂が見られ、凹面には布目が残るものが2点、凸面に離れ砂が見られ、凹面に布目が残るものが1点、凹面・凸面とも離れ砂が見られるものが3点、凹面に糸切り痕と布目が残り、離れ砂が見られるものが1点、凹面・凸面ともナデによる擦り消しが見られるものが1点があり、丸瓦には、凸面にナデによる擦り消しが見られ、凹面に布目が残るものが6点、凹面・凸面ともナデによる擦り消しが見られるものが2点あった。

〔第3・4層出土遺物〕

第3・4層出土遺物のうち、サヌカイト製石鏃（742）、須恵器杯蓋（TK10型式）（743）を図示した。

これ以外の第3・4層出土遺物には、弥生土器甕底部、土師器小皿・皿・甕・椀、土師質鉢底部・羽釜、須恵器壺口縁部・壺高台部・甕・大甕体部、瓦質土器甕・風炉体部、平瓦、丸瓦がある。

なお、瓦には、凹面・凸面ともナデによる擦り消しが見られるもの、凹面・凸面とも離れ砂が見られるもの、凸面に縄目叩き、凹面に布目が残るものがある。

〔第4層出土遺物〕

第4層出土遺物には、土師器甕、土師質羽釜、須恵器杯・甕、黒色土器椀、瓦がある。

なお、瓦には、凸面に縄目叩き、凹面に布目が残るもののほか、凸面に縄目叩き、凹面に模骨痕が残

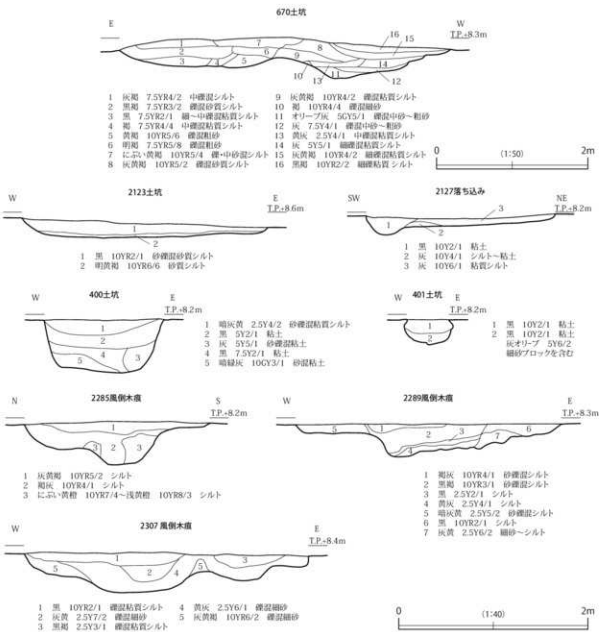


図197　6・7区　第5面　各遺構　断面図

り、両面とも離れ砂が見られるものがある。

〔側溝出土遺物〕

側溝出土遺物のうち、サヌカイト製石鏃（793・794）、須恵器脚体部（795）、瓦器椀（796）・小皿（797・798）を図示した。

これ以外の側溝出土遺物には、弥生土器高台、土師器小皿・椀・鉢口縁部・甕、土師質羽釜・羽釜鍔・羽釜体部、黒色土器椀・椀体部・椀高台、瓦質土器鉢体部・こね鉢・叩き甕・大甕・羽釜口縁部、須恵器杯身（6世紀代）・杯蓋（8世紀代）・こね鉢・擂鉢口縁部・甕・大甕体部・横瓶、平瓦、丸瓦、白磁高台、唐津椀高台、伊万里碗高台、天目椀高台、染付、砥石状石製品、鉄釘などがある。

なお、平瓦には、凸面に縄目叩き、凹面には模骨痕が残り、両面とも離れ砂が見られるものがある。丸瓦には、凸面にナデによる擦り消しが見られ、凹面に布目が残るものや、凸面に縄目叩き、凹面に模骨痕が残り、両面とも離れ砂が見られるもの、凸面にナデによる擦り消しが見られ、凹面に布目が残る

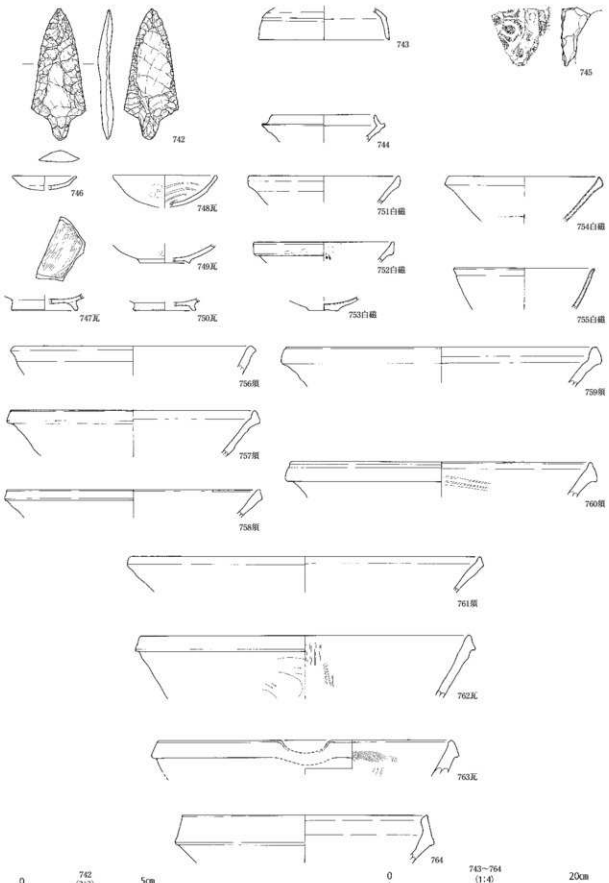


図198　6・7区　第3層　出土遺物(1)

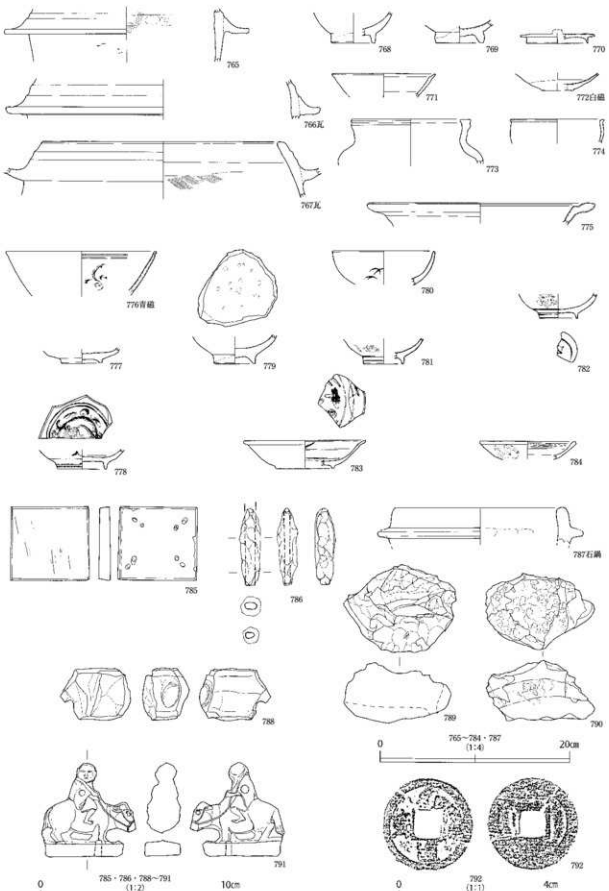


図199　6・7区　第3層　出土遺物(2)

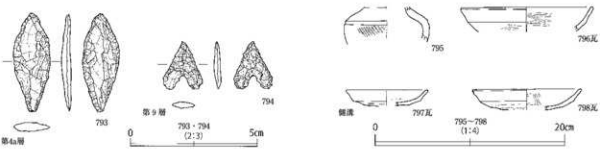


図200　6・7区　第4a・9層・側溝　出土遺物

ものがある。

包含層出土遺物のうち、平瓦を中心とした瓦が目を引く。これらからは、瓦葺きの建物が調査地周辺に存在していた可能性もあるが、詳細は明らかでない。

第５節　８区の成果

８区は 05-1 調査の中で最も西側に位置し、この西側は 05-2 調査の調査区が位置するとなる。協議の結果、調査区の東端は阪南大学野球グランドの西端までで、調査区北側に民家があるためにその通用道路は対象外とし、調査区の西端は 05-2 調査区を分ける水路までとなった。上記の通用道路を境に、東西２地区に分けて調査を行った。西側が 8-1 区、東側が 8-2 区である。なお、8-1 区は北区と南区に分かれる。

１．基本層序　（図 201）

この地区は、南側を通る道路沿いに未買収地が残っているため、他の調査区と連続する南側断面図は、実施可能であった 8-1 区南区の断面図のみ図示した。

第１層　現代耕作土である。暗オリーブ褐色礫混シルトからなる。この上部に盛土が被る。

第２層　上下に細分される。上層は灰オリーブ色～黄褐色中砂混粘質シルトからなり、層厚は 0.08 ～ 0.13m を測る。下層は灰オリーブ色～褐色砂混粘質シルトからなり、層厚は 0.05 ～ 0.12m を測る。

第３層　黄褐色～オリーブ褐色粘質シルトからなり、層厚は 0.07 ～ 0.10 m を測る。本層上面を第１面として調査をおこない、主に東西方向の鋤溝群を検出した。

第４層　オリーブ褐色・黄褐色・褐色粘質シルトや、褐色・黄褐色シルト～砂混シルトからなる。層厚は 0.06 ～ 0.14 m を測る。本層上面を第２面として調査をおこない、足跡群などを検出した。

第５層　褐色ないしは黄褐色のシルト～砂混シルトからなる。本層は北側を中心に分布しており、南側断面図には表われない。本層上面を第３面として調査をおこなった。

第６層　細砂を含む黄褐色シルト～粘質シルトからなる。層厚は 0.15 ～ 0.31 m を測る。8-2 区東側に堆積する。本層上面を第４面として調査をおこない、溝状遺構を検出した。

第７～９層　褐灰色～褐色細砂混粘質シルトなどからなる。層厚は 0.05 ～ 0.23 m を測る。第７層上面を第５面として調査をおこない、流路、土坑などを検出した。

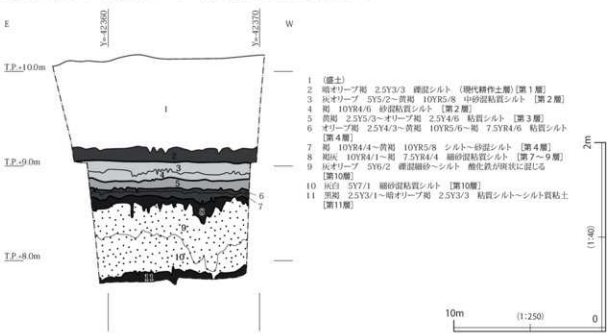


図201　８区　南壁　断面図

第 10 層　灰オリーブ色礫混細砂～シルトからなり、酸化鉄が斑状に混じる。層厚は約 0.90 mを測る。
第 11 層　黒褐色・暗オリーブ褐色粘質シルト～シルト質粘土からなる。

2．第 1 面（図 202 ～ 204、図版 25-1）

8-1 区（図 202・203、図版 25-1）

遺構面の標高は、北東隅 8.91 m、北西隅 8.94 m、南東隅 8.99 m、南西隅 8.99 m、中央部分 8.90 mを測る。北区のやや南側に東西方向の水路跡が通る。この水路跡を境として、北と南で様相がやや異なる。南側では、水路から南側約 3m 付近まで鋤溝が検出されず、その南側から東西方向の鋤溝群が検出される。溝幅は 0.10 ～ 0.40m を測り、細い溝が多く検出される。鋤溝の長さは、大半が 5m 未満であり、最長は約 15.5 mを測る。水路の北側では、南側と同じく東西方向の短い鋤溝を検出した。ただし、鋤溝を検出した範囲は島状を呈し、それ以外ではほとんど鋤溝が検出されない。島状部分以外では、調査区東側で僅かに南北方向の鋤溝を検出した。南区は北区南側の続きと考えられ、同様の東西方向の鋤溝を検出した。

8-2 区（図 202・204）

遺構面の標高は、北東隅 8.93 m、北西隅 8.94 m、南東隅 8.93 m、南西隅 8.95 m、中央部分 8.90

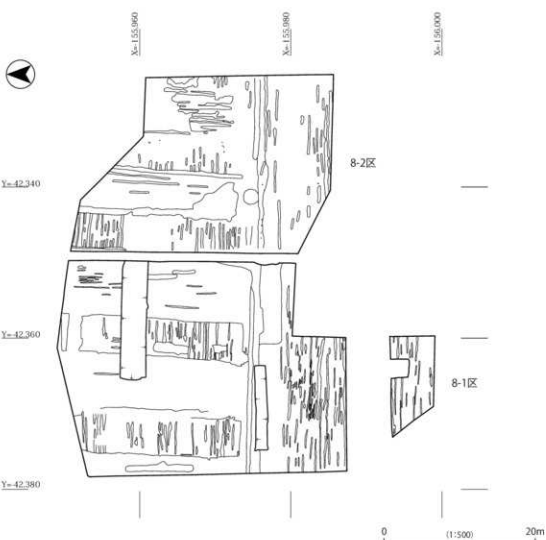


図202　8区　第 1 面　平面図

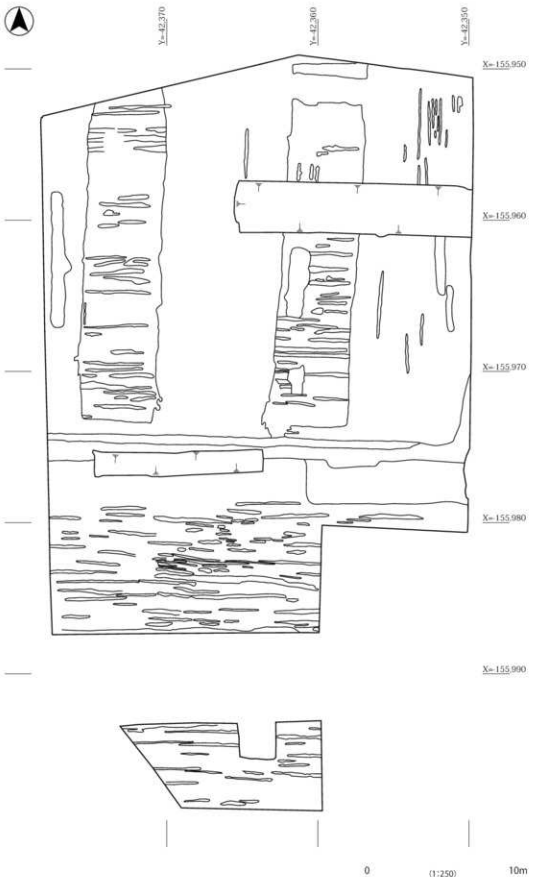


図203　8-1区　第1面　平面図

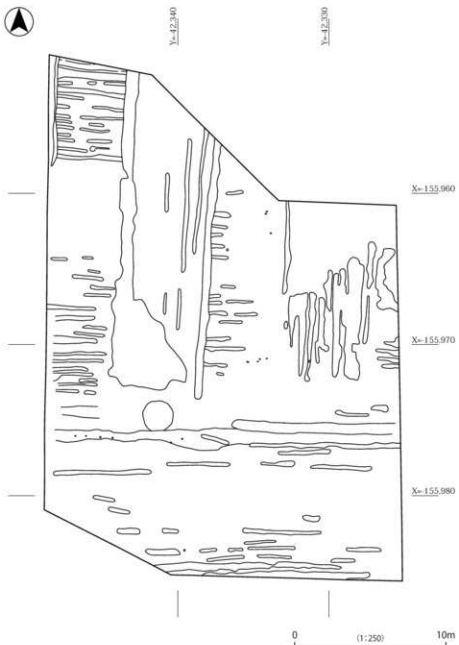


図204　8-2区　第1面　平面図

mを測る。中央よりやや南側に東西方向の水路跡があり、8-1区に連続する。水路の南側では、東西方向の鋤溝を検出した。しかし、水路の北側は様相が異なる。中央やや西寄りと東側に、それぞれ帯状に集まる南北方向の鋤溝群を検出した。東西方向と南北方向の鋤溝との切り合い関係から、南北方向の鋤溝が新しいことが分かった。水路跡の南側に検出した東西方向の鋤溝群は、幅0.30～0.40m、長さ1.4～14 mを測る。鋤溝の数は少ない。水路跡の北側で検出した鋤溝の長さは、東西方向が0.8～4.3mを、南北方向が1.4～8.8 mをそれぞれ測る。調査区北東側の南北方向の鋤溝群は、長さ2.7～8.7 mを測り、鋤溝が幾つか重複して検出された。調査区全体としては、水路の北側で4群、南側で1群の鋤溝を検出し、合わせて5群の鋤溝群を検出した。

3．第2面（図205～207、図版25-2）

第4層上面を第2面とするが、8区の中で第4層の残存状況が東西で異なる。8-2区では第4層がほ

とんど残存しておらず、第５層が多くの範囲で露出する。一方、8-1 区では第４層が良好に残存しており、足跡群などを検出した。

8-1 区（205・206、図版 25-2）

遺構面の標高は、北東隅 8.66 m、北西隅 8.60 m、南東隅 8.71 m、南西隅 8.69 m、中央部分 8.65 mを測る。ほぼ全域に足跡群と鋤溝が認められる。足跡は、牛と思われる偶蹄目のものと、人と思われるものがある。これらの足跡群に重複して第３層下面の鋤溝群も、僅かであるが検出した。Y = -42,366 ラインより西側と Y = -42,358 ラインより東側では、東西方向の鋤溝が多く認められる。一方、Y = -42,366 ラインと Y = -42,358 ラインの間では、南北方向の鋤溝が多い。

8-2 区（図 205・207）

遺構面の標高は、北東隅 8.72 m、北西隅 8.67 m、南東隅 8.72 m、南西隅 8.76 m、中央部分 8.71 mを測る。8-2 区では第４層が非常に薄いか、部分的に残存するのみで、ほとんどの範囲で、下層の第５層が露出する。本地区では 8-1 区と異なり、足跡と鋤溝群が少ない。検出した足跡群と鋤溝の方向は、東西である。調査区南側の第１面で検出した水路跡の下面では杭跡が並ぶ。中央やや西寄りの南側では、枝分かれする杭列も見つかった。これらの杭跡は、第１面の水路跡に伴うものの可能性がある。

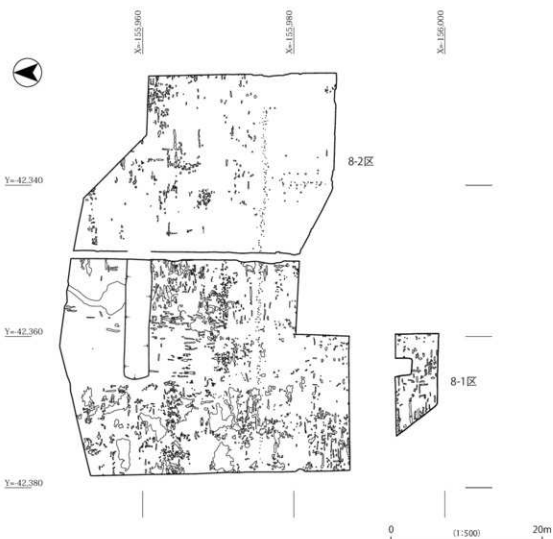


図205　8区　第２面　平面図

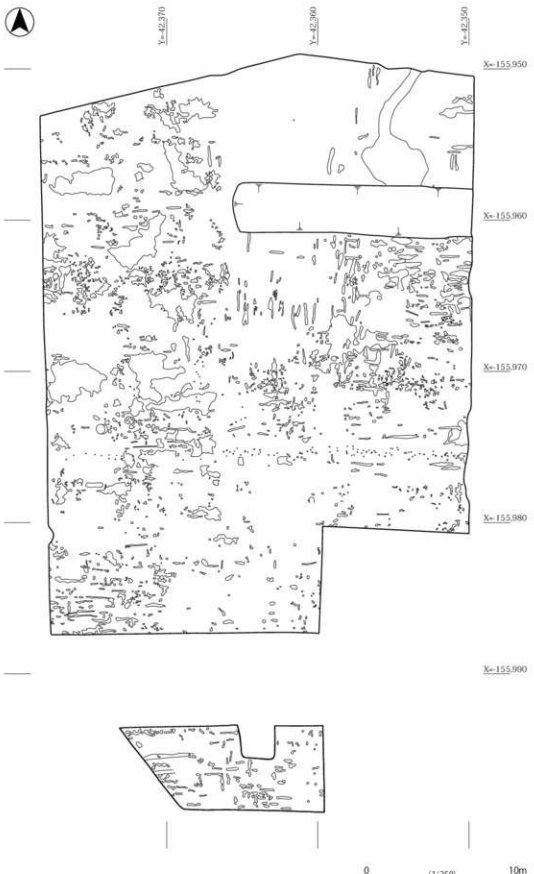


図206　8-1区　第２面　平面図

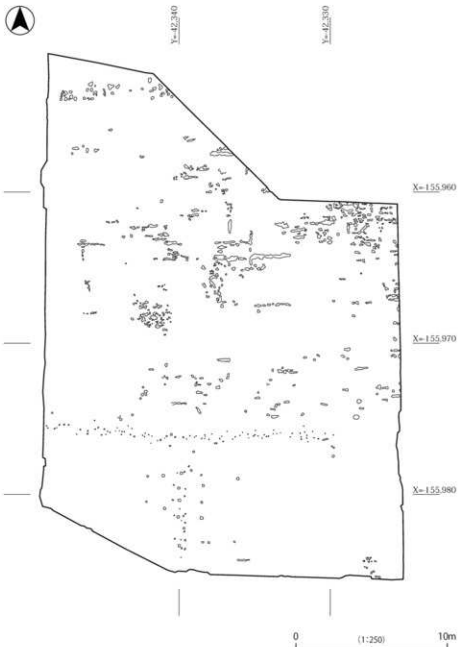


図207　8-2区　第2面　平面図

4．第3面（図208～210、図版25-3・26-2）

8-1区（図208・209、図版25-3）

遺構面の標高は、北東隅8.55 m、北西隅8.52 m、南東隅8.60 m、南西隅8.56 m、中央部分8.49 mを測る。溝、土坑、柱穴、轍跡を検出した。轍跡は調査区を東西方向に横断するものと、湾曲して北西側にに抜けるものの2者がある。

8-2区（図208・210、図版26-2）

遺構面の標高は、北東隅8.42 m、北西隅8.67 m、南東隅8.72 m、南西隅8.76 m、中央部分8.71 mを測る。溝、土坑、小穴、轍跡などを検出した。

溝

南西から北東方向に蛇行しつつ流れる幅広い2158・2161溝、およびそれに枝分かれする2159溝、

これに交差する 2160 溝などを検出した。

〔2155 溝〕（図 208・209・211、図版 25-3）

8-1 区北区の西端、4O-8h で検出した。2156 溝との合流地点より西側の溝を指し、長さ 1.40m、幅 1.08m、深さ 0.35m を測る。2156 溝と合流して 2158 溝に流入すると幅が広くなる。断面観察を行った結果、2156 溝より後から掘られたと判断でき、本溝と 2156 溝の同時併存はない。断面は摺鉢状を呈する。埋土は上層が黒褐色砂質シルト、下層が暗灰黄色粗砂である。

〔2156 溝〕（図 208・209・211、図版 25-3）

8-1 区北区の西端、4O-8h で検出した。長さ 1.30m、幅 0.88m、深さ 0.34m を測る。断面は摺鉢状を呈する。埋土は上層が黒褐色砂質シルト、下層が黒褐色シルトである。

〔2158 溝〕（図 208・209・211・213、図版 25-3）

8-1 区北区の西側、4O-7g・7h・8g・8h で検出した。長さ 18.26m、幅 2.24 ～ 5.39m、深さ 0.31 ～ 0.66m を測る。断面は皿状を呈する。埋土は、上層がにぶい黄橙色細砂、中層が暗灰黄色砂質シルト、下層がオリーブ黒色シルトなどである。本溝は 2157 落ち込みの東側を通り、ここに溜められた水を排出する機能を持っていた可能性がある。本溝の北側は 2161 溝に続く。本溝と 2161 溝の形状の違いか

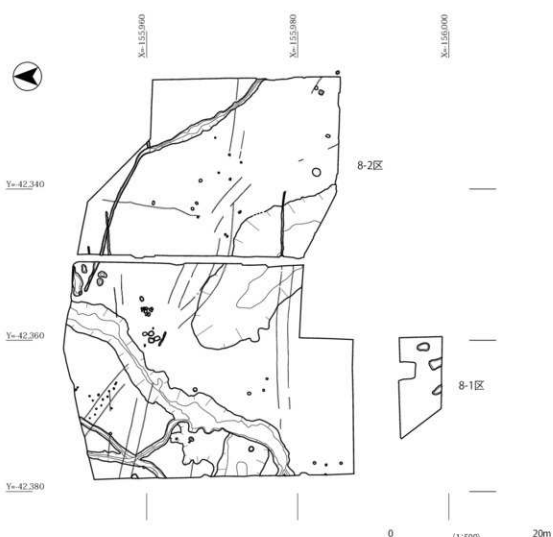


図208　8区　第3面　平面図

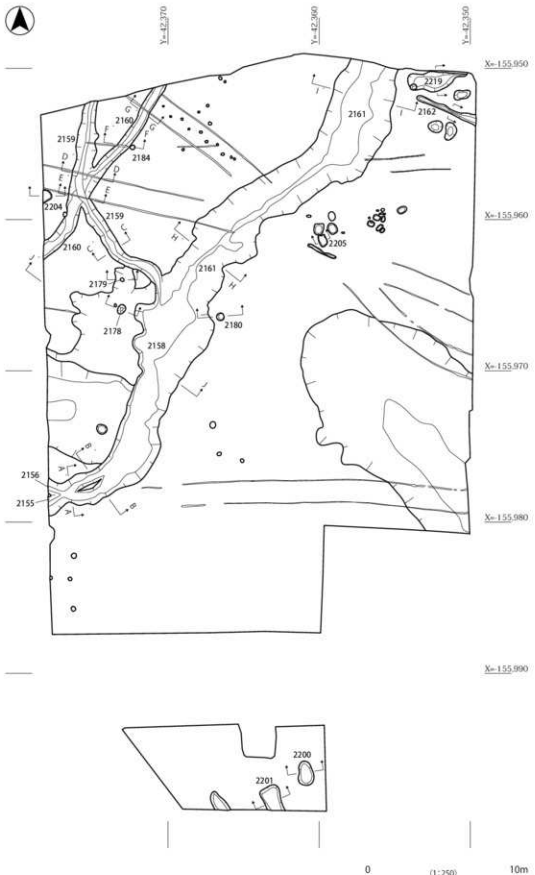


図209　8-1区　第3面　平面図

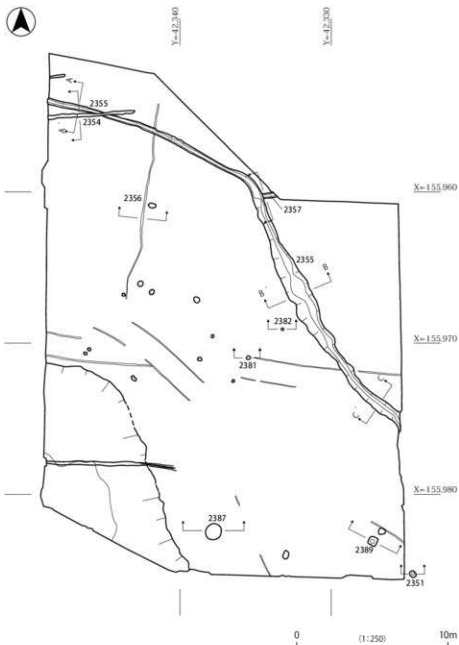


図210　8-2区　第3面　平面図

ら、本溝北部分は一定量の水を溜める機能を持っていた可能性がある。

出土遺物のうち、石庖丁（799）、弥生土器（V様式）甕口縁部（800）、土師器壺口縁部（801）・高杯杯部（802）を図示した。この他には、弥生土器簾状文壺体部・壺、土師器壺体部、生駒西麓産土器体部などの遺物が出土した。

〔2159溝〕（図208・209・211・213、図版25-3）

8-1区北区の北西側、40-8f・8gで検出した。長さ13.50m、幅0.74～1.40m、深さ0.35～0.57mを測る。断面は法面が急な逆台形状を呈する。埋土は、上層が暗オリーブ褐色中～細砂、中層が黒褐色シルト、下層が黄灰色中～粗砂などである。本溝は、2158溝の北端から北西方向を向き、蛇行しながら北に抜けている。40-8fでは、本溝と2160溝が交差し、本溝が先行することが明らかである。中層に黒褐色シルトが堆積していることから、一定期間、滞水状態にあったことが想定できる。

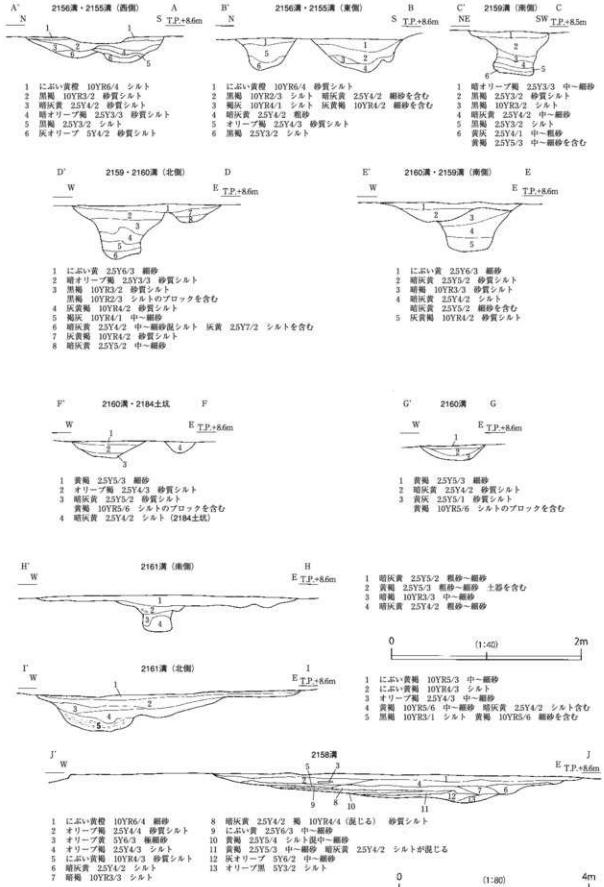


図211　8区　第3面　各遺構　断面図(1)

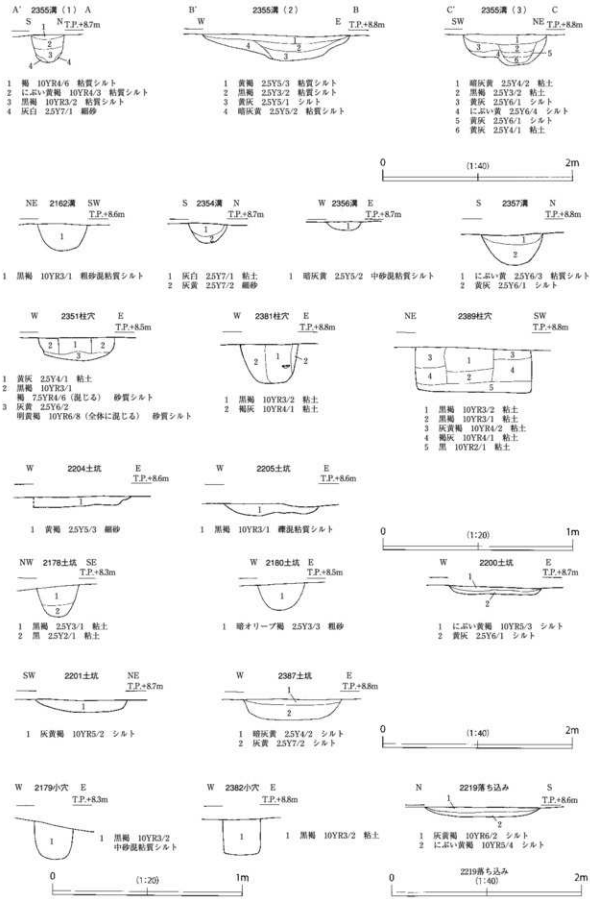


図212　8区　第3面　各遺構　断面図（2）

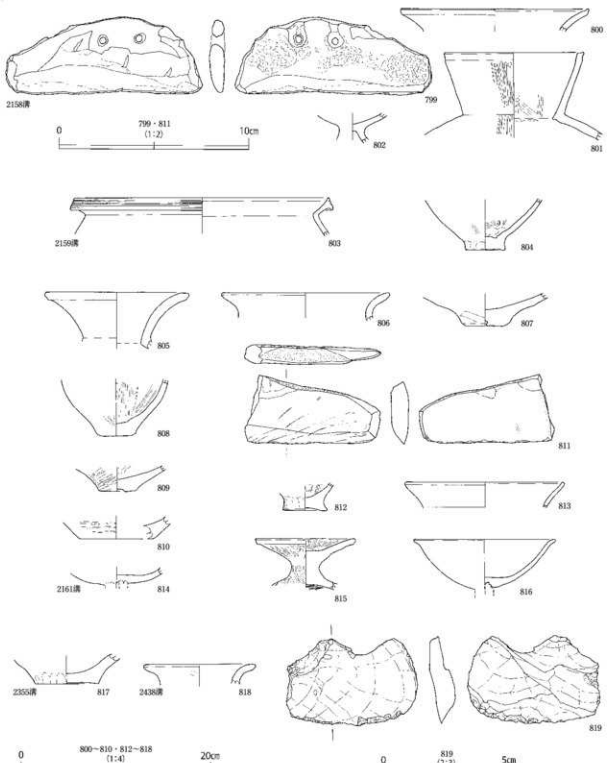


図213　8区　第3面　各遺構　出土遺物

出土遺物のうち、弥生土器甕口縁部（803）・鉢底部（804）を図示した。この他にも、弥生土器の破片が数点出土した。

〔2160溝〕（図208・209・211、図版25-3）

8-1区北区の北西側、4O-8f・8gで検出した。長さ13.20m、幅0.64～1.02m、深さ0.15～0.30mを測る。断面は緩やかな椀状を呈する。埋土は、上層がにぶい黄色細砂、下層が暗灰黄色中～細砂など

である。調査区西側から北東方向に流れ、2159 溝と交差して、調査区外に達する。2159 溝とは同時併存しない。2159 溝に比して、本溝は浅い。

〔2161 溝〕（図 208・209・211・213、図版 25-3・33）

8-1 区北区の西側、4O-6f・6g・7f・7g・8f・8g で検出した。2158 溝が 2159 溝と分岐する地点以北を指す。長さ約 19.4m、幅 2.55 ～ 4.42m、深さ 0.36 ～ 0.70m を測る。埋土は、上層が暗灰黄色粗砂～細砂、中層が暗褐色中～細砂、下層が暗灰黄色粗砂～細砂などであり、水成層が認められる。断面は、南側では側面が皿状を呈し中央が摺鉢状に深まり、北側では東肩が皿状、西肩が鉢状を呈する。本溝の北側は、南側の溝底が細くなった箇所より一段深く掘り下げられ大きく窪んでおり、水溜めの機能を持っていた可能性が想定できる。ただし、本溝の北端は再度一段浅く、細くなる。先述の通り本溝と連続する 2158 溝北側は水を溜める機能を持っていた可能性があるが、ここから本溝南側の溝底が細くなった箇所を経て北側に水を溜め、北端に一段高くなり、細くなった部分から水を調査区外の北側方向へ流出させていたと考えられる。

出土遺物のうち、弥生土器壺口縁部（805・806）・壺底部（807・808）・甕底部（809・810）・鉢底部（812）、石庖丁（811）、土師器（庄内式）甕口縁部（813）・（布留式）高杯杯部（814・816）・

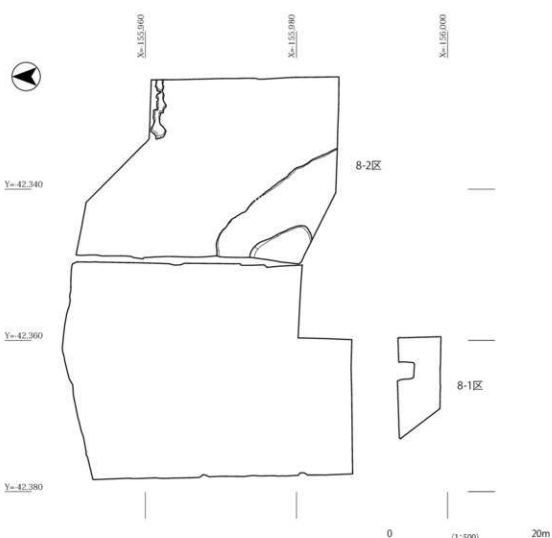


図214　8区　第4面　平面図

小形器台受部（815）を図示した。この他には、弥生土器（V様式）甕口縁部・口縁部～体部・高杯脚柱部、須恵器杯身などが出土した。

〔2162 溝・2355 溝〕（図 208 ～ 210・212・213、図版 25-3・26-2）

8-1 区北区の北東側、8-2 区北東から東側、4O-3g・3h・4f・4g・4h・5f・6f で検出した。8-1 区では 2162 溝、8-2 区では 2355 溝と呼称したが、同一の溝である。長さ 38.5m、幅 0.27 ～ 1.69m、深さ 0.08 ～ 0.30m を測る。断面は、幅の狭い箇所が鉢状、幅の広い箇所がやや深い皿状を呈する。なお、幅の広い箇所では、流芯が東側へ偏る。埋土は、上層が黒褐色粗砂混じり粘質シルト、黄灰色粘質シルト、下層が黄灰色粘土などである。本溝は 8-2 区東側から北北西に延び、途中屈曲する部分では 2357 溝が分岐する。屈曲した後は西北西方向に延び、8-1 区の 2161 溝へ続く。

出土遺物のうち、弥生土器壺底部（817）を図示した。

〔2354 溝〕（図 208・210・212）

8-2 区北西側、4O-5f で検出した。長さ 5.73m、幅 0.14 ～ 0.29m、深さ 0.05 ～ 0.10m を測る。断面は U 字状の浅い溝である。埋土は、上層が灰白色粘土、下層が灰黄色細砂である。2355 溝と交差しており、本溝が後出する。

〔2356 溝〕（図 208・210・212、図版 26-2）

8-2 区北西側、4O-5f・5g で検出した。長さ 13.08m、幅 0.04 ～ 0.16m、深さ 0.04m を測る。幅が非常に狭い南北方向の溝で、少し折れるように蛇行する。断面は浅い U 字状を呈する浅い溝である。埋土は暗灰黄色中砂を含む粘質シルトである。

〔2357 溝〕（図 208・210・212、図版 26-2）

8-2 区北東側、4O-4f・4g で検出した。2355 溝から東に分岐する直線状の溝である。長さ 0.92m、幅 0.36m、深さ 0.16m を測る。断面は U 字状を呈する。埋土は、上層がにぶい黄色粘質シルト、下層が黄灰色シルトである。

柱穴

〔2351 柱穴〕（図 208・210・212）

8-2 区南東端、4O-3i で検出し、側溝内に位置する。長さ 0.46m、幅 0.39m、深さ 0.12m を測る。平面は隅丸方形を呈する。断面は深い皿状を呈し、側面はほぼ垂直である。埋土は柱痕が黄灰色粘土、掘形が黒褐色・褐色混じり砂質シルトなどである。

〔2381 柱穴〕（図 208・210・212、図版 26-2）

8-2 区中央付近、4O-4h で検出した。長径 0.27m、短径 0.23m、深さ 0.21m を測る。平面は長円形を呈する。断面は摺鉢状を呈する。埋土は柱痕が黒褐色粘土、掘形が褐灰色粘土である。

〔2389 柱穴〕（図 208・210・212、図版 26-2）

8-2 区南東端、4O-3i で検出した。長さ 0.60m、幅 0.58m、深さ 0.23m を測る。平面は隅丸方形を呈する。断面は長方形状を呈する。埋土は柱痕が黒褐色粘土など、掘形が灰黄褐色粘土などである。

土坑

〔2178 土坑〕（図 208・209・212、図版 25-3）

8-1 区北区の西側中央付近、4O-8g で検出した。長径 0.65m、短径 0.48m、深さ 0.32m を測る。平面は長円形の深い土坑である。断面は U 字状を呈する。埋土は、上層が黒褐色粘土、下層が黒色粘土などである。

〔2180 土坑〕（図 208・209・212、図版 25-3）

8-1 区北区の中央付近の 2158 溝東岸、4O-7g で検出した。長径 0.54m、短径 0.50 m、深さ 0.26m を測る。平面は少し歪んだ楕円形状を呈する。断面はU字状を呈する。埋土は暗オリーブ褐色粗砂である。

〔2200 土坑〕（図 208・209・212）

8-1 区南区の南東側、4O-7j で検出した。長径 1.63m、短径 1.05m、深さ 0.11m を測る。平面は卵状を呈する。断面は皿状を呈する。埋土は上層がにぶい黄褐色シルト、下層が黄褐色シルトである。

〔2201 土坑〕（図 208・209・212）

8-1 区南区の南端、4O-7j で検出した。長辺 1.91m、短辺 1.33m、深さ 0.13m を測る。平面は長方形状を呈し、遺構の南側は調査区外に延びる。断面は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトである。

〔2204 土坑〕（図 208・209・212、図版 25-3）

8-1 区北区の北西端、4O-8f で検出した。長辺 0.89m、短辺 0.58m、深さ 0.08m を測る。平面は隅丸方形状を呈し、遺構の西側は調査区外に延びる。断面は浅い皿状を呈し、側面が急である。埋土は黄褐色細砂である。

〔2205 土坑〕（図 208・209・212、図版 25-3）

8-1 区北区の中央やや北東寄り、4O-6g・7g で検出した。長辺 0.84m、短辺 0.54m、深さ 0.06m を測る。平面はやや長方形に似た形状を示す。断面は皿状を呈し、底部がやや丸みを帯びる。埋土は黒褐色礫混じり粘質シルトである。

〔2387 土坑〕（図 208・210・212、図版 26-2）

8-2 区南側付近、4O-4i で検出した。長径 1.12m、短径 1.05m、深さ 0.21m を測る。平面は楕円形である。断面は円筒状を呈する。埋土は、上層が暗灰黄色シルト、下層が灰黄色シルトである。

小穴

〔2179 小穴〕（図 208・209・212）

8-1 区北区の西側、4O-8g で検出した。長径 0.28m、短径 0.24m、深さ 0.18m を測る。平面は少し歪んだ楕円形状を呈する。断面はU字状を呈する。埋土は黒褐色中砂混じり粘質シルトである。

〔2382 小穴〕（図 208・210・212、図版 26-2）

8-2 区中央やや東寄り、4O-4g で検出した。長径 0.18m、短径 0.16m、深さ 0.18m を測る。平面は楕円形である。断面は側面が垂直な円筒状を呈する。埋土は黒褐色粘土である。

落ち込み

〔2219 落ち込み〕（図 208・209・212）

8-1 区北区の北東隅、4O-6f で検出した。平面は中央が太く丸みを帯び、遺構の北東端は調査区外に延びる。長さ 3.95m、幅 1.36m、深さ 0.13m を測る。断面は皿状を呈する。埋土は灰黄褐色シルトなどである。

5．第 4 面（図 214 ～ 215）

第 4 面のベースとなる第 6 層は、8-2 区の東側にのみ認められた。第 6 層は、細砂を含む黄褐色シルト～粘質シルトからなり、にぶい黄色～灰色の貫入が見られる。遺構面の標高は、北東隅 8.49 m、北西隅 8.54 m、南東隅 8.66 m、南西隅 8.38 m、中央部分 8.51 mを測る。

〔2438 溝〕（図 214・215）

8-2 区北東隅、4O-3g・4g で検出した。長さ約 7.73m、幅 0.67 ～ 1.97m、深さ約 0.13m を測る。

東から西方向に延び、平面は起伏に富んだ不定な形状を呈する。第5層を除去した段階で検出した。断面は皿状を呈する。遺構内から、弥生時代と思われる厚手の土器片が出土した。

出土遺物のうち、弥生土器壺口縁部（818）、サヌカイト剥片（819）を図示した。

6．第5面（図216～218、図版26-1・26-3）

第5面では、土坑や溝状遺構、風倒木痕、小穴などを幾つか検出した。いずれも、出土遺物は全く認められなかった。

8-1区（図216・217、図版26-1）

遺構面の標高は、北東隅7.79m、北西隅7.86m、南東隅7.74m、南西隅7.55m、中央部分7.83mを測る。東西方向に流れる大きな流路と、調査区をかすめながら南東から北西方向に流れる大きな流路を検出した。この他に、土坑や小穴群など、幾つかの遺構を検出した。いずれの遺構も遺物は出土していない。

8-2区（図216・218、図版26-3）

遺構面の標高は、北東隅8.25m、北西隅8.21m、南東隅8.50m、南西隅8.44m、中央部分8.41mを測る。調査区の西側を中心に、南から西方向に屈曲しつつ流れる流路と、南東側から北西側に流れる流路を検出した。

流路

〔2209流路〕（図216～218、図版26-1・26-3）

8-2区の南西隅をかすめながら8-1区を通り、S字状に屈曲しつつ8-1区西側の調査区外に延びる。4O-4h・4i・5h・5i・6g・6h・6i・7g・7h・8f・8g・8hで検出した。長さ約43.6m、幅約11.0～18.1m、最深部の深さ1.70mを測る。埋土は、上層が黄褐色粘質シルト、中層が灰色細砂、下層が褐灰色粗砂や細～中砂などである。下刻作用が著しいことから、流速が早かったことが想定できる。後述の2215流路とは重複関係にあり、本流路が後出する。

〔2215流路〕（図216～218、図版26-1・26-3）

8-2区南側から北東方向に延び、8-2区北東隅をかすめながら北方向に進路をかえる。4O-3h・3i・4g・4h・4i・5f・5g・5h・6f・6gで検出した。長さ約38.3m、幅約19.1m、深さ1.46mを測る。埋土は、上層が褐色細砂細～中礫、中層が灰黄褐色粗砂や細～中礫、下層が青灰色粗砂や細～中礫である。底面は凹凸が著しい。

溝

〔2211溝〕（図216・217・219）

8-1区北区の北側、4O-7f・8fで検出した。長さ4.73m、最大幅0.75m、深さ0.18mを測る。断面は皿状を呈する。埋土は黄灰色シルトである。

土坑

〔2213土坑〕（図216・217・219、図版26-1）

8-1区北区の西側、4O-8gで検出した。2209流路の肩部に位置する。長径0.78m、短径0.60m、深さ0.21mを測る。平面は変形した楕円形状を呈する。断面は上半は皿状、下半は摺鉢状を呈する。埋土は、上層が灰黄褐色粘質シルト、下層が褐灰色粘質シルトである。

〔2214土坑〕（図216・217・219、図版26-1）

8-1区北区の南側、4O-7i・8iで検出した。長径1.37m、短径0.79m、深さ0.17mを測る。平面は

少し歪んだ長円形を呈する。断面は緩やかな椀状を呈する。埋土は暗灰黄色シルトなどである。

〔2251 土坑〕（図 216・217・219、図版 26-1）

8-1 区北区の南東隅、4O-6h・6i で検出した。長さ 0.98m、幅 0.49m、深さ 0.19m を測る。平面は不整形を呈する。断面は皿状を呈する。埋土は黄灰色シルトである。

〔2252 土坑〕（図 216・217・219、図版 26-1）

8-1 区北区の南東隅、4O-6h で検出した。長径 1.24m、短径 0.78m、深さ 0.47m を測る。平面は少し歪んだ楕円形を呈し、北側は 2209 自然流路に削られる。断面は段をなして下がる椀状を呈する。埋土は上層が黒褐色シルト、下層がにぶい黄色シルトである。

小穴

〔2239 小穴〕（図 216・217・219、図版 26-1）

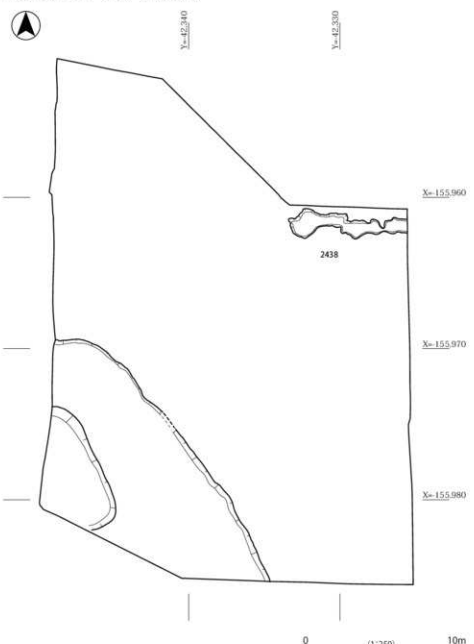


図215　8-2区　第4面　平面図

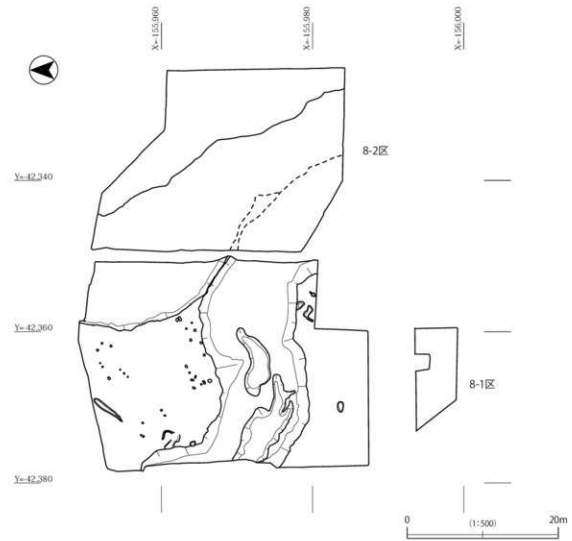


図216　8区　第5面　平面図

8-1 区北区の中央付近、4O-7g で検出した。長径 0.22m、短径 0.19m、深さ 0.08m を測る。平面は楕円形を呈する。断面はU字状を呈する。埋土は、上層が黒褐色シルト、下層が暗灰黄色シルトである。

〔2246 小穴〕（図 216・217・219、図版 26-1）

8-1 区北区の中央やや北西寄り、4O-8f・8g で検出した。長径 0.27m、短径 0.22m、深さ 0.16m を測る。平面は少し歪んだ楕円形を呈する。断面はU字状を呈する。埋土は、上層が黒色シルト、下層が黄灰色シルトである。

〔2247 小穴〕（図 216・217・219、図版 26-1）

8-1 区北区の中央やや北西寄り、4O-8g で検出した。長径 0.25m、短径 0.17m、深さ 0.14m を測る。平面は長円形を呈する。断面はU字状を呈する。埋土は黒色シルトである。

包含層出土遺物（図 220・221）

〔第 3 層出土遺物〕

第 3 層出土遺物のうち、サヌカイト剥片（820・821）、須恵器杯身（822）、須恵器鉢口縁部（823）、黒色土器内黒椀口縁部（824）・高台（825）、瓦器椀口縁部（826）、緑釉陶器椀高台（827）、白磁皿口縁部（828）・碗口縁部（829）・碗高台（830・831）、東播系須恵器こね鉢口縁部（11 世紀末～ 12

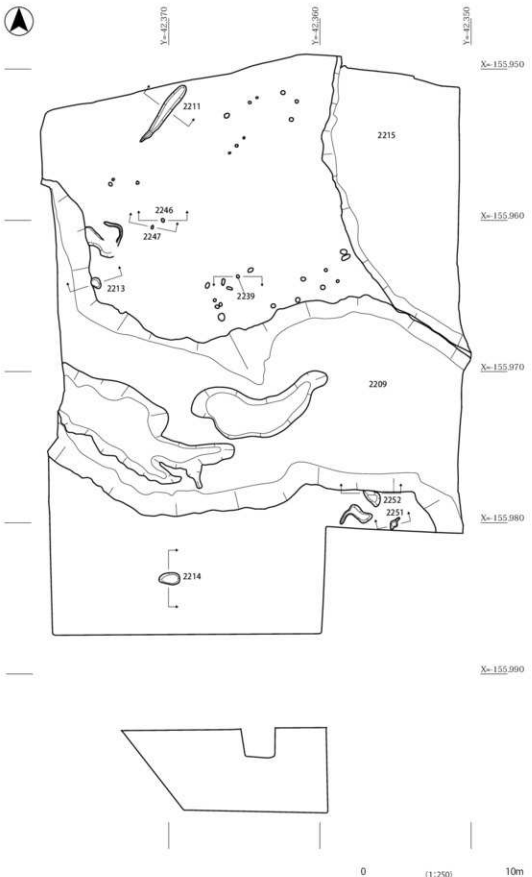


図217　8-1区　第5面　平面図

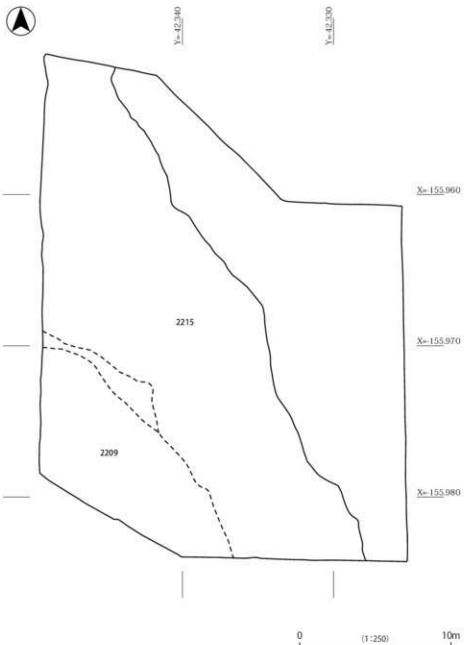


図218　8-2区　第5面　平面図

世紀初頭頃）（832・833・834）、瓦質土器甕口縁部（836・837）、陶器鉢口縁部（838）、瓦質土器こね鉢口縁部（839・840）・羽釜口縁部（835・841）・羽釜鍔部分（842）・火鉢脚部（843）、瀬戸美濃碗底部（844）、染付小皿（845・846）、軒丸瓦（847）、天禧通寶（北宋銭・1017年初鋳）（848）を図示した。

この他に、土師器椀・椀高台・鉢・壺体部、須恵器杯身高台（8世紀代）・こね鉢底部・高杯脚端部・壺口縁部・壺体部・壺底部・甕・甕体部、黒色土器鉢体部、瓦器小皿・椀高台部・椀、瓦質土器鉢高台部・羽釜鍔・火鉢、陶磁器染付碗口縁部・染付碗・壺、丹波大甕底部、瓦、鋳型粘土外枠の可能性があるものなどが出土した。

なお瓦には、凸面に縄目、凹面に布目が残るもの、凸面に擦り消した縄目、凹面に布目が残るもの、凸面に縄目叩きが残り、離れ砂が見られ、凹面に糸切り痕と離れ砂が見られるもの、凸面に縄目叩きが

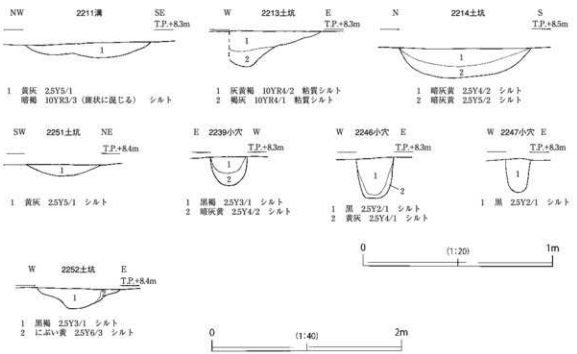


図219　8-1区　第5面　各遺構　断面図

残り、凹面に離れ砂が見られるもの、凸面が擦り消され、凹面に布目が残るもの、凸面に離れ砂が見られ、凹面に布目が残るもの、凸面・凹面ともに離れ砂が見られるもの、凸面・凹面とも擦り消され、離れ砂が見られるものが出土した。

〔第3～5層出土遺物〕

第3～5層出土遺物のうち、弥生土器壺口縁部（849）・（V様式）甕底部（850）、土師器（庄内式）甕口縁部（851）・高杯脚部（852）、須恵器杯蓋（TK209～217・TK10型式）（853・854）・杯身（MT85型式）（855）、土師器高杯杯部（856）を図示した。

この他に、弥生土器壺底部、土師器椀・椀高台・鉢口縁部・壺底部・甕、土師質羽釜、須恵器杯蓋（8世紀代）・杯身（8世紀代）・杯体部・杯（8世紀代）・高杯脚端部・大甕・壺高台・壺、瓦器椀・椀高台、凹面に離れ砂が見られる瓦、陶磁器白磁・小壺などが出土した。

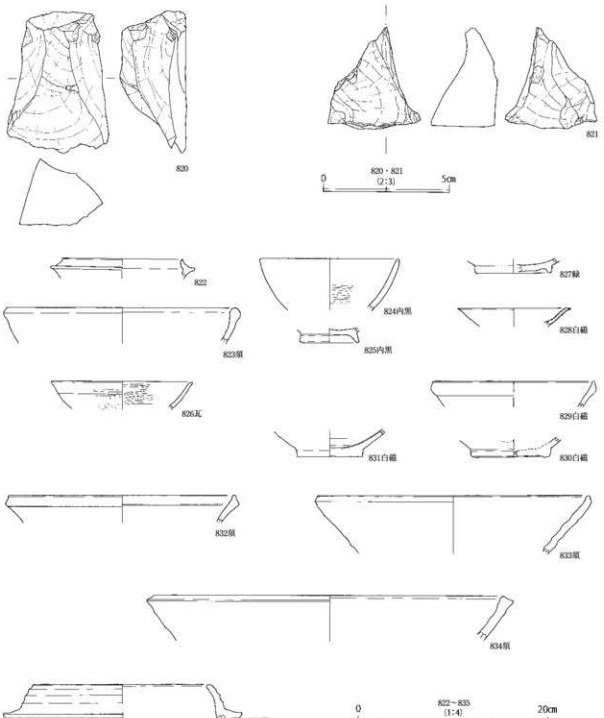


図220　8区　第3層　出土遺物

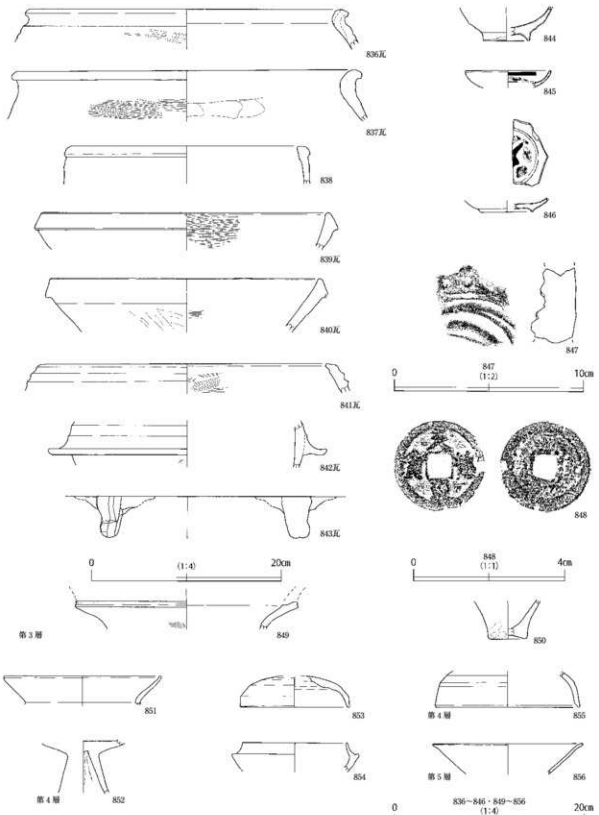


図221　8区　第3～5層　出土遺物

第6節　05-1・07-1 調査のまとめ

以上、本章では 2005 ～ 2006・2007 年度に実施した 05-1・07-1 調査の成果を報告してきた。本発掘調査は、道路建設の事前調査という性格上、調査区が東西方向に長いものであったため、調査成果については、「05-1-1・2 区・07-1 区」「05-1-3 区」「05-1-4・5 区」「05-1-6・7 区」「05-1-8 区」の計 5 区に分けて報告をおこなった。本節では、これらを総括して池内遺跡の東半分を占める 05-1・07-1 調査の成果を時代順に概観して様相を把握することで、まとめに代えたい。

〔近世〕

全調査区にて鋤溝を検出しており、ほぼ全域が生産域として利用されていたことが想定できる。鋤溝は、南北方向と東西方向の 2 つの方向が認められる。1 区では南北方向、3 区では東西方向、4・5 区では東西方向、6・7 区では南北を示すが、6-3 区や 7-4 区では異なる。鋤溝の方向が示す範囲は、必ずしも一町単位で決まっていたのではない可能性がある。6-3 区と 7-4 区は、一つの耕作単位の中でも鋤溝の方向が変わることを示している。

1-3 区東端の第 3 面 2623 溝から出土した遺物（図 26）の時期は、おおよそ 16 世紀中頃（泉佐野市教育委員会　渡辺晴香氏教示）を示し、この頃に溝が埋没したと考えられる。この後、東側にある現在の流路が新たに開削された可能性がある。

6-4 区東側の第 1 面溜池からは、16 世紀末頃から 18 世紀前半頃までの遺物が出土し（図 170）、18 世紀前半頃まで溜池として機能していたことが想定できる。なお、溜池上部を覆っていた作土層の存在から、以降は水田化されたと考えられる。

〔中世〕

各地区から灌漑用の溝、耕作溝や井戸、土坑、足跡などを検出した。

〔平安時代〕

1-1 区では東西方向、南北方向の灌漑用溝が掘られ、平安時代前期頃の可能性がある。溝は、条里制の地割に合致して掘削されたようである。また 1-1 区では、建物が 1 棟検出されているが、1 区の大半は生産域である。

3 区では 18 棟以上にも及ぶ掘立柱建物群からなる居住域を確認した。居住域は 4 ・5 区のものをあわせると東西 110 m以上に及ぶものであり、次章において述べる平安時代の屋敷地との関連を考える上で、非常に重要な資料といえる。なお、僅少ではあるが、柱穴内より出土した遺物から、本建物群の帰属時期は 8 世紀後半～ 11 世紀前半までと想定できる。

ここでは、この 8 世紀後半を除く時期の建物群の変遷について、一定の見解を与えておきたい。個々の建物は柱穴内の出土遺物もごく少ない上に、それぞれがほとんど重複関係にないため、建物の前後関係は明らかでない。そこで、出土遺物のほか、建物の柱穴埋土や規模をもとに個々の建物の変遷を把握するために、建物の占有する領域より建物を 3 群にグルーピングした。

第 1 群は建物 6 ～ 11、第 2 群は建物 12・13、第 3 群は建物 14・15・18 である。このうち、建物 6 ⇒建物 11 および、建物 14 ⇒建物 15 の前後関係が判明した。各群の柱穴を大きさの順に並べると、第 1 群は建物 6・8 ⇒建物 9 ⇒建物 11 ⇒建物 10 ⇒建物 7、第 2 群は建物 12 ⇒建物 13、第 3 群は建物 14 ⇒建物 15 ⇒建物 18 となる。これらの 3 群の資料と、各建物出土の遺物の時期を組み合わせると、以下のように 5 期の変遷が考えられる。

1期　9世紀前半　建物6・8
2期　9世紀後半　建物9・12
3期　10世紀前半　建物10・13・14・16
4期　10世紀後半　建物2・11・15
5期　11世紀前半　建物3・7・18

一方、耕作溝からは弥生時代後期、古墳時代前期・中期、奈良時代、平安時代頃の資料が認められることから、この中の最も新しい時代である平安時代頃まで使用された可能性がある。このように考えると、建物の時期と耕作溝の時期が一部重複することになる。しかし、掘立柱建物群が構成される範囲では、耕作溝の数が少ないことから、建物のない空閑地が耕作に使用されていたと推定できる。

3-2区では、土坑や小穴などからの出土遺物が11世紀前半までであるのに対し、第4面993井戸からの出土遺物の時期は12世紀前半であり（図77）、この資料のみ時期的に突出している。出土遺物から、3区の集落は11世紀前半で廃絶していたと考えられ、993井戸の存在は興味深い。

4・5区では、第2面470土坑が10世紀後半から11世紀前半、472土坑が11世紀後半から12世紀前半頃と推定される。また、654土坑は11世紀前半後葉頃と思われる。424溝などは灌漑用と考えられ、この区域は部分的に生産域として使用されていた可能性が高い。

5-1区の第4面掘立柱建物のうち、建物30・31出土遺物は、11世紀初めから前半頃を示しており、3区の集落の一部分と考えられる。

5-2区の掘立柱建物群については、出土遺物や切り合い関係から、建物20・22、1717土坑⇒建物19、塀2、1040溝、1038土坑⇒717・719・1031・1041溝⇒714・716溝⇒建物20、1044土坑、1039溝⇒建物21・23と変遷すると考えた。

6区では、条里制の方向とは異なった方向を示す轍跡を検出した。これらの轍跡の方向は、7区南側へ収束する。この周辺では、古代から近世までの瓦が多く出土しており、瓦葺建物の存在が想定され、轍との関連も考えられる。

6-2区の第3面622溝、6-3区の第3面2208・2480溝、7-2区第3面2334溝は、正方位の南北方向を示している。特に2208・2480・2334溝は、条里制地割の1町ごとの坪境溝と考えられる。

8区では足跡群が検出され、この地区は生産域であると推測する。

〔奈良時代〕

1区では、第3面2788柱穴内から出土した須恵器が8世紀前半を示し、周辺の掘立柱建物や柱穴もおおよそ8世紀前後を示すと思われる。1区の包含層出土遺物では奈良時代から9世紀頃の資料が比較的多く、この頃に1区の活動が盛んであったことが推測される。

3-2区の第5面677溝は一町ごとの坪境に位置している可能性がある。

3区の第5面掘立柱建物28・29の帰属時期は、677溝埋没以降であり、少なくとも8世紀後半以降、それも後葉頃と思われる。

〔古墳時代〕

1区では、古墳時代前期の遺物を出土する第3面2660土坑などを検出した。また、包含層より古墳時代前期～後期の遺物が出土している。なお、包含層の出土遺物では、須恵器杯身杯蓋など6世紀中頃の資料があり、6世紀中頃から7世紀初め頃にも活動があったことが推測される。この他、1区の耕作溝から出土した円筒埴輪（図24-6）は6世紀中頃を示し、古墳が近くに作られていた可能性がある。

3区では、第5面の井戸や土坑などから古墳時代前期～後期の資料が出土している。庄内式の時期はやや希薄だが、布留式以降、断続的に居住域となっていた可能性が考えられる。

8区では、弥生時代後期から古墳時代前期の資料が認められる。詳細は弥生時代の項で述べる。

〔弥生時代〕

1区では、弥生時代前期と思われる土器片が遺構内から数点出土している。しかし、磨耗が著しく2次堆積の可能性がある。

3区では、第5面309土坑や728土坑など、弥生時代前期単独の資料が出土する遺構が僅かであるが認められ、前期中葉頃と考えられる。また、弥生時代後期などやや時期が下る資料とともに出土している弥生時代前期の土器もある。出土した数量が少なく、集落の中心地ではないと考えられる。弥生時代後期から古墳時代前期の資料は、井戸、土坑などから出土している。

5-2区では、1726・1727溝から石鏃や弥生土器が出土している。資料が磨耗しているため確実ではないが、弥生時代前期に遡る可能性がある資料である。1731・1732溝からは、弥生時代後期と思われる土器が出土している。1718・1719・1731・1732・2012・2014溝は、一連の遺構として考えられ、弥生時代後期頃の水利施設が削られ残った跡と思われる。

6区では、蛇行しながら真北から東西方向に少し振った方向を示す溝を検出している。出土遺物が認められないため、詳細な時期は分からない。ただし、7区の落ち込みからサヌカイト片が出土していることから、弥生時代の可能性がある。

8区では、西側から弥生時代後期から古墳時代前期の溝群が検出されている。これらの溝群は弥生時代後期から古墳時代前期頃の水利施設の跡と考えられる。この調査区では、溝幅の広がる箇所が数箇所認められ、このような地点に水を溜める機能を持たせていた可能性がある。

〔縄文時代〕

6-1区の第9層下面から縄文時代と思われる凹基の石鏃（図200－794）が出土している。

〔旧石器時代〕

1区の第10・13層からサヌカイト剥片（図37－45・46）が出土している。

（入江）

〔参考文献〕
古代の土器研究会編 1997『古代の土器 5-1　7世紀の土器（近畿東部・東海編）』
古代の土器研究会編 1996『古代の土器 4　飛鳥Ⅰ（近畿編）』
中世土器研究会編 1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
兵庫埋蔵銭調査会 1996『日本出土銭総覧 1996 年版』
森村健一 1981「堺環濠都市遺跡発掘調査報告－市之町東地区－　堺市内出土黒色土器について」『堺市文化財調査報告書第7集』堺市教育委員会
上野俊雄 1985『堺環濠都市遺跡発掘調査報告 -SKT75 地点-　結語　堺環濠都市発と和泉型土器』『堺市文化財調査報告 第 21 集』堺市教育委員会
樋口吉文 1988『中世集落期の土器』『堺市文化財調査報告第 33 集　陶器・小内山遺跡』堺市教育委員会
堺市立埋蔵文化財センター編 2009『堺市文化財調査概要報告 第 92 冊　堺環濠都市遺跡発掘調査概要報告 -SKT762 地点・熊野町西 2 丁-』堺市教育委員会
能勢町埋蔵文化財研究会編 1985『能勢町における埋蔵文化財の調査 -大阪府能勢町所在塩山7号墳・姫逢遺跡の発掘調査と古代・中世土器の研究』能勢町教育委員会
福永信雄 2002『中・南河内における土師器皿の変遷』『瓜生堂遺跡第 46、47-1・2 次 発掘調査報告書』東大阪市教育委員会
奈良国立文化財研究所編 1987『薬師寺発掘調査報告』奈良国立文化財研究所学報第 45 冊
奈良国立文化財研究所編 1995『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 - 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査 - 』奈良国立文化財学報第 54 冊

(財)大阪府文化財センター発掘調査報告書　第198集

池　内　遺　跡

（第1分冊）

都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2010年3月31日発行

編集・発行／財団法人　大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社　中島弘文堂印刷所
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号